松山町埋蔵文化財調査報告書(1)

前　谷　遺　跡

1986年3月

鹿児島県曽於郡松山町教育委員会

序　　文

現今，本県教育推進の中で郷土教育の必要性が強く叫ばれ，地域の自然や文化の見直し，有形・無形の文化財の掘り起こし等に対する認識が高まっています。

松山町教育委員会では，早くから泰野・前谷地区一帯から土器・石器等の出土がしられており，発掘の必要性を感じていましたが，この度，国・県の補助を得て，県文化課の指導を受けながら発掘調査を実施いたしました。

昭和60年７月から約40日間にわたって，総事業費500万円，うち国庫補助250万円，県費補助125万円，町費負担125万円であります。

この発掘調査の結果，遺構として歴史時代の掘立柱建物跡，弥生時代・縄文時代相当の竪穴式住居跡，出土遺物として縄文早期から縄文後期にかけての土器・石器等多数の発掘がなされ，特に春日式土器等が多量に出土したことは特筆すべきことであります。

本町としては，初めての遺跡発掘調査事業であり，相当の困難が予想されましたが，ここに無事完了したことに対し，土地所有者の[redacted]氏のご理解と協力，炎天下精力的にご指導いただいた県教育庁文化課の吉永正史・中村耕治・繁昌正幸の先生方に心から厚くお礼申し上げます。

発掘されました遺物は，郷土文化の研究や郷土教育の資料として，本町歴史民俗資料館に展示保存して参りますが，幅広い活用をお願い申し上げます。

昭和61年３月

松山町教育委員会

教育長　　加世田　瑞　穂

例　　言

1．本報告書は，鹿児島県曽於郡松山町泰野字前谷3153-1番地に所在する前谷遺跡の確認調査報告書である。

2．調査の組織は経過のなかで記した。

3．本書の執筆は次の通りで，編集は吉永・中村が分担して行った。

○第1章，第4章，第5章，第6章第2節	
第7章	吉永
○第6章第1・2節，第7章	中村
○第3章	繁昌
○第2章	福留

4．遺物の実測・写真撮影等は執筆者が分担してこれを行った。

5．本書に用いた遺物番号は，通し番号を付した。

6．本書に用いたレベル数値は海抜絶対高を示す。

7．出土した炭化物について，放射性炭素年代測定を京都産業大学理学部教授山田治氏に依頼した。

8．出土炭化木ノ実については，名古屋大学文学部教授渡辺誠氏にその鑑定結果の玉稿をいただいた。

9．土器観察表の胎土で，石：石英，長：長石，角：角閃石，金：金雲母である。

目　　次

序　文
例　言
第1章　調査の経過……8
　第1節　調査に至るまでの経過……8
　第2節　調査の組織……8
　第3節　調査の経過……9
第2章　遺跡の位置及び環境……10
第3章　土　　層……17
第4章　調査の概要……20
第5章　遺　　構……21
　第1節　縄文時代の遺構……21
　第2節　弥生時代の遺構……41
　　小　結……41
　第3節　歴史時代の遺構……43
　　小　結……46
第6章　遺　　物……51
　第1節　土　器……51
　第2節　石　器……95
第7章　まとめ（縄文時代の遺構・遺物について）……114

付　篇　植物遺体

挿図目次

第1図　遺跡の位置及び周辺の遺跡……11
第2図　周辺の遺跡の採集遺物……13
第3図　土層模式柱状図……17
第4図　トレンチ土層断面図……18
第5図　遺跡周辺地形図……19
第6図　グリッド及遺構配置図……20
第7図　縄文時代の遺構配置及び地形図…21
第8図　2号住居跡……23
第9図　2号住居跡出土遺物（1）……24
第10図　〃　（2）……25

第11図　3号住居跡出土遺物……26
第12図　3号住居跡……27
第13図　4号住居跡……29
第14図　4号住居跡出土遺物……30
第15図　5号住居跡……32
第16図　5号住居跡出土遺物（1）……33
第17図　〃　（2）……34
第18図　6号住居跡……36
第19図　6号住居跡出土遺物……37
第20図　円形ピット……39
第21図　集石……40
第22図　弥生時代の遺物……41
第23図　1号住居跡……42
第24図　溝状遺構と1号掘立柱建物跡……44
第25図　2～4号掘立柱建物跡……45
第26図　遺物分布図……47
第27図　遺物出土状況（1）……49
第28図　〃　（2）……50
第29図　出土土器実測図　（1）……51
第30図　出土土器実測図　（2）……52
第31図　出土土器実測図　（3）……54
第32図　出土土器実測図　（4）……55
第33図　出土土器実測図　（5）……56
第34図　出土土器実測図　（6）……57
第35図　出土土器実測図　（7）……58
第36図　出土土器実測図　（8）……60
第37図　出土土器実測図　（9）……61
第38図　出土土器実測図　（10）……62
第39図　出土土器実測図　（11）……63
第40図　出土土器実測図　（12）……64
第41図　出土土器実測図　（13）……65
第42図　出土土器実測図　（14）……66
第43図　出土土器実測図　（15）……67
第44図　出土土器実測図　（16）……68
第45図　出土土器実測図　（17）……70
第46図　出土土器実測図　（18）……71
第47図　出土土器実測図　（19）……72
第48図　出土土器実測図　（20）……73
第49図　出土土器実測図　（21）……74
第50図　出土土器実測図　（22）……76
第51図　出土土器実測図　（23）……77
第52図　出土土器実測図　（24）……79
第53図　出土土器実測図　（25）……80
第54図　出土土器実測図　（26）……82
第55図　出土土器実測図　（27）……83
第56図　出土土器実測図　（28）……84
第57図　出土土器実測図　（29）……85
第58図　出土土器実測図　（30）……94
第59図　遺物出土状況―石器―……95
第60図　出土石器実測図　（1）……95
第61図　出土石器実測図　（2）……96
第62図　出土石器実測図　（3）……97
第63図　出土石器実測図　（4）……98
第64図　出土石器実測図　（5）……99
第65図　出土石器実測図　（6）……100
第66図　出土石器実測図　（7）……101
第67図　出土石器実測図　（8）……104
第68図　出土石器実測図　（9）……105
第69図　出土石器実測図　（10）……107
第70図　出土石器実測図　（11）……108
第71図　出土石器実測図　（12）……109
第72図　出土石器実測図　（13）……110
第73図　出土石器実測図　（14）……110
第74図　住居跡の形態及出土遺物……114
第75図　里木貝塚出土遺物……119

図版目次

図版1 上 遺跡近景 ……122
下 調査風景
図版2 遺構検出状況 ……123
図版3 土層断面 ……124
図版4 2号住居跡 ……125
図版5 3号住居跡 ……126
図版6 4号住居跡 ……127
図版7 5号住居跡 ……128
図版8 6号住居跡 ……129
図版9 円形ピット ……130
図版10 集石 ……131
図版11 住居跡出土遺物－1 ……132
図版12 住居跡出土遺物－2 ……133
図版13 1号住居跡及弥生時代の遺物 134
図版14 1・2号掘立柱建物跡 ……135
図版15 上 3号掘立柱建物跡 ……136
下 遺物出土状況－土器－1
図版16 遺物出土状況－土器－2……137
図版17 上中 遺物出土状況－土器－3……138
図版 下 遺物出土状況－石器－
図版18 出土遺物－土器－1 ……139
図版19 出土遺物－土器－2 ……140
図版20 出土遺物－土器－3 ……141
図版21 出土遺物－土器－4 ……142
図版22 縄文・撚糸文拡大 ……143
図版23 上左 出土遺物－土器－5 ……144
上右 出土遺物－石器－ナイフ型石器
中 出土遺物－石器－石斧
下 出土遺物－石器－石匙・石錘他
図版24 上左 出土遺物－石器－磨石・叩き石 145
中 出土遺物－石器－叩き石・砥石
下 出土遺物－石鏃－1
図版25 出土遺物－石鏃－2 ……146
図版26 出土遺物－石鏃－3 ……147
図版27 上 出土遺物－石鏃－4 ……148
下 出土遺物－石器－その他

表目次

表1 周辺の遺跡一覧……14
表2 2号住居跡出土石器計測表……26
表3 5号住居跡出土石器計測表……34
表4 住居跡出土土器観察表……35
表5 1号掘立柱建物跡柱間距離計測表……43
表6 2号掘立柱建物跡柱間距離計測表……43
表7 3号掘立柱建物跡柱間距離計測表……46
表8 4号掘立柱建物跡柱間距離計測表……46
表9 Ⅰ～Ⅵ類土器観察表……52
表10 Ⅶ～Ⅸ類土器観察表……86
表11 Ⅹ類土器観察表……94
表12 石器計測表－1 ……102
表13 石器計測表－2 ……106
表14 石鏃計測表 ……110

第1章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

松山町管内においては，昭和58年6月に大隈地区埋蔵文化財分布調査の一環として新橋地区を中心に分布調査が行われ，曽於東部地区の畑地灌漑事業の推進に伴って分布調査が一部で実施されて徐々に遺跡の分布状況が把握できるようになってきた。

昭和59年4月に同町泰野字前谷3153－1番地の畑地を平坦に整地しようとしたところ，縄文式土器等が多量に出土したため，土地所有者である[redacted]氏は直ちに町教育委員会へ連絡し，その取り扱いについて協議を行った。

町教育委員会は，さらに県教育庁文化課と連絡をとり，その処置について指導を受け，昭和60年度に発掘調査を国，県の補助を受けて実施することとなり，遺跡は土地所有者の協力を得て調査実施まで現状保存することとなった。

発掘調査は，町教育委員会が調査主体となり，県教育庁文化課に発掘調査を依頼して昭和60年7月1日から8月17日まで実施した。その後の整理，報告書作成作業等は県文化課重富収蔵庫において行った。

第2節　調査の組織

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体者	松山町教育委員会		
調査責任者	松山町教育委員会	教育長	加世田　瑞　穂
調査事務	〃	事務局長	福　岡　千　昌
	〃	学校管理主事	宝　地　順　一
	〃	庶務係	通　山　美　保
	〃	〃	中　村　裕　子
		社会教育主事	清　水　　勲
		〃	福　留　栄　行
		社会体育係	坂　元　幸　二
		社会教育指導員	和　田　幸　夫
調査担当	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員	吉　永　正　史
		〃	繁　昌　正　幸
		主事	中　村　耕　治

その他，調査の企画等に関し，県教育庁文化課長桑原一廣，同課長補佐坂口肇，同主幹中村文夫，同主任文化財研究員向山勝貞，管理係長寺園晃他の指導，助言を得た。

又，県文化財保護審議会委員河口貞徳氏には現地における調査指導・整理における遺物等に

ついて多大な教示を受けた。出土炭化物については，名古屋大学文学部教授渡辺誠氏の御厚意による鑑定結果ついての玉稿をいただいた。

第3節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄により略述する。

7月1日　調査の開始。諸器材の搬入及びグリッドの設定。
7月3日　表土剝ぎ。住居跡様落ち込みを数ヶ所で確認。遺物は北側に多い。
7月4日　1号住居跡（D・E－6）・溝状遺構（E－6）を確認。
7月5日　ピット列（B・C－6，D～F－5・6）を確認。
7月8日　ピット列（1～3号堀立柱建物跡）検出の開始。
7月9日　2号住居跡（E～5・6）を確認。
7月10日　1・2号住居跡検出の開始。
7月11日　1号住居跡に張り出しを有することを確認。
7月15日　3号住居跡（F－6）を確認。
7月16日　3号住居跡検出の開始。4号住居跡（E－5・6）を確認。
7月17日　ピット列（4号堀立柱建物跡）の検出。3号住居跡にベット状のものあり。
7月18日　円形ピット（C－6），焼土（C－6）を確認。4号住居跡検出の開始。
7月19日　5号住居跡（E－5）の確認。
7月25日　集石（C－5）を確認，検出。C－6区に土層観察用トレンチを設定する。
7月26日　トレンチにて下層で集石2ヶ所確認。
7月30日　遺構の実測（1／10）開始。4号住居跡，集石の実測。
7月31日　河口貞徳県考古学会長による現地指導。
8月1日　6号住居跡・円形ピットの検出開始。1～2号住居跡実測。
8月2日　3号住居跡実測。別府大学教授賀川光夫氏来訪。
8月5日　収蔵庫において水洗作業を開始する。
8月6日　5号住居跡検出開始。
8月7日　ピット列（4号堀立柱建物跡）実測。
8月9日　各住居跡においてベルト除去後柱穴の確認・検出及び実測。
8月16日　トレンチの土層実測。土層断面の剝ぎ取り。
8月17日　5・6号住居跡実測。遺構の保存対策。諸器材の搬出。調査を終了する。

その後，県文化課収蔵庫にて整理作業を行い，報告書の執筆作業を行う。この間，河口貞徳県考古学会長により遺物等において指導を受けた。

又，調査後遺跡は土地所有者の協力によって，遺構等について現地保存を行うこととなり，土盛りによる保存事業が実施された。

第２章　遺跡の位置と環境および周辺遺跡

前谷遺跡のある松山町は，大隅半島曽於郡のほぼ中央部に位置し，東西に細長く東西12km，南北４ kmである。東は志布志町，西は末吉町，大隅町，南は有明町・志布志町，北は末吉町に境している。

経緯度は東経13度から13度７分，北緯31度37分で，町総面積は49.69km²であり，山岳は末吉町に境する宮田山520 m，有明町に境する霧岳408 mが主な丘陵で，河川は大隅町岩川から新橋河床を経て，町の西端を流れる菱田川上流と，尾野見排水東端と大統東端を流れる安楽川の支流が主な河川である。気温は年間平均16.5度で西部台地と東部台地とでは年間平均気温が１度から２度の差があり，西部台地は一般に霜が早く10月中旬には，初霜を見ることもある。晩霜は４月下旬で終る。夏期における気温の変化は大差なく，最高36度位である。降雨量は平均2.190 mmで中でも５月，６月の梅雨期と，８月９月の台風襲来時に集中するためシラス台地にある耕地等においては土の流失，埋没浸蝕の被害もある。風は12月から翌年３月にかけて北西の季節風が強く高台では冬作物の被害もある。４月から７月にかけては南東の風があり，６月下旬から10月にかけての台風襲来時における災害は耕地作物に与える影響が極めて大である。

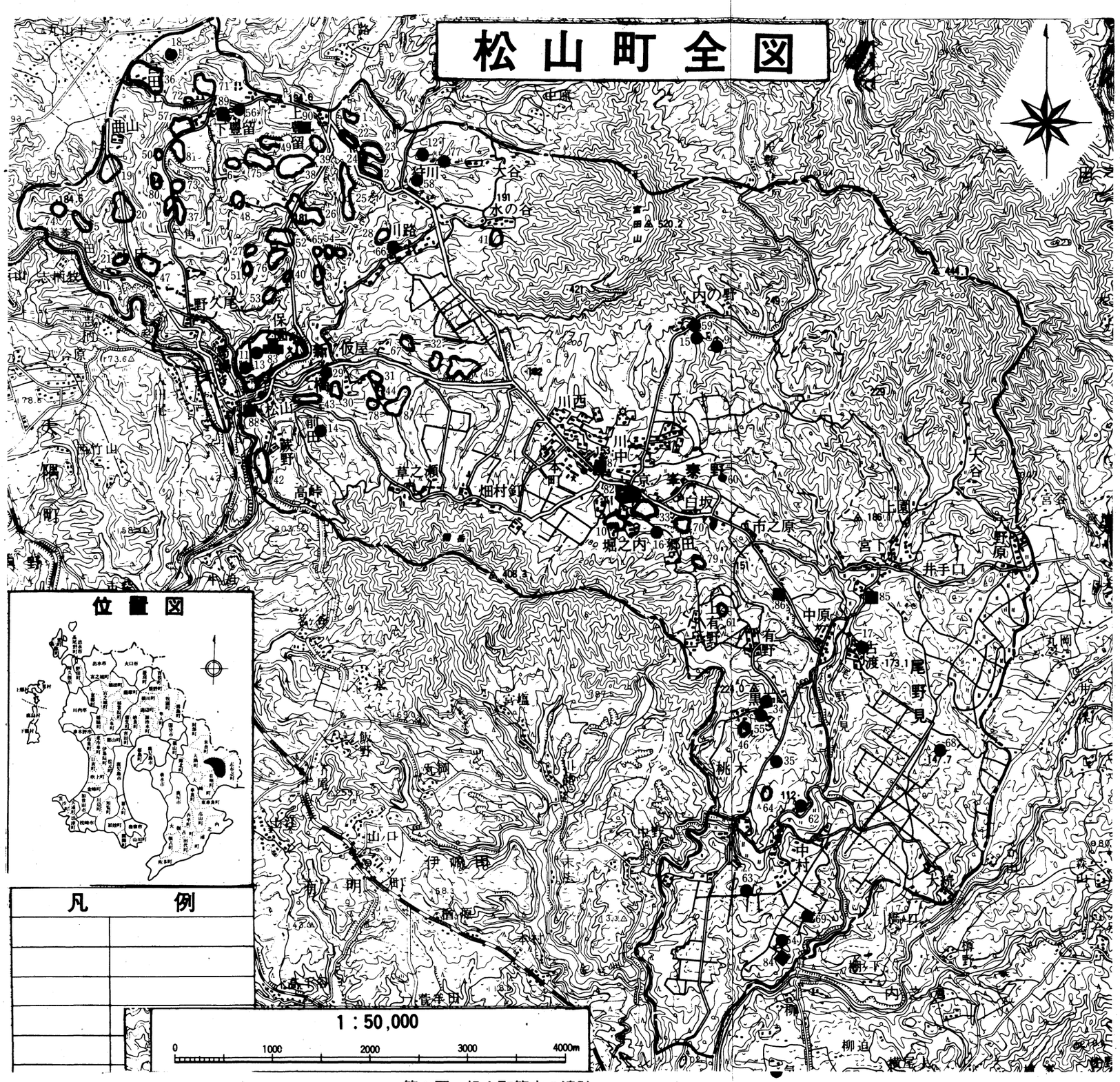
今回調査を行なった前谷遺跡は大字泰野にあり，小字前谷の一部である。後に標高408mの霧岳の裾野が広がり，前には豊富な湧水があり今でも豊富な水量が付近の水田用水として利用されている。

遺跡の東側には中世山城の名ごりを残こす，堀ノ内，京ノ峯，堂下といった小字の地名が残っている。出土遺物は歴史時代の土師器，弥生時代の山ノ口式土器，縄文時代前期の平栫式土器，春日式土器，縄文時代早期の石坂式土器，前平式土器が主であるが，石鏃，石斧，磨石，石匙，石錐，石錘，石皿，叩き石も見られる。また歴史時代の建物跡４ヶ所，弥生時代の住居跡（竪穴式住居跡）１ヶ所，縄文時代春日式期の住居跡５ヶ所も同時に確認されている。

周辺遺跡

松山町においては，これまでに考古学的な調査があまり行なわれず，周知された遺跡の数も多くはなかった。しかし，鹿児島県教育委員会文化課によって行なわれた大隅地区埋蔵文化財分布調査の一環として，昭和49年度，58年度の２回にわたり，松山町内の分布調査が実施されたことにより，新橋地区を中心に遺跡数が急増した。現在の段階で縄文時代の遺跡，55ヶ所，弥生時代の遺跡16ヶ所，古墳時代の遺跡１ヶ所，歴史時代の遺跡13ヶ所が知られている。特に縄文時代については，菱田川，松尾川，尾野見川やそれらの支流となる川が狭谷をなし，台地に喰い込み湧水源をつくっている。この狭谷により舌状の台地が形成され，遺跡の立地条件を満たしている。台地上には縄文時代早期から晩期にかけての遺跡が数多く見られる。

新橋地区では，宇都谷遺跡(1)で前平式土器，宇都Ｄ遺跡(2)では，吉田式土器，砂田Ａ遺跡(3)では，石坂式土器，下迫Ｃ遺跡(5)，榎之保遺跡(6)では，塞ノ神式土器などの縄文時代早期の遺物が見られる。また，砂田Ｄ遺跡(7)，稗ヶ迫Ｃ遺跡(8)では，縄文時代前期の轟式土器がみられ



第１図　松山町管内の遺跡

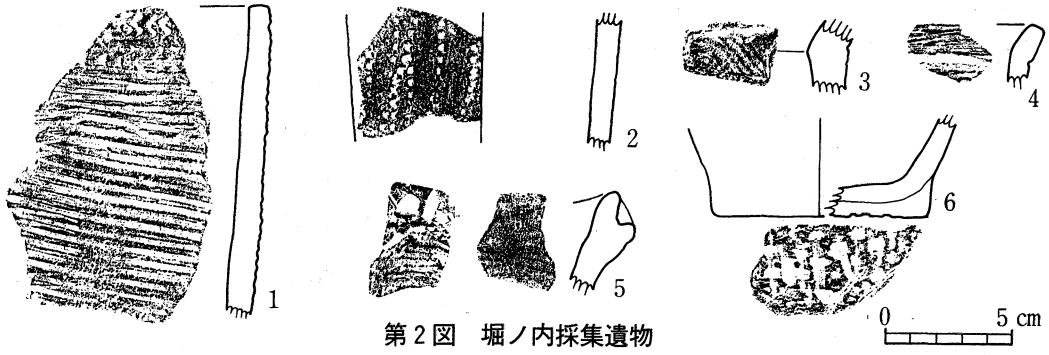
る。その他阿高式土器，市来式土器，御領式土器などの縄文時代中期から晩期にかけての遺跡も数多く見られる。弥生時代においても大原遺跡(39)，中山B遺跡(45)で弥生時代中期の入来式土器が見られる他に約10ヶ所の遺跡がある。

尾野見地区は遺跡数は少ないが，実際にはもっとあるものと思われる。それでも中村遺跡(4)で縄文時代早期の前平式土器が見られ，井手段III遺跡(35)では縄文時代後期の岩崎上層式，黒石崎遺跡(34)では縄文時代後期の出水式土器が知られている。弥生時代においても，六日畑遺跡(61)，鳩窪遺跡(63)などで弥生時代中期の山ノ口式土器が知られている。

前谷遺跡のある泰野地区においても遺跡の数は多くないが，今後，まだ増加するものと思われる。内野野C遺跡(9)では縄文時代早期の塞ノ神式土器，内野野B遺跡(15)，郷田遺跡(16)では縄文時代中期の阿高式土器，堀ノ内遺跡(33)では縄文時代後期の市来式土器が出土しており，古くから人々が生活していたことがうかがわれる。弥生時代の遺跡は少ないが，内野野A遺跡(59)，柿木瀬戸遺跡(60)などで弥生時代のものと思われる遺物が出土している。また，松山町内で唯一の古墳時代の遺跡と思われる瀬戸地下式横穴(70)も小字秋木瀬戸にあったということである。堀ノ内遺跡は養鶏場建設のため大きく削平されており，約半分ほどが残存している。建設の際に採集された遺物は郷土館に保管されているが，松山式土器，市来式土器（縄文時代後期）の破片が多く，現在でも，黒曜石片などと共に多く散布している。

周辺遺跡採集の遺物

1～6は調査期間中に堀ノ内遺跡で表面採集した遺物である。1～2は縄文時代早期の前平式土器と思われる。1は口縁部にヘラによる刻目を施し，口縁部には貝殻腹縁による連続刺突文，胴部には横位に近い斜行の貝殻条痕を施す。2は斜行の押し引き文をナデ消しているため押した部分だけ刺突文状に観察される。3は頸部がくの字状に外反し，胴部に貝殻条痕が認められ型式は不明であるが縄文早期と考えられる。4～6は縄文時代後期の土器と思われる。4は沈線文を施す口縁部，5は貝殻刺突文，沈線文刺突文等を施し，口縁部が肥厚するものである。6は復原底部径cmを測る。底面に網代の圧痕が認められるものである。



第2図　堀ノ内採集遺物

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	宇都谷	新橋字宇都谷		縄(早)	前平式	
2	宇都D	〃 字宇都		縄(早・後) 歴	吉田式 黒曜石 土師器 須恵器	
3	砂田A	〃 字砂田		縄(早)	石坂式 黒曜石 押型文 石鏃	
4	中村	尾野見字中村		縄(早)	前平式	
5	下迫C	新橋字下迫		縄(早)	塞ノ神式 姫島産黒曜石	
6	榎之俣	〃 字榎之俣		縄(早)	塞ノ神式	
7	砂田D	〃 字砂田		縄(前) 弥(中)	轟式	
8	稗ケ迫C	〃 字稗ケ迫		縄(前) 弥(中)歴	轟式 土師器	
9	内野野C	泰野字内野野		縄(前)	塞ノ神式 打製石斧	
10	前ノ谷	〃 字堀ノ内		縄(前)	阿高 御領 磨製石斧 敲石	
11	公会堂上	新橋字公会堂上		縄(前)	塞ノ神式	
12	狩川B	〃 字狩川		縄(中)	阿高式 敲石	
13	松山	〃 字松山		縄(中・後)	阿高 御領 磨製石斧 敲石	
14	入道久保A	〃 字入道久保		縄(中)	阿高式 石斧	
15	内野野B	泰野字内野野		縄(中)	阿高式 磨製石斧 凹石 石皿	
16	郷田	〃 字郷田		縄(中)	阿高式 磨製石斧 凹石 石皿	
17	蛇山ノ谷	尾野見字蛇山ノ谷		縄(中) 弥(中)	石匙 打製石斧	
18	垂門A	新橋字垂門		縄(後)	市来式	
19	下迫A	〃 字下迫		縄(後) 弥(中)歴	御領式 黒曜石 土師器	
20	堀口	〃 字堀口		縄(後)歴	御領式 石鏃 青磁	
21	河床	〃 字河床		縄(後)		
22	宇都A	〃 字宇都		縄(後)	松山式 石皿	
23	宇都B	〃 字宇都		縄(後)歴	須恵器	
24	宇都C	〃 字宇都		縄(後)	岩崎上層式	
25	中村迫	〃 字中村迫		縄(後)歴	石皿 打製石器 土師器 須恵器	
26	山ノ田	〃 字山ノ田		縄(後)歴	松山式 土師器 石鏃	
27	後谷A	〃 字後谷		縄(後)	指宿式	
28	上ノ原	〃 字上ノ原		縄(後)	綾式 岩崎上層式	
29	入道久保C	〃 字入道久保		弥(後)	打製石器	
30	仮屋	〃 字仮屋		縄(後・晩) 歴	土師器	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
31	稗ケ迫A	新橋字稗ケ迫		縄(後) 歴	御領式 土師器	
32	中山A	〃 字中山		縄 (後)	黒曜石	
33	堀ノ内	泰野字堀ノ内		縄(後・晩) 歴	市来式 黒曜石 土師器	
34	黒石崎	尾野見字黒石崎		縄 (後)	出水式 敲石 石剣	
35	井手段Ⅲ	〃 字中村井手段		縄 (後)	岩崎上層式	
36	百田	新橋字百田		縄 (晩)	上加世田式 打製石斧	
37	構溝	〃 字垂門 構溝		縄(晩) 歴	磨製石斧 土師器	
38	牧ノ原B	〃 字牧ノ原		縄 (晩) 弥 (中)		
39	大原	〃 字大原		縄 (晩) 弥(中) 歴	入来式 土師器	
40	後ノ谷	〃 字後谷		縄(晩) 歴	土師器	
41	水流知	〃 字水流知		縄(晩) 歴	土師器	
42	蕨野	〃 字蕨野		縄(晩) 歴	土師器 打製石斧	
43	入道久保B	〃 字仮屋		縄(晩) 歴	土師器 須恵器	
44	稗ケ迫B	〃 字稗ケ迫		縄 (晩)	磨製石斧	
45	中山B	〃 字中山		縄 (晩) 弥 (中)	入来式	
46	黒石Ⅱ	尾野見字黒石		縄 (晩)		
47	牧ノ段	新橋字牧ノ段		縄 (晩)		
48	井手間	〃 字井手間		縄 (晩)		
49	梨木	〃 字梨木		縄 歴	土師器 青磁 鉄滓	
50	大窪B	〃 字大窪 垂門		縄 歴	土師器	
51	後谷B	〃 字後谷		縄		
52	前ノ谷	〃 字後谷		縄		
53	前谷	〃 字前谷		縄		
54	砂田C	〃 字砂田		縄 歴	土師器	
55	黒石Ⅰ	尾野見字黒石		縄		
56	豊留	新橋字豊留		弥 (中)	打製石斧	
57	大窪A	〃 字大窪		弥 (中)		
58	狩川A	〃 字狩川		弥(中・後)	打製石斧 磨製石斧 敲石	
59	内野野A	泰野字内野野		弥 (中)	石斧 石鏃	
60	柿木瀬戸	〃 字柿木瀬戸		弥 (中)	打製石斧	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	番号
61	六日畑	尾野見字六日畑		弥(中)	山之口式	
62	中村手岡	〃 字中村手岡		弥(中)	打製石斧	
63	鳩窪	〃 字鳩窪		弥(中)	山之口式	
64	井手段 I	〃 字中村井手段		弥(後)		
65	砂田 B	新橋字砂田		弥		
66	川路	〃 字川路		弥	打製石斧 石弾	
67	栗須田	〃 字栗須田		弥		
68	尾野見	尾野見		弥		
69	桐ノ木	〃 字桐ノ木		弥		
70	瀬戸地下式横穴	泰野字柿木瀬戸		古	地下式横穴	
71	竹下	新橋字竹下		歴	土師器，須恵器 青磁	
72	四ッ枝	〃 字四ッ枝		歴	土師器，須恵器 青磁	
73	垂門 C	〃 字垂門		歴	土師器	
74	下迫 B	〃 字下迫		歴	土師器	
75	牧ノ原 A	〃 字牧ノ原		歴	土師器	
76	後谷 C	〃 字後谷				
77	狩川 C	〃 字狩川		歴	須恵器	
78	清水迫	〃 字清水迫		歴	土師器	
79	川東	泰野字川東		歴	土師器 須恵器	
80	垂門 B	〃 字垂門		弥・歴	土師器	
81	前之窪	〃 字前之窪		弥(中)歴	土師器	
82	泰野城跡	〃				
83	松山城跡	新橋字松尾	火山灰台地小丘		文治4年(1188年)隠岐守重頼築城松山川要害地	(町)昭49.3.1
84	銭ケ迫一里塚	桃木銭ケ迫				〃
85	柏木門椎四郎の墓	尾野見				〃
86	尾野見一里塚	〃				〃
87	泰野の石敢当	泰野				〃
88	馬場の庚申塔	新橋馬場				〃
89	豊留の田之神像	〃				〃
90	豊留の板碑	〃				〃

第3章　層　　位

本遺跡の標準的な層位は，場所によって削平などによる欠落があるが，おおよそ次のようになっている。

第1層　表土・耕作土。黒色の火山灰土で，大隅半島に普遍的に見られる“クロボク”と呼ばれるものである。場所によっては2層に分かれ，下部の1b層は旧耕作土で，若干薄い黒色を呈する。また，ボラといわれる大正3年の桜島の噴出物が，本台地の縁辺にかけて見られるところもある。

第2層　明褐色土。弥生時代の遺物包含層と思われるが，遺構の埋土にのみ残存する。

第3a層　暗茶褐色火山灰土で，パミスが混じる。3b層と共に本遺跡に普遍的に見られ，遺物を包含する主体の層である。縄文時代に該当する。

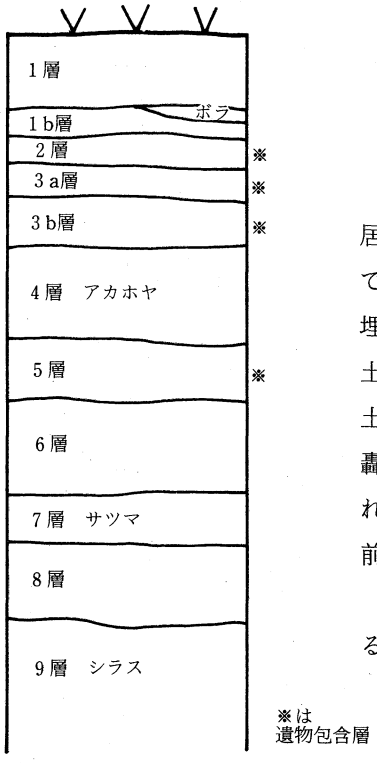
第3b層　明茶褐色火山灰土で，遺物包含層である。縄文時代該当層である。この層の中にはパミスが含まれるが，御池カルデラ起原と思われる(註)。

第4層　黄褐色火山灰土で鬼界カルデラ起原のアカホヤ（BP6000年）と呼ばれる。

第5層　明茶褐色火山灰土で，3b層に似るが，粘質を帯びる点で異なる。パミスを含む。縄文時代早期の遺物包含層である。

第6層　暗茶褐色火山灰土で，粘性があり，パミスを少量含む。

第7層　黄褐色火山灰土で，桜島起原の“サツマ”と呼ばれるものである。



第3図　土層模式柱状図

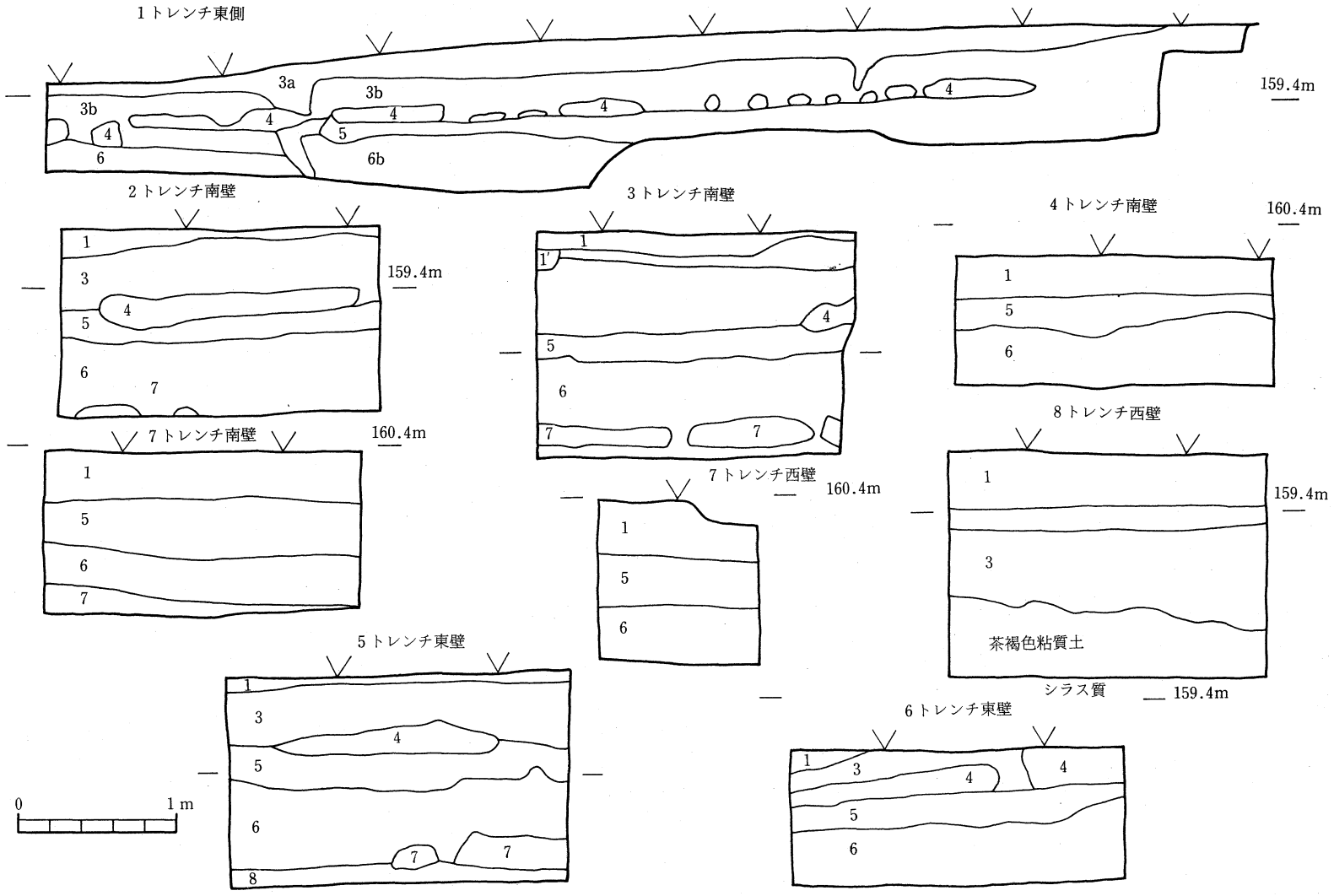
第8層　黒褐色を呈する粘性の強い火山灰土で，“チョコ層”とも俗称される。

第9層　シラス。入戸火砕流とも呼ばれ，姶良カルデラを起原に求められる噴出物である。

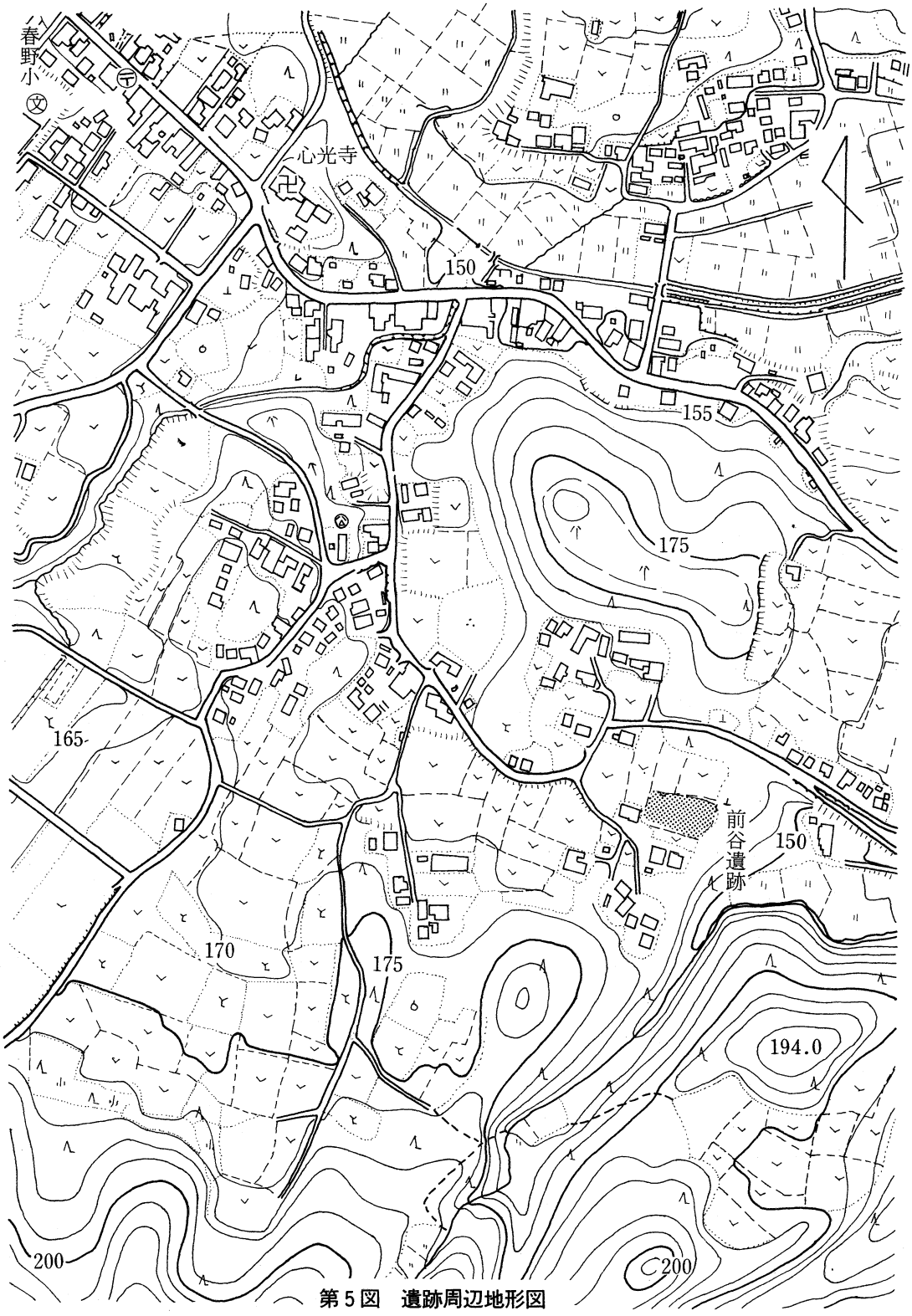
上記のように，遺物包含層は4層あり，第2層は1号住居跡の埋土のみに残存しており，住居跡が弥生時代のものであることから，この第2層もそのころのものと思われる。埋土からは遺物は出土しなかったが，表採資料に山ノ口式土器片が見られる。第3層は2層に分かれ，何れも春日式土器を主体とした包含層である。春日式以外では，曽畑式，轟式などの縄文時代前期の土器や後期の市来式土器も見られる。また，第5層の遺物包含層は，縄文時代早期に当り，前平式土器や条痕文土器，押型文土器などが見られる。

なお，本遺跡の地層は，ほとんど火山噴出物の推積によるものと思われ，第2層も火山灰土と推定される。

（註）成尾英仁氏（徳之島高校教諭）の御教示による。



第4図　トレンチ土層断面図



第5図　遺跡周辺地形図

第4章　調査の概要

調査の結果，本遺跡は縄文時代，弥生時代，歴史時代の複合遺跡であることが判明したが中心となるのは縄文時代であった。

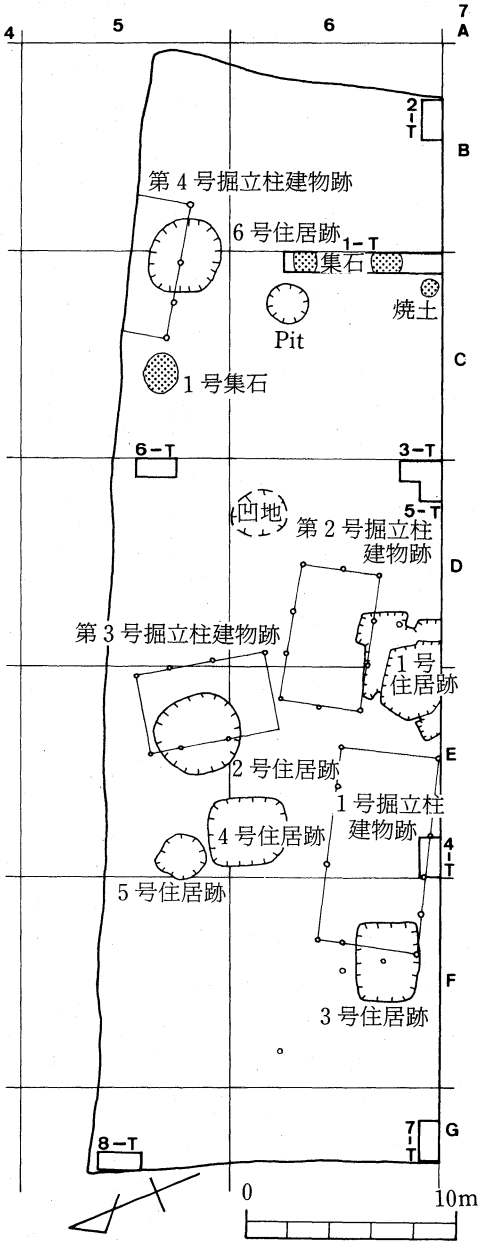
歴史時代の遺構は，堀立柱建物跡が4棟分検出された。略東西に主軸をとるもの2棟（1・2号堀立柱建物跡），略南北に主軸をとるもの1棟（3号堀柱建物跡），主軸不明1棟（4号堀立柱建物跡）である。遺物は出土していないが，周辺に土師器の小破片を確認した。

弥生時代の遺構は，竪穴式住居跡が1基（1号住居跡）が検出されたが，遺物は出土しなかったものの周辺から弥生時代中期の遺物数点を採集した。

縄文時代の遺構は，竪穴式住居跡が5基検出された。方形の住居跡3基（3～5号住居跡），円形の住居跡2基（2・6号住居跡）。円形ピット1基，集石1基，焼土1ヶ所。遺物は縄文時代前期末から中期にかけての「春日式土器」，石鏃，すり石，叩き石，石斧，石匙等を出土した。これらの遺物は黄色パミス（御池パミス）を混じる茶褐色土層（3層）から出土した。

土層観察用深堀りトレンチの調査の結果，縄文時代早期の集石が2基確認できた。

本遺跡は調査後，土地所有者の協力で土盛りによる遺構の現状保存が町の手で実施された。



第6図　グリッド及遺構配置図

第5章　遺　　構

第1節　縄文時代の遺構

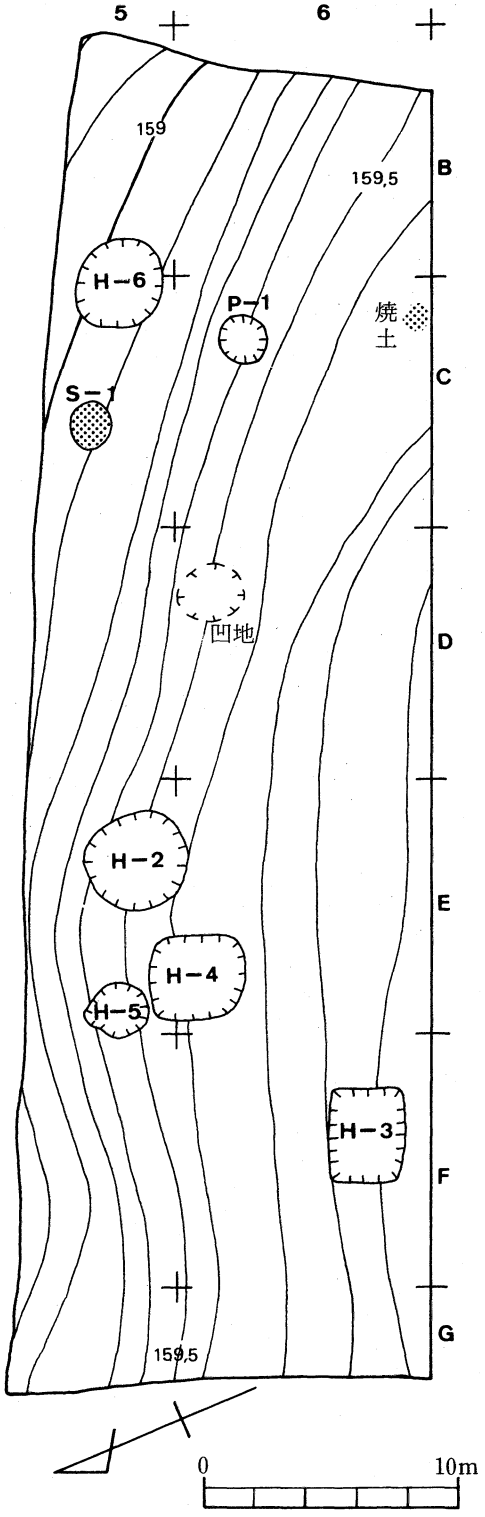
本遺跡から出土した遺物はその大部分が縄文時代に属するものである。

検出された遺構には，竪穴式住居跡5基，集石3基，円形ピット1基，焼土1ヶ所，がそれぞれ検出された。このうちの集石2基は土層観察用深堀りトレンチ（第1トレンチ）の第5層において確認されたものである。他の遺構は第3層中～下位において検出されたものである。

遺物は大部分が第3層から出土しており，トレンチ調査における第5層からの出土量はきわめて少量であった。

出土遺物のうち，土器はその大部分が春日式土器であり，それに轟式系統土器，曽畑式系統土器の他瀬戸内地方とのつながりを示すと考えられる縄文・撚系文を施す土器等も出土している。トレンチ調査における第5層からは，石坂式土器，前平式土器，貝殻条痕文土器が出土した。又，第3層からは市来式土器も単独で少量出土した。

石器については，磨製石斧，石匙，磨石，叩石，石鏃等が出土している。石斧，磨石は2～3個が重なった状況で出土しているものもあり，石鏃は100本以上を超えるものであった。



第7図　縄文時代（第3層）の遺構配置及び地形図

2号住居跡（第8～10図，

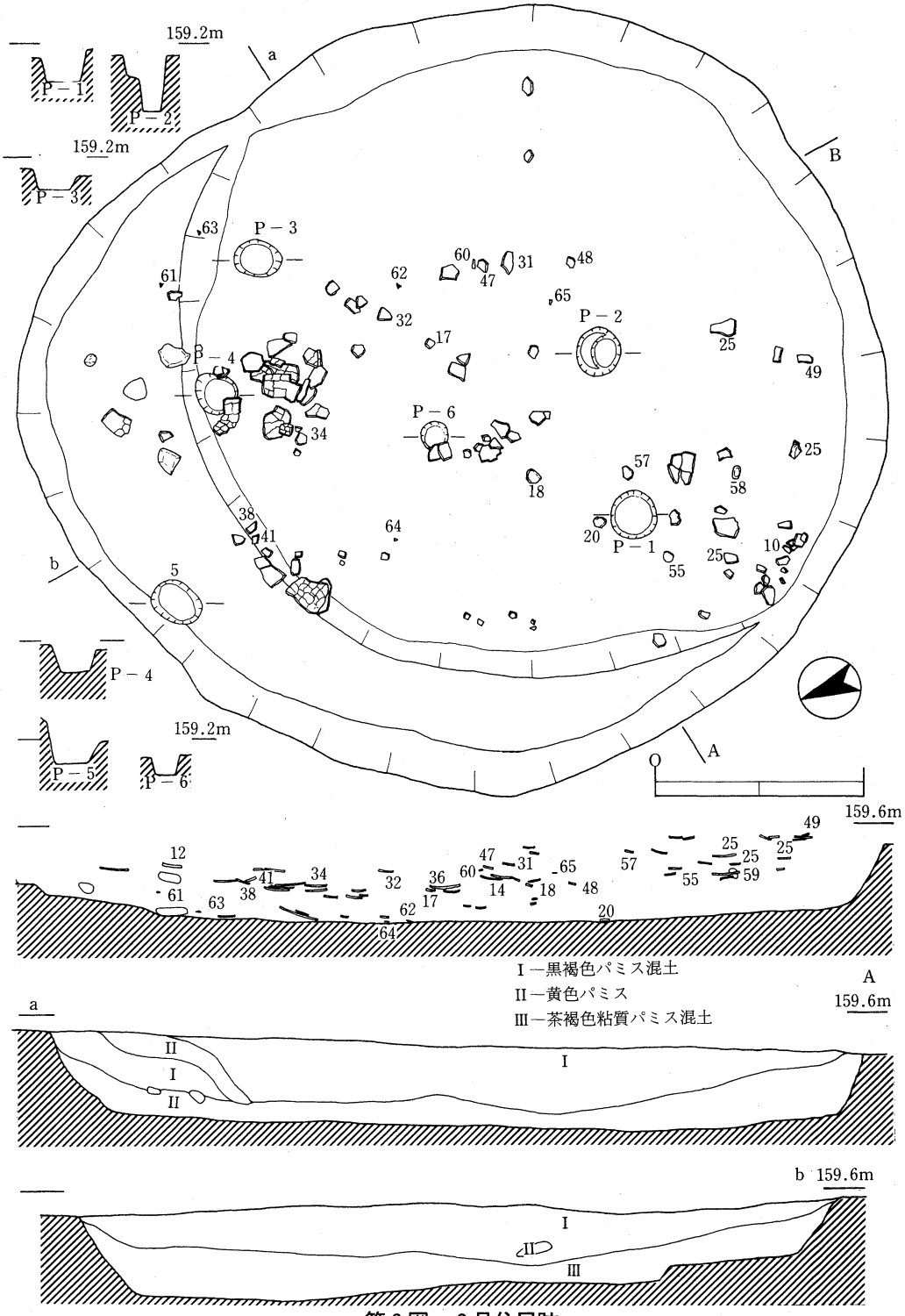
2号住居跡は，E－5・6区で検出されたものである。略円形を呈し，長径が4.21m短径が3.85mを測る。長軸はN－21.5度－Eをとり，深さは最深部で40cmある。住居跡は第III層から堀り下げられており，床面は第IV層の赤ホヤパミス層となっている。床面には北側にわずかにベット状となった高まりがあり，床面積は約9.9m²を測る。柱穴は6個検出され，うちP－6はやや小さく浅いもので，P－2は二重ピットである。柱穴の大きさは径が11～25cm，深さが10～27cmを測るものである。主支柱穴はP－1～P－4と考えられる。炉跡はない。

住居跡の埋土は3層確認され，I層が黒褐色パミス混土，II層が黄色パミス土で部分的にあり，III層が茶褐色粘質土である。

埋土中からは土器片や石器（石斧，叩き石，石匙，石鏃）の他炭化木ノ実が出土した。遺物は床面近くから出土するものもあったが大部分は上位より出土した。

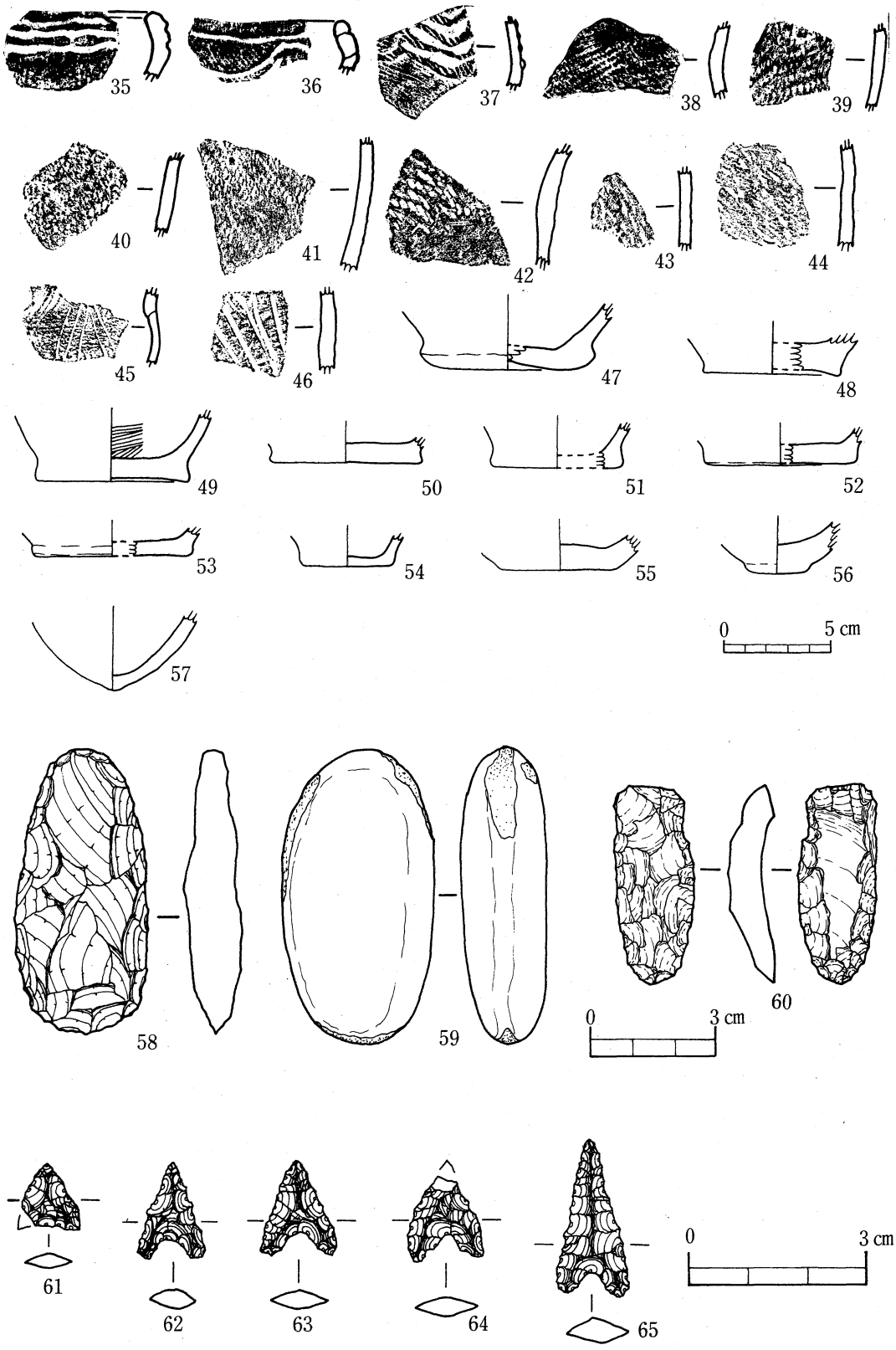
出土遺物

土器　出土した土器は，頸部から外反し，口縁部で内湾するキャリパー形を呈する深鉢形のものである。9～11は無文土器である。外面は貝殻条痕を施したあとなで消している。内面は貝殻条痕を施している。12～24は貼り付け突帯を付すものである。12はなだらかなカーブ状に，13は口縁端部に波状に付す。内面は貝殻条痕を施す。14は内外共に貝殻条痕を施し，口縁に波状突帯を2段に貼り付けている。外面には一部でススが付着している。15は「T」字状に突帯を付し，貝殻腹縁部を押圧したものである。16・17は波状に2段突帯を付すものである。内外面などで仕上げてある。18～24は，貼り付突帯に刻みを付すものである。18～20・22はヘラ状の工具で，21・23・24は貝殻腹縁による刻みである。24は5号住居跡埋土から出土のものと接合した。内面は18・19がなで調整，他は貝殻条痕を施す。外面は，18・19が上位でなで，下位で貝殻条痕を，24がなで調整で他は貝殻条痕を施している。25は，復元口径38cmを測るものである。口唇部はフラットで水平となっている。口縁端部に横位に一条，その下位は波状に4～6条沈線を施すものである。胎土に滑石を含んでおり，焼成も良く他の土器とは異なったものである。26は口縁部が山形に隆起しているもので，3条の沈線を端部に巡らす。28は細い沈線を上位で波状に，下位では斜位に施すものである。27・29～34は突帯文と沈線や短沈線（連点）とを組み合わせるものである。29～31は突帯に刻みを付するもの，33は半載竹管によると考えられる連点文を，突帯は貝殻腹縁による刻みを付すものである。28は胎土に雲母を含む。34は補修孔がみられる。35～44は縄文ないしは撚糸文を施すものである。35は横位の沈線を3条口縁端部に施し，その下位と口唇部に押圧縄文を施すものである。36は撚糸文を施した後に沈線を描き，37は撚糸文を施した後に突帯を貼り付け，さらに撚糸文を施したものである。38～42は縄文を押圧するものであるが，39，40，42は単位が大きいものである。41は複節で他は単節のものと考えられる。調整は35，43の内面に貝殻条痕を施す。145は浅い沈線，46は太い沈線を施す。47～57は底部片である。48，49があげ底，50～55が平底，56が乳房状尖底，57が尖底である。あげ底となるものは端部が外へやや張るものである。48は胎土に滑石を混入するもので，


159.2m
P－1
P－2
P－3
P－4
P－5
P－6
a
b
A
B
159.6m
I ―黒褐色パミス混土
II ―黄色パミス
III ―茶褐色粘質パミス混土

第８図　２号住居跡

第９図　２号住居跡出土遺物（1）



第10図　2号住居跡出土遺物 (2)

25の土器の底部とも考えられるものである。47，49，55の内面のみは貝殻条痕を施す。

石器　58は砂岩製の磨製石斧片である。59は砂岩製の叩き石である。楕円形のやや扁平な石を利用し，端部及び側辺部の4ヶ所に打痕がみられる。60はホルンフェルス化した砂岩製の縦長石匙である。16～65は石鏃で，61，64がチャート製，他は黒曜石製である。

表2　2号住居跡出土石器計測表　（　）は現存長

No.	遺物No.	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材　質	備　　考
58		石斧	6.8	3.3	1.4	31.7	頁岩	未製品 ?
59	H-2-41	叩石	7.1	3.65	2.1	80.0	砂岩	
60	H-2-1	石匙	4.75	1.9	0.8	8.7	〃	
61	H-2-4	石鏃	1.1	(0.96)	(0.29)	0.25	チャート	片脚欠損
62	H-2-2	〃	1.6	1.15	0.36	0.45	黒曜石	
63	H-2-3	〃	1.6	1.3	0.3	0.45	〃	
64	H-2-5	〃	(1.4)	1.3	0.37	0.5	チャート	先端部欠損
65	H-2-3	〃	2.65	1.22	0.47	0.95	黒曜石	

3号住居跡　（第11・12図）

3号住居跡は，F－6区で検出されたものである。隅丸長方形を呈し，長軸が3.85m：短軸が2.94mを測る。長軸はN－68度－Wをとり，深さは最深部で40cmある。住居跡は第V層上面で確認され，床面は第V層下部から第VI層上面となっている。北隅と東隅ではベット状となっている。床面積は約8.8m²を測る。柱穴及び炉跡は確認されなかった。

住居跡の埋土は，黒褐色土でパミスを少量混じたものである。

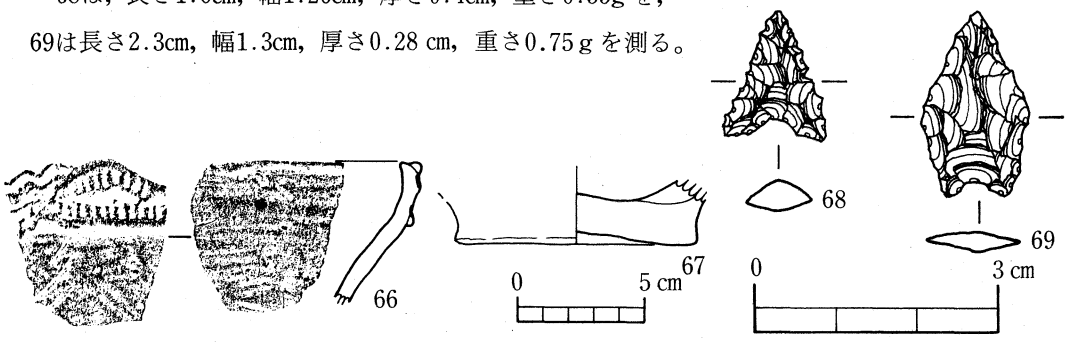
埋土中からは，少量の土器片と石鏃2本が出土した。

出土遺物

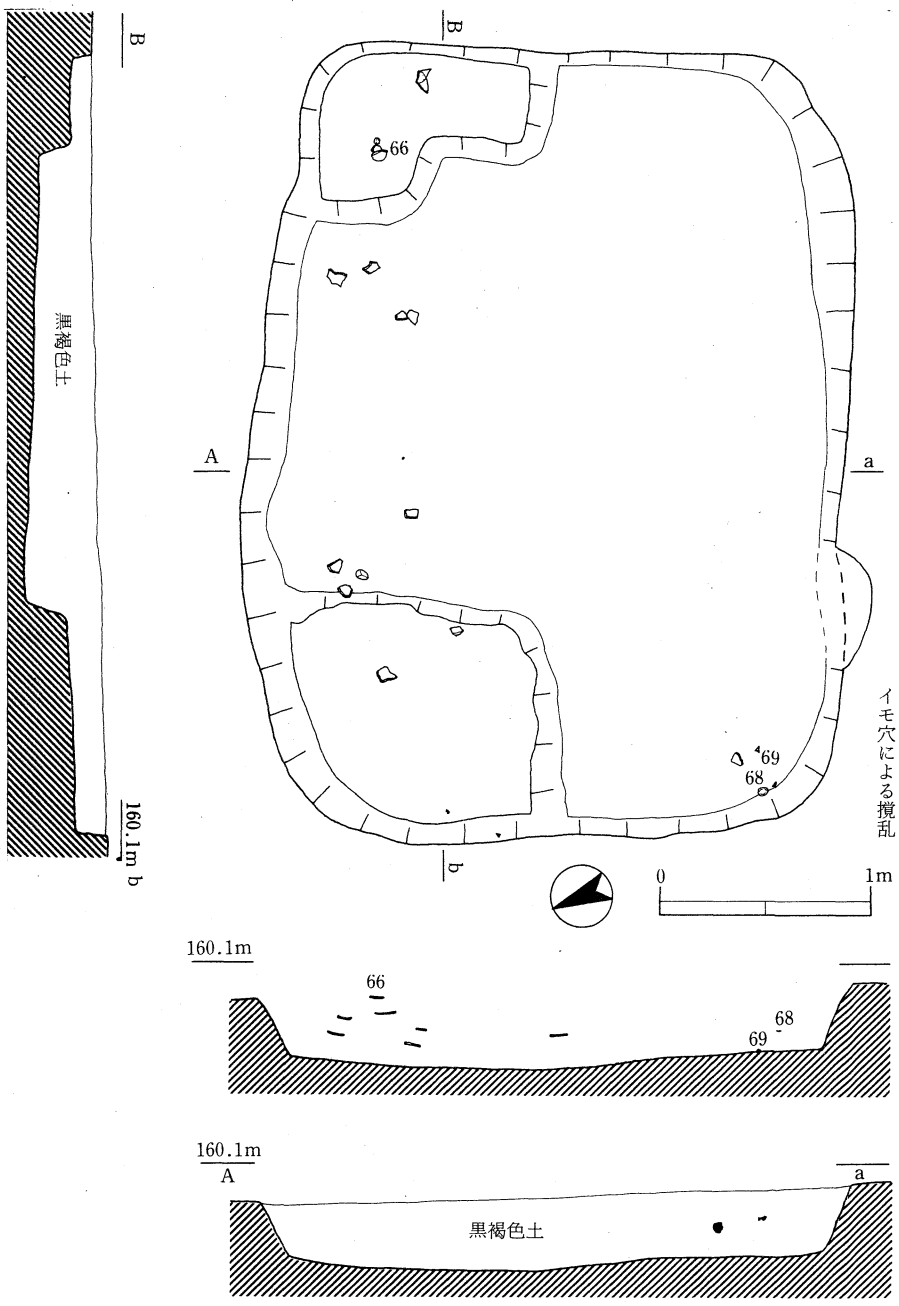
土器　出土した土器は少量であった。66は口縁部が内湾するもので，貼り付突帯と沈線，連点文とを組み合わすものである。外面は貝殻条痕を施した後になで消している。内面はなで仕上げである。67は平底の底部片である。端部は若干張り出し，内面に貝殻条痕を施す。

石器　68はホルンフェルス化した砂岩製，69がチャート製のものである。

68は，長さ1.6cm，幅1.26cm，厚さ0.4cm，重さ0.55gを，
69は長さ2.3cm，幅1.3cm，厚さ0.28cm，重さ0.75gを測る。



第11図　3号住居跡出土遺物


B
B
黒褐色土
160.1m
b
A
a
66
69
68
イモ穴による撹乱
b
0
1m
160.1m
66
68
69
160.1m
A
a
黒褐色土

第12図　3号住居跡

4号住居跡　（第13・14図）

4号住居跡は，E－5，6区で検出されたものである。隅丸長方形を呈し，長軸3.63m，短軸2.94mを測る。長軸はN－22度－Eをとり，深さは最深部で45cmある。住居跡は第III層から堀り下げられており，床面は2号住居跡同様第IV層の赤ホヤパミス層となっており，床面積は約8.3m²を測る。柱穴は3個検出され，うちP－2は二重ピットである。P－1の径は28cm×27cmで，深さは11cmで他の2個の柱穴と比較して浅い。P－2の径は上部で30cm×30cm，下部で17cm×17cm，深さは64cmである。P－3の径は25cm×21cmで，深さは64cmである。主柱穴はP－2，P－3の2本と考えられる。炉跡は確認できなった。

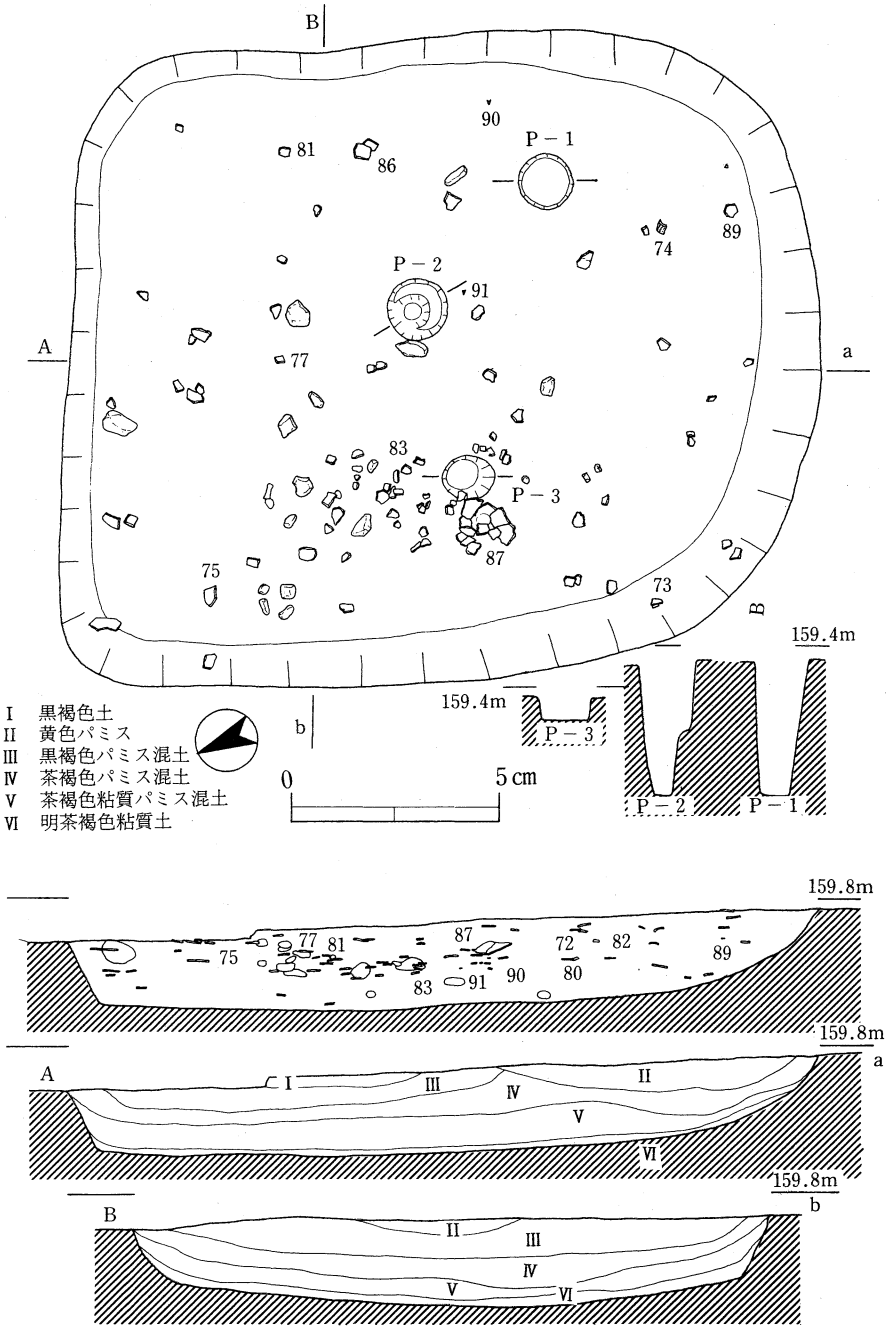
住居跡の埋土は6層確認された。I層が黒褐色土，II層が黄色パミス(御池パミス)，III層が黒褐色パミス混土，IV層が茶褐色パミス混土，V層が茶褐色粘質パミス混土，VI層が明茶褐色粘質土である。

埋土中からは土器や石器（石匙，石鏃）の他炭化木ノ実が出土した。遺物はIII～V層中から多く出土し，床面近くから出土したものは少なかった。

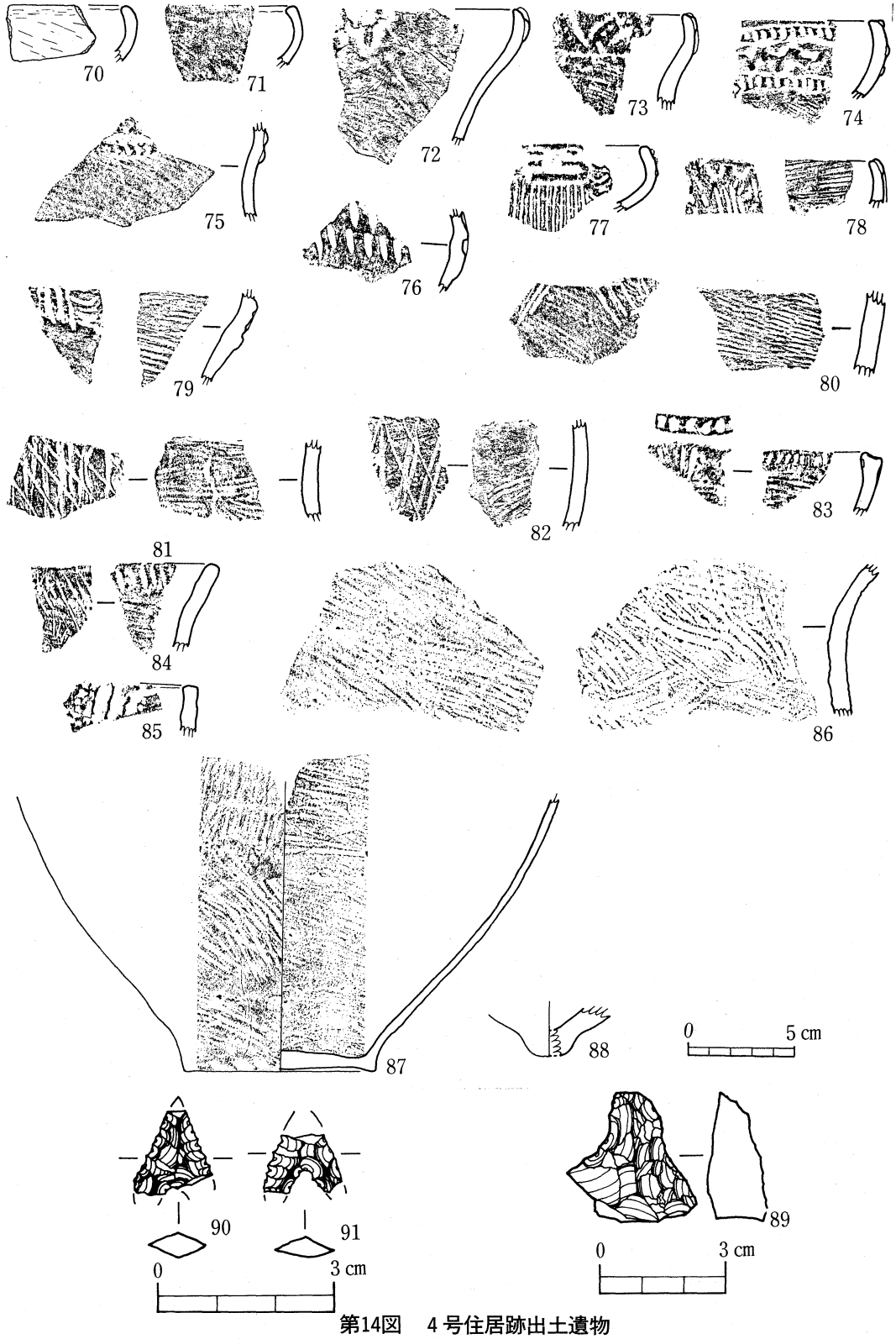
出土遺物

土器　出土した土器は，頸部から外反し，口縁部で内湾するキャリパー形を呈する深鉢形のもの（70～79），口縁部が外反するもの（84），口縁部が直口するもの（85）等がある。70，71は無文のものである。外面は貝殻条痕を施したあとなで消している。内外は70がなで71が貝殻条痕を一部残す。72は口縁端に突帯を「W」字状に貼り付けるものである。外面は貝殻条痕を施したあとなで仕上げている。73は口縁端に貼り付け突帯を波状に付し，突帯上に連点文を施している。74は刻み突帯を平行に2条付し，その間に波状の突帯を付している。外面に一部貝殻条痕を残す。75は頸部片で刻み突帯を付すものである。外面は貝殻条痕を施した後なで消し，内は貝殻条痕を施している。76は縦位の短沈線（連点）を施す，77，78は貼り付け突帯と沈線を組み合わすものである。79は沈線文を施している。78，79の内面は貝殻条痕を施している。80～82は細い沈線文を施すものである。内面は貝殻条痕を施す。83は内湾する口縁部片で外面に縦位に沈線を，内面に連点文を，口唇部に連点文を施すものである。84は外反する口縁部片で，外面に斜位の沈線を，内面の端部に斜位の短沈線文を施すものである。85は直口する口縁部片で，半截竹管による連点を外面に，口唇部は浅い凹点を施している。86は内外に貝殻条痕を施す頸部片である。87はややあげ底の底部からやや張る胴部までのもので，内外共やや粗い貝殻条痕を施す。88は乳房状に膨む尖底状の底部片である。70～88のうち72，81の胎土には雲母片を85の胎土には滑石を混入している。

石器　89はチャート製の石匙片，90はチャート製の，91は黒曜石製の石鏃片である。90は，長さ1.4cm，幅1.35cm，厚さ0.43cm，重さ0.6gを91は長さ0.97cm，幅1.33cm，厚さ0.36cm，重さ0.3gを測る。


B
90
P－1
81
86
89
74
P－2
91
A
a
77
83
P－3
87
75
73
B
159.4m
159.4m
P－3
P－2
P－1
I 黒褐色土
II 黄色パミス
III 黒褐色パミス混土
IV 茶褐色パミス混土
V 茶褐色粘質パミス混土
VI 明茶褐色粘質土
b
0
5cm
159.8m
75
77
81
87
72
82
89
83
91
90
80
159.8m
A
a
I
III
IV
II
V
VI
159.8m
B
b
II
III
IV
V
VI

第13図　4号住居跡



第14図　4号住居跡出土遺物

5号住居跡（第15～17図）

5号住居跡はE－5区で検出されたものである。円形に近い不整形のものである。長径が2.81m，短径が2.5mを測り，本遺跡では一番小形のものである。長軸はN－21.5°－Eをとり，深さは最深部で40cmある。住居跡は第III層から堀り下げられており，床面は第IV層の赤ホヤパミス層となっている。床面積は約2.5m²を測る。柱穴は東側に1個検出された。径は28cm×27cm，深さは64cmである。炉跡は確認できなかった。

住居跡の埋土は3層確認された。I層が黒褐色土，II層が黒褐色パミス混土，III層が茶褐色パミス混土である。

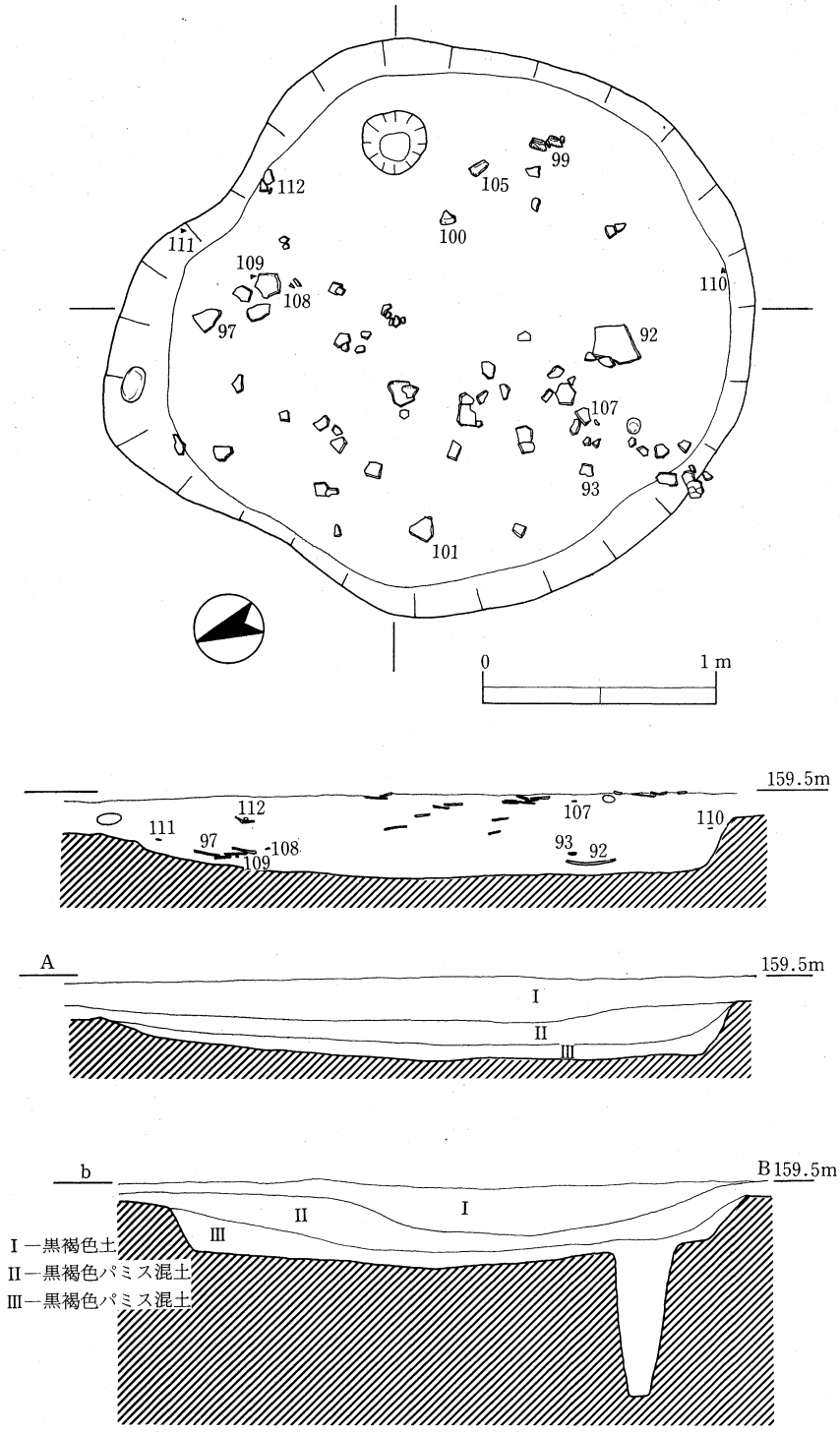
埋土中からは，土器，石器（磨製石斧片，叩き石，石匙，石鏃）の他，土製品，炭化木ノ実が出土した。遺物は床面近くから出土したものもあるが，多くはI層からの出土であった。

出土遺物

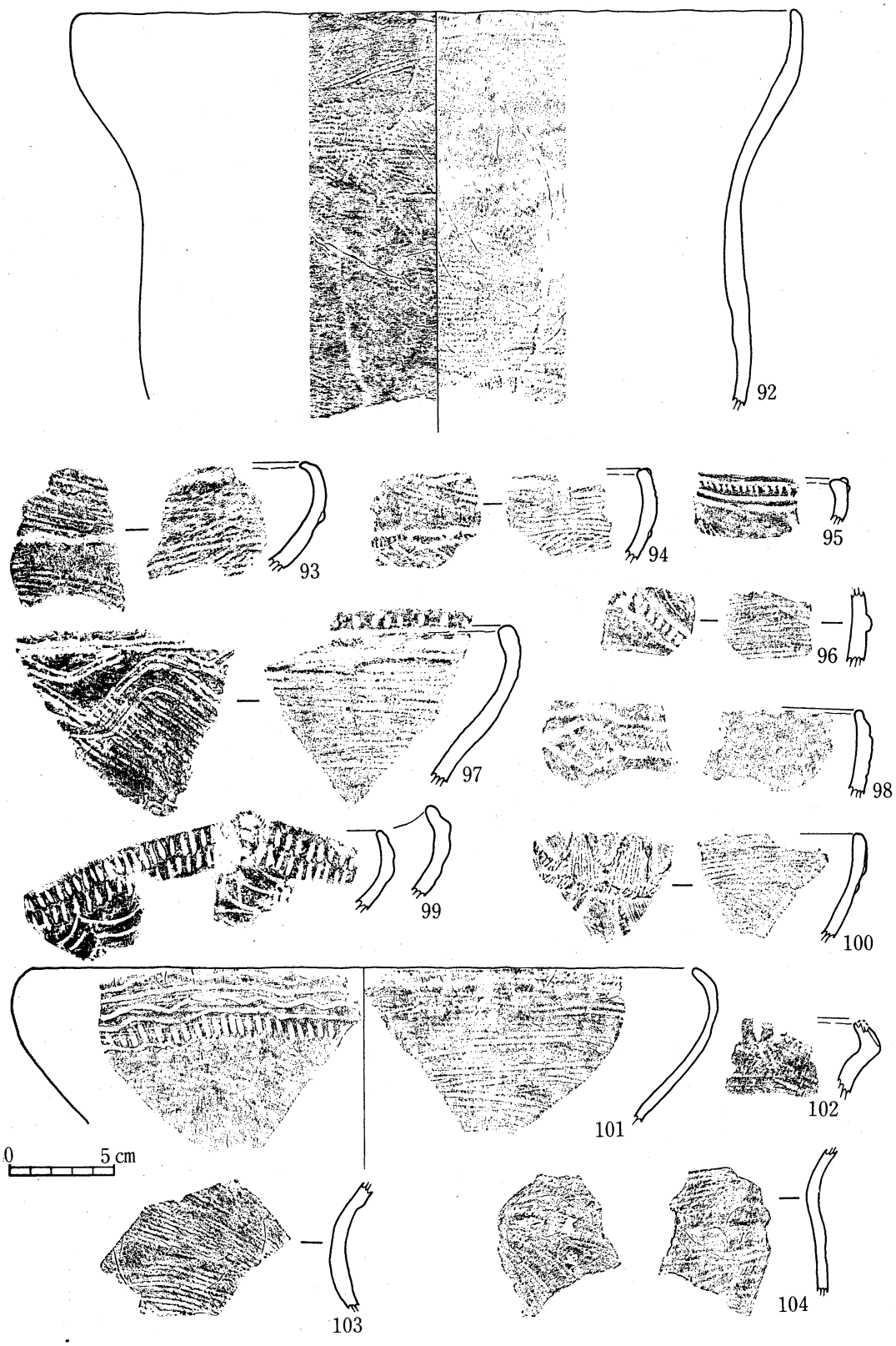
土器　出土した土器は，頸部から外反し，口縁部で内湾するキャリパー形を呈する深鉢形のものである。92は復元口径33.8cmを測るものである。口縁部は若干内湾するもので，胴部はあまり張らない。内外面共に貝殻条痕による器面調整が行われている。93は突帯を，94は刻みを付した突帯を貼り付けている。内外共に貝殻条痕を施している。95は貼り付け突帯の上部に連点文を，下部に沈線文を付し，突帯の下位には一部鋸歯状の沈線文がみられる。外面はなで調整，内面には貝殻条痕を残す。96は刻み突帯を斜位に付すものである。内面に貝殻条痕を残す。97はやや胎土の粗いもので，波状の沈線を2～3条横位に，口唇部に連点文を施すものである。外面は斜位の，内面は横位の貝殻条痕を施す。98は「四ツ菱」状に沈線で描くものであり内湾の度合いはゆるやかである。97は山形に隆起する口縁部である。口縁端に縦位の短沈線を2段，その下位に狐状の沈線を数条めぐらすものである。隆起部は肥厚し凹点を施す。100は突帯を貝殻腹縁で貼りつけ，突帯間に沈線を施すものである。内外面共に貝殻条痕を施す。101は復元口径31.4cmを測るもので，口縁端に沈線を横位に波状に施し，その下位に縦の短沈線（連点文）を施すものである。内外面共貝殻痕を施す。102は「く」字状に内湾するもので，口縁端に縦位の短沈線（連点文）を施すものである。103は頸部片で，斜位に撚糸文を施すものである。104は内外面に貝殻条痕を残す頸部片である。

石器　105はホルンフェルス化した砂岩製の磨製石斧片である。刃部は破損している。研磨は丁寧に仕上げていず，一部剝離痕を残している。106は砂岩製の叩き石である。長軸の両端部に敲打痕を残している。107は黒曜石製，108はチャート製のいずれも縦形の石匙であるが，107は裏面に一次剝離面を残している。109～111は石鏃で，109・111が黒曜石製，110がチャート製である。

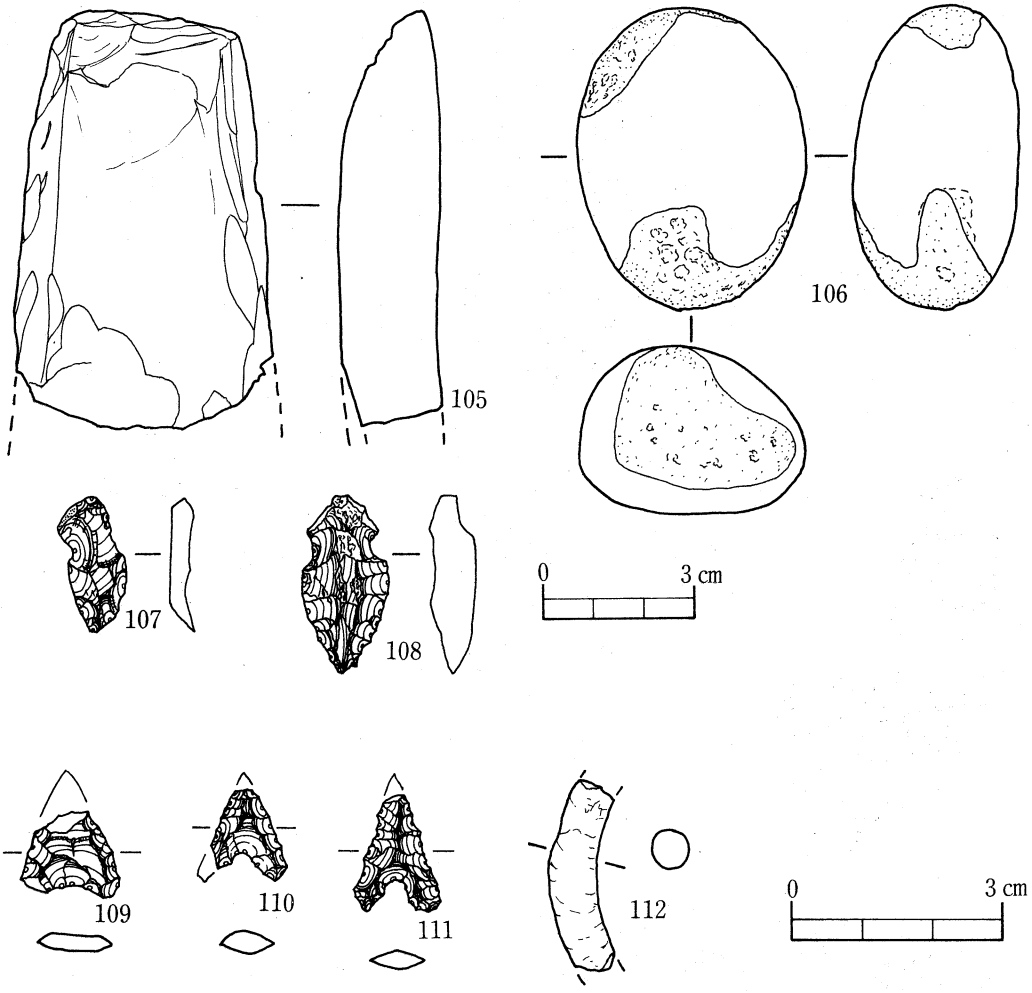
その他　112は土製品である。長さ2.5cm，径0.6cmを測る。土器製作用の粘土紐の可能性もある。


99
105
112
100
111
109
108
110
97
92
107
93
101
0
1 m
159.5m
112
111
97
108
109
107
110
93
92
A
159.5m
I
II
III
b
B 159.5m
II
I
III
I－黒褐色土
II－黒褐色パミス混土
III－黒褐色パミス混土

第15図　5号住居跡



第16図　5号住居跡出土遺物 (1)



第17図　5号住居跡出土遺物　(2)

表3　5号住居跡出土石器計測表

No.	遺物名	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材　質	備　　考
105	H-5-6	石斧	(8.3)	5.2	2.5	135.3	砂岩	刃部欠損
106	H-5-18	叩石	6.0	4.6	3.4	114.6	〃	
107	H-5-1	石匙	2.73	1.4	0.5	1.15	黒曜石	
108	H-5-2	〃	3.6	1.72	1.4	4.2	チャート	
109	H-5-3	石鏃	(1.23)	1.4	0.26	0.45	黒曜石	先端部欠損
110	H-5-21	〃	(1.3)	(1.05)	0.28	0.35	チャート	先端・片脚欠損
111	H-5-4	〃	(1.65)	1.25	0.28	0.45	黒曜石	先端部欠損

6号住居跡（第18・19図）

6号住居跡は，B，C－5区で検出されたものである。略円形を呈し，長径が3.94m，短径が3.47mを測る。長軸はN－28度－Wをとり，深さは最深部で45cmある。　住居跡は第Ⅲ層から堀り下げられており，床面は第Ⅳ層の赤ホヤパミス層となっている。南側には長軸66cm，短軸40cmの長方形のベッド状の高まりがある。中央部よりに長径49cm，短径48cm，深さ10cmの円形の浅いピットがある。床面積は約8.2m²を測る。柱穴は中央部に1個検出され，径が23cm×20cm，深さは14cmと若干浅いものである。炉跡は確認できなかった。

住居跡の埋土は4層確認され，Ⅰ層が黒褐色土，Ⅱ層が黒褐色パミス混土，Ⅲ層が茶褐色パミス混土，Ⅳ層が茶褐色粘質土である。

埋土中からは土器片の他炭化木ノ実が出土したが，石器は出土しなかった。遺物の多くは埋土の中位から出土した。

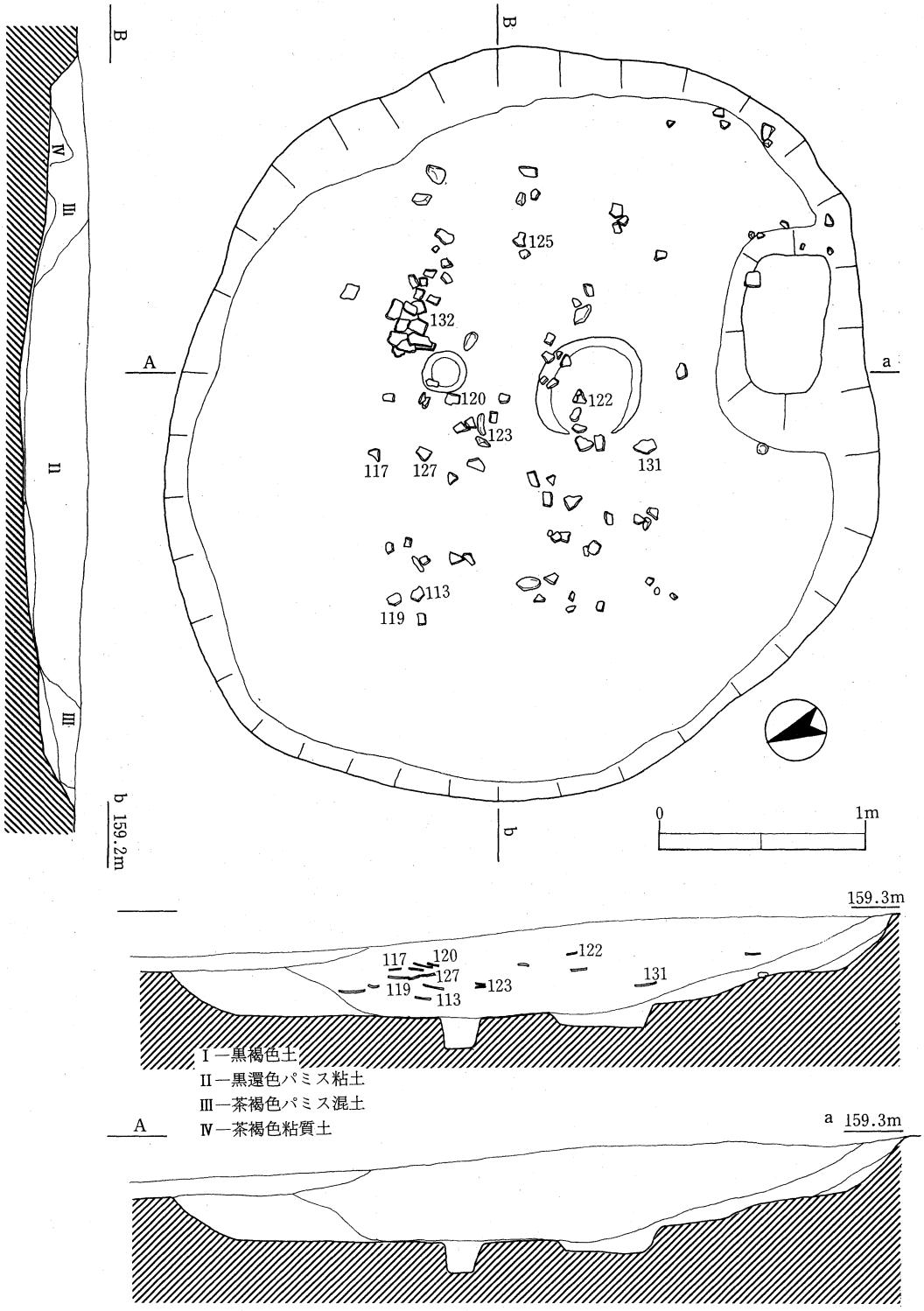
出土遺物

土器　出土した土器は，頸部から外反し，口縁部で内湾するキャリパー形を呈する深鉢形のものである。113はやや直口気味の口縁部片である。口唇部に沈線を施し，部分的に連点文を施すものである。外面は縦位に貝殻条痕を施した後一部なで消している。又ススの付着がみられる。内面はヘラ状工具による横位のなで調整である。114・115は口縁端に突帯を付すもので，114は縦位に2本，115は波状に付すものである。114は内外共貝殻条痕を，115は内外共なで調整である。114は焼成がやや悪い。116・117は刻みを付す突帯を付したもので，116の刻みは貝殻腹縁，117はヘラ状工具で施している。118は貼り付突帯と連点文を組み合わせるものである。119は沈線文と連点文を組み合わせるもので，口唇部に連点文を施す。120・121は波線を波状に施す。122・123は刻み突帯と短沈線（連点文）を組み合わせるものである。110～121のうち120は内外共貝殻条痕を残し，他は一部なで消している。122の外面はススの付着がみられる。124は沈線文と刻み突帯を組合わせるものである。胎土に雲母を含み，器厚は他に較べてやや厚い。125は沈線と連点を組み合せるものである。口縁内湾の度合は他に較べ弱い。126は山形に隆起する口縁部片でやや直線的に開くものである。連点と沈線を組み合せる。127は外反する頸部片で，縦位の沈線とそれに沿って連点を施している。128～130は撚糸文を縦位に施すもので，130はさらに沈線を斜位に施している。131は頸部片である。押圧縄文が一部にみられる。器面は内外共なで調整である。

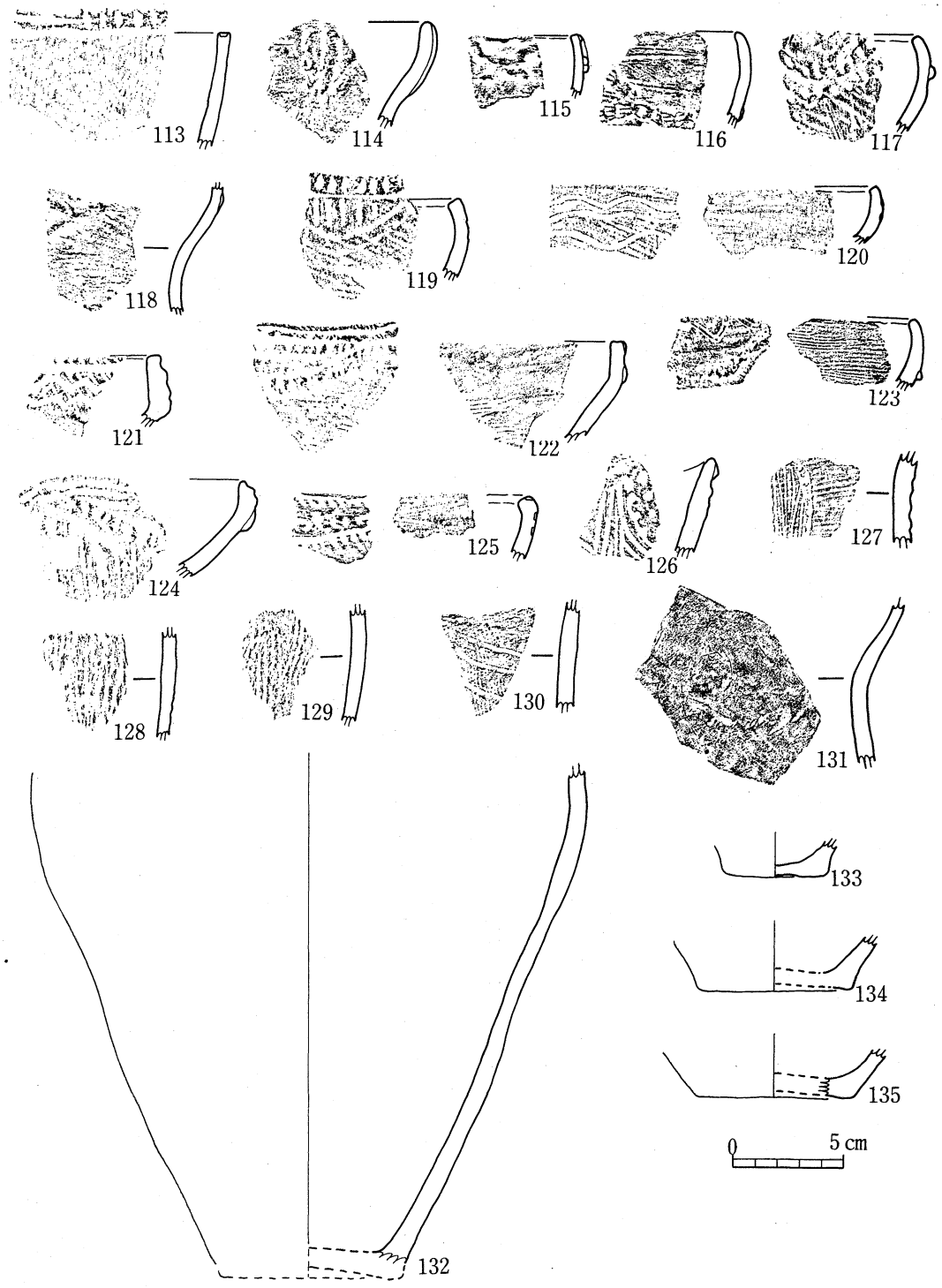
132は底部近くからやや直線的に開く胴部片である。胎土に雲母を含んでいる。133～135は底部片であげ底である。内外共なで調整である。135は胎土に雲母を含んでいる。胎土等から124・132・135は同一個体と考えられるものである。

表4　住居跡出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	類	調整(外)	調整(内)	胎土	焼成	備考
9	9	Ⅶ	ナデ消	貝殻条痕	細砂	良	
	10	〃	〃		〃	〃	
9	11	Ⅶ	貝殻条痕	貝殻条痕	細砂粒	良	
	12	〃	上なで 下貝殻条痕	〃	細砂粒	〃	


B
B
A
a
b
b
159.2m
159.3m
159.3m
A
a
125
132
120
122
123
117
127
131
113
119
0
1m
Ⅰ—黒褐色土
Ⅱ—黒還色パミス粘土
Ⅲ—茶褐色パミス混土
Ⅳ—茶褐色粘質土

第18図　6号住居跡



第19図　6号住居跡出土遺物

表4　住居跡跡出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	類	調整(外)	調整(内)	胎　土	焼成	備　考
9	13	Ⅶ	なで	貝殻条痕	細砂粒	良	
	14	〃	貝殻条痕	〃	砂粒	〃	スス
	15	〃	なで	なで	細砂粒	〃	突帯に貝殻文
	16	〃	〃	〃	砂粒	〃	
	17	〃	〃	〃	〃	〃	スス
	18	〃	上　なで 下貝殻条痕	〃	〃	〃	突帯に貝殻刻
	19	〃	〃	〃	〃	〃	
	20	〃	貝殻条痕	貝殻条痕	〃	〃	
	21	〃	〃	〃	〃	〃	
	22	〃	〃	〃		〃	
	23	〃	〃	〃	砂粒	〃	
	24	〃	なで	〃	細砂粒角閃石	〃	
	25	〃			砂，滑石粒を多く含む	非常によい	
	26	〃	貝殻条痕	貝殻条痕	砂粒	良	内スス山形隆起
	27	〃	なで	なで	〃	〃	
	28	〃	〃	貝殻条痕	〃　雲母	〃	
	29	〃	〃	〃	細砂粒	〃	
	30	〃	〃	〃	〃	〃	
	31	〃	〃	なで	砂粒	〃	同一個体
	32	〃					〃
	33	〃	なで	貝殻条痕	砂粒	〃	
	34	〃	〃	なで	〃	〃	補修孔
10	35	Ⅷ	〃	貝殻条痕	細砂粒	〃	
	36	〃	〃	なで	〃	〃	
	37	〃	〃	〃	砂粒	〃	器面と突帯上の撚糸は方向が若干異なる
	38	〃	〃	〃	〃　角閃石	〃	
	39	〃	〃	〃	〃　〃	〃	
	40	〃	〃	〃	〃　小礫　〃	〃	
	41	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	
	42	〃	〃	〃	砂粒角閃石	〃	
	43	〃	なで	貝殻条痕	〃　小礫	〃	
	44	〃	〃	なで	〃　〃	〃	
	45	〃	貝殻条痕	貝殻条痕	砂粒	〃	
	46	〃	〃	〃	〃　雲母	〃	
	47	底部	〃	〃	小礫角閃石 軽石粒	〃	
	48	〃	なで	なで	小礫多・ 滑石粒	非常に良い	
	49	〃	〃	貝殻条痕	砂粒小礫	良	
	50	〃	〃	なで	砂粒	〃	
	51	〃	〃	〃	〃　小礫	〃	
	52	〃	〃	〃	砂粒	〃	
	53	〃	〃	〃	〃	〃	
10	54	底部	なで	なで	砂粒	良	
	55	〃	〃	貝殻条痕	〃	〃	
	56	〃	〃	なで	〃　小礫雲母	〃	
	57	〃	〃	〃	細砂粒	〃	
11	66	Ⅶ	〃	〃	砂粒礫，長	〃	
	67	底部	〃	貝殻条痕	細砂粒小礫	〃	
14	70	Ⅶ	〃	なで	細砂粒	良	
	71	〃	貝殻条痕 なで	貝殻条痕	〃	〃	
	72	〃	貝殻条痕	貝殻条痕 ＋なで	〃	〃	
	73	〃	なで	なで	〃	やや悪い	
	74	〃	貝殻条痕 ＋なで	貝殻条痕 ＋なで	〃	良	
	75	〃	〃	貝殻条痕	〃	〃	
	76	〃	なで	なで	〃	〃	
	77	〃	〃	なで＋ 貝殻条痕	〃	〃	
	78	〃	〃	貝殻条痕	〃	〃	
	79	〃	〃	〃	〃	良	
	80	〃	貝殻条痕	〃	砂粒	〃	
	81	〃	なで	〃	〃　雲母	やや悪い	
	82	〃	〃	なで＋ 貝殻条痕	〃　〃	〃	
	83	〃	なで 貝殻条痕	貝殻条痕	〃	良	
	84	〃	〃	〃	砂粒多い	〃	
	85	〃	なで	貝殻条痕 ＋なで	細砂粒滑石	〃	
	86	〃	貝殻条痕	貝殻条痕 あらい目	砂粒小礫	非常に良い	
	87	底部	貝殻条痕 あらい	貝殻条痕 あらい	砂粒	良	スス非常にうすい
	88	〃	なで	なで	砂粒多い	〃	
16	92	Ⅶ	貝殻条痕	貝殻条痕	砂粒	やや悪い	
	93	〃	〃	〃	〃	〃	
	94	〃	〃	〃	〃　小礫	良	
	95	〃	なで	〃	細砂粒	〃	
	96	〃	〃	〃	〃	〃	
	97	〃	貝殻条痕	〃	砂粒多い小礫	〃	
	98	〃	なで	なで	砂粒小礫	〃	
	99	〃	〃	〃	砂粒雲母	〃	
	100	〃	〃	貝殻条痕	砂粒	〃	
	101	〃	貝殻条痕	〃	細砂粒	〃	
	102	〃	〃	〃	砂粒雲母	〃	
	103	〃	撚糸	なで	砂粒小礫	〃	
	104	〃	貝殻条痕	貝殻条痕	砂粒		
19	113	Ⅶ	〃	なで	〃	良	
	114	〃	〃	貝殻条痕	〃	やや悪い	
	115	〃	なで	なで	〃	良	

挿図番右	遺物番号	類	調整(外)	調整(内)	胎　土	焼成	備　考
19	116	Ⅶ	貝殻条痕なで	貝殻条痕	砂粒	良	
	117	〃	貝殻条痕	なで	〃	〃	
	118	〃	貝殻条痕なで	貝殻条痕	砂粒多い	〃	
	119	〃	貝殻条痕	なで	〃	〃	
	120	〃	〃	貝殻条痕	砂粒粒	〃	
	121	〃	貝殻条痕なで	なで	砂粒多い	〃	
	122	〃	貝殻条痕	なで 貝殻条痕	細砂粒	〃	スス
	123	〃	なで	貝殻条痕	砂粒	〃	
	124	〃	〃	〃	砂粒雲母	〃	
	125	〃	〃	〃	砂粒	良	

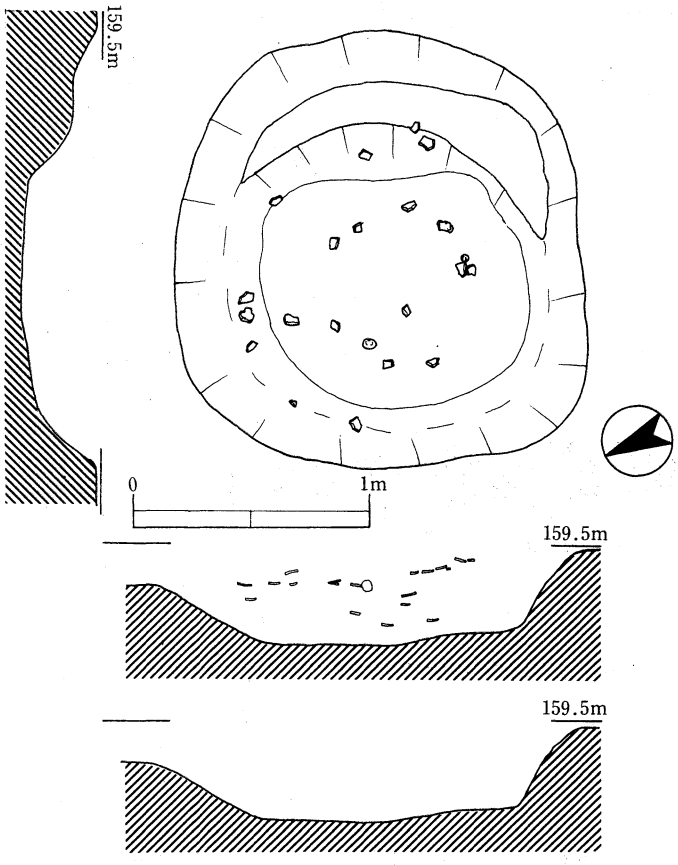
挿図番号	遺物番号	類	調整(外)	調整(内)	胎　土	焼成	備　考
19	126	Ⅶ	なで	貝殻条痕	細砂粒	良	
	127	〃	貝殻条痕	〃	砂粒	〃	
	128	Ⅷ	撚糸	なでで	〃	〃	
	129	〃	〃	〃	〃 小礫	〃	
	130	〃	撚糸の上に沈線	〃	〃 〃	〃	
	131	〃	なで	〃	〃 〃	〃	
	132	底部	〃	貝殻条痕 上小 下太	〃 雲母	〃	
	133	〃	〃	なで	〃 礫	〃	
	134	〃	〃	〃	〃 〃	〃	
	135	〃	〃	〃	〃 雲母	〃	

円形ピット（第20図,

円形ピットは，C－6区で検出されたものである。略隅丸方形に近い形を呈し，長軸1.85m，短軸1.7mを測る。長軸はN－22度－Wをとる。深さは最深部で32cmある。第Ⅲ層から堀り下げられ，底面は第Ⅳ層となっている。東側には階段状の高まりがみられる。

ピットの埋土は，暗茶褐色パミス混土である。

埋土中からは土器片が出土しているが，図化できるものはなかったものの，春日式土器の胴部片が中心であった。



第20図　円形ピット

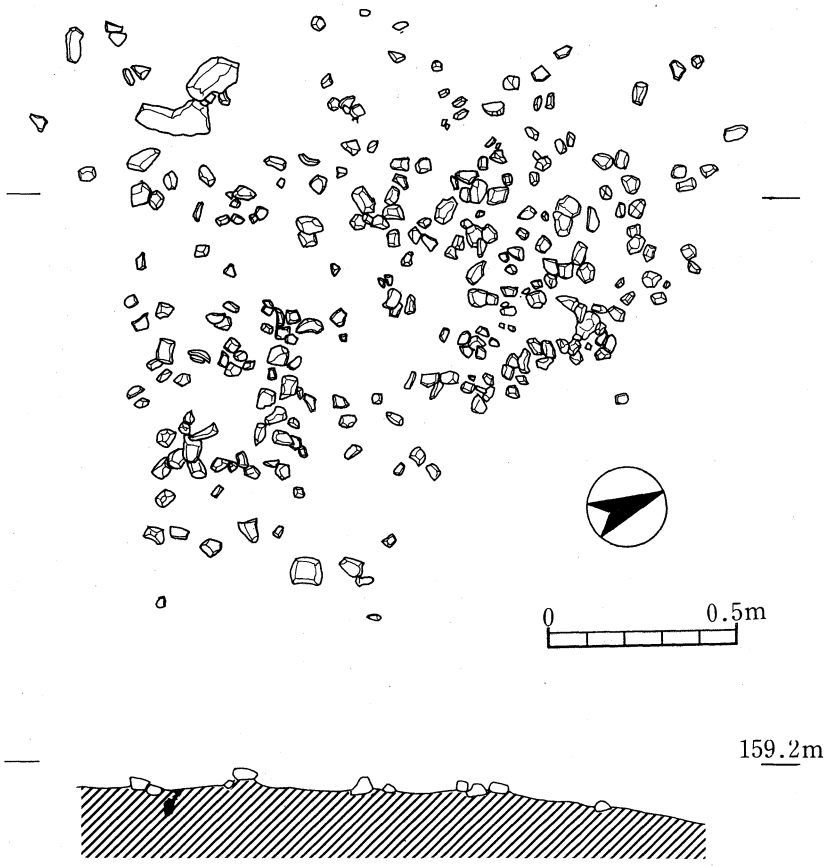
集　石（第21図）

集石は，C－5区で検出されたものである。径が10cm前後の石が散乱状態ではあったが，集中しているものである。この集石は略水平で，堀り込み等は確認できなかった。

礫の大部分は，熱を受けたためか赤褐色を呈するものがみられた。

集石の周囲からは，春日式土器の破片等が出土している。

又　トレンチ調査の際に第V層から2基の集石を確認した。



第21図　集　　石

焼　土

焼土は，C－6区の南隅部の第III層上面で検出されたものである。径が70cm，深さ約5 cmを測るもので，上面観略円形で断面が皿状に赤褐色を呈するものであった。一時的に火熱を受け赤化したものと考えられるものである。

凹地

凹地は，D－6区で確認されたものである。径1.5m，深さ10～20cmの円形を呈する。自然の凹地と考えられるものであるが，一応記録にとどめておいたものである。

第２節　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は，竪穴式住居跡が１基検出された。

１号竪穴式住居跡（第23図）

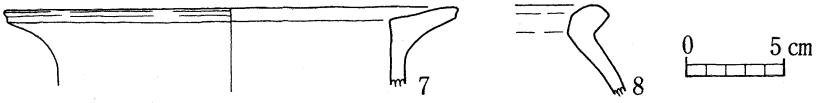
Ｄ・Ｅ－６区の南側で検出された，第３層に掘り込んだ埋土が黒褐色土の，ベッド状の張り出しをもつ竪穴式住居跡である。

調査地区外へ住居跡は広がっているため，規模は不明である。遺構検出面からの深さは張り出し部で10～27cm，中央部で45cm を測る。住居跡の基本形は不明であるが，東側で「Ｌ」字状の張り出しを有し，東南部には幅30～50cm，北西部には幅15cm の障壁を設けている。又，西側にも張り出し部を有し，北東隅に幅20cm の障壁を設けている。張り出し部と床面との比較差は35～20cm を測る。床面には２個の柱穴と浅い土壙状の凹みを設けている。

住居跡の埋土中からは時代を明確に決定できる遺物の出土はなかった。

弥生時代の遺物は，住居跡内及び他の地区からは出土しなかったが，隣接する畑地から２点採集することができた。

７はくの字状に開く甕形土器の口縁部片である。口縁端部は凹んで凹線状を呈しており，内側には稜を有している。内外面ともに丁寧な横位のなで調整がなされている。胎土に石英・長石・雲母砂を含む。色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。８は口辺部がやや内湾気味で，く字状に開く口縁部片である。胴部はやや球状を呈する甕形土器と考えられる。内外面なで調整が施され，胎土に石英，長石，雲母片を含む。色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。



第22図　弥生時代の遺物

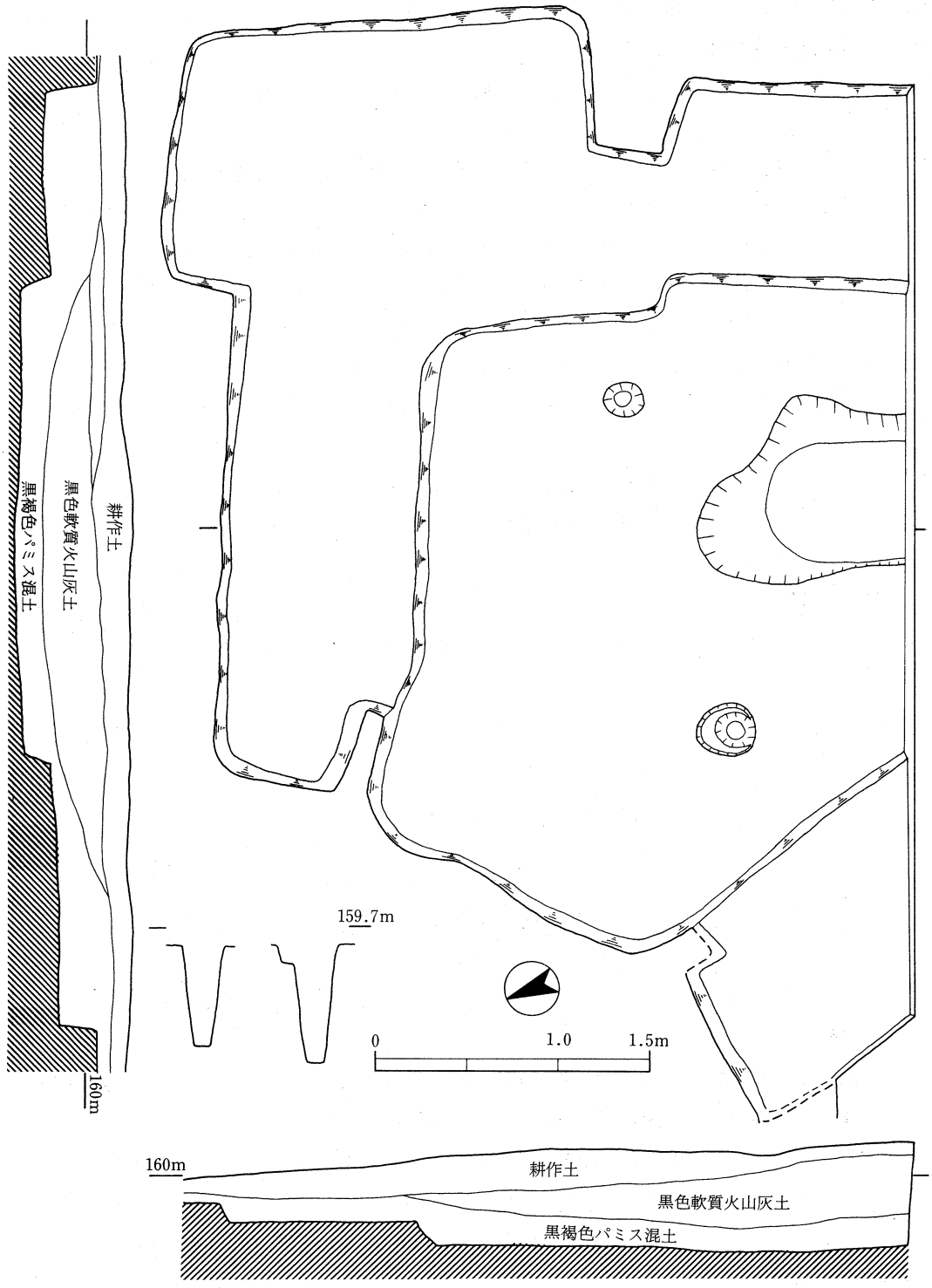
小　結

１号竪穴式住居跡は，ベッド状の張り出しを有するものであり，このような住居跡は鹿屋市王子遺跡[註(1)]，山川町成川遺跡[註(2)]等で検出された住居跡と類似しているもので，隣接地で採集した土器片も山ノ口遺跡出土の土器を標式とする弥生時代中期後半の山ノ口式土器[註(3)]に比定できることから，弥生時代中期の住居跡と考えて差し支えないと考えられる。

１）　立神次郎　「王子遺跡」　鹿児島県教育委員会　1985．3

２）　弥栄久志・繁昌正幸　「成川遺跡」　〃　1983．3

３）　河口貞徳　「山ノ口遺跡」　〃　1960．3


耕作土
黒色軟質火山灰土
黒褐色パミス混土
160m
159.7m
0
1.0
1.5m
160m
耕作土
黒色軟質火山灰土
黒褐色パミス混土

第23図　1号住居跡

第3節　歴史時代の遺構

歴史時代の遺構は，掘立柱建物跡が4棟分検出された。

1号掘立柱建物跡（第24図）

E・F－6区に検出された略東西に長い2間×5間に庇を設ける建物跡である。主軸方向はN－60°－Wである。それぞれの柱穴は直径20～30cmを測り，深さは20～30cmである。

桁行間は北側で929cm，南側で933cm，染行間は東側で477cm，西側で471cmを測る。それぞれの柱間の距離は次表の通りである。又西側にあるピット3個は本建物跡との関連はないと考えられるものである。柱穴からの遺物は出土はなかった。

表5　1号掘立柱健物跡柱間距離計測表

桁間柱間				梁間柱間			
P_1～P_2	195cm	P_6～P_7	190cm	P_4～P_5	117cm	P_1～P_{11}	477cm
P_2～P_3	379cm	P_7～P_8	186cm	P_5～P_6	354cm		
P_3～P_4	357cm	P_8～P_9	200cm				
		P_9～P_{10}	173cm	P_4～P_6	471		
P_1～P_4	929cm	P_{10}～P_{11}	185cm				
		P_6～P_{11}	933cm				

2号掘立柱建物跡（第25図）

D・E－6区で1号掘立柱建物跡の東側に検出された略東西に長い2間×3間の建物跡である。主軸方向はN－59.9°－Wであり，1号掘立柱建物跡と同様の値を示す。それぞれの柱穴は直径20～30cmを測り，深さは20～30cmである。

桁行間は北側で641cm，南側で638cmを測り，梁行間は東側で374cm，両側で378cmを測るものである。それぞれの柱穴間は次の表の通りである。柱穴からの遺物は出土はなかった。

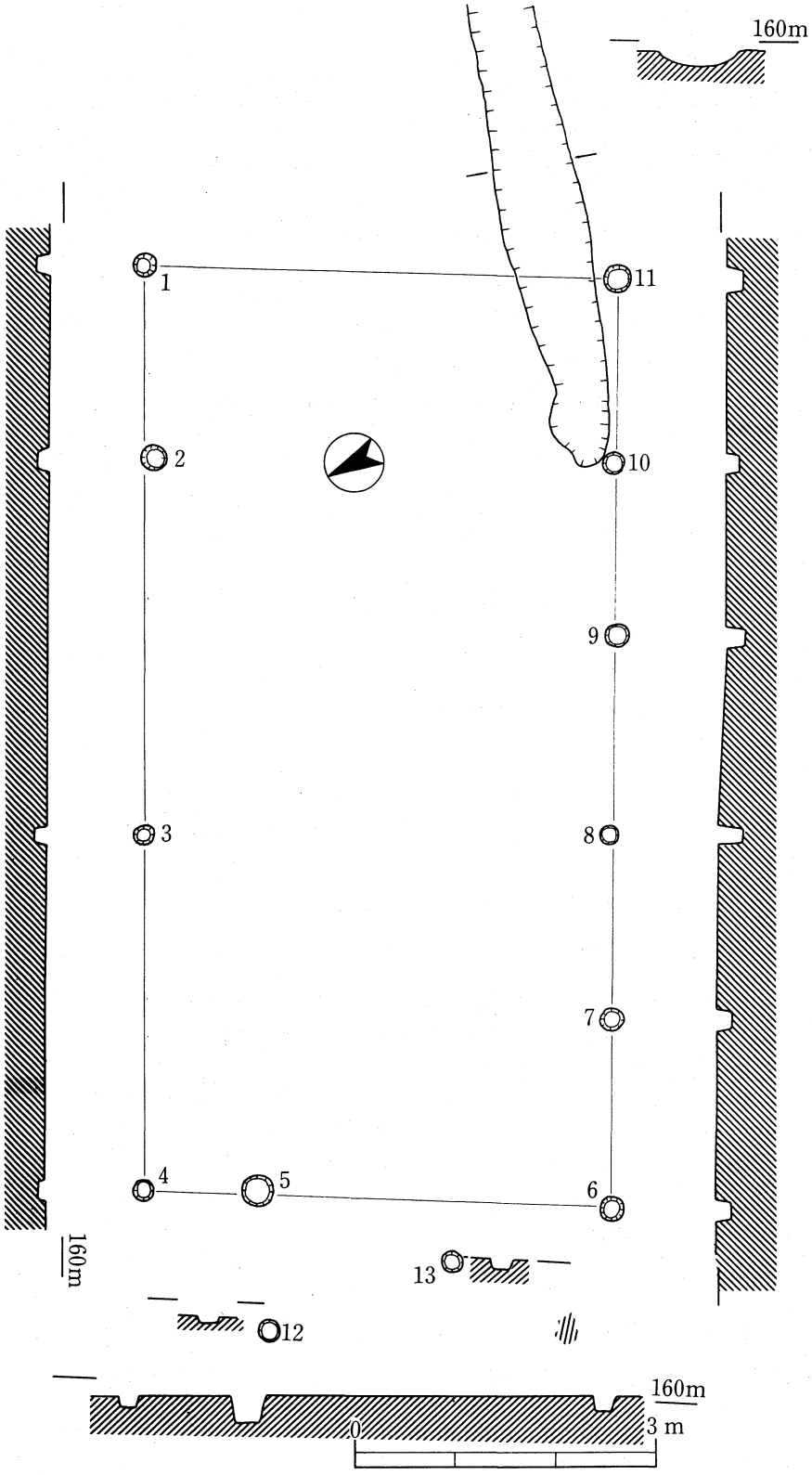
表6　2号掘立柱建物跡柱間距離計測表

桁行柱間				梁行柱間			
P_{21}～P_{22}	244cm	P_{19}～P_{18}	211cm	P_{21}～P_{20}	187cm	P_{14}～P_{15}	192cm
P_{22}～P_{23}	203cm	P_{18}～P_{17}	215cm	P_{20}～P_{19}	189cm	P_{15}～P_{16}	187cm
P_{24}～P_{24}	214cm	P_{17}～P_{16}	2120cm	P_{21}～P_{19}	374cm	P_{14}～P_{16}	378cm
P_{21}～P_{24}	641cm	P_{19}～P_{16}	638cm				

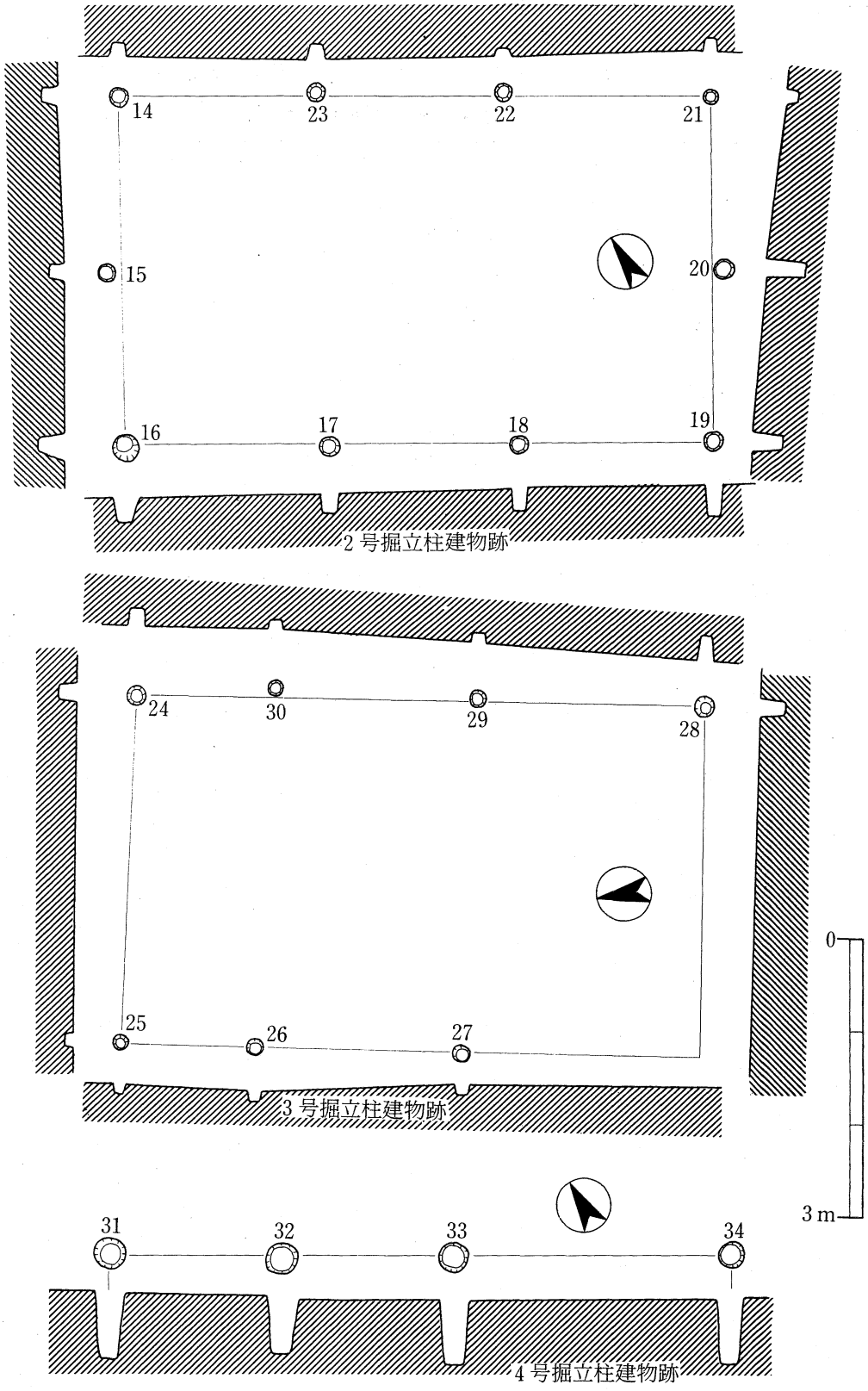
3号掘立柱建物跡（第25図）

D・E－5・6区で2号掘立柱建物跡のすぐ北側に検出された，略南北に長い2間×2間の北側に庇を設ける建物跡である。主軸方向はN－12°－Eで1・2号掘立柱建物跡とは略直角に主軸をとるものである。それぞれの柱穴は直径20～30cm，深さ20～30cmを測るものである。

桁行間は東側で617cm，西側で624cm，梁行間は北側で375cm，南側で382cmを測るものであ



第24図　溝状遺構と１号掘立柱建物跡



第25図　2～4号掘立柱建物跡

る。それぞれの柱間距離は次の表の通りである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

表7　3号掘立柱建物跡柱間距離計測表　　（　）は推定値

桁行柱間				梁行柱間			
P_{24}～P_{30}	151cm	P_{25}～P_{26}	145cm	P_{24}～P_{25}	375cm	P_{28}～　・	(382cm)
P_{20}～P_{29}	220cm	P_{26}～P_{27}	224cm				
P_{29}～P_{28}	247cm	P_{27}～　・)	(254cm)				
P_{24}～P_{28}	617cm	(P_{25}～　・)	(624cm)				

4号掘立柱建物跡（第25図）

B・C－5区で検出された建物跡と考えられるもので，桁行ないしは梁行のみ検出されたもので調査区外へのび，全体を把握できなかった。柱穴は4個検され，両端の柱穴間は670cmを測る。直径は30～70 cm，深さは70～80 cmを測り，1～3号掘立柱建物跡よりやや大きく深い柱穴であった。柱穴からの遺物の出土はなかった。

表8　4号掘立柱建物跡柱間距離計測表

柱間距離							
P_{31}～P_{22}	184cm	P_{32}～P_{33}	186cm	P_{33}～P_{34}	300cm	P_{31}～P_{34}	670cm

溝状遺構

E－6区に，幅70～80 cm，深さ20 cmの皿状の断面をもつ溝状遺構が検出された。埋土は黒色火山灰土で，遺物等は出土しなかった。

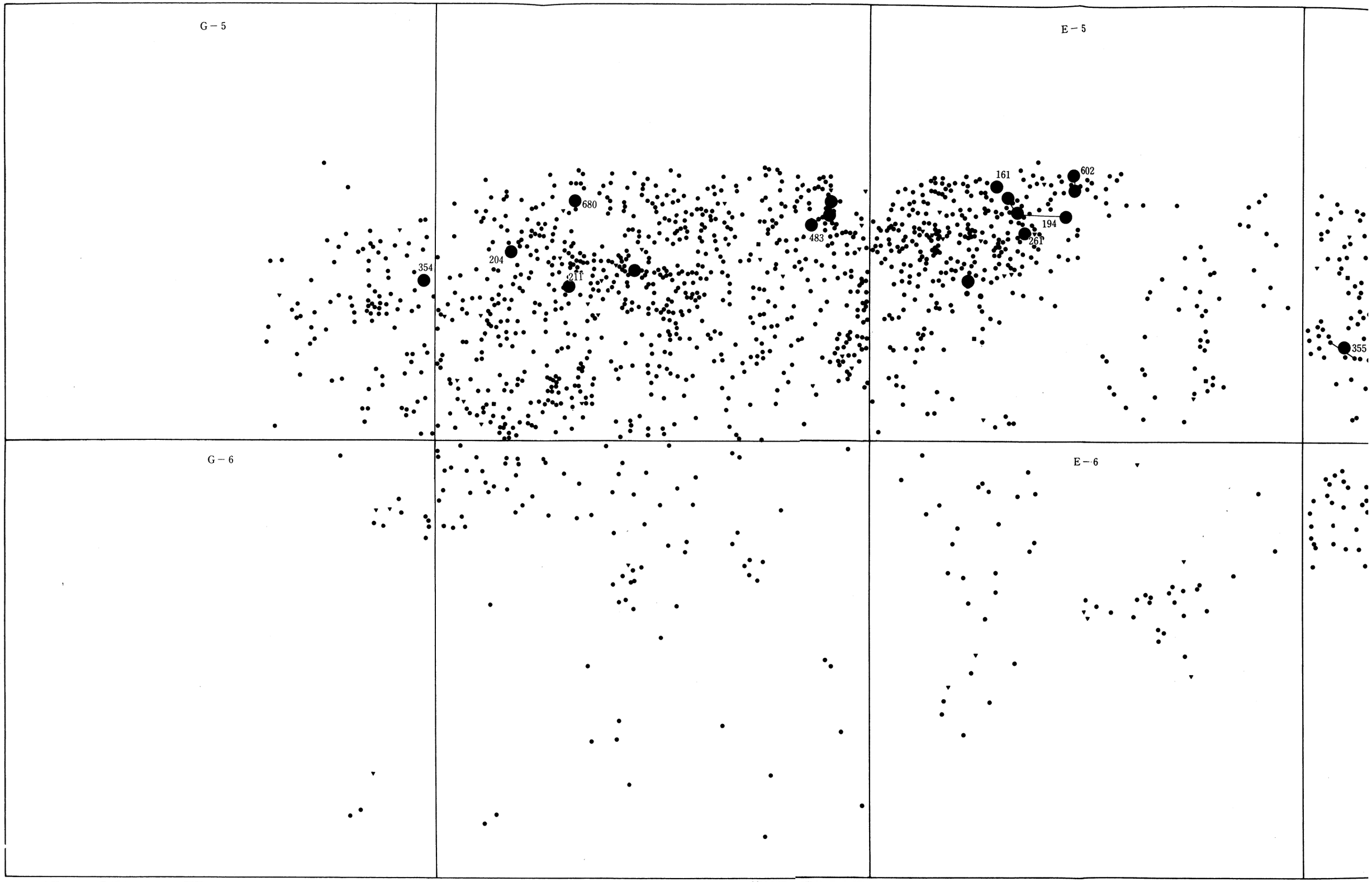
第2節　小　結

歴史時代に属するものは，遺構のみで遺物の出土は柱穴からもなかった。遺構は4棟の掘立柱建物のうち3棟については規模を知ることができた。

建物の向きは，1・2号建物跡が主軸を略同じにとり，3号建物跡はこれらと直角にとるものである。4号はその規模が不明なものの，主軸はどちらかに属するものと考えられるもので柱穴は他の建物跡と趣きを異にするものである。

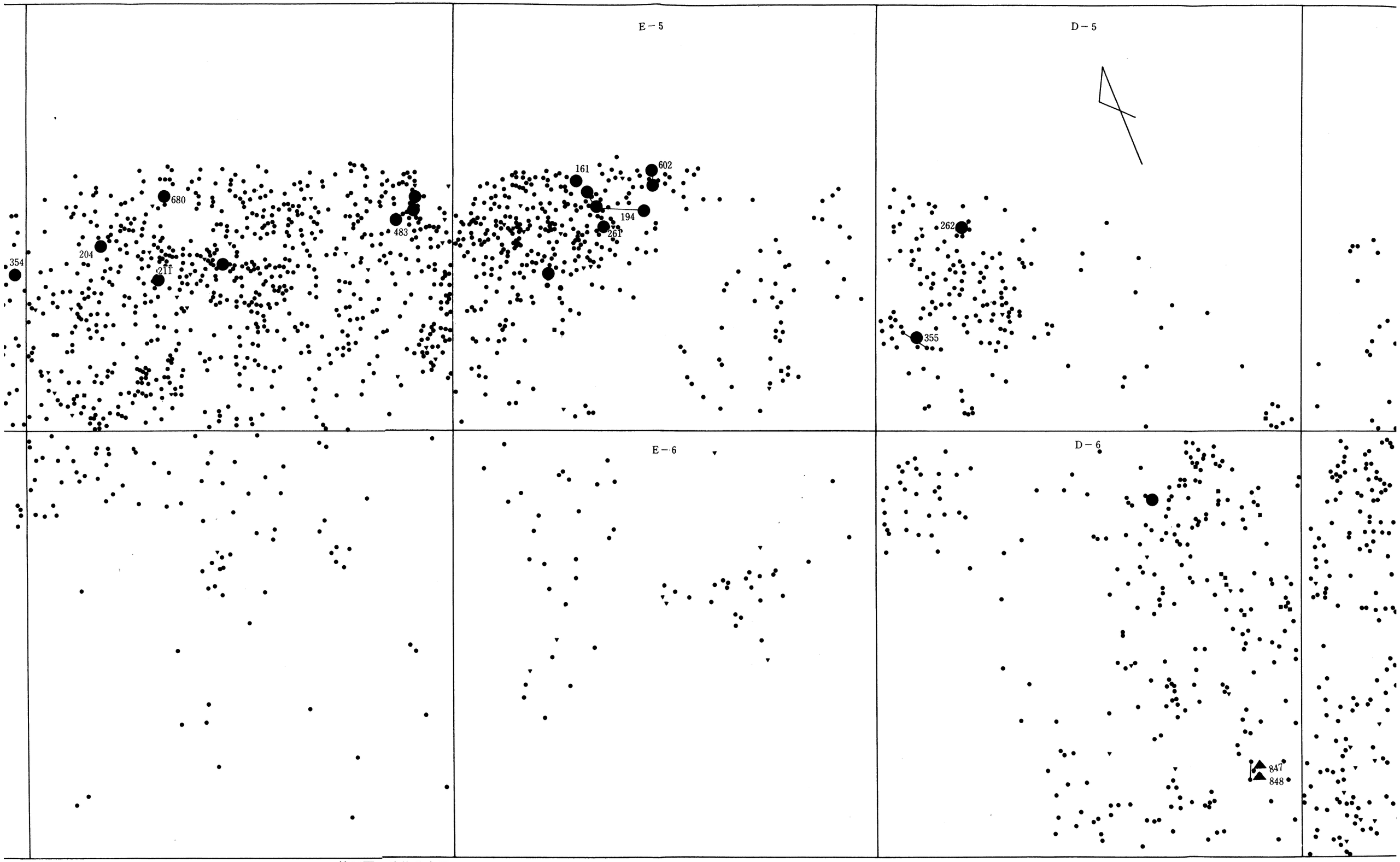
時期の決定については，遺物の出土がないため断定することはできないものの，周辺に土師器の破片が少量散布していることと，遺跡の北側に標高180mを測る京ノ峯の頂部が中世山城跡の「泰野城跡」[註(1)]と考えられていることから，これら掘立柱建物跡は室町時代に属するものと推定される。

1）　「日本城郭大系」　『鹿児島』　新人物往来社刊　1982年

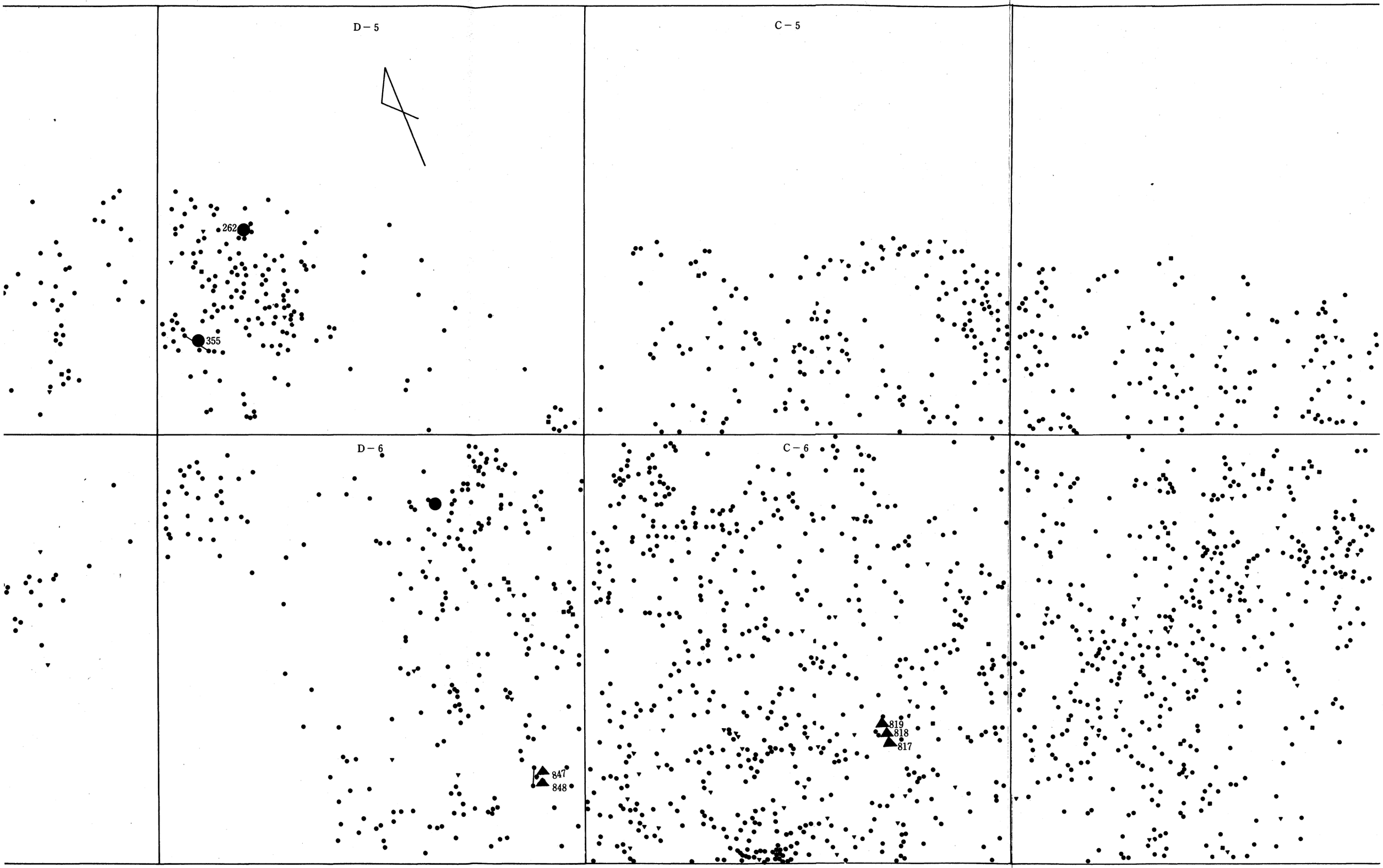


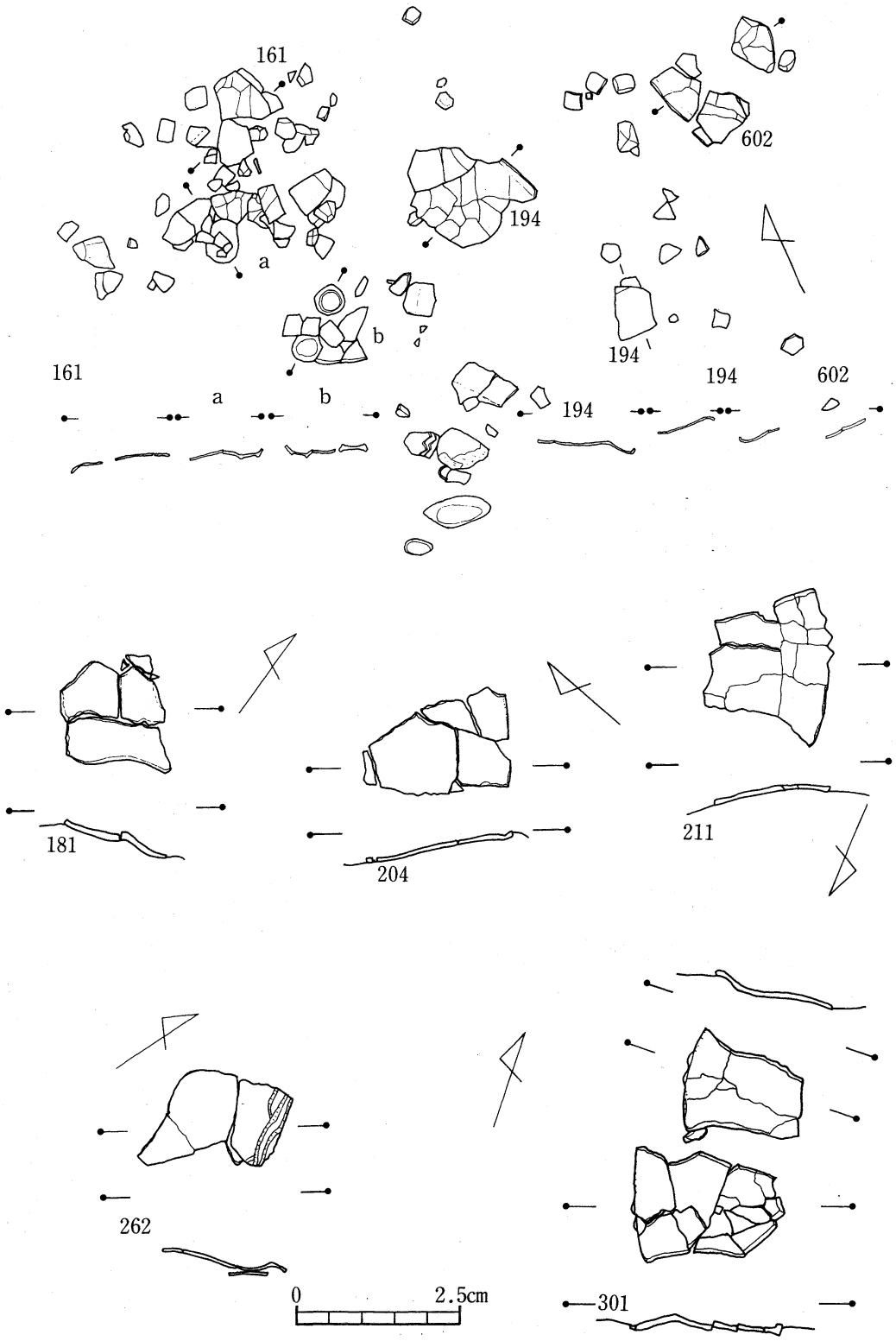
● 土器　■ 縄文　▲ 石器

第26図　遺物分布図



第26図　遺物分布図


D－5
C－5
262
355
D－6
C－6
847
848
819
818
817



第27図　遺物出土状況　(1)

第28図　遺物出土状況　(2)

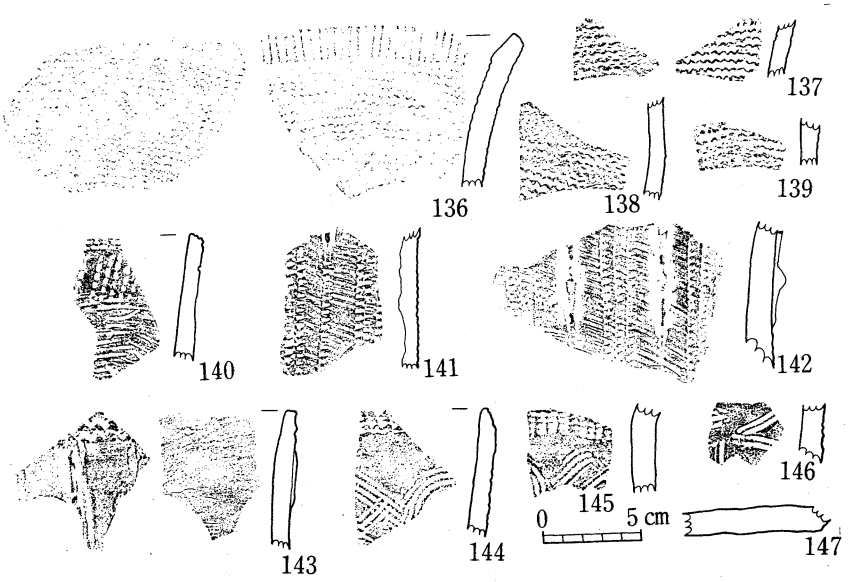
第５章　遺　　物

第１節　土　　器

土器はIII層中に春日式土器を中心として多量に出土したが，トレンチ調査によりＶ層中よりも若干の土器片が出土した。それらを大まかに分類すると，Ⅰ～Ⅳ類（縄文早期），Ⅴ・Ⅵ類（縄文前期），Ⅶ類（春日式），Ⅷ類（縄文系），Ⅸ類（尖底土器），Ⅹ類（縄文後期）とに大別される。

136～139はⅠ類で押型文土器，136は４号住居跡の床面を堀りすぎたＶ層中より出土し内外面に横位の山形押形文，口縁内面に縦位の沈線を施すもので，口縁部はやや外反するものである。137は内外面に山形押形文，138・139は外面に山形押形文を施すものである。140はII類で表面採集である。他にも表面採集されているが，これだけが図化できた。口縁部はわずかに外反し平坦な口唇部に貝殻腹縁による刺突文，口縁部には貝殻腹縁による連続刺突文，胴部には貝殻条痕文を施すもので，石坂式と思われる。141～143はIII類，141・142はくさび形突起を有し，胴部には貝殻腹縁による斜行する押し引き文を施す。143はくさび形突起を有するが，胴部の条痕はヘラみがきで消してある。口縁上位には横位の貝殻刺突文が施される。144～146はIV類，口縁部に貝殻による連続刺突文，胴部に貝殻腹縁による２～４条の沈線を施すもので形式は不明である。Ⅰ～IV類はいずれも縄文時代早期と思われる。

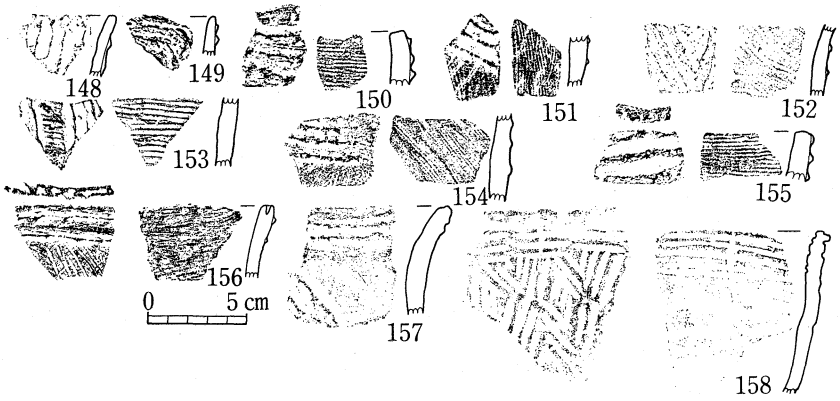
147はこれらのいずれかに伴う底部である。



第29図出土土器実測図（Ⅰ～Ⅳ類）

Ⅴ，Ⅵ類土器（第30図）

148～157はⅤ類で轟式系と思われる。いずれも縦位，横位，斜位のミミズばれ状の突帯を施し，地文は貝殻条痕である。148～150・156・157は口縁部に連続刺突文を施し，口縁部の２条のミミズばれ状突帯の下位に，きめの細かい格子状の沈線文を施す。158はⅥ類で曽畑式と思われる。口縁部はやや内湾気味である。口唇部には刻目を施し，口縁内外面には横位の短沈線文，外面胴部には幾何学文を施すものである。



第30図　出土土器実測図（2）

表９　Ⅰ～Ⅵ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第29図	136	F-6	Ⅴ	Ⅰ	石・長・角	良好	
	137	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	138	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	139	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	140	表採		Ⅱ	〃 〃 〃	〃	
	141	〃		Ⅲ	〃 〃 〃	〃	内面剝脱
	142	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 輝	〃	
	143	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃 〃	〃	
	144	C-6	Ⅲ下	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	
	145	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	144と同一個体？
	146	表採		〃	〃 〃 〃 金	〃	
	147	B-6	Ⅲ	底部	〃 〃 〃	〃	内面外ヘラ削り
第30図	148	C-6	Ⅲ下	Ⅴ	石・長	良好	
	149	B-6	〃	〃	〃 〃	〃	
	150	F-6	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	口唇部に刻目
	151	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	152	〃	〃	〃	〃 〃 〃 金	〃	
	153	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	154	表採		〃	〃 〃 〃	〃	
	155	F-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	156	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	157	D-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 輝	〃	
	158	C-5	Ⅲ	Ⅵ	〃 〃 〃	〃	

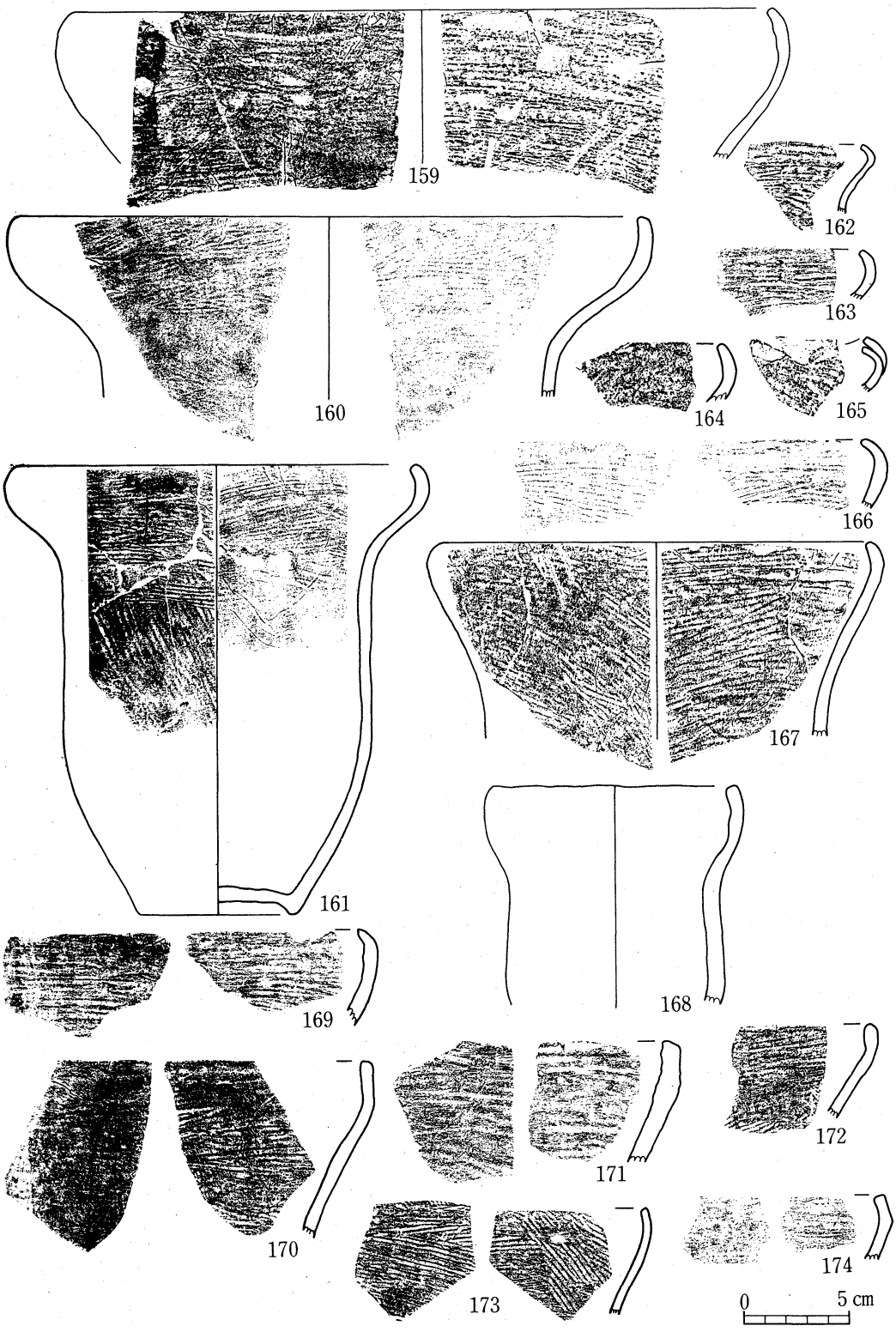
Ⅶ類土器

Ⅶ類土器は前谷遺跡において出土する土器の主流をなすもので，いわゆる春日式土器と呼ばれているものである。春日式土器は胴部が張り，胴部上位でしまり口縁部へと外反するが，口縁部はさらに内湾する。いわゆるキャリパー状を呈しているものである。

本遺跡では多量のⅦ類土器が出土しており，施文，器形等にさまざまの変化が見られる。

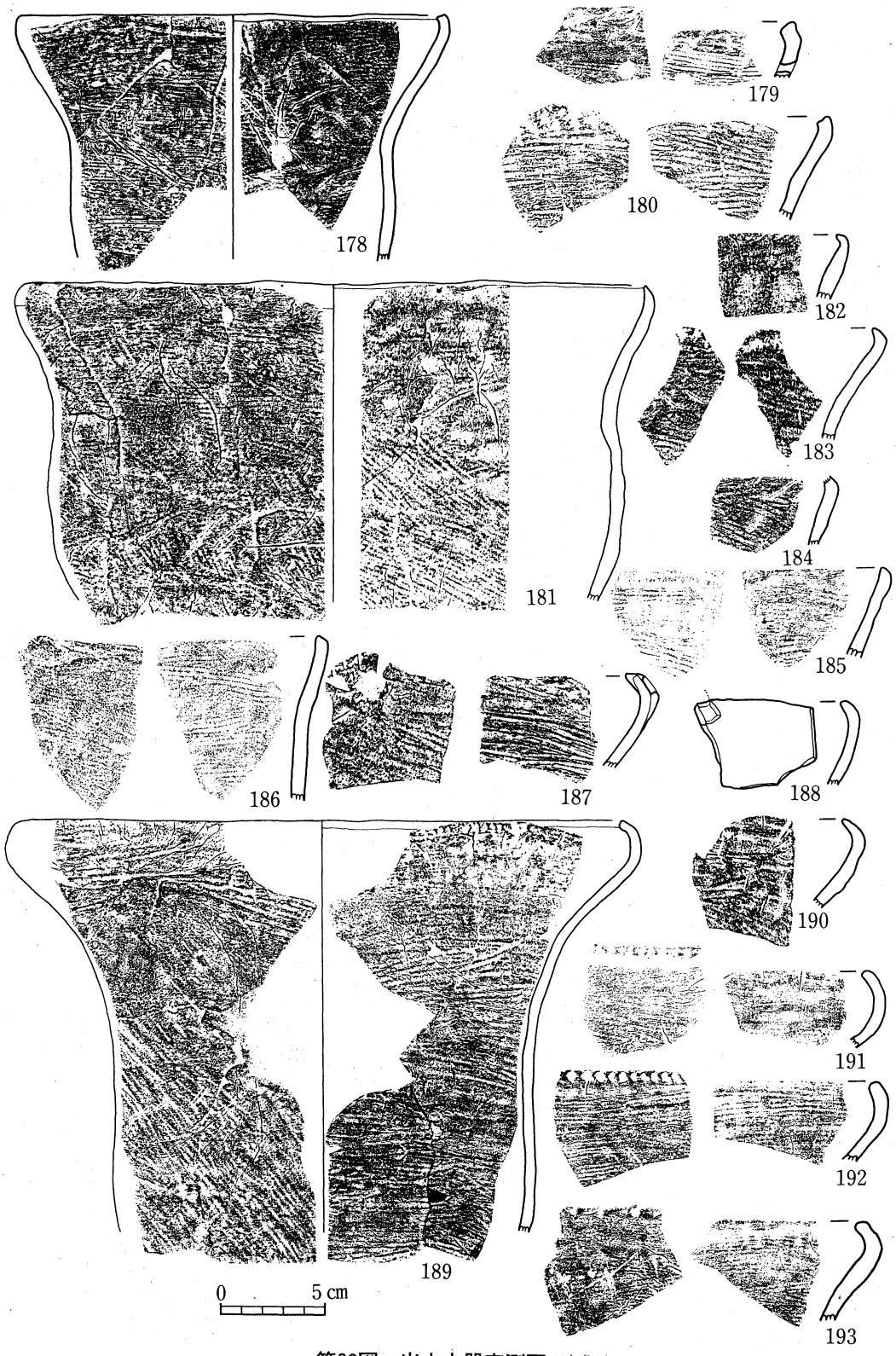
本報告においては，便宜上Ⅶ類土器を文様構成により，Ⅶa類～Ⅶe類に大別した。さらに各類においては器形の変化にも留意して細分を試みた。Ⅶa類は無文のものであるが地文には貝殻条痕を施す。Ⅶa類においては，口縁部が強く内湾するもの(159～166)，ゆるやかに内湾するもの（167～175)，端部のみ内湾もしくは内傾するもの（176～188)，口唇部に刻目を有するもの（189～214）等がある。159は復原口縁径33cm，160は復原口縁径29.5cmを測る。161は口縁径18.8cm，器高21.2cmを測る。あげ底の底部より立ちあがり，胴部は張らず，頸部でわずかにしまり，口縁部はいったん外反してから内湾するもので，いわゆるキャリパー状を呈する。内外面共に貝殻条痕を施す。162は器壁が薄く，口縁部の内湾度が強い。165は波状口縁と思われる。167は，口縁径20.2cmを測る。168は口縁径11.5cmを測る。あまり張らない胴部より，頸部はわずかにしまり，口縁部の外反，内湾もなだらかである。内外面共に貝殻条痕をナデ消してある。175は口縁径42cmを測る大形のもので，内外面貝殻条痕を施す。176は口縁径23cm，器高22.2cmを測る。平底と思われる底部より，胴部はあまり張らずわずかにしまった頸部より口縁部は外反し，端部において，わずかに内湾する。内外面共に貝殻条痕を施す。177は口縁径22.5cm，器高22.4cmを測る。底部はあげ底で，胴部，頸部，口縁部は176と類似する。178は口縁径20.4cmを測る。179は口縁下部に穿孔が見られる。181は口縁径29.5cmを測り，口縁端部は鋭くおさめる。外面にはふきこぼれとも思えるススの付着が認められる。内面上位には貝殻条痕の後，ナデ整形が施されている。182・183は口縁部で短く内湾し端部はするどくおさめる。185・186は，口縁部の内湾がわずかにしか認められないものである。187・188は突起を有するものである。189～214は口辱部に刻目を施すものである。189～193は口縁部の内湾が強いものである。189は口縁径28.8cmを測る。胴部はなだらかで，口縁部はいったん外反してから強く内湾し，口唇部に貝殻腹縁による刺突文を施す。しかしながら刺突文は全体に施されているものではない。190～192は口唇部に貝殻刺突による刻目。193はヘラによる刻目を施す。194は復原口縁径38.7cmを測る大形のもので，胴部の張り，頸部のしまりはなでらかで，口縁部は短く内湾する。口辱部には189と同様に連続しない貝殻刺突による刻目を施す。194は5号住居跡出土の土器片と接合する。195～198は貝殻刺突による刻目，199はヘラによる刻目を口辱部に施す。196は口縁外面に突起を有する。

200～211は胴部から口縁部にかけて直線的に近く外反し，口縁部の内湾も弱いものである。200・202・205・207・208はヘラによる刻目，201・203・204・206・209・210は貝殻刺突による刻目を口唇部に施す。211は口縁径27.2cmを測る。胴部はあまり張らず，頸部からなだらかに外反した口縁部は上位においてわずかに内湾する。口縁部には4ヶ所に4個の山形突起を貼りつける。口唇部には貝殻による刻目を施し，内外面共に貝殻条痕である。口縁下位に穿孔が見られる。212～214は波状口縁で，いずれも口唇部にヘラによる刻目を施すものである。

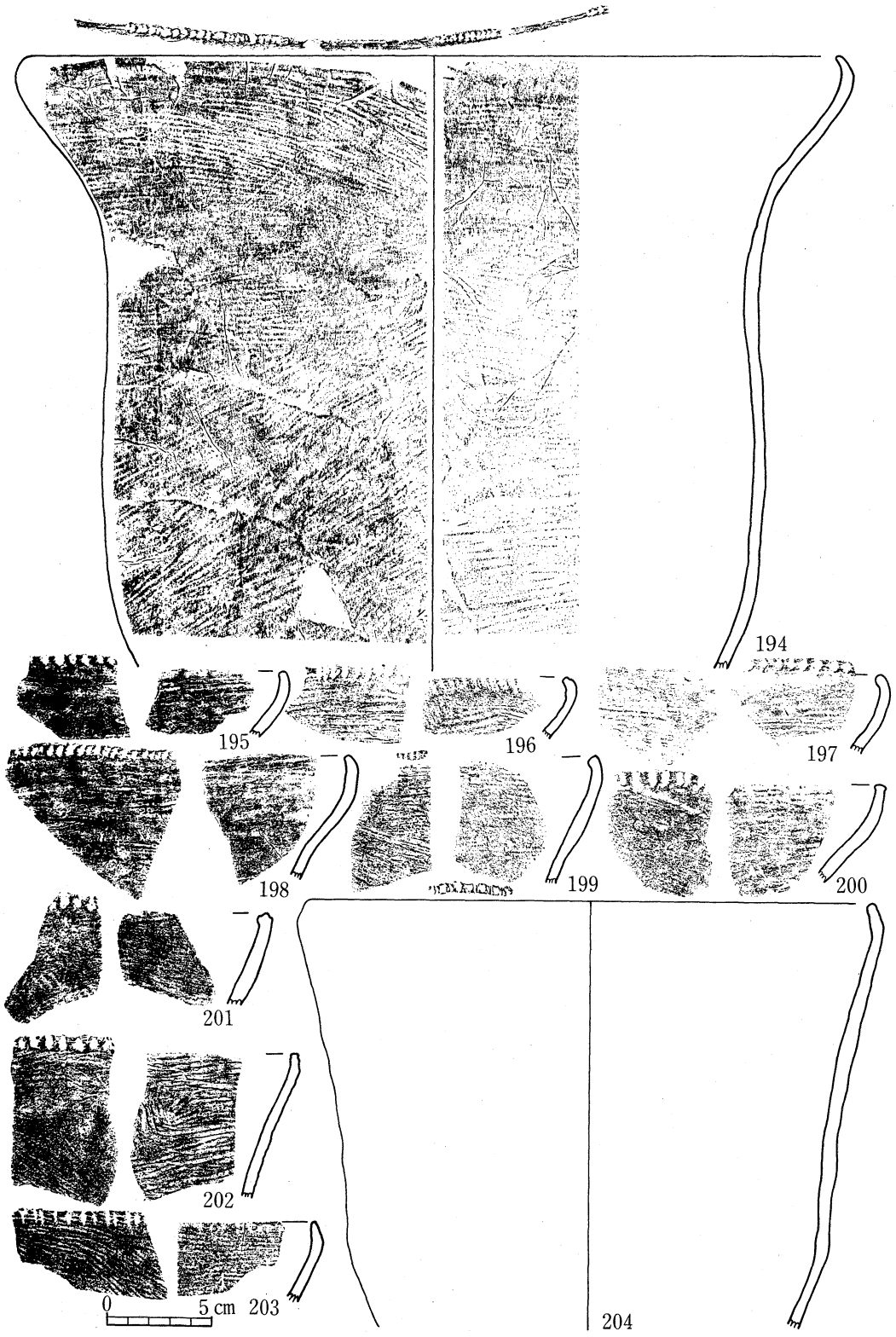


第31図　出土土器実測図 (3)

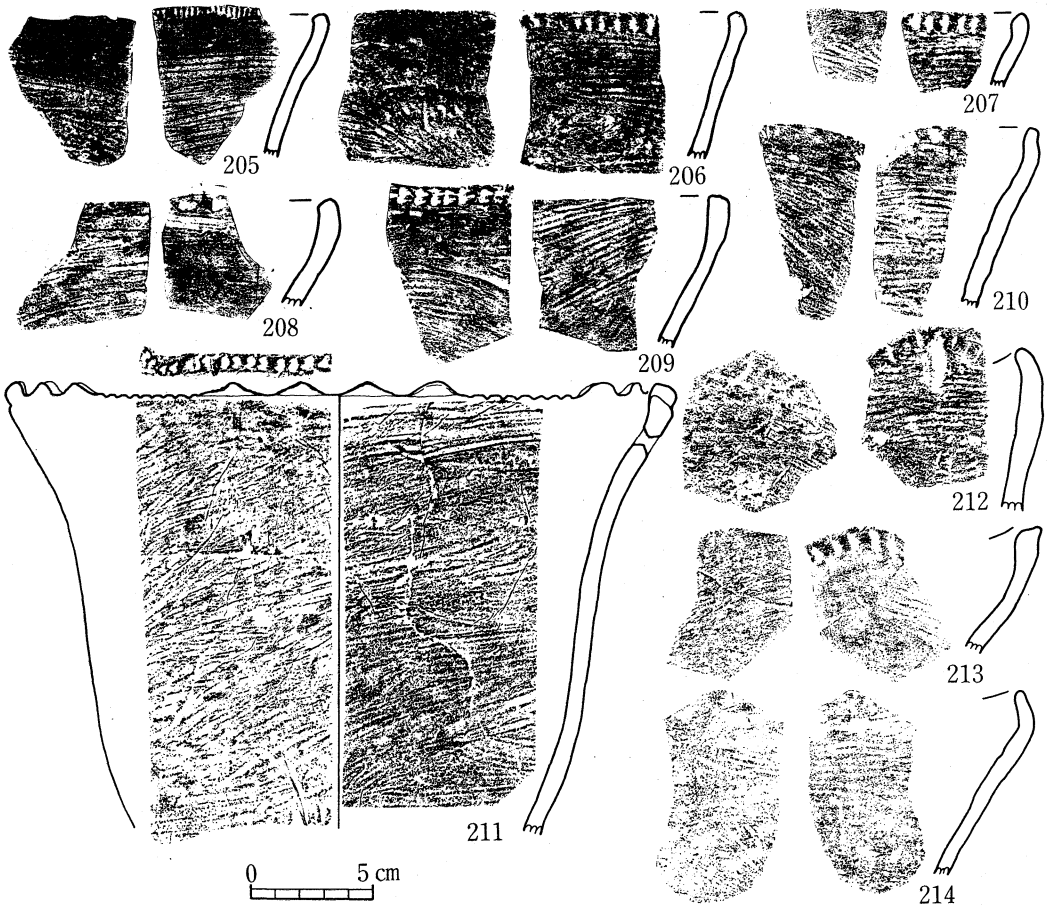
第32図　出土土器実測図 (4)



第33図　出土土器実測図　(5)



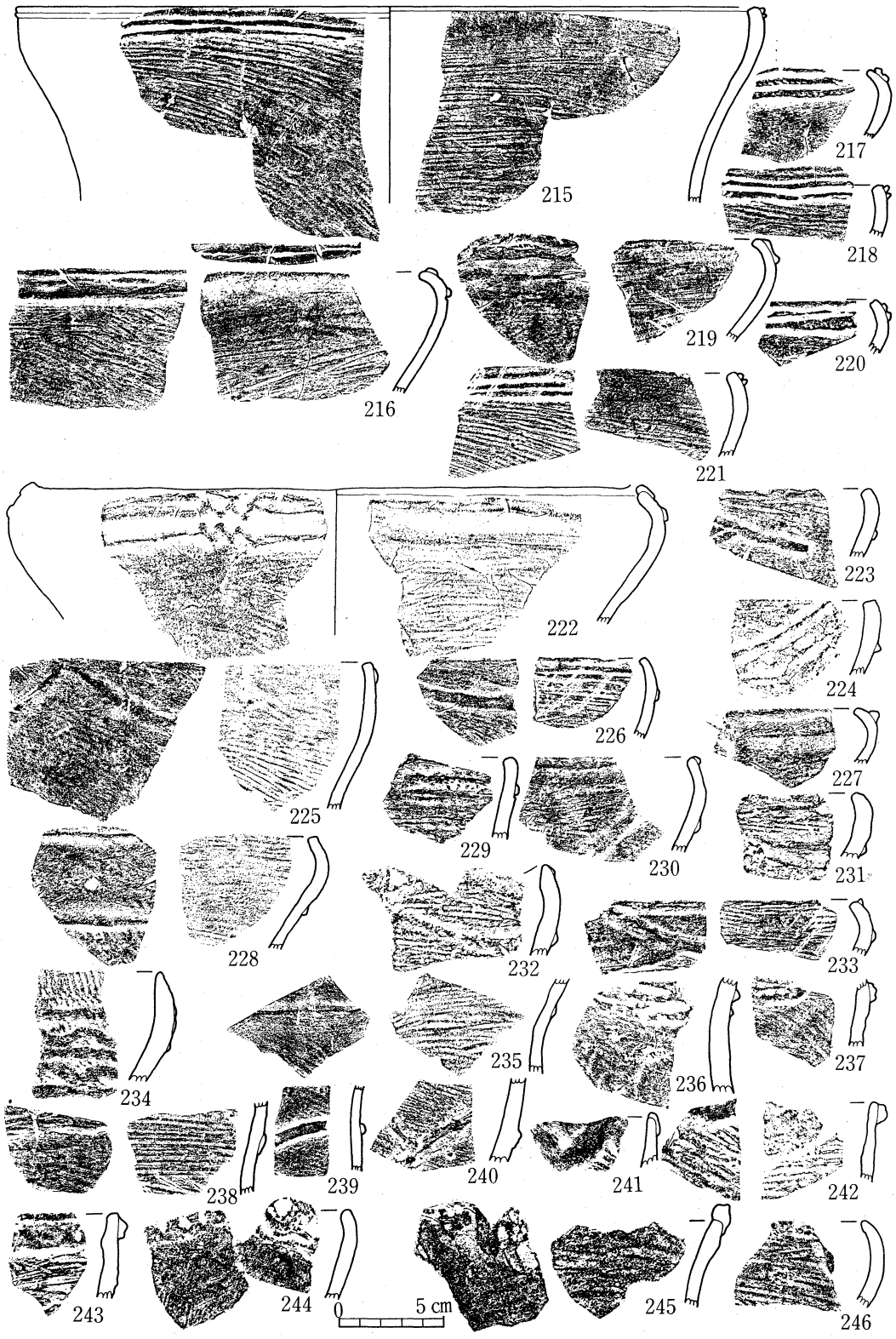
第34図　出土土器実測図　(6)



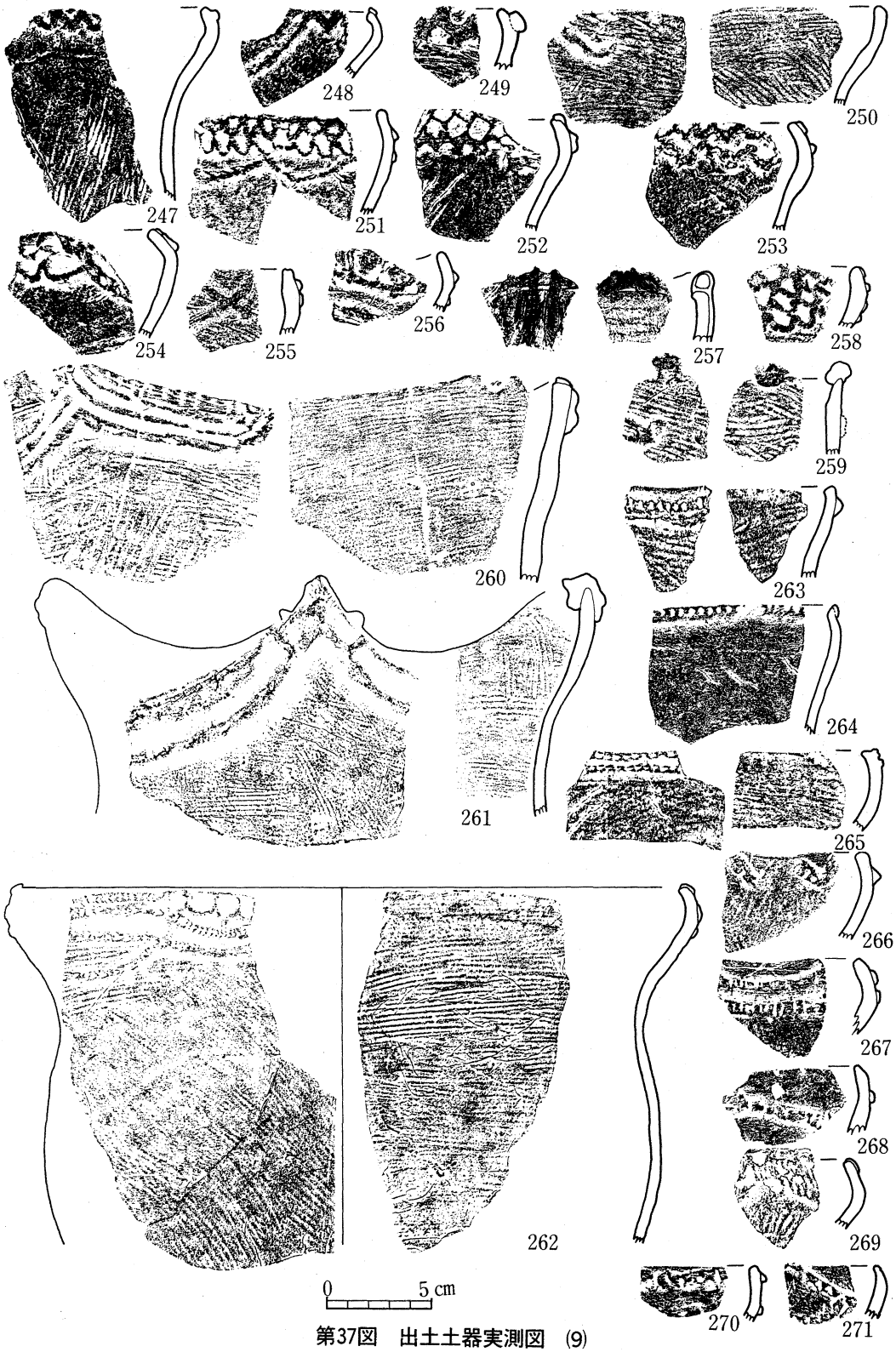
第35図　出土土器実測図 (7)

215～417はⅦb類である。Ⅶb類は突帯文を有するものであるが，突帯に刻目の無いものⅦb_1類，と刻目を有するものⅦb_2類，突帯文と沈線文の組み合わせや突帯文と連点文の組み合わせ等Ⅶb_3類に細分される。215～261はⅦb_1類である。215・217・218・220・221は口縁部に巡らした突帯に横位の沈線を施し2条の突帯状にするものである。215は口縁径35.6cm を測る。216・219は口縁部に2条の突帯を巡らす。222は口縁径30cm を測り，口縁部に2条の突帯を巡らすが部分的に波状をなす。223～234は口縁部で突帯を横位および斜位に巡らすものである。231はミミズばれ状の突帯である。234は横位の突帯を3条巡らし，その突帯間に波状の突帯を巡らすものである。241～246はやや幅の広い突帯である。247～249・251～254・258は突帯を波状に巡らすものであるが，中には網目状に見えるものもある。255は χ 字状の突帯，256は横位・縦位の突帯を巡らす。257は口唇部に粘土紐をブリッジ状に貼り付け，さらに口縁内面から粘土紐の上，口縁外面にかけて縦位の粘土紐を貼り付けるものである。260・261は波状口縁である。260は口縁部があまり内湾しないもので頂部には突起を有する。口縁部上位に幅の広い突帯（突帯には2条の沈線）を巡らす。261は口縁径27cm を測る。山形部は高くて鋭くとがっている。口縁内

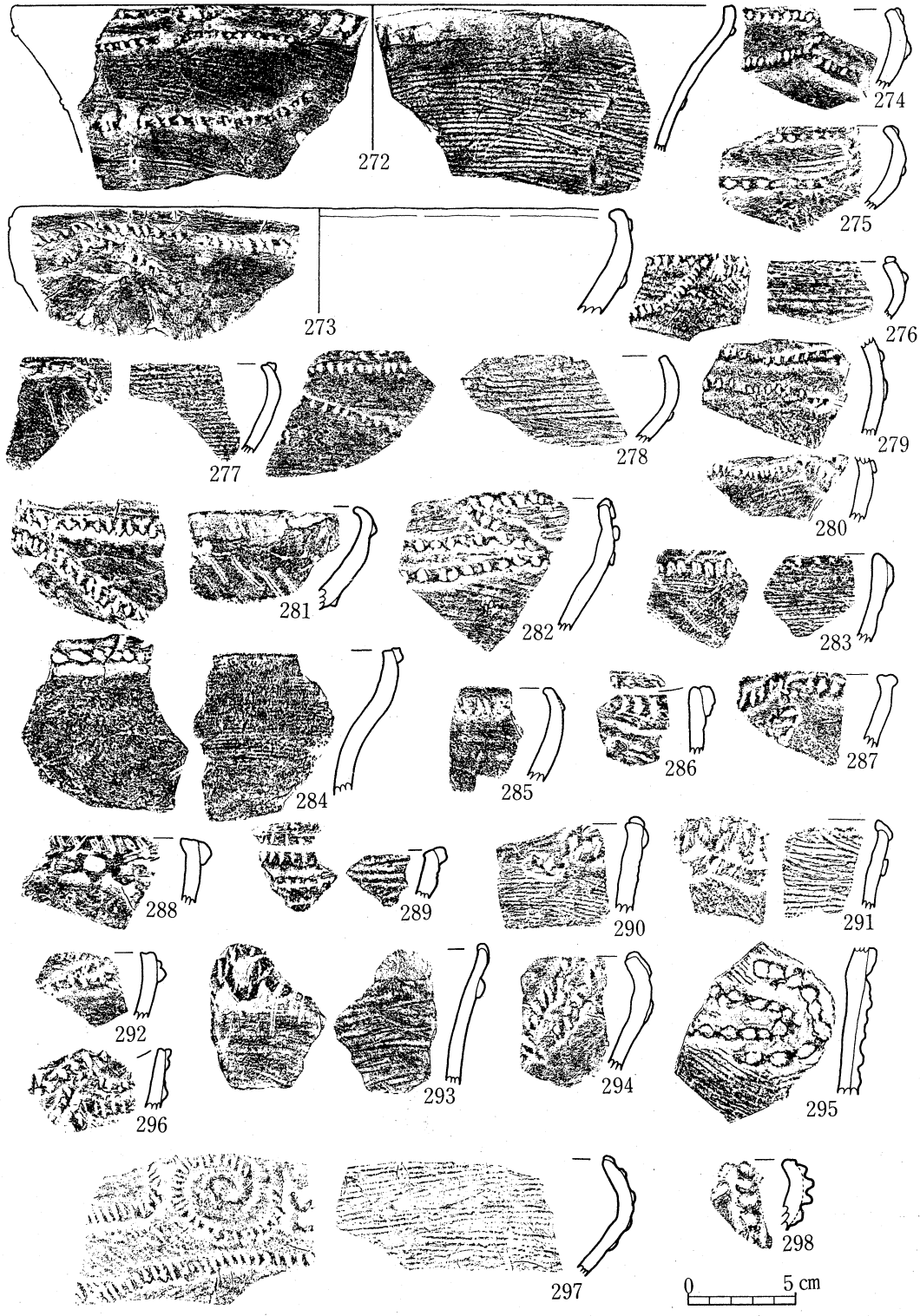
外面に突帯を巡らし，頂部近くでは粘土紐を縦位に貼り付けてある。262～353はⅦb_2類である。この中でも刻目がヘラによるもの，貝殻腹縁によるもの，幅の広い突帯等が見られる。262は口縁径32.5cmを測る。口縁上位に横位，斜位，波状の突帯を巡らす。突帯および口唇部には貝殻による刻目が施される。263～297はヘラ状施文具による刻目を有するものである。272は口縁径33.6cmを測る。273は口縁径29cmを測るものであるが，器壁がやや厚い。281～295はやや幅の広い突帯である。297ではうず巻状の突帯が見られる。298は，縦位の突帯に細い棒状施文具による刺突文が施される。299～346は突帯に貝殻による刻目を施したものである。299は口縁径35cmを測る。口縁上位は貝殻の肋を押圧し，口縁下位は貝殻腹縁による刻目を施すものである。300は口縁径29cmを測る。301は口縁径22.7cm器高21cmを測る。底部はわずかなあげ底で胴部はあまり張らない。頸部はしまらず口縁部は外反し，上位においてわずかに内湾する。口縁部には3ヶ所に粘土紐貼り付け突帯による突起が見られる。突帯および口縁部には貝殻による刺突文が施される。302～321は貝殻腹縁による刻目を施すものである。312・313は口縁の内湾が弱いものである。317は刻目突帯の他に縦位の突帯を3条張り付ける。319は口唇部に刻目を施す。322～330は貝殻の肋を突帯に押圧するもので，刻目の浅いものである。突帯は波状，斜位等である。330は口縁内湾が屈曲気味である。331～346は幅の広い突帯に貝殻による刻目を施したものである。331は口縁径24.2cmを測る。胴部がやや張り頸部はしまる。外反した口縁部は端部近くでわずかに内湾する。口縁部と口縁下位に横位，波状の刻目突帯を巡らす。また口縁部の4ヶ所に3条の縦位の刻目突帯を張り付けるものである。340・341は同一個体と思われる。342は波状口縁で山形部分はとがっている。346は器壁が薄く口縁部が外反するものである。347～353は幅が広くて低い刻目突帯が不規則に施されるもので，347～350・352は同一個体と思われる。354～417は突帯文と沈線文，突帯文と連点文，突帯文と沈線文・連点文の組み合わせ等，文様構成の複雑なものでⅦb_3類としたものである。354は口縁径42cmを測る大形のものである。大形の割に器壁が薄い。刻目の無い突帯と指頭状の押圧のある刻目突帯を張り付け，突帯間に沈線により区画された部分に連点文を施すものである。くびれ部に径3 mmの穿孔が見られる。355～383は突帯文と沈線文の組み合わせである。355は口縁径30cmを測る。胴部の張らないもので口縁下位に突帯で区画をつくり，その中に重孤状，斜行の沈線を施す。口唇部にも部分的に浅い刻目が施される。355～378・380・381は沈線が直線である。また355～365は突帯に刻目が無い。379・382は波状沈線である。384～401は突帯文と連点文の組み合わせである。384は口縁径29.5cmを測る。横位の突帯と縦位の連点文である。口縁部下位に穿孔がある。385・389は口縁の内湾が弱い。392は口縁径26.5cmを測る。波状突帯に貝殻による刻目を施し，その下位に連点文を施すものである。402～405は若干異なったものである。402は縦位，横位の突帯に沈線文と連点文を交互に施す。403は突起状の粘土紐の上に縦位の突帯を貼り付けその横に斜行沈線を施す。404は内湾の弱い口縁で口唇部に刻目を施す。405はミミズばれ状突帯の間に貝殻刺突文を施す。407は口縁径21cmを測る。口縁部に4ヶ所の突起を有し突起部に口縁内面から外面にかけて突帯を張り付け突帯には貝殻の肋による押圧が見られる。さらに波状に突帯を巡ら



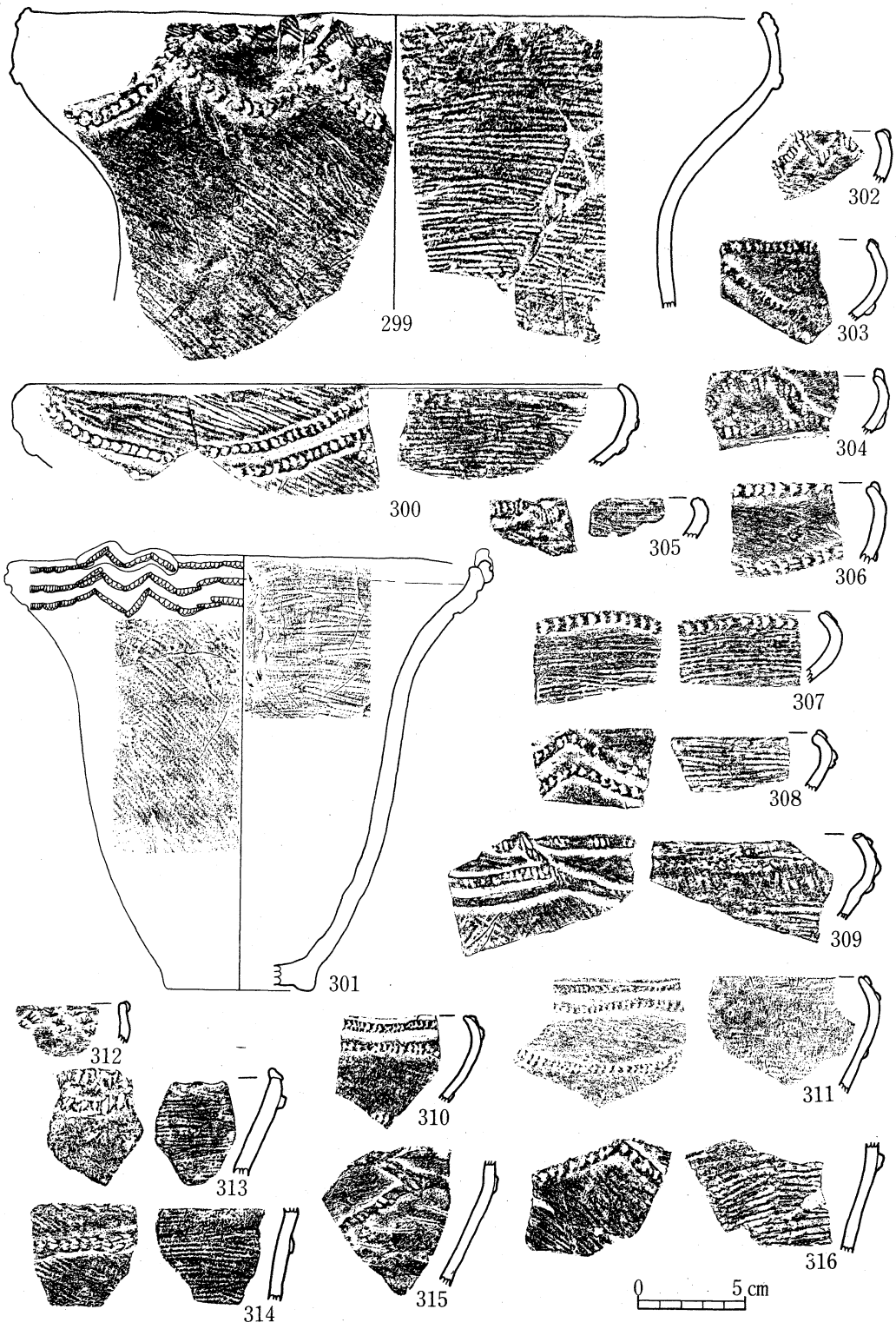
第36図　出土土器実測図　(8)



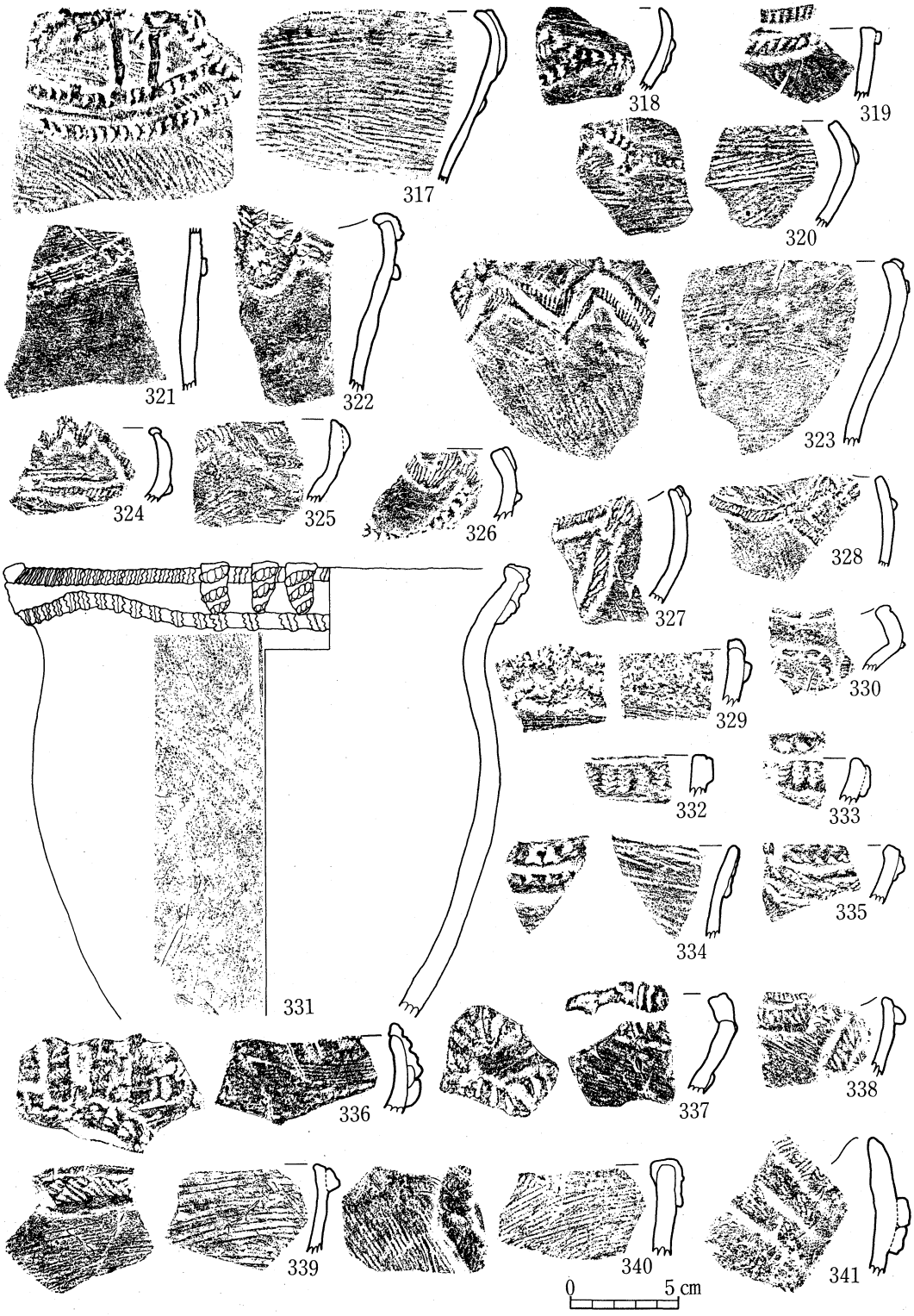
第37図　出土土器実測図　(9)



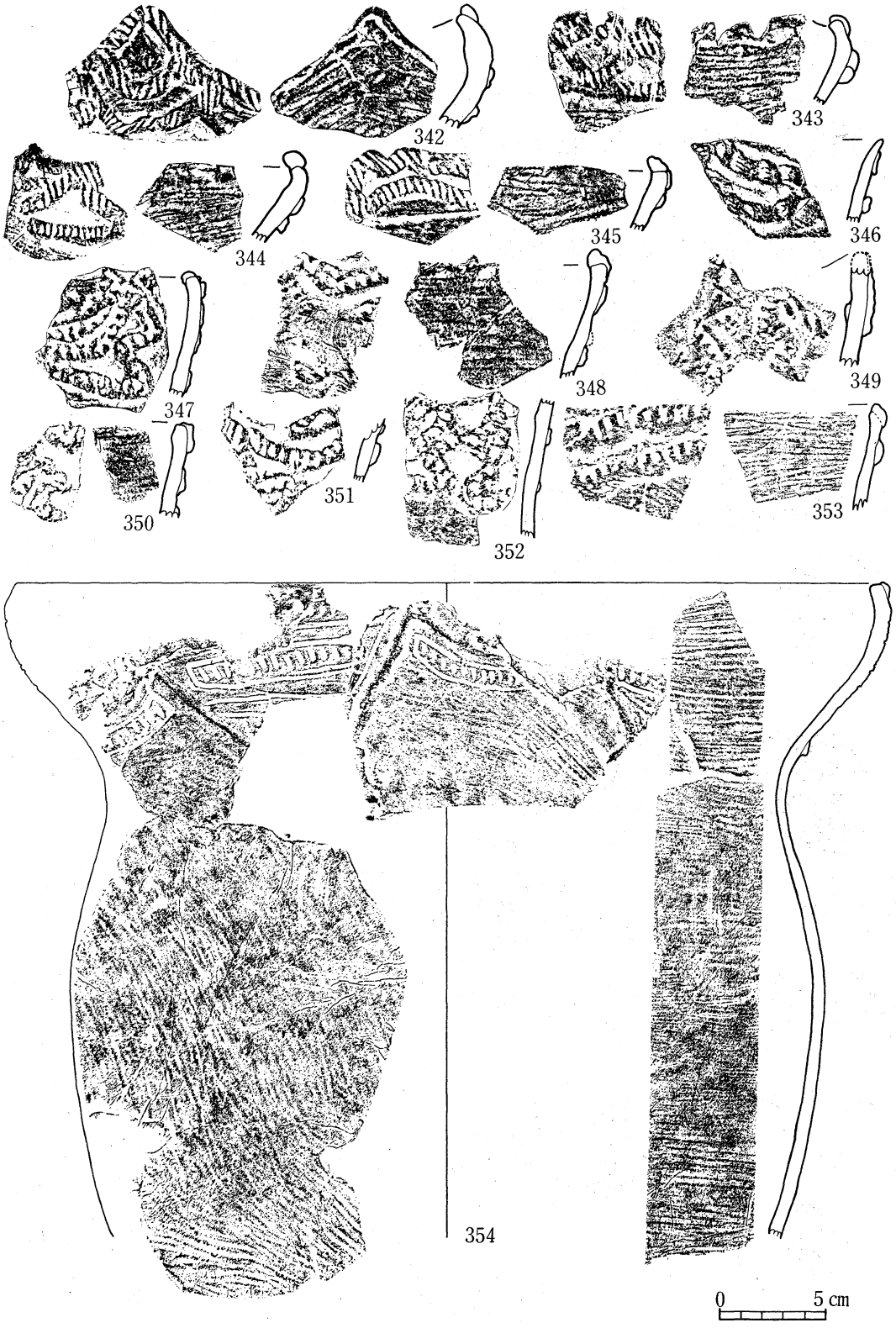
第38図　出土土器実測図 (10)



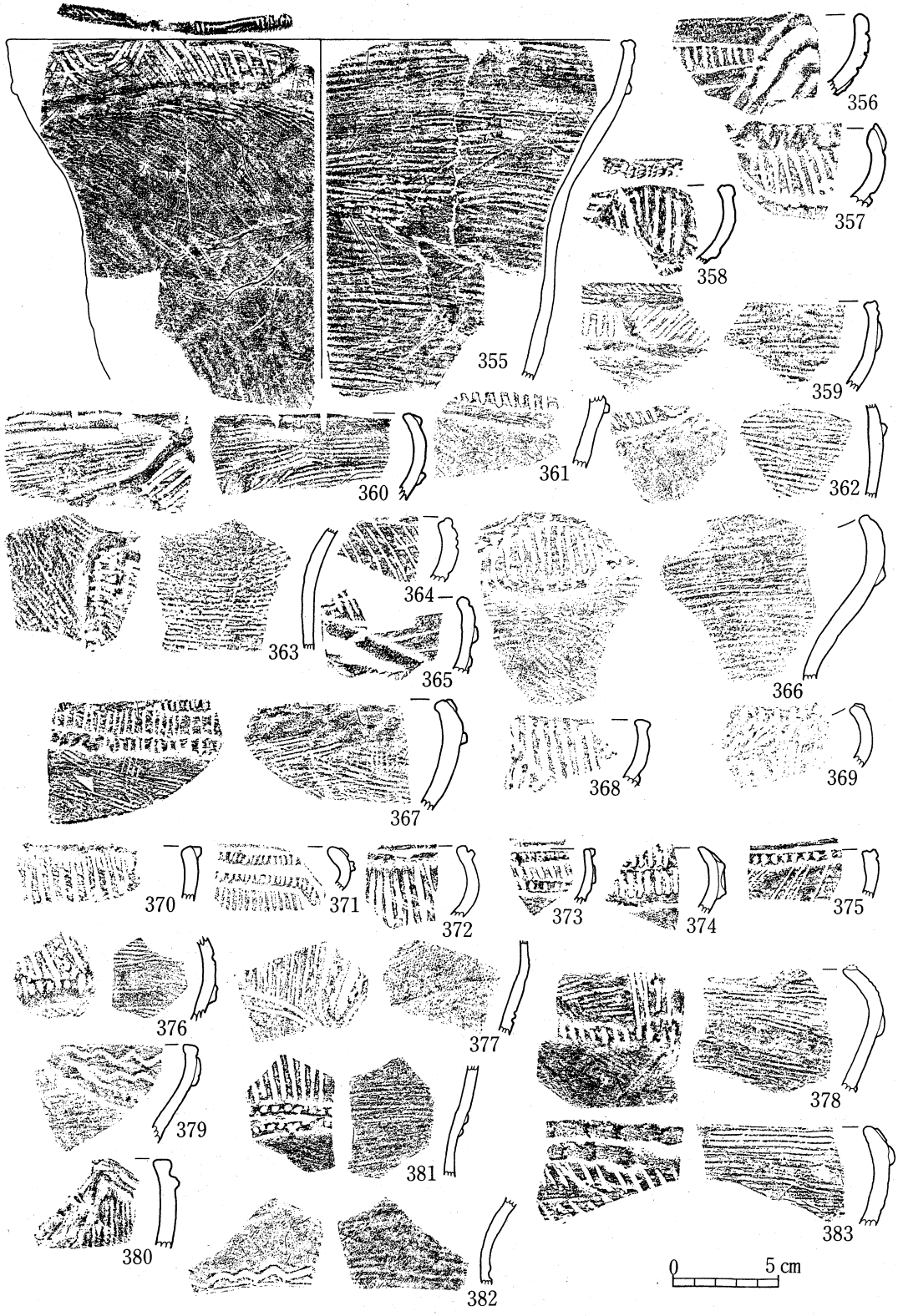
第39図　出土土器実測図 (11)



第40図　出土土器実測図 ⑫



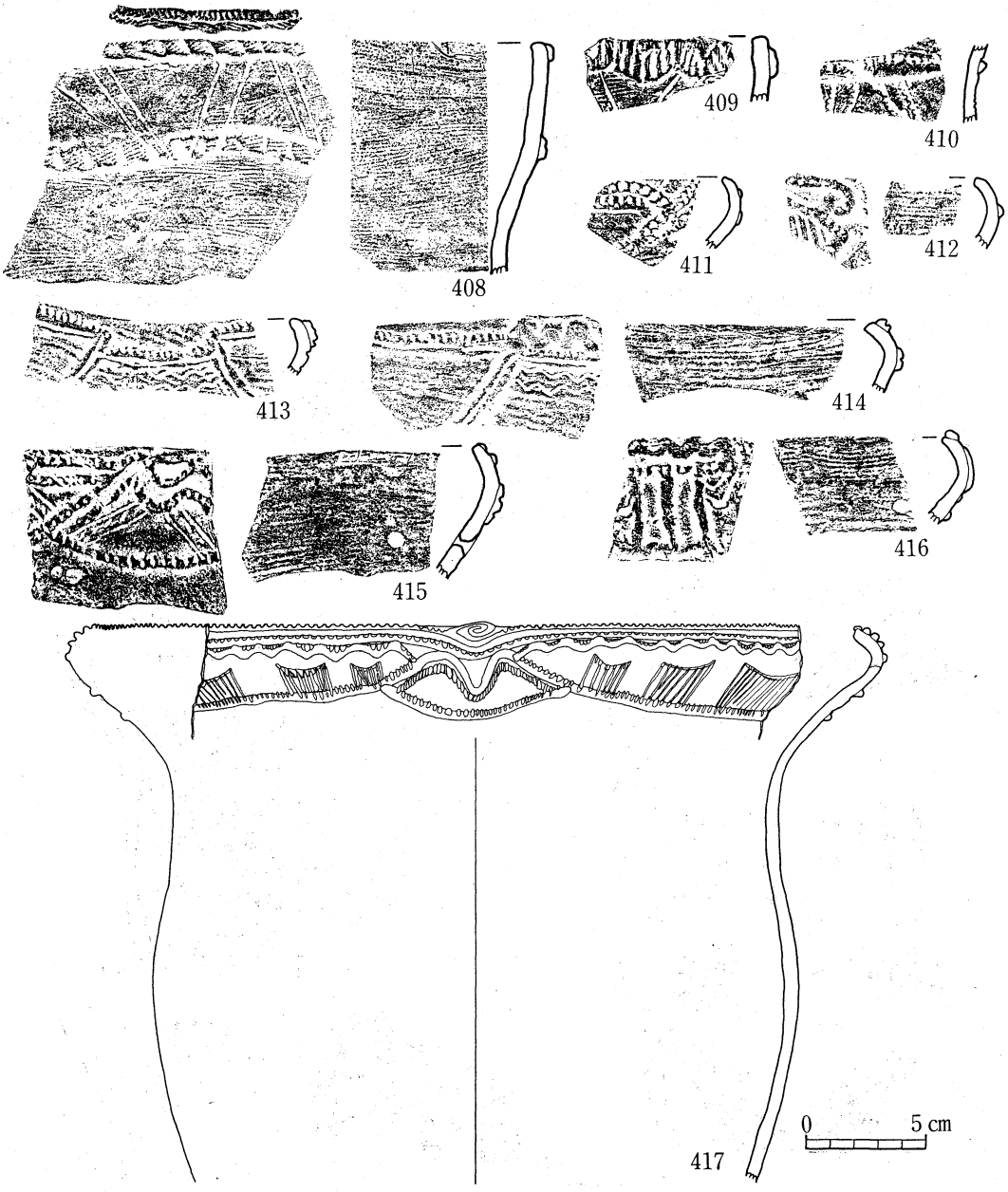
第41図　出土土器実測図 (13)



第42図　出土土器実測図 ⑭

第43図　出土土器実測図 (15)

したなかに沈線文を施すものである。408は口縁の内湾が弱いもので，刻目突帯間に2条のヘラ沈線を鋸歯上に施す。409～417は突帯文，沈線文，連点文等の組み合わせにより華麗な文様を施すものである。411～417は口縁の内湾も強い。412はうず巻状突帯を施す。415は穿孔が見られる。417は口縁径32cm を測る。胴部は張り頸部はしまり口縁の内湾も強い。刻目突帯をうず巻状，波状等に巡らしその中に連点文，沈線文を施すものである。

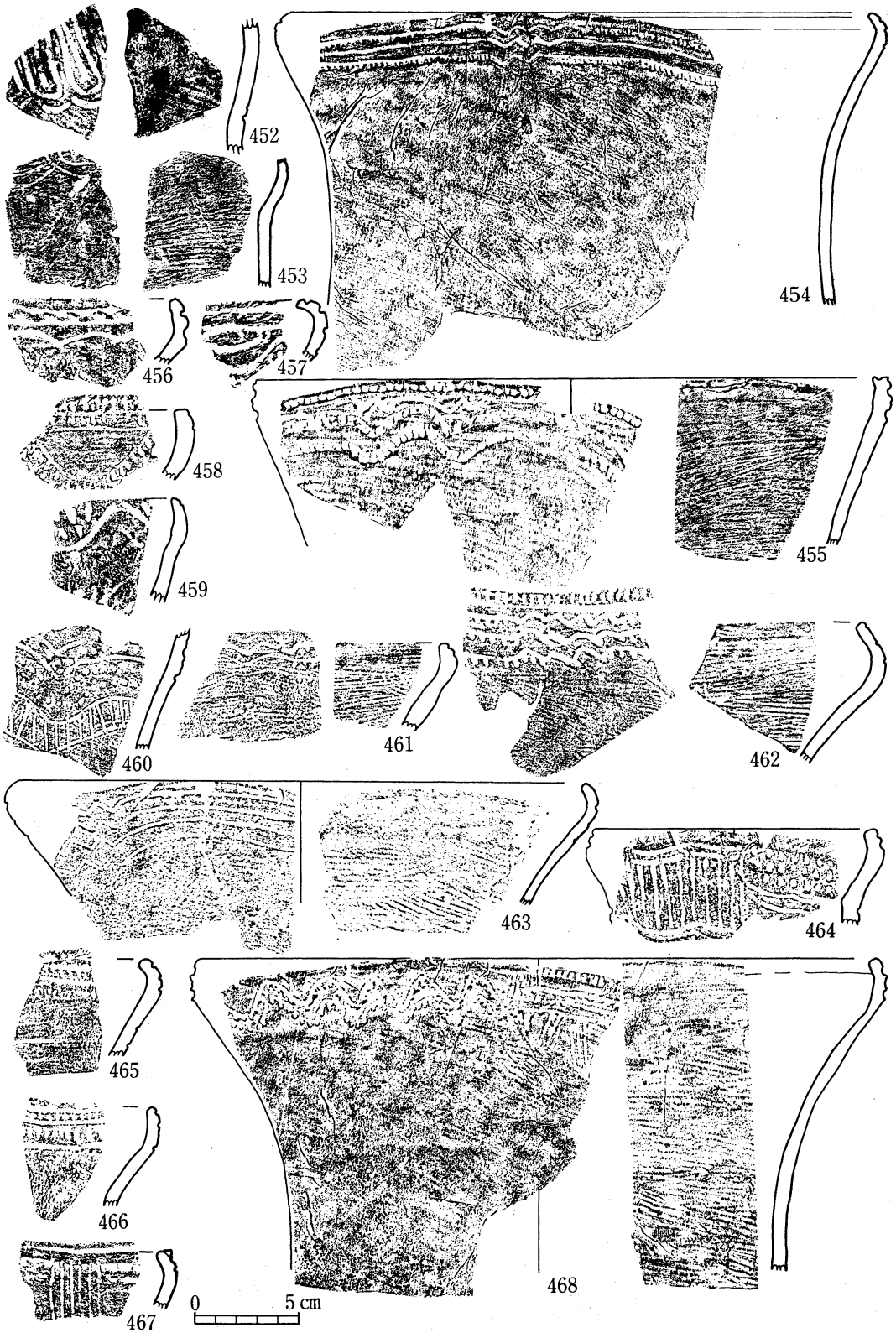


第44図　出土土器実測図 (16)

418～520は沈線文を主とするものでⅦc類としたものである。この中でも沈線文だけのものⅦc_1類，沈線に連点状の刻目をつけたり，連点文を組み合わせたものⅦc_2類に細分される。

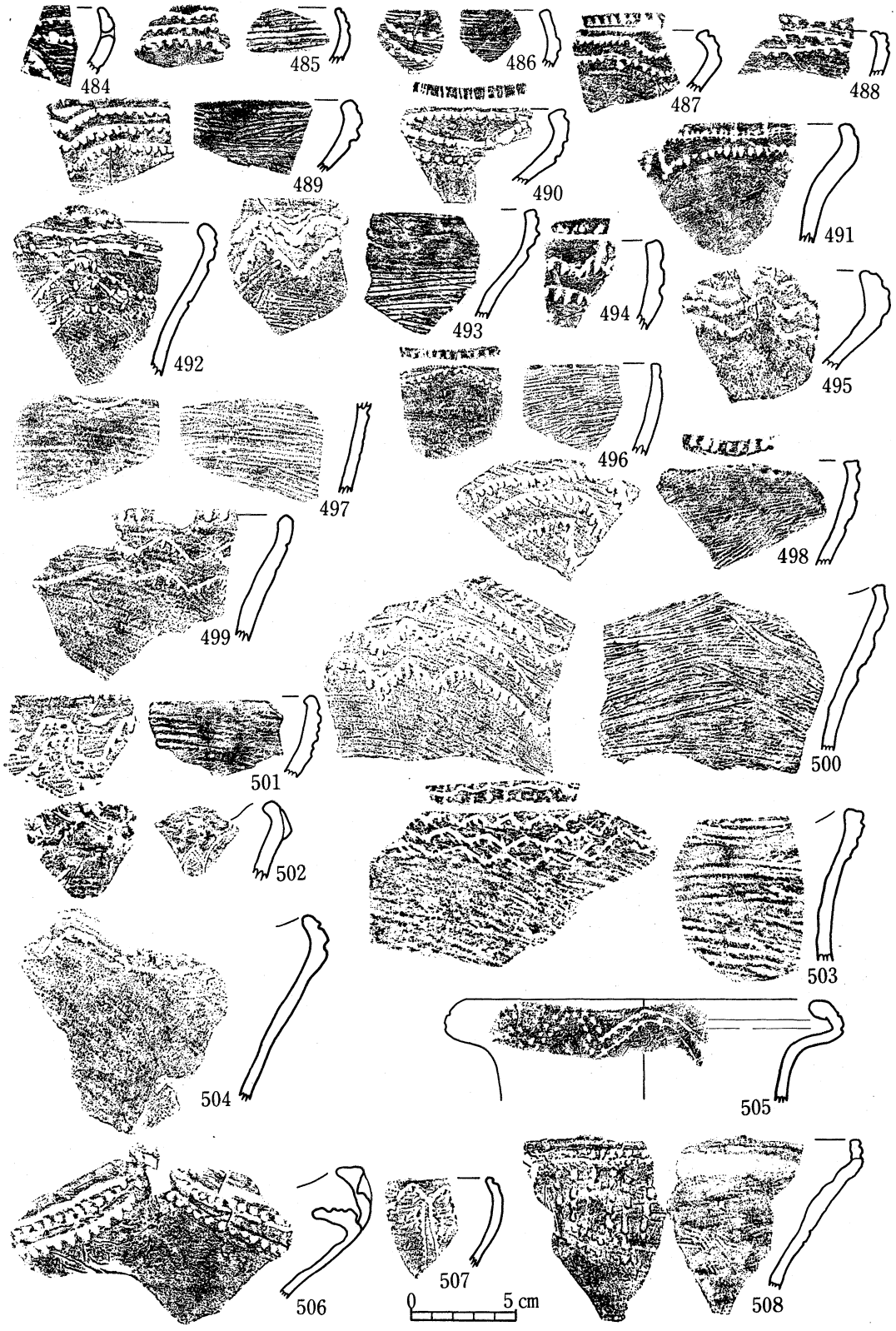
418～453はⅦc_1類。沈線文を横位，縦位，波状等に施すものである。418～425は口縁部に横位の沈線文を施すものである。418は口縁径25.8cmを測り，口縁部に2条の沈線文を施す。426～439は口縁部や胴部上位に1条～4条の波状沈線文を施すものである。426は口縁径23cmを測る。口縁は強く内湾し4条の波条沈線文を施し，口縁部には貝殻による刻目が施行される。427は口縁径14cmを測る。頸部はよくしまり口縁部も強く内湾する。口縁部に2条の波状沈線文を施す。432・433・436～439は大きい波状沈線である。440はⅦc_2類口縁径13.7cmを測る。全体に間のびした感じの器形である。口縁部は短く内湾する。口縁部に大きい波状沈線文，胴部に2条の半円文と沈線に刻目をつけた半円文を施す。442～446・448・451は直線の沈線を縦位，横位，斜位に施すものである。447・449・450は波状口縁で曲線の沈線を施すもので，447・450は頂部に刺突文が見られる。454～532はⅦc_2類，454は口縁径28cmを測る。頸部のあまりしまらないもので口縁部に3条の沈線文（部分的に波状文）を巡らし，上位と下位の沈線の上にヘラによる刻目を施すものである。455は口縁径30cmを測る。口縁部の内湾は弱く，押し引き状の刻目を施した沈線文を巡らす。口唇部にも同様の文様が施される。463は口縁径28cmを測り，口縁部に4条の沈線文を巡らし，1番目と2番目の沈線間に刺突文を施す。464は口縁径13.5cmを測る小形のもので，口縁部に縦位，横位，孤状の沈線文と連点文を施す。468は口縁径32.5cmを測る。口縁部に刻目を有する沈線文を波状，横位に巡らし，横位の沈線の下に短沈線を鋸歯状に施す。469は波状口縁で山形部に縦位の粘土紐貼り付け，そこから横方向に沈線文と連点文を施す。470は口縁部に縦位の沈線文と刺突文を施すもので口唇部にも刻目が見られる。471～473は同一個体で口縁部を欠損する。頸部および胴部に刻目のある沈線文を施すものである。474～497は沈線文に連続する刻目を施すものである。474は口縁径39cmを測る。口縁部に刻目のある沈線文，口唇部に刻目を施す。484は穿孔が認められる。501～503は刻目の間隔があいているものである。502は口縁内面にも沈線文が施される。501～504・506は波状口縁である。506は口縁の内湾が鋭角で山形部はつまみあげたような感じである。505は口縁径16.5cmを測る。口縁部は大きく外に開いてから鋭角的に内湾するもので，口縁部に連点文と刻目のある沈線文を施す。507は縦位と波状の刻目沈線文を施す。508は連点文と刻目沈線文を施すものである。509は口縁部がほとんど内湾しないものである。口縁部，胴部に鋸歯状に2条の沈線文を配し，沈線間には刻目を施す。501～513は沈線内に押し引き状の連点文を施すものである。512は口縁部に押し引き状の連点文を施した沈線文を2条巡らし，口唇部には貝殻による刻目を施すものである。514～516・518～520は貝殻腹縁による刺突文を連続して沈線文状に施すものである。515は口縁径33.4cmを測る。口縁部はゆるやかに内湾し，貝殻腹縁の刺突文を連続させることにより沈線文状に見せている。口唇部には貝殻による刻目を施す。

第45図　出土土器実測図 (17)



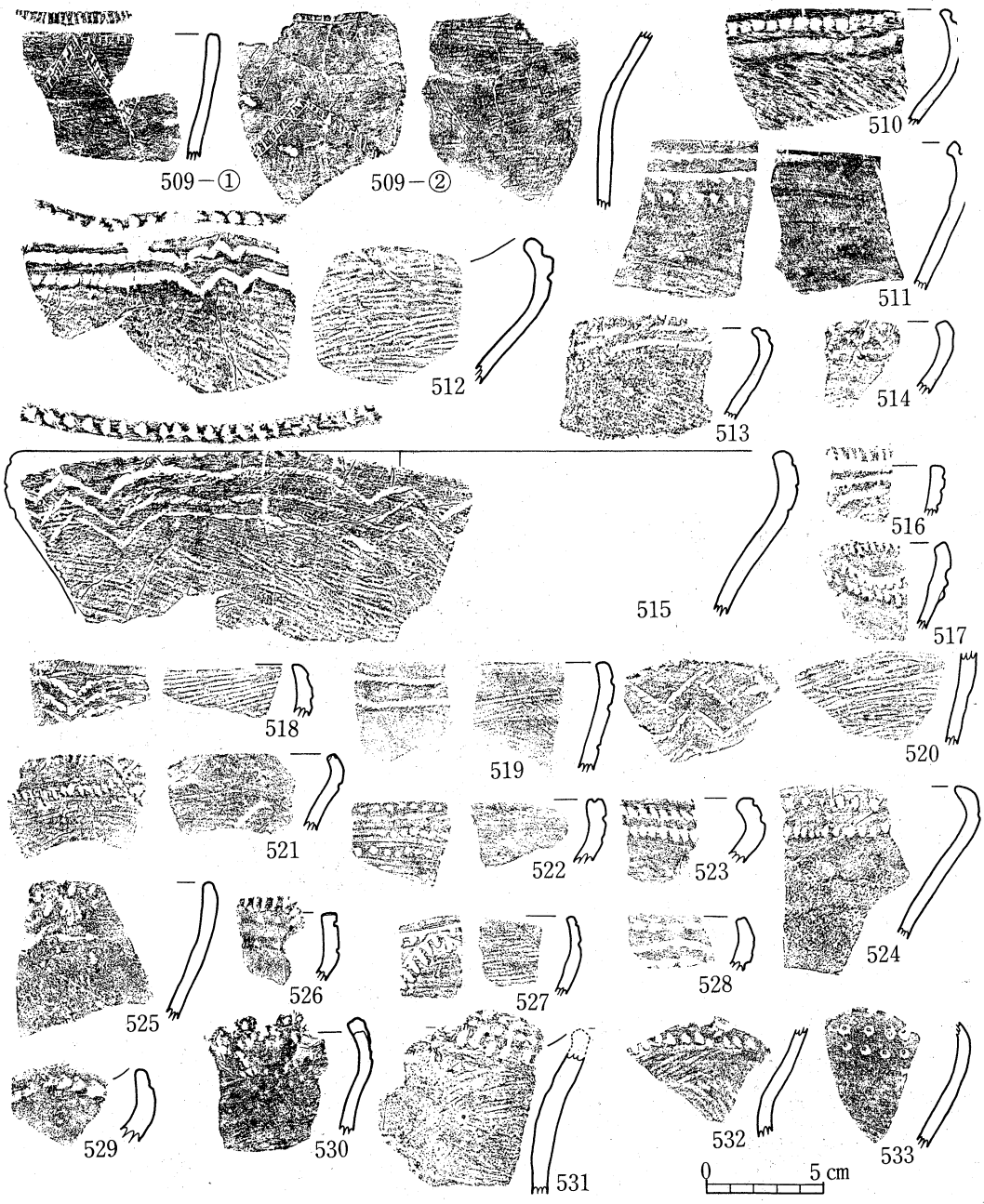
第46図　出土土器実測図 (18)

第47図　出土土器実測図 (19)



第48図　出土土器実測図 (20)

521～532は連点文を施すものである。521・523～525・527・532はヘラ状施文具によるもの522・526・528・530は棒状施文具によるもの，529は貝殻によるもの，531は竹管状施文具によるものと思われる。533は連続する竹管文を施すものである。



第49図　出土土器実測図 (21)

534～556（Ⅶd類），557～615（Ⅶe類）としたものであるが，器形，文様等が特殊なもので中には春日式土器の範疇からはずれるものもあると思われる。

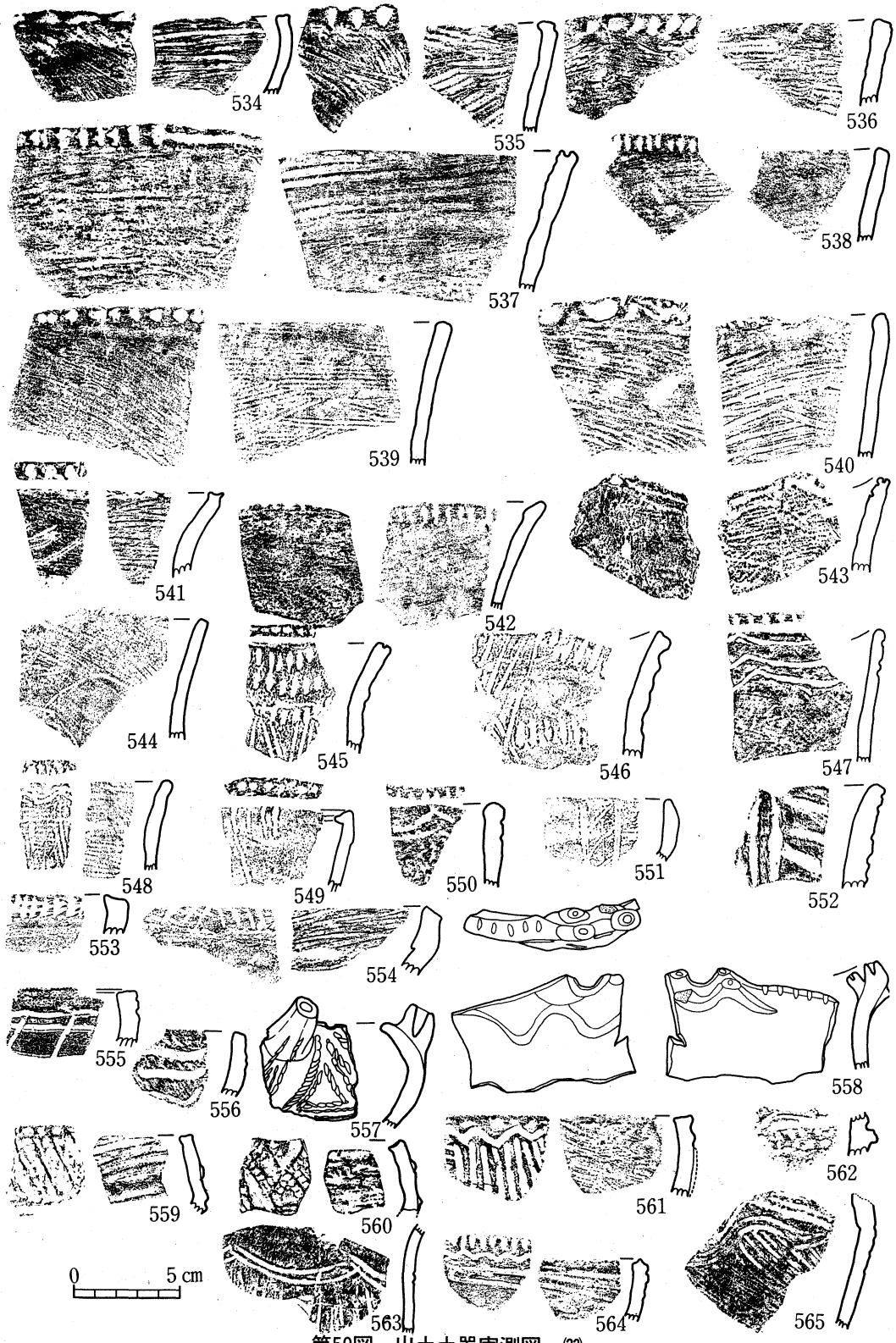
534～556はⅦd類。口縁部が内湾せずに，直行または外反するもので，534～544は外面が無文である。544を除いて口唇部に刻目あるいは沈線を施す。534はわずかに内湾する。

537は口唇部に貝殻刺突による刻目を横方向，縦方向に施す。540は口唇部に突起状の刻みと貝殻刺突による刻目を施す。542は口唇部というより内面に貝殻による刻目を施す。543は波状口縁で，口唇部および口縁内面に沈線文を施す。544は胴部に沈線文を施すものである。

545～556は沈線文を施すもので口縁の内湾が認められないものである。545～547・550はⅦc類の文様構成と類似しているが，口縁部が外反する。549は口縁部の端部のみ内側へ折れるものである。552は太い沈線文を施す。553・554は口唇部に刻目を施す。557～615はⅦe類としたものであるが，特殊なものを集めたものでこれらも何種類かに細分されるものと思われる。557～558は突起を有するものである。557は内湾する口縁部に注口状突起を貼り付けたもので周囲には貝殻刺突文，口唇部には刻目を施す。558は波状口縁，口縁端部近くがわずかに内湾し，口唇部に刻目を施し，山形部には2ヶ所のこぶ状突起を有し，突起には穿孔がある。さらに山形部においては内外面に粘土紐を貼り付け肥厚させる。内面の粘土紐は口縁部の突起と同様の突起状をなすものである。559～562は胎土に滑石を混入するものである。559と560は同一個体と思われる。口縁部は屈曲気味に内湾する。屈曲した部分に巡らした横位の突帯と口縁部の間に斜行あるいは格子状の突帯文を施し，突帯間には竹管状の刺突文を施すもので，口唇部にも刻目が見られる。561は口縁部に1条の波状沈線文とその下位に縦位の沈線文を施す。562は刻目突帯を有する。563～615は沈線文を主体とするものである。566は口縁径15cmを測る。胴部はあまり張らず，口縁部の内湾もわずかである。口縁部に鋸歯状に沈線文，胴部には曲線状の沈線文を施すもので口唇部と口縁内面には刺突連点状の刻目が見られる。断面観察では輪積み痕と思われる痕跡が認められる。567・568・571は波状口縁で，574はこれらのタイプの胴部と思われる。572・573は胴部に沈線文を施す。

575～580，582～585は口縁部がわずかに内湾するもので，口縁部や口縁内面に短沈線文を施すものである。また口唇部に刻目を施すものもある。581・584・586・587は口縁部が外反するもので，口縁部内面にも短沈線文を施すものである。584は口唇部に刻目が見られる。588～594は沈線文を施すもので口縁部が外反するものであるが，590はやや内湾，592は口縁端部が折れまがるように内湾する。595～602はやや太い沈線文を施すものである。

598は波状口縁で口縁部に同心円状の沈線文等，内面に短沈線文を施す。602は胴部で短沈線文を施すがⅥ類の曽畑式とも考えられる。603～615は胴部に沈線文を施すものである。603～605・608・611・615はヘラ状の施文具による沈線を施すが，608以外は規則制がない。608は鋸歯状になるものと思われる。606・607・609・610はやや太めの沈線文である。610は波状沈線文と直線文を施す。607は斜行する沈線文を施す。

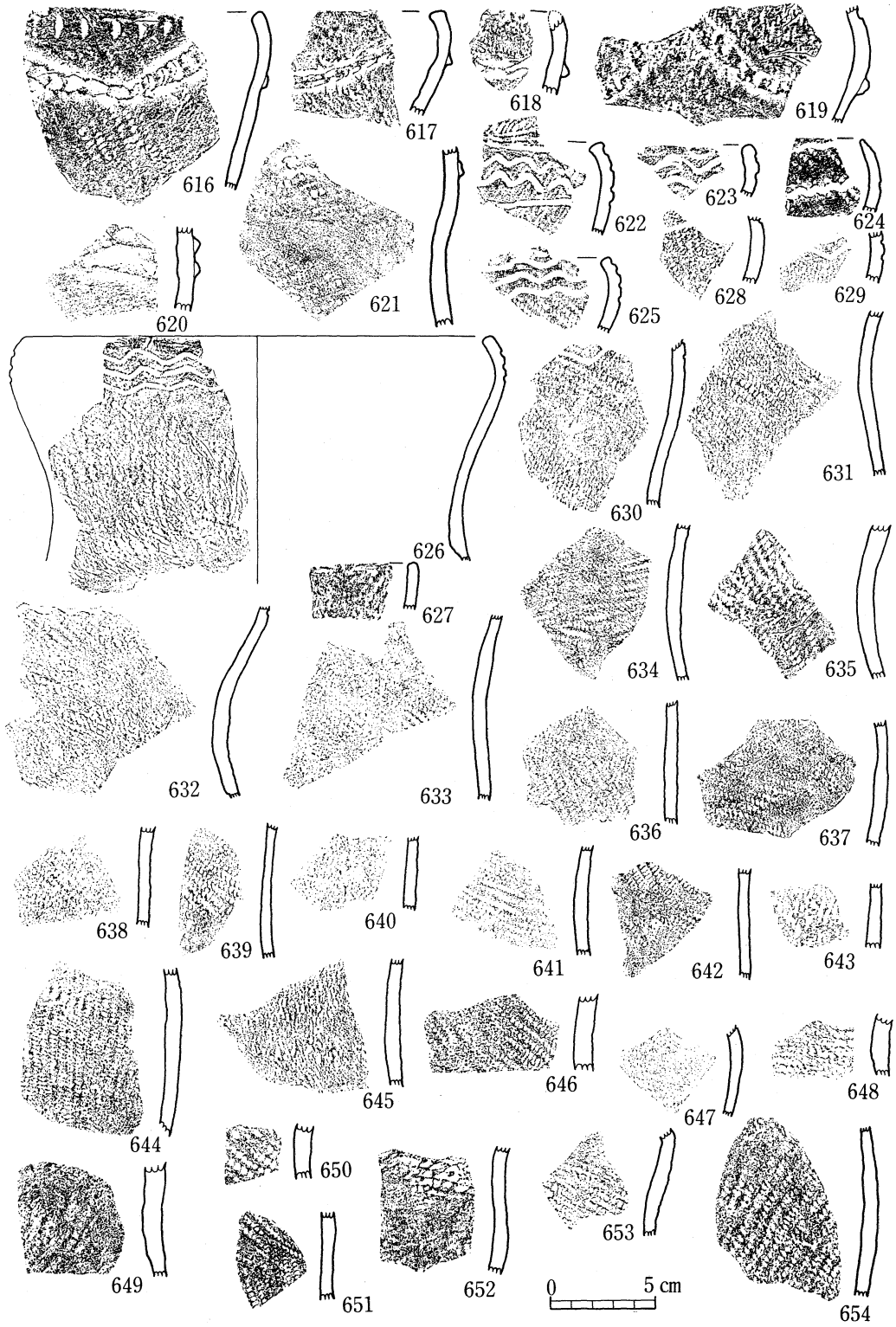


第50図　出土土器実測図 (22)

第51図　出土土器実測図 (23)

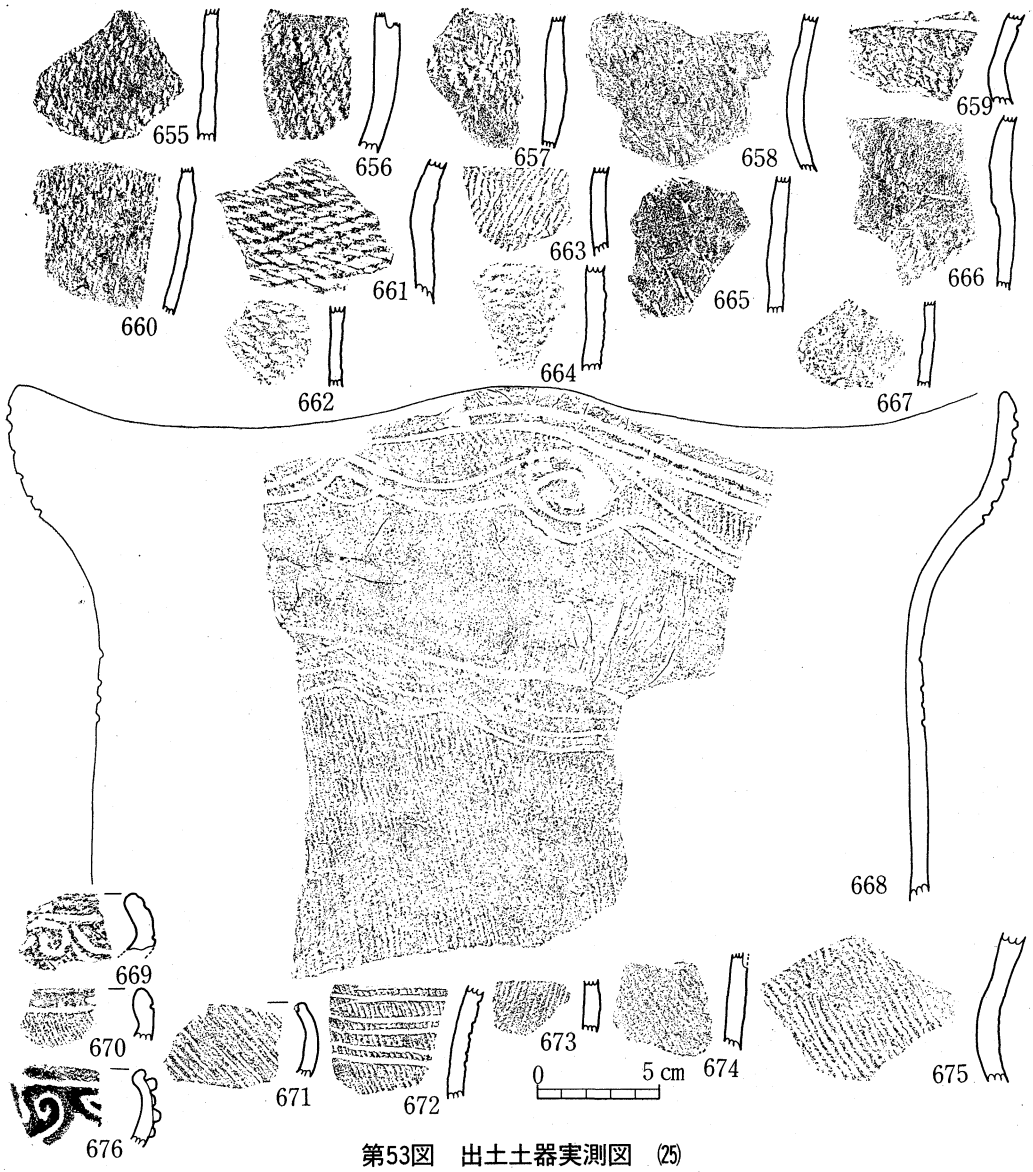
Ⅷ類土器

Ⅷ類土器は縄文，撚糸文を施文したもので，突帯文や沈線文を施したものもある。器形はⅦ類に類似して居り，口縁部が内湾してキャリパー状を呈する。内面の整形はヘラけずりかナデ整形が行われている。616～621は突帯文を施すものである。616は左上りの斜縄文を施した後に，刻目突帯を貼り付けるもので口縁部にもヘラ状施文具による刻目が施されている。617・618は細い突帯文を貼り付けるものである。619はヘラによる刻目の施される突帯文を貼り付けるものであるが，口縁部近くに沈線の痕跡も認められる。620は2条の突帯を貼り付けるものである。縄文を施したあとナデ整形が行われている。621はしまった頸部からあまり開かず外反するものである。口縁下位に突帯文が認められる。右上りの斜縄文が施される。621～626・628～630・632は沈線文を施すものである。622は右上りの撚糸文を地文とし，口縁部に2条の横位の沈線文とその間に2条の波状沈線文を施す。口唇部にも刻目が施される。623は口縁部に波状沈線文を施す。624は口縁部に1条，口縁下位に1条の波状沈線文を施す。625は左上りの斜縄文を地文とし，口縁部に3条の波状沈線文を施す。626は口縁径22.4cmを測る。頸部はよくしまり，口縁部は外反した後内湾するものである。地文には縄文を施し口縁部に3条の波状沈線文を施す。628～630・632は左上りの斜縄文を地文とし口縁部近くに波状沈線文を施す。628～630は内面がナデ整形である。627は直行気味であまり内湾しない口縁部である。631～635は頸部である。633・634はあまりしまらないものである。631～633・635は左上りの斜縄文を施す。634は横位および斜行の縄文を施す。636～642は胴部で左上りの斜縄文を施すものである。643～653は左上りの縄文を施すもの。654は右上りの縄文を施すものである。616～654の縄文は概して撚りが硬く緻密である。655～667は616～654とは縄文が異なるものである。655～660は左上りの縄文である。659は頸部でよくしまるものである。口縁下位に横位の沈線文を施す。611・662は横方向の縄文である。663は右上りであるが，撚糸文かとも考えられる。664は横方向でわずかに右上りである。665は左上りで間隔のあるものである。666は胴部から頸部にかけての部分であるが，胴部はあまり張らず頸部のしまりも弱いものである。左上りの縄文が施される。667も左上りの縄文である。668～675は撚糸文を施したものと思われる。668は口縁径41cmを測り波状口縁である。胴部はあまり張らず頸部から外反した口縁はわずかに内湾する。地文には左上りの撚糸文を前面に施すが，頸部はヘラみがきのため撚糸文が消され無文帯となっている。口縁部に2条の横位の沈線文とその下位に波状および渦巻文を施すが，渦巻文は波状口縁の山形部の下位にあたる。胴部上位には横位の沈線文を1条とその下位に3条の沈線文を孤状に施す。内面は丁寧なヘラけずりにより整形されている。また，口縁部の2条目の沈線より上は貼り付けによる痕跡が明瞭であるが，撚糸文を施した後に張り付けられたと思われる痕跡が認められる。669は強く内湾する口縁部である。地文の撚糸文がわずかに残されている。口縁部に横位の沈線文を巡らし，その下位に渦巻文等を施すものである。接合の痕跡が明瞭である。670は左上りの撚糸文を施す口縁部である。口縁部に横位の沈線文とその下位に波状と思われる沈線文がわずかに認められる。671は左上りの撚糸文を施す口縁部である。672は左上りの撚糸文を施す頸部



第52図　出土土器実測図 ㉔

であるが，横位に６条の沈線文も施される。673は右上りの撚糸文を施す。674は左上りの撚糸文を施す。接合の痕跡が明瞭である。675は左上りのやや太めの撚糸文を施す。676は撚糸文は認められないが，胎土等が類似しているため同様に取りあつかった。口縁部は内湾し貼付突帯により渦巻文を施すもので，突帯間の凹んだ部分に丹と思われる赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。



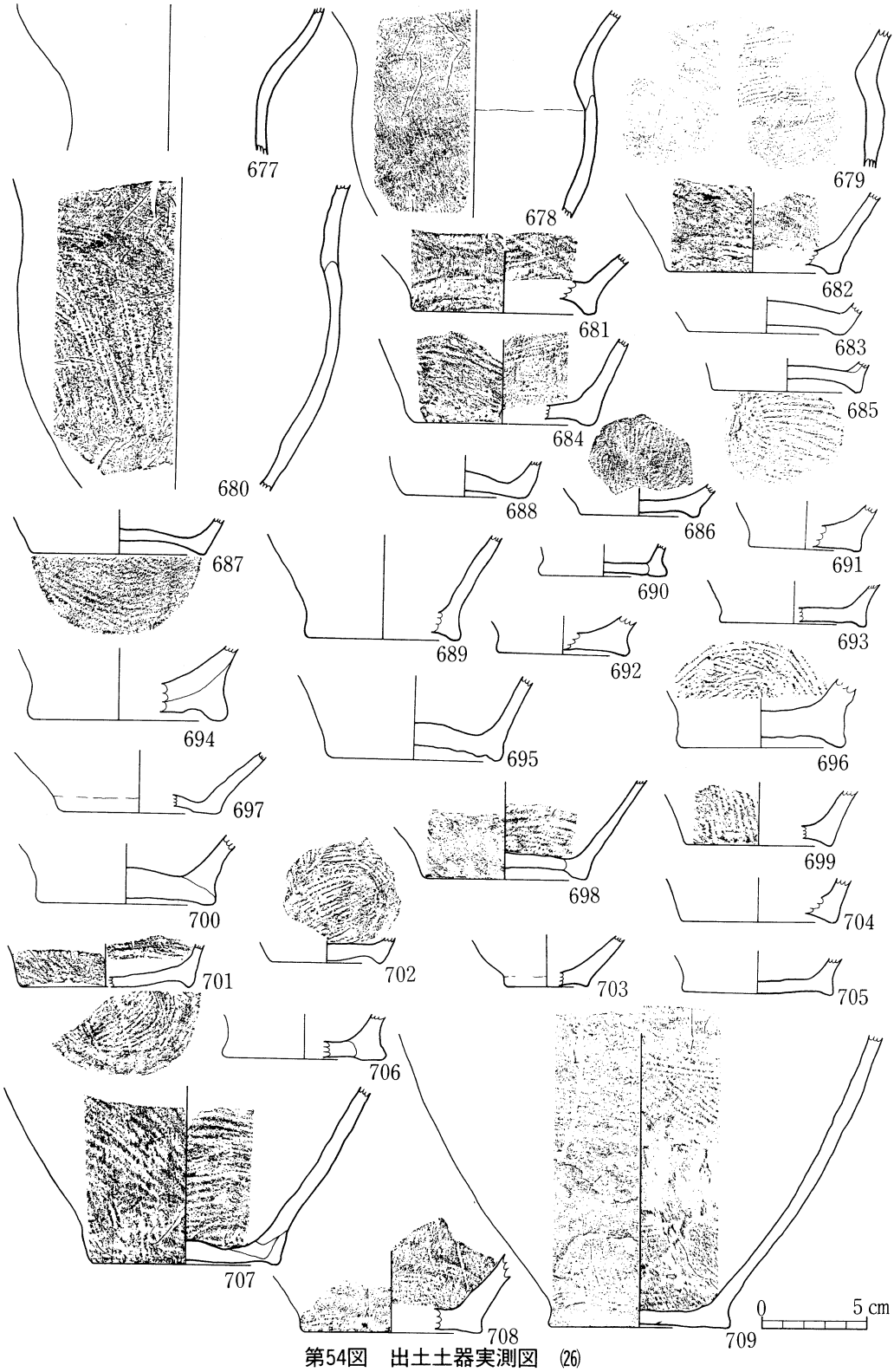
第53図　出土土器実測図 (25)

Ⅶ類，Ⅷ類土器の胴部および底部

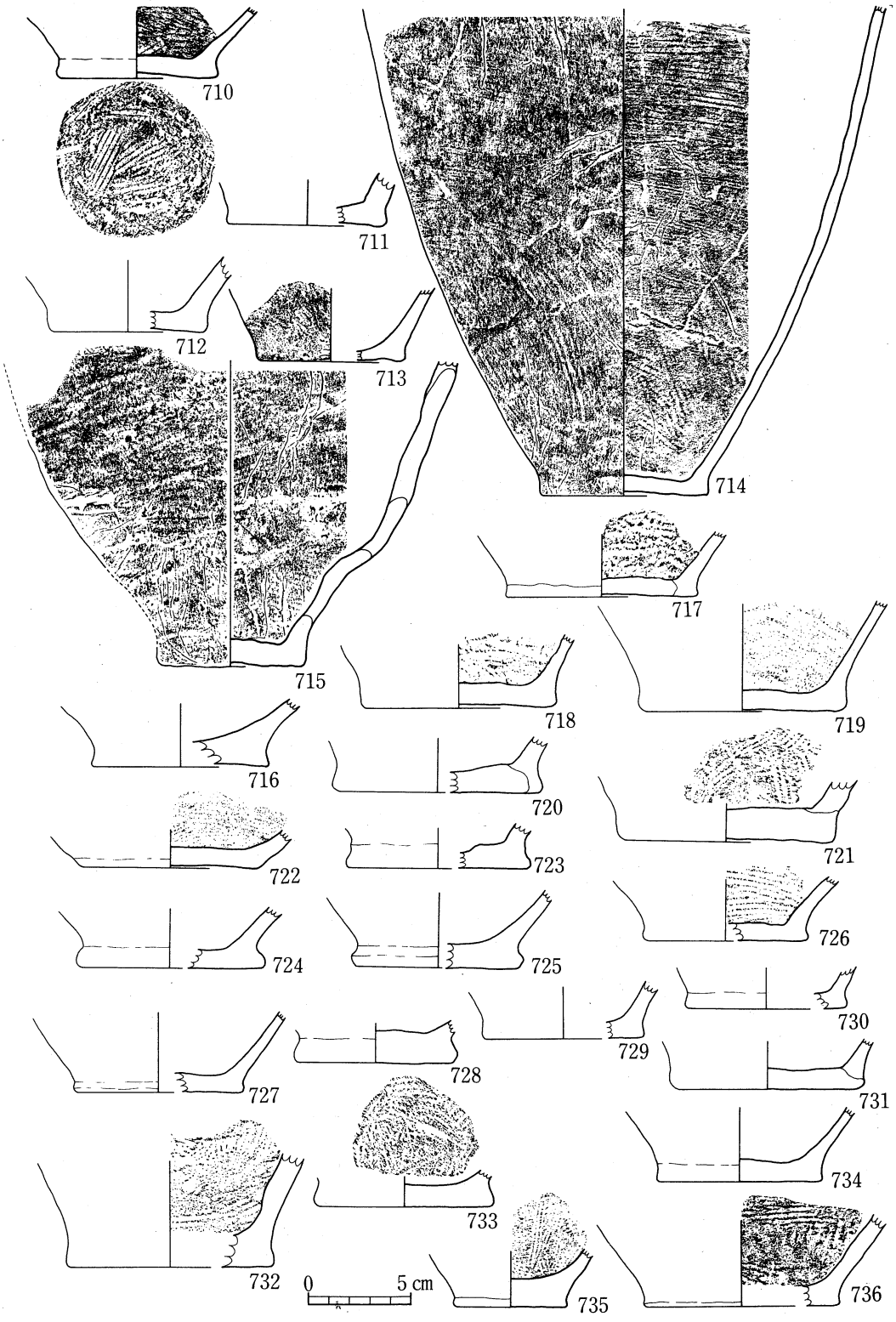
667～680はⅦ類土器の胴部であるが文様等が判明しないために，底部と同様に取り扱った。677は頸部がよくしまるもので，内外面に条痕がみられるが，口縁部では部分的にナデ整形が行われている。678は頸部径11.2cm を測る。やや張った胴部より頸部はしまる。口縁部は外反するが内湾する部分は欠損している。外面はナデ整形，内面は下位で荒いヘラけずり，上位および口縁部はナデ整形である。頸部では接合の痕跡が認められる。679は内外面共に貝殻条痕である。680は頸部径15cm を測る。外面は荒い条痕の後に部分的にナデ整形を行っている。内面はナデ整形が施され条痕は消されている。681～779は底部である。底部もあげ底，わずかなあげ底，平底とに細分される。681～705はあげ底である。681～700は接着面が平坦なもので，681・682・684・698は内外面共に条痕，699は外面に条痕，686・696は底部内面に条痕，685・687は底部外面に条痕が施される。688は接着面が広いものである。690・694・698・700は接合部が明瞭である。701～705は接着面が丸味をおびたり尖ったりしているものである。701は内外面，底部外面に条痕が施されるもので，接着面は丸くおさめる。702は底部内面に条痕が施される。703は底部径 4 cm を測る小形のもので接着面はやや尖り気味である。705～723はわずかにあげ底状になるものである。707～709は内外面共に条痕を施す。707は接合部が明瞭である。709は底部径8.6cm を測る。わずかに膨らみながら胴部へと立ちあがるもので胴部は張るものと思われる。710は内面，底部外面に，713は外面に条痕を施す。714は底部径8.2cm を測る。わずかなあげ底で，直線的に立ちあがるもので胴部はあまり張らないものと思われる。外面に条痕が施される。715は底部上位で屈曲気味に立ちあがるもので外面は浅い条痕，内面はヘラみがきが施される。輪積みと思われる接合部が明瞭である。717～719・722・723は内面に条痕を施す。723～762は平底であるがくびれ部を有するもの（723～736）と有しないもの（737～762）とに分けられる。723・733・735・736は内面に条痕を施す。746・755は底部外面に条痕を施す。753～758はあまり開かずに立ちあがるもの。763は外面に撚糸文を施すものでⅧ類の底部と思われる。764～779は底部径 5 cm 以下の小さな底部より大きく開いて立ちあがるものである。768・770・775は内面に条痕を施す。771は外面に縦位の沈線が施される。777～779は底部が丸みをおびている。780～782は底部径1.5cm 前後と小さく，尖底に近いものである。780は胴部がやや張り，頸部がしまるもので内外面は条痕な後ナデ整形がなされ部分的に条痕が残る。782は内外面条痕を施す。753・784は胴部で内外面共に条痕を施す。底部は尖底もしくは尖底に近いものと思われる。

Ⅸ類土器

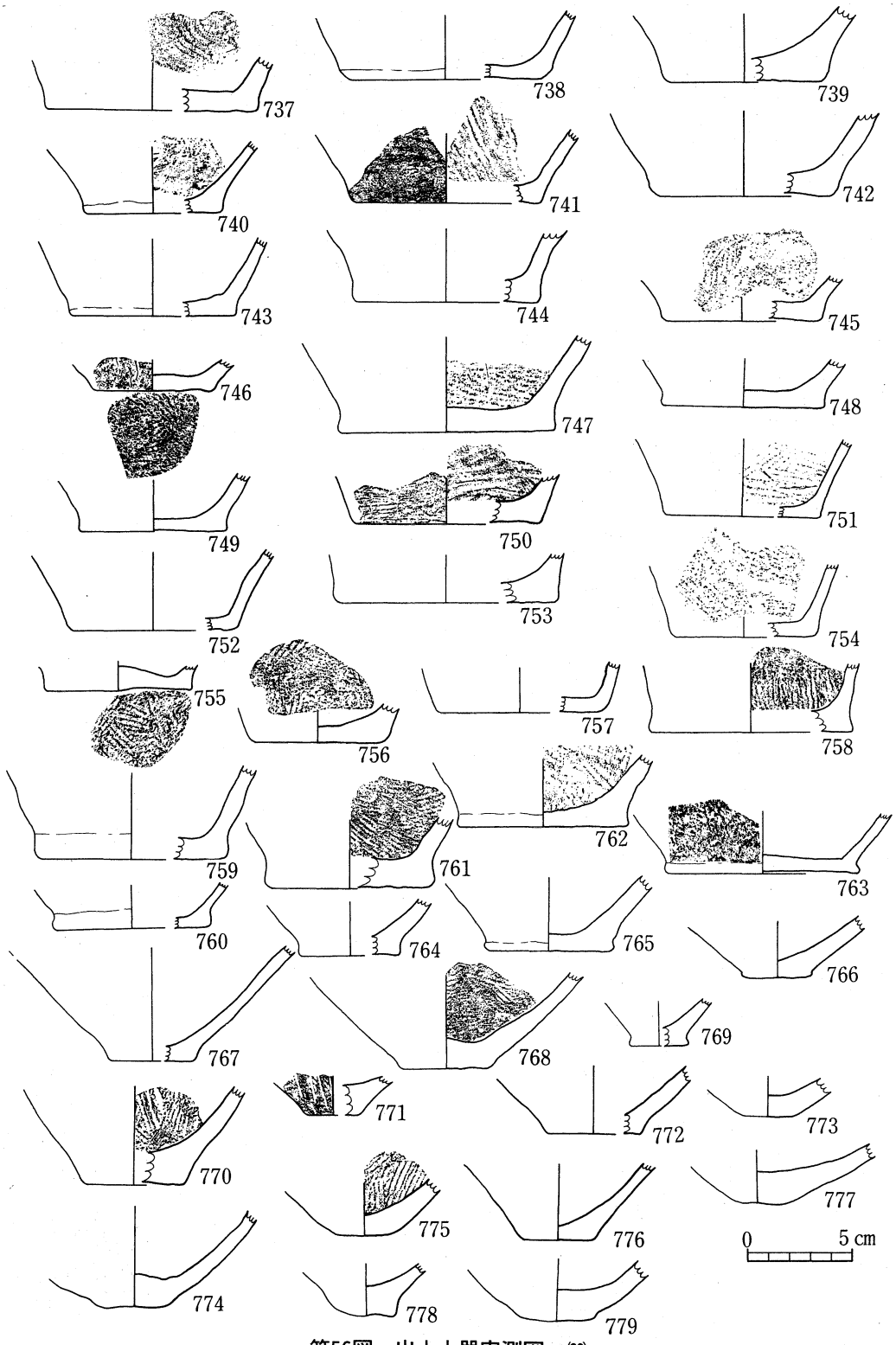
785～796は底部が尖るものでⅨ類（尖底土器）である。785は口縁径22cm を測る。尖った底部より立ちあがり，胴部は張らず口縁部は直行気味に外反し端部近くでわずかに内湾する。口唇部は平坦におさめ，外面にはヘラ状施文具による縦位の沈線文を施すものである。内外面共に貝殻条痕の後ナデ整形を施すもので部分的に条痕が残る。786～796は尖底部である。790は外面に条痕を施す。792はやや丸みをおびている。



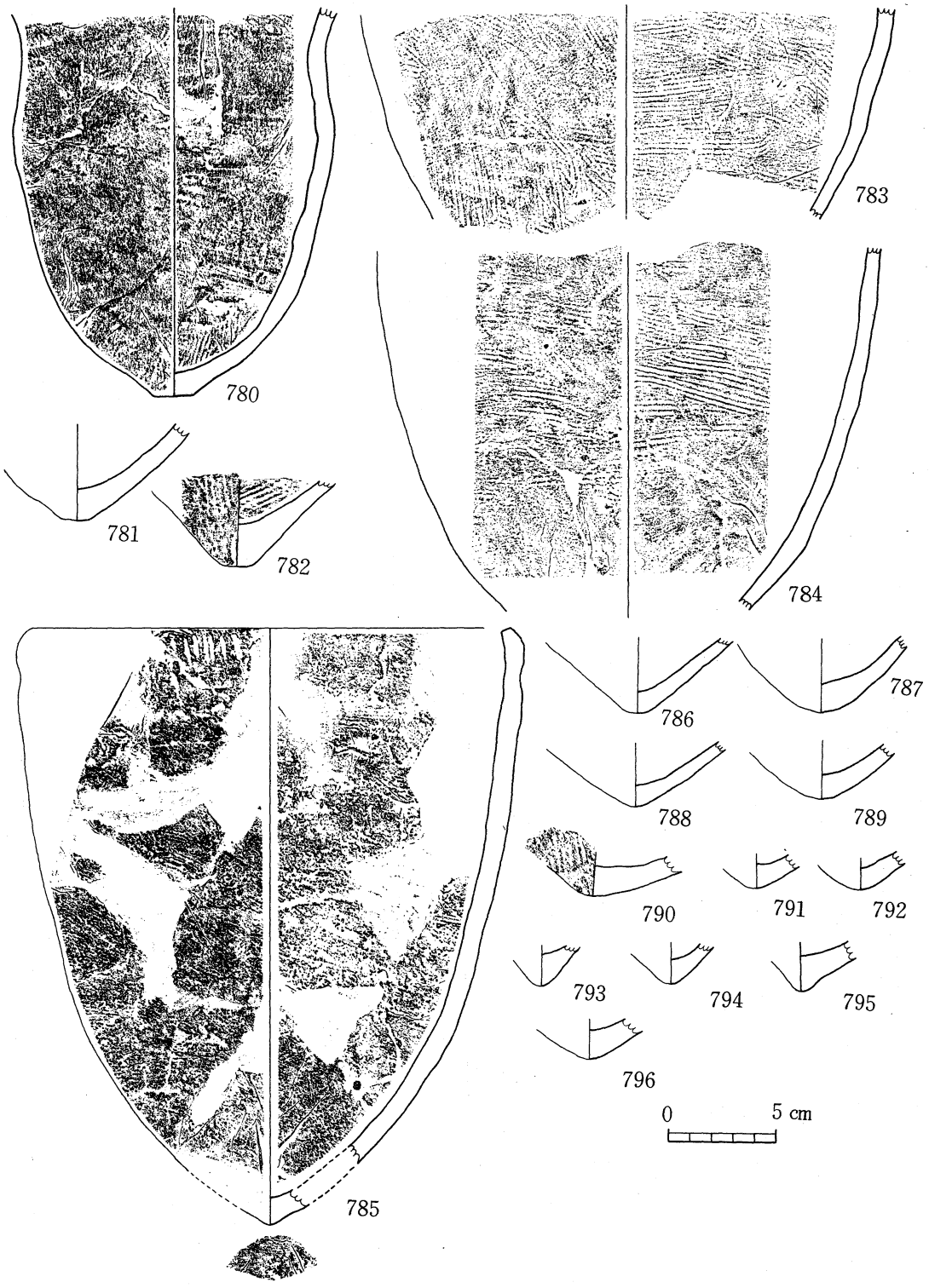
第54図　出土土器実測図 (26)



第55図　出土土器実測図 (27)



第56図　出土土器実測図 (28)



第57図　出土土器実測図 (29)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第31図	159	E-5	Ⅲ下	Ⅶa1	石・長・角・輝	良好	
	160	F-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	161	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 輝	〃	スス付着
	162	〃	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	163	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	〃	
	164	E-5	〃	〃	〃 〃 滑石	〃	条痕の後ナデ整形
	165	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	山形口縁
	166	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	167	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	168	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	条痕の後ナデ整形
	169	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	170	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	171	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	172	G-5	〃	〃	〃 〃	良好	
	173	F-5	〃	〃	〃 〃 角・金	〃	
	174	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
第32図	175	E-5	Ⅲ下	Ⅶa1	石・長・角	良好	スス付着
	176	G-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	一部ナデ整形
	177	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	一部ナデ整形 スス付着
第33図	178	F-5	Ⅲ下	Ⅶa1	石・長	良好	スス付着
	179	〃	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	穿孔
	180	G-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	口縁部に刻目
	181	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ふきこぼれ状にスス付着
	182	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面ナデ整形
	183	〃	〃	〃	〃 〃	〃	
	184	C-6	〃	〃	〃 〃	〃	
	185	D-6	Ⅲ下	〃	〃 〃	〃	
	186	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 角・金	〃	突起
	187	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	188	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	189	C-5	〃	Ⅶa2	〃 〃 〃	〃	
	190	F-6	〃	〃	〃 〃	〃	内外面スス付着
	191	E-5	〃	〃	〃 〃 輝	〃	条痕の後ナデ整形
	192	G-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	193	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
第34図	194	E-5 F-5 H-5	Ⅲ下 Ⅲ	Ⅶa2	石・長・角	良好	5号住居址と接合
	195	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	196	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃	〃	突起
	197	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	
	198	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	条痕の後ナデ整形
	199	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第34図	200	G-5	Ⅲ	Ⅶa2	石・長・角	良好	スス付着
	201	〃	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	202	F-5	〃	〃	〃 〃 〃		スス付着
	203	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	良好	〃
	204	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	内外面ナデ整形
第35図	205	B-6	Ⅲ下	Ⅶa2	石・長・角	〃	スス付着
	206			〃	〃 〃 〃	良好	
	207			〃	〃 〃 〃	良好	
	208	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	スス付着
	209	G-5	〃	〃	〃 〃	〃	
	210	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	211	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 穿孔
	212	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	波状口縁 ナデ整形
	213	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃	〃	波状口縁
	214	G-5	〃	〃	〃 〃 角	不良	
第36図	215	F-5	Ⅲ	Ⅶb1	石・長・角	良好	
	216	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	内面ナデ整形
	217			〃	〃 〃	〃	内外面ナデ整形
	218	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	
	219	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	220	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	221			〃	〃 〃 〃	〃	
	222			〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	223	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃	〃	
	224	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	ミミズばれ状突帯
	225	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	226	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	227	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	228	〃	〃	〃	〃 〃 〃	良好	内面スス付着 外面ナデ整形
	229	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	230	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	231			〃	〃 〃 〃	不良	ミミズばれ状突帯
	232	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 金	〃	
	233	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	良好	
	234	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	235	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	外面ナデ整形
	236			〃	〃 〃 〃	不良	〃
	237	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	238	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	239	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	240	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第36図	241	D-6	Ⅲ	Ⅶb1	石・長・	良好	
	242			〃	〃 〃 角	不良	
	243	D-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	244	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	245	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	246	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
第37図	247	D-6	Ⅲ下	Ⅶb2	石・長 角	良好	
	248	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	249	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	250	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	251	E-5 C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃 ナデ整形
	252	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	253	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃 スス付着
	254	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃 〃
	255	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	256	E-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	ナデ整形
	257	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	258	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	259	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	こぶ状突起
	260	C-6	〃	〃	石 〃 〃	〃	波状口縁
	261			〃	〃 〃 〃	〃	〃 スス付着
	262	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	263	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	264	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形 スス付着
	265	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	266	C-6	ⅢⅢ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	267	F-5	ⅢⅢ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	268	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃 金	〃	
	269	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	270	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	271	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
第38図	272	E-5	〃	Ⅶb2	石・長・角	良好	
	273	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	274	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃	〃	スス付着
	275	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	〃
	276	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	277	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	278	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	279	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	280	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	281	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第38図	282	F-5	Ⅲ下	Ⅶb2	石・長・角	良好	内面ナデ整形
	283	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	284	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 金	〃	スス付着
	285	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 金	〃	
	286	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	〃	
	287	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	288	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	289	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	290	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	291	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	292			〃	〃 〃 〃	〃	内面ナデ整形
	293	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	外面ナデ整形
	294	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面ナデ整形
	295	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	296	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	297			〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	298	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
第39図	299			Ⅶb2	石・長・角・輝	良好	スス付着
	300	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	301	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	302	G-5	〃	〃	〃 〃	〃	
	303	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	〃	
	304	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	305	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	306	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	307	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	308	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	309	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	310	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	311	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	312	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	313	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	314	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	315	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	316	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
第40図	317	〃	〃	Ⅶb2	石・長・角	良好	
	318	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	319	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	320	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	321	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	322	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着

挿図番号	遺物番号	出土	層位	類	胎土	焼成	備考
第40図	323	E-5	Ⅲ下	Ⅶb2	石・長・角	良好	
	324	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	325	〃	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	326	G-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	良好	
	327	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	スス付着
	328	E-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	〃
	329	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	330	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	331	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	332	F-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	良好	
	333	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	334	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	335	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	336	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	337	B-6	〃	〃	〃 〃	良好	
	338	C-6	〃	〃	〃 〃 角	〃	スス付着
	339	G-5	〃	〃	〃 〃 〃 輝	〃	
	340	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	同一個体
	341	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
第41図	342	C-6 F-5	Ⅲ下 Ⅲ	Ⅶb2	石・長・角	良好	スス付着
	343	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	不良	
	344	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	345	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	346	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	347	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	348	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
	349	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
	350			〃	〃 〃 〃	〃	
	351	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	352	E-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	347～350と同一個体
	353	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	354			Ⅶb3	〃 〃 〃	良好	穿孔 スス付着
第42図	355	D-5	Ⅲ	Ⅶb3	石・長・角	良好	
	356	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	357	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	358	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	359	D-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	360	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	361	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	362	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	363	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第42図	364			Ⅶb3	石・長・角	良好	
	365	G-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	366	C-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	367	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	368	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	369	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	370	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	371	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	372	C-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	373	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面スス付着
	374	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	375	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	376	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	377	G-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	378	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	379	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	380	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	381	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	382	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	383	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
第43図	384	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	穿孔
	385	〃	〃	〃	〃 〃 〃 金	〃	スス付着
	386	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	387	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃 金	〃	ナデ整形
	388	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	389	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	390	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	391	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	392	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	393	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	〃
	394	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	395	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	396	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	397	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	398	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	399			〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	400	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	401	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	402	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	403	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	404	E-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第43図	405	F-5	Ⅲ	Ⅶb3	石・長・角	良好	
	406	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	407	E-5 F-5	Ⅲ下 Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
第44図	408	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	409	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	410	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	411	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	412	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	413	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
	414	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
	415	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	穿孔
	416	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	417	B-6 B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	外面ナデ整形
第45図	418	F-5	Ⅲ下	Ⅶc1	石・長・角	良好	スス付着
	419	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	420	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	421	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	422	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	423	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	424	〃	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	425	〃	〃	〃	〃 〃	不良	
	426	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	良好	スス付着
	427	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	428	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	429	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	430	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	431	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	432	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	433	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	434	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	435	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	436	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	437	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃 金	〃	〃
	438	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	439	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	440	F-5	Ⅲ下	Ⅶc2	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	441	B-6	Ⅲ	Ⅶc1	〃 〃 〃	〃	スス付着
	442	F-5	〃	〃	〃 〃 〃 金	〃	
	443	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	444	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	445	F-5	〃	〃	〃 〃 〃 金	〃	〃

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第45図	446			Ⅶc1	石・長・角	良好	
	447	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	448	B-6 D-5	〃	〃	〃 〃	〃	スス付着
	449	F-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	〃
	450	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	451	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
第46図	452	C-6	Ⅲ	Ⅶc1	石・長・角	良好	スス付着
	453	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 金	〃	
	454	〃	〃	Ⅶc2	〃 〃 角	〃	スス付着
	455	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	456	C-5	〃	〃	〃 〃 〃 金	〃	スス付着
	457	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	458	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	459	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	460	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 金	〃	
	461	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	スス付着
	462	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	463	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	464	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 金	〃	〃
	465	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	466	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	467	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	468	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
第47図	469	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	470	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	471	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	472	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	同一個体
	473	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	474	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	475	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	476	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	477	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	478	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	479	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	480	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	481	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	482	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	483	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
第48図	484	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 穿孔
	485	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	486	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第48図	487	F-5	Ⅲ	Ⅶc2	石・長・角	不良	スス付着
	488			〃	〃 〃 〃	良好	ナデ整形
	489	G-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	490	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 金	〃	スス付着
	491	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	〃	〃
	492	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	493	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	494	G-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	495	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	496	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	497	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	498	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	499	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	〃
	500	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	〃
	501	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	502	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	503	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	504			〃	〃 〃 〃	〃	
	505	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	506	E-5 E-5	Ⅲ Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 ナデ整形
	507	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	508	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
第49図	509	C-5 C-5	Ⅲ Ⅲ	Ⅶc2	石・長・角	良好	
	510	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	511	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	512	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	513	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	514	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	515	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	516	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	517	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	518	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	519	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	520	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	521	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	522	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	523	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	524	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	525	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 ナデ整形
	526	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	527	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第49図	528	F-5	Ⅲ	Ⅶc2	石・長・角	良好	
	529	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	530	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	531	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	
	532	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	内面ナデ整形
	533	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
第50図	534	F-5	〃	Ⅶc2	石・長・角	〃	スス付着
	535	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	536	D-6	〃	〃	〃 〃 〃 輝	不良	〃
	537	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	538	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	539	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	540	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	541	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	542	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	543	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	544	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	545	C-5	〃	〃	〃 〃 金	不良	
	546	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	547	B-6	〃	〃	〃 〃 角	良好	スス付着
	548	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	549	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 角	〃	スス付着
	550	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	551	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	552	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 内面ナデ整形
	553	E-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	554	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	555	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面スス付着
	556	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	557	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	558	C-5 D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	559	D-5	〃	〃	〃 〃 滑石	〃	
	560		〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	561		〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	562	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	563	G-5	Ⅲ上	〃	〃 〃	〃	ナデ整形
	564	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	
	565	〃	〃	〃	〃 〃 〃	不良	スス付着
	566	D-6 B-6	〃 〃	Ⅷe	石・長・金	〃	輪積痕
	567	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	568	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第51図	569	F-5	Ⅲ	Ⅶe	石・長・金	良好	
	570	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	ナデ整形
	571	〃	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	572	B-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	内面ナデ整形
	573	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	574	D-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	575	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 金	〃	
	576	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	577	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	578	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	579	B-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	580	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	581	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	582	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	583	〃	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	584	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	ナデ整形
	585	〃	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	586	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	587	〃	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	588	〃	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	589			〃	〃 〃 角	良好	
	590	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	591	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	592	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	593	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	594	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	595	〃	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	596	D-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	597			〃	〃 〃 金	〃	
	598	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	599	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	600	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	
	601	B-6	〃	〃	〃 〃	〃	
	602	〃	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	603	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	604	B-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	スス付着
	605	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	606	F-5	〃	〃	〃 〃 金	不良	
	607	D-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	内面ナデ整形
	608	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	609	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第51図	610	D-6	Ⅲ	Ⅶe	石・長・角・輝	良好	
	611	F-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	スス付着
	612	G-5	〃	〃	〃 〃 金	良好	
	613	C-6	〃	〃	〃 〃 角	〃	内面ナデ整形
	614	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	スス付着
	615	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
第52図	616	F-5	〃	Ⅶ	石・長・角	〃	スス付着
	617	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	618	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	619	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	620	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	621	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	622	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	623	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	624	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	625	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	626	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	627	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	628	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	629	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	630	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	631	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	632	B-6 B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	633	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	634	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	635	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	636	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	637	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	638	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	639	〃		〃	〃 〃 〃	〃	
	640	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	641	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	642	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	643	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	644	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	645	B-5	〃	〃	石・長・角 黒雲母	〃	
	646	B-6	〃	〃	石・長・角	〃	スス付着
	647	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	648	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	649	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	650	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第52図	651	D-6	Ⅲ	Ⅷ	石・長・角	良好	
	652	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	653	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	654	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
第53図	655	B-6	〃	Ⅷ	石・長・角	良好	
	656	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	657	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	658	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	659	D-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	660	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	661	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	662	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	663	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	664	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	665	C-6	Ⅲ	〃	石・長	〃	
	666	B-6	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	667	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	668			〃	〃 〃 〃 金	〃	スス付着
	669	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	670	〃	〃	〃	〃 〃 〃 〃	〃	
	671	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	672	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 金	〃	
	673	B-6		〃	〃 〃 〃	〃	
	674	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃 金	〃	
	675	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	676	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	丹塗
第54図	677	F-5	Ⅲ下	〃	石・長・角	良好	スス付着
	678	F-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 ナデ整形
	679	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	680	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着 ナデ整形
	681	D-5	Ⅲ	底部	〃 〃 〃	〃	
	682	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	683	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	684	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	685	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	686	D-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	687	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	688	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	
	689	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	スス付着
	690	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	691	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面スス付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第54図	692	F-5	Ⅲ	底部	石・長・角	良好	
	693	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	694	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	695	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	696	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	697	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	698	B-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	699	F-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	700	B-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	
	701	F-5 B-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	702	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	703	F-5 E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	704	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	705	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	706	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	707	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	708	G-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	709	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
第55図	710	〃	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	711	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	不良	
	712	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	良好	
	713	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	
	714	〃	Ⅲ下	底部 胴部	〃 〃 角	〃	スス付着
	715	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	内面ヘラ磨き
	716	B-5	〃	底部	〃 〃 角	〃	
	717	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	718	C-6 D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	719	〃	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	720	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	721	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃	〃	
	722	F-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	内面スス付着
	723	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	724	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	725	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	726	〃	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	727	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	728	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	
	729	〃	〃	〃	〃 〃 〃	良好	ナデ整形
	730	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	731	C-6 G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	732	〃	〃	〃	〃 〃 〃 輝	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第55図	733	G-5	Ⅲ下	底部	石・長・角	良好	
	734	C-5	Ⅲ Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	735	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	736	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
第56図	737	B-6	〃	底部	石・長・角	良好	
	738	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	739	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	740	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	741		Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	742	D-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	〃
	743	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	744	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	745	F-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	不良	
	746	〃	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	747	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	748	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	749	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	750	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	751	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	752	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	753	C-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	754	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	755	E-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	756	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	757	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	758	E-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	759	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	760	D-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	761	E-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	762	G-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	763	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	外面に撚紋
	764	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
第56図	765	D-6	Ⅲ	〃	石・長・角	良好	内面 ヘラみがき
	766	F-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
	767	C-5	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	768	〃	ⅢⅢ下	〃	〃 〃 金	〃	〃
第56図	769	F-5	Ⅲ下	底部	石・長・角	良好	
	770	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	
	771	F-5	〃	〃	〃 〃 金	〃	外面沈線
	772	D-6	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	773	F-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	774	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	775	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	776	C-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	777	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	不良	
	778	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	良好	
	779	B-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	
第57図	780	F-5	Ⅲ	底部 胴部	石・長・角	良好	スス付着 ナデ整形
	781	D-6	Ⅲ下	底部	〃 〃 〃	〃	
	782	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 〃	〃	内外面スス付着
	783	F-5	〃	胴部	〃 〃 〃	〃	
	784	E-5	Ⅲ下	〃	〃 〃 〃	〃	スス付着
	785			Ⅸ	〃 〃 金	〃	外面丹塗？
	786	F-5	Ⅲ	Ⅸ 底部	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	787	B-5	〃	〃	〃 〃 角	〃	
	788	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	ナデ整形
	789	B-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	内面スス付着
	790	C-6	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	791	E-5	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	792	C-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 金	〃	
	793	B-6	Ⅲ	〃	〃 〃 角	〃	
	794	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	795	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	
	796	E-6	Ⅲ下	〃	〃 〃 金	〃	

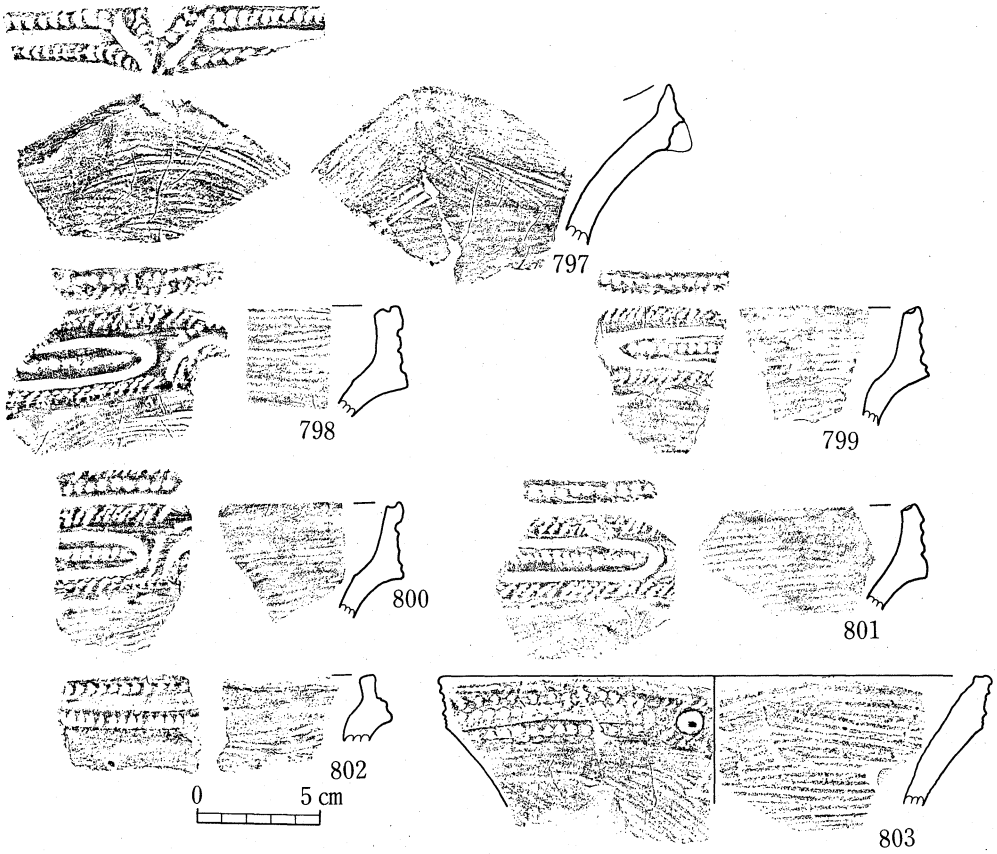
X類土器

797～803は市来式土器でX類としたものである。いずれも口縁部を断面三角形に肥厚させて文様帯を構成するもので地文には貝殻条痕を施すものである。797は波状口縁である。肥厚した口縁部に凹線文とその上下に爪形文を施すもので，山形部は八の字状の凹線文と爪形文を施す。798～801は同一個体と思われる。口縁部は肥厚するが口唇部にはやや内傾する平坦面をつくる。文様帯には凹線文，貝殻腹縁による連続刺突文，連続刺突文を施し，口唇部にも連続刺突文を施すものである。802は口縁部が短く肥厚するもので，文様帯に凹線文と爪形文を施す。803は口縁径22.4cm を測る。口縁部はあまり肥厚せず，文様帯に凹線文，連続刺突文，貝殻腹縁による刺突文を施すもので，貝殻刺突の上に竹管文を施すものである。

表11　X類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
	797	D-6	Ⅲ	X	石・長・角・金	良好	スス付着
	798	〃	〃	〃	〃 〃 〃 〃	〃	同一個体 スス付着
	799	〃	〃	〃	〃 〃 〃 〃	〃	
	800	〃	〃	〃	〃 〃 〃 〃	〃	

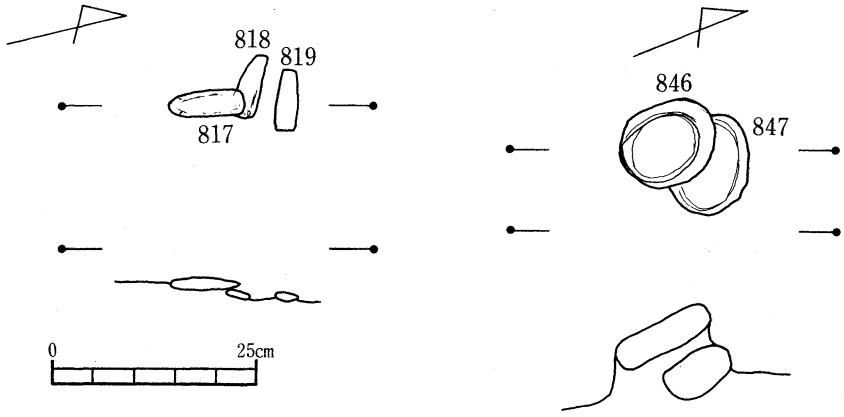
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	類	胎土	焼成	備考
	801	D-6	Ⅲ	X	石・長・角・金	良好	798～800と同一個体　スス付着
	802	〃	〃	〃	〃 〃	〃	
	803	〃	〃	〃	〃 〃 角・金	〃	スス付着



第58図　出土土器実測図 (30)

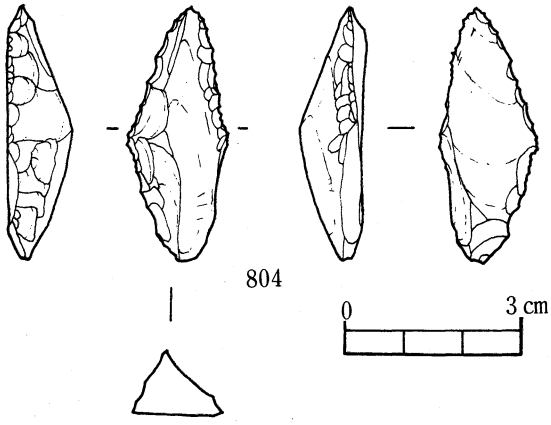
第2節　石　　器

石器はナイフ形石器と思われるもの（1），石斧（20）・スクレイパー（11）・石匙（10）つまみを有するスクレイパー（4）・石錘（1）・異形石器（1）・石鏃（140）・すり石・たたき石(41を図化)，石皿（小破片）等が出土した。また磨製石斧817～819は3本が重なり合って出土し，すり石847・848も重なって出土した。



第59図　遺物出土状況－石器－

ナイフ型石器



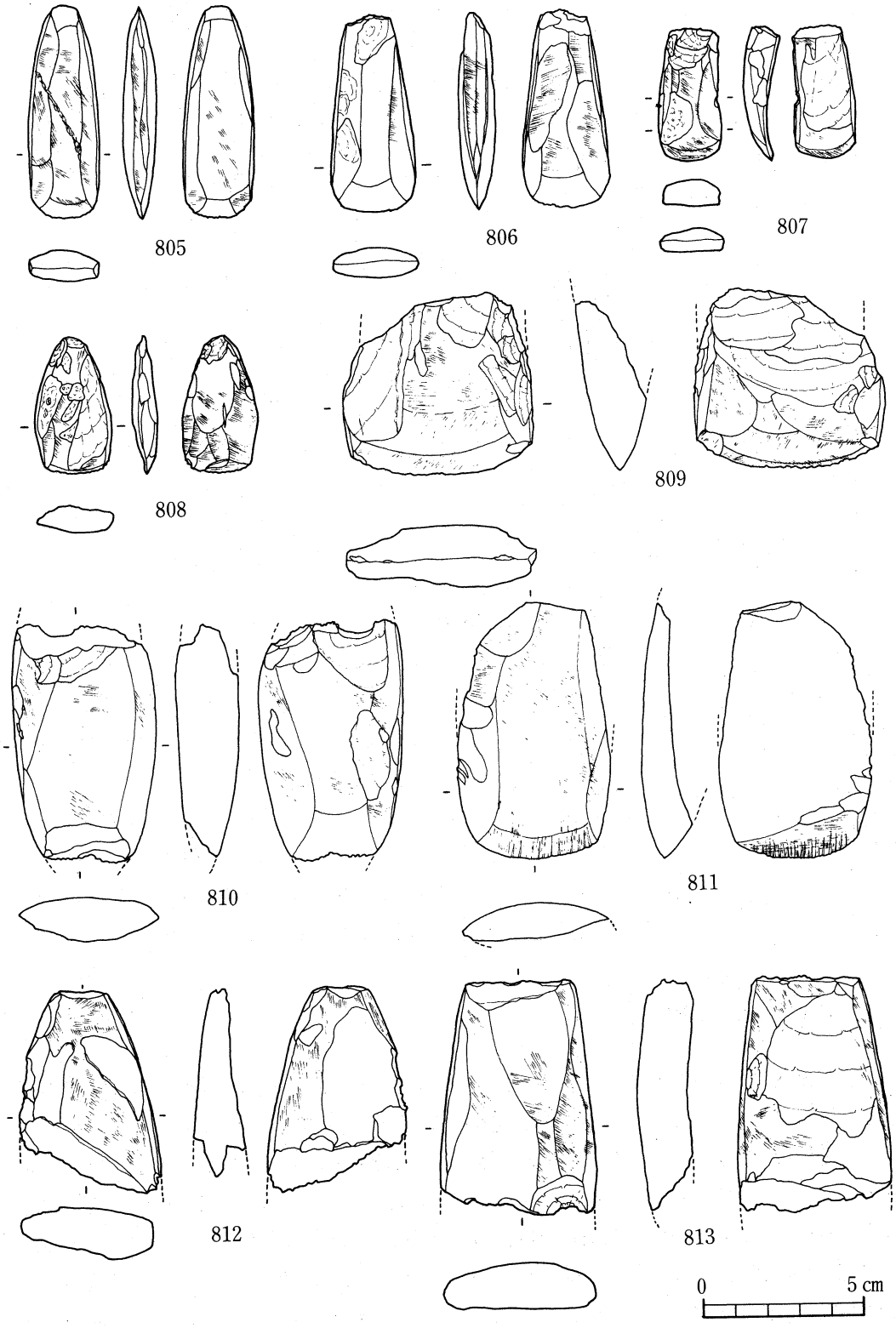
804は3層出土である。頁岩の横長に近い剝片を素材として，片側縁辺は急角度な剝離によって整形されている。もう片方の縁辺も入念な剝離を施し，両端をとがらす。

剝離は平坦な面からのみ行なわれ断面が三角形状を呈す。縁辺の調整はナイフ形石器に見られる歯つぶし調整に類似しており，旧石器時代の可能性が考えられる。

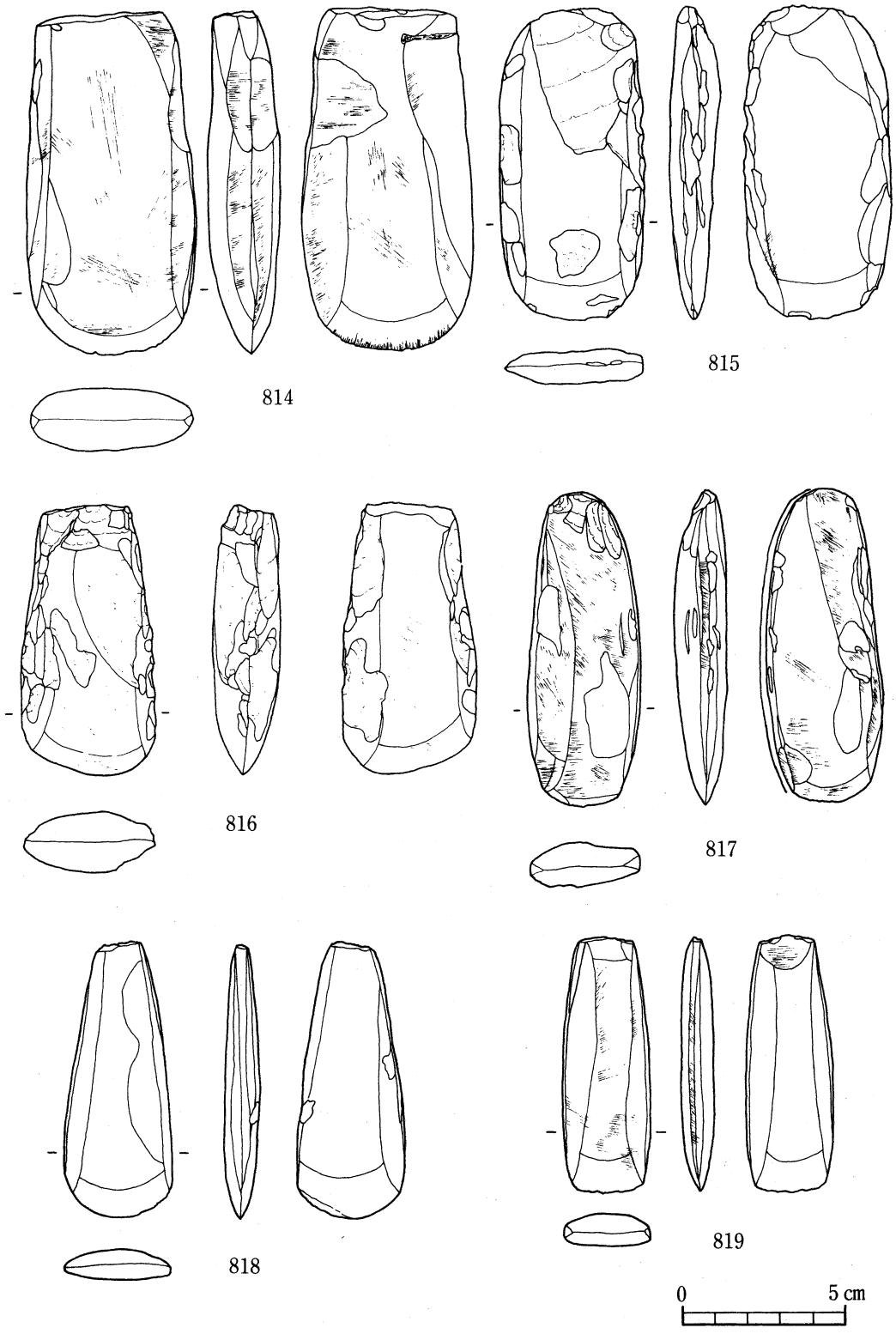
第60図　出土石器実測図（1）

石　斧

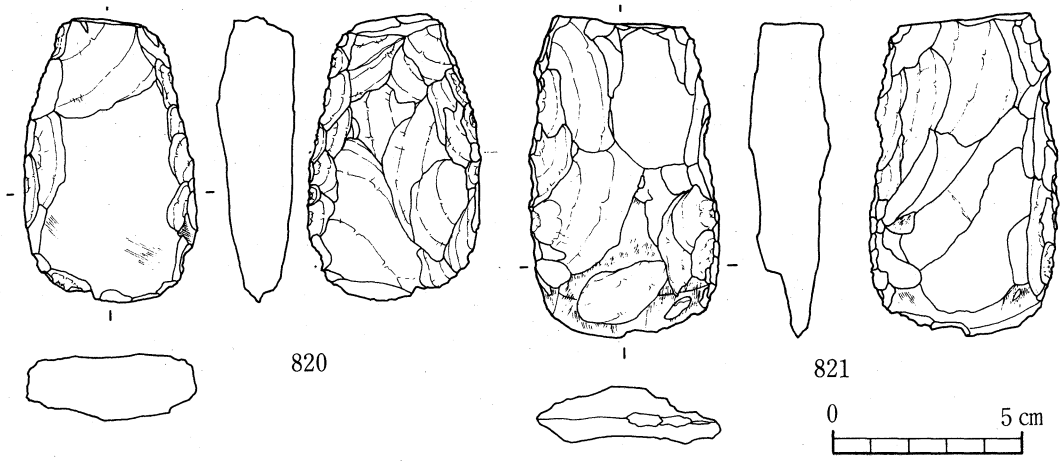
石斧は磨製石斧・局部磨製石斧が出土しており打製石斧は見られない。805～808は刃部が幅約2 cm前後の小形のものでノミ状を呈する。805は両端に刃部をもうける。807は剝片の湾曲を残し部分的に研磨するものである。808は長さに比して幅の広いものである。809～816は刃部の幅が3～4 cm，厚さ1.5～2 cmのもの。807は刃部だけである。810・812・813は刃部を欠損する。811は基部が欠損する。814は基部近くの片側縁辺に3cmのわずかな抉りが認められる。815は表面が風化のため，擦痕が認められない。816は両側面を剝離により調整し，刃部および裏面は入念な研磨が施される。817～819は三本が重なり合って出土したもので，いずれも全面が研磨された薄手のものである。820・821は刃部のみが研磨されたものである。



第61図　出土石器実測図　(2)



第62図　出土石器実測図 (3)



第63図　出土石器実測図　(4)

石　匙

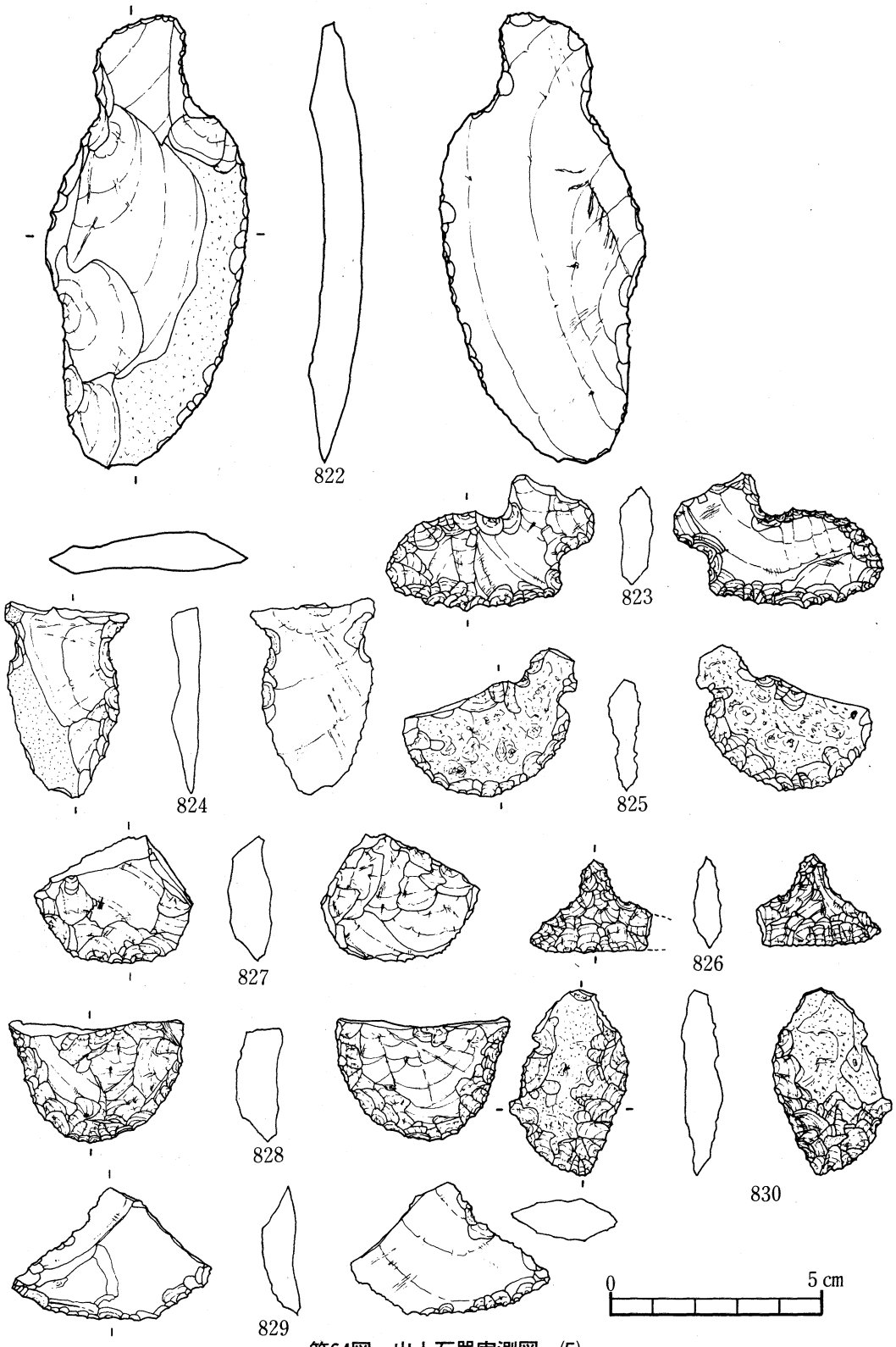
822～826は石匙である。822は横長剝片を利用した大形のものである。打面を調整し，片方につまみをつける。側縁末端部に丁寧な剝離を行ない刃部とする。824は姫島産の黒曜石を素材としたもので丁寧な剝離が施される。825は全体に丁寧な剝離が行なわれ刃部は丸味をおびている。823は片面に一部自然面を残す縦長剝片を利用したものである。

スクレイパー

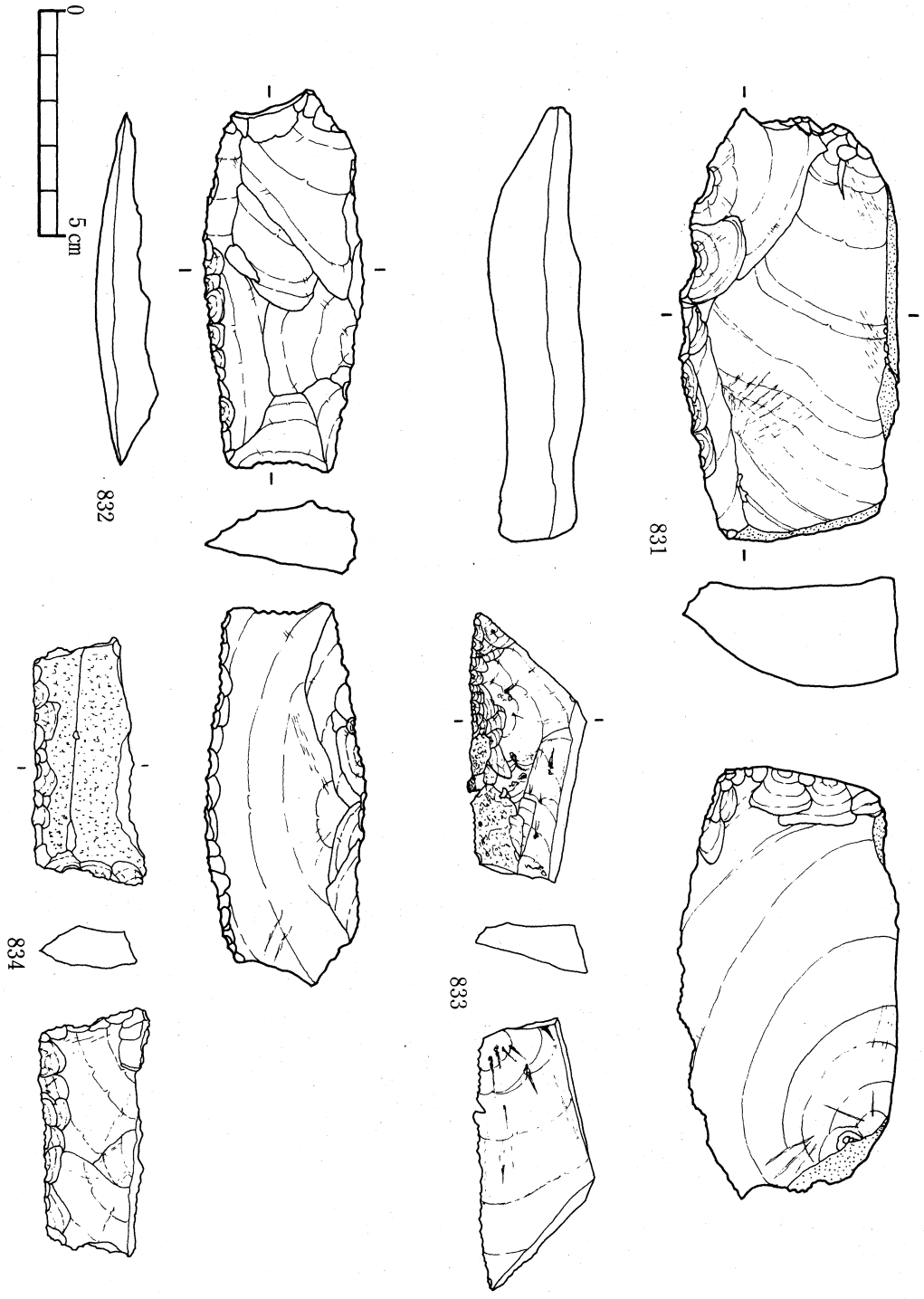
827～841はスクレイパーであるが，835～839･841はつまみを有するもので，石匙とも考えられる。827～829は入念な剝離を施すもので，刃部は丸味をおびている。830は全体に入念な剝離を施し，先端は尖っている。831・832・834は横長剝片を利用したものである。831はホルンフエルスを素材とするもので，バルブが明瞭で，上縁には自然面を残す。側縁は荒い剝離で整形され，刃部はおもに片側からの剝離が行なわれる。832は打撃面を上面にし，両側面には抉りが認められる。834は片面に自然面を残し刃部は丁寧な剝離を施す。833は縦長剝片の側面を刃部とし，刃部は片側からの剝離である。835は全面に入念な剝離が施される。836は丁寧な剝離が施されるが，基部と思われる部分にも使用によるものと思われる剝離が認められる。837は刃部が円形を呈する。839･834は基部にわずかな抉りを入れたものである。840は縦長剝片を利用したもので側面および先端部に刃部がある。840は小形のもので丁寧な剝離が施されるものである。

石錘・特殊石器

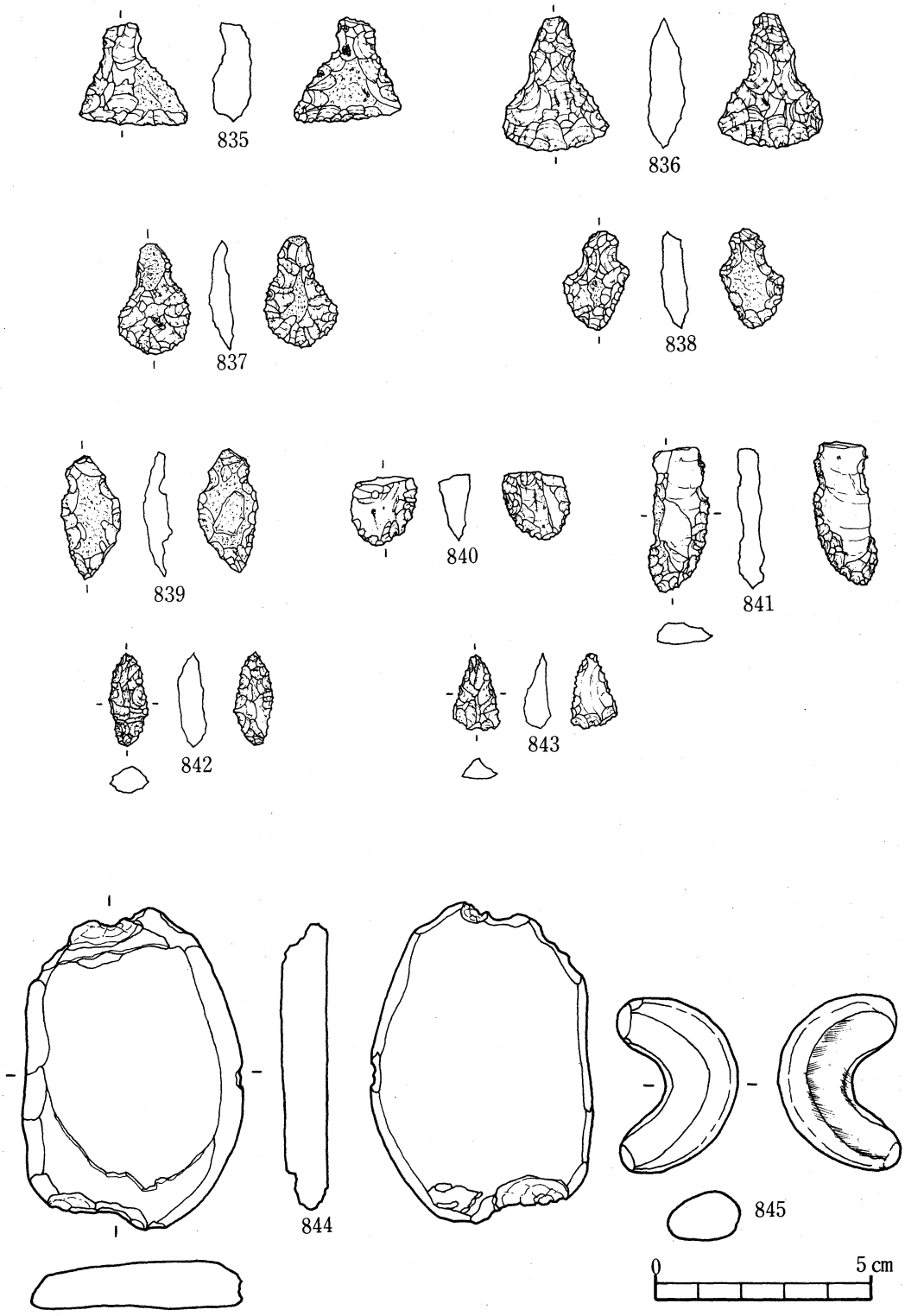
844は楕円形状の扁平な自然石の両端を剝離して抉りを入れたもので唯一出土の石錘である。842は全面に入念な剝離が施される。基部・先端部共に尖る細身のものである。843は姫島産の黒曜石を素材とするもので基部は欠損していると思われる。先端部が尖り断面は三角形を呈する。842･843は石鏃としての使用も考えられる。845は表面採集である。半円形状を呈し断面は楕円形である。全面に研磨が行なわれるが用途は不明である。



第64図　出土石器実測図 (5)



第65図　出土石器実測図 (6)



第66図　出土石器実測図 (7)

表12 石 器 計 測 表 (1)

No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅 cm	厚みcm	重量g	材 質	備 考
804	784	ナイフ	B－6	Ⅲ	4.4	1.7	1.1	6.0	安山岩	旧石器？
805	表採	石斧			6.6	2.2	1.1	23.1	頁岩	両端に刃部
806	362	〃	C－6	Ⅲ	6.1	2.7	1.1	24.1	〃	
807	70	〃	F－5	〃	4.2	2.0	1.0	10.0	砂岩	
808	854	〃	C－6	〃	4.3	2.4	0.8	9.8	頁岩	
809	2609	〃	B－6	Ⅲ下	5.6	5.9	1.8	76.3	〃	
810	1290	〃	D－6	Ⅲ	7.4	4.4	2.0	84.0	〃	
811	37	〃	F－5	〃	8.0	4.8	1.3	51.5	〃	
812	1441	〃	B－5	〃	6.3	4.1	1.6	44.4	〃	
813	3020	〃	F－5	〃	7.1	4.8	1.6	93.3	〃	
814	表採	〃			10.6	5.1	2.3	190.8	〃	
815	3229	〃	F－5	Ⅲ	9.7	4.3	1.5	84.0	〃	
816	3739	〃	E－5	Ⅲ下	8.4	4.1	2.1	98.5	〃	
817	1575	〃	C－6	Ⅲ	9.7	3.4	1.6	68.8	〃	
818	1576	〃	C－6	〃	8.5	3.3	1.1	41.3	〃	
819	1577	〃	C－6	〃	7.9	2.6	1.0	37.0	〃	
820	2592	〃	B－6	Ⅲ下	7.6	4.5	2.1	84.0	〃	
821	3098	〃	G－5	Ⅲ	8.7	4.8	2.2	105.7	〃	
822	3854	石匙	C－6	Ⅲ下	10.6	4.8	1.1	57.8	〃	
823	表採	〃			4.6	3.0	0.6	8.7	〃	
824	1911	〃	D－6	Ⅲ	3.2	4.9	0.8	9.7	黒曜石	姫島産
825	2582	〃	B－6	Ⅲ下	3.4	4.1	0.7	7.1	硅岩	
826	3801	〃	F－5	〃	2.2	2.9	0.6	2.7	チャート	
827	1414	スクレイパー	F－5	〃	2.9	3.8	1.0	13.8	ホルンフェルス	
828	3170	〃	D－5	Ⅲ	2.9	4.1	1.0	14.2	チャート	
829		〃	E－5		3.1	4.8	0.8	10.5	ホルンフェルス	
830	1343	〃	D－6	Ⅲ	4.4	2.8	0.9	10.0	硅岩	
831	3819	〃	F－5	Ⅲ下	4.8	9.6	2.3	106.1	ホルンフェルス	
832	3410	〃	E－5	〃	3.3	7.8	1.5	40.2	砂岩	
833	1943	〃	D－6	Ⅲ	2.5	6.0	1.0	13.3	硅岩	
834	1330	〃	D－6	〃	2.4	5.5	0.9	13.6	安山岩	
835	1237	〃	C－6	〃	2.3	2.5	0.9	3.5	硅岩	
836	2808	〃	E－5	〃	3.1	2.5	0.6	5.4	チャート	
837	2337		B－5	〃	2.6	2.7	0.5	1.8	硅岩	
838	1712		G－6	〃	2.3	1.5	0.6	1.6	〃	
839	1992		D－6	〃	2.9	1.4	0.6	1.6	〃	
840	2623		B－6	〃	2.2	0.9	0.6	1.5	〃	
841	2212		B－6	Ⅲ下	3.3	1.3	0.6	2.5	〃	
842	1062	特殊	B－6	Ⅲ	2.7	0.9	0.6	1.0	チャート	
843	1448	〃	B－5	Ⅲ	1.7	1.1	0.6	1.5	黒曜石	姫島産
844	3429	石錘	E－5	Ⅲ下	7.4	4.9	1.1	65.0	砂岩	
845	表採	特殊			4.0	1.8	1.8	12.7	〃	

磨　石（第67図）　846～849が磨石である。楕円形を呈し，扁平である。846は砂岩製である。847・848は花崗岩製のものである。この2点はD－6区で重なった状態で出土（第59図参照）した。側面も丁寧な研磨がみられる。849は破損している。火熱を受けたためか全体が赤化している。砂岩製である。

叩き石（第67・68図）

850～885が叩き石である。楕円形で扁平を呈するもの(850～852)，楕円形で厚い卵形を呈するもの(853～883)，棒状を呈するもの(884・885)に形態から細分できるものである。850～852は側辺部全体に敲打痕がみられるが，852は研磨状に平滑となった部分がある。850・851が砂岩製，852が溶結凝灰岩製である。853～883のうち857・860・861・867・869～872・875・878は側辺の全体に敲打痕がみられる。他は一部に敲打痕がみられるものであるが，853～855・862・868・873・879・880・881・882は長軸の端に，他は側辺部に敲打痕がみられるものである。多くが砂岩製であるが，857・880が安山岩製，864が花崗岩製である。882は火熱を受けたためか赤化している部分がある。884・885は棒状の両端部に敲打痕がみられるものである。884は節理に沿って破損している。両者とも砂岩製である。

砥　石（第68図）

886は砥石と考えられるものである。砂岩製で一部欠損している。研磨のためか中央部で若干凹んでいる。

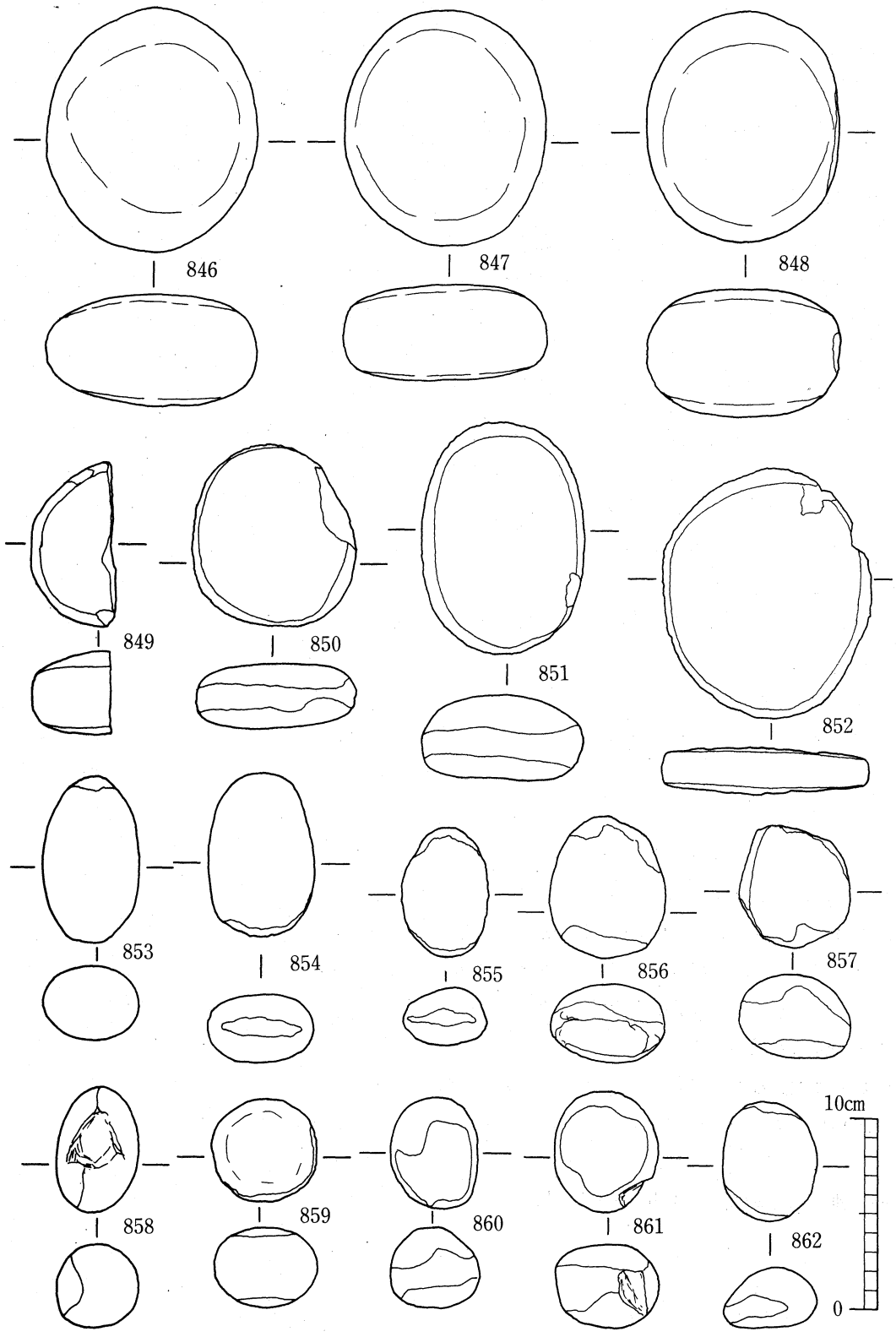
石　鏃（第69～72図）

887～1008が石鏃である。1008は第3トレンチの第V層から出土したもので，他は第III層からの出土である。多くが凹基式で989・990が平基式である。991～995は抉りの浅いものである。1000は未製品と考えられるものである。887～890は細石鏃に近いものである。887は1次剝離面を残す。891～946は側辺が直線状となるもの，947～979は側辺が外湾状となるもの，980～988は側辺が内湾状となるものに大きく分けられる。このうち927～934はやや大形のものである。939～946は長身である。971～976は鍬型鏃である。992～995は三角鏃である。998は五角形に近いものである。999は先端部が膨らむ特殊な形を呈する。石材はホルンフェルス化した砂岩，チャート，黒曜石であるが，黒曜石のうち大分県姫島観音崎産の黒曜石[註]も含まれている。

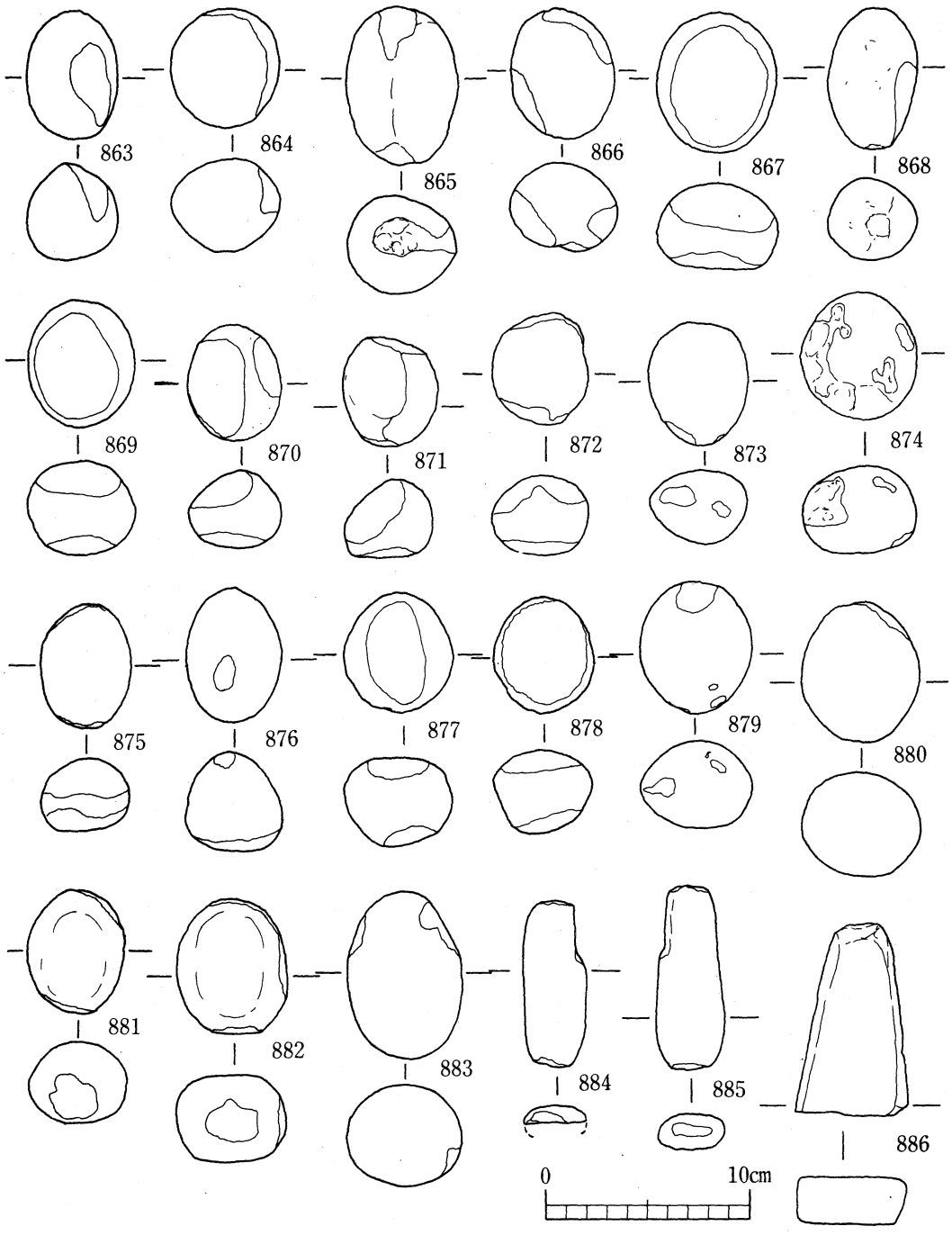
その他の石器（第73図）

1009は軟質な石材で加工されたものである。形態上は石匙に似るも抉りがやや深いものである。1010はチャート製のものであり，円基鏃の可能性をもつものである。

註　別府大学教授　　賀川光夫氏御教示



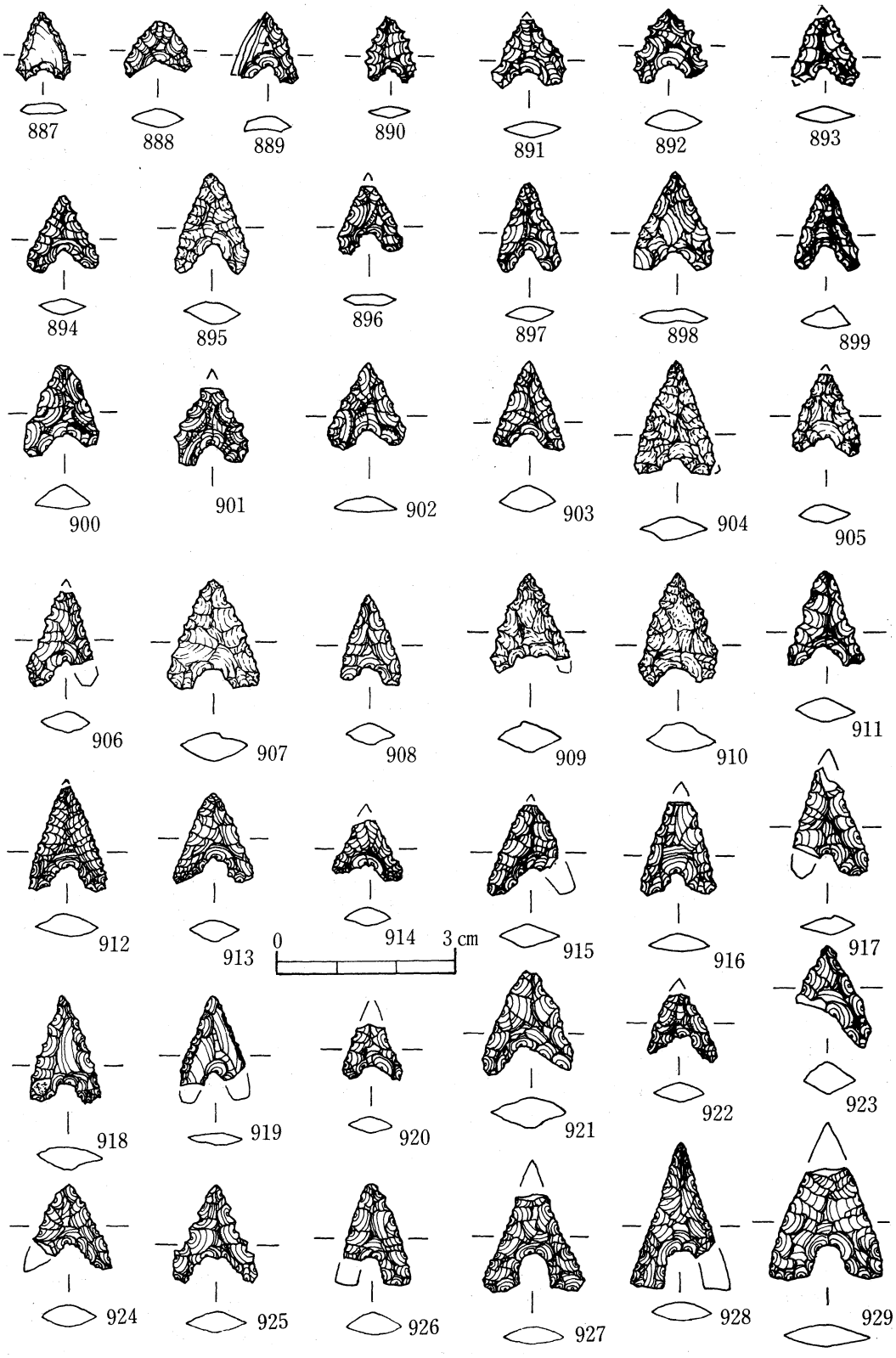
第67図　出土石器実測図 (8)



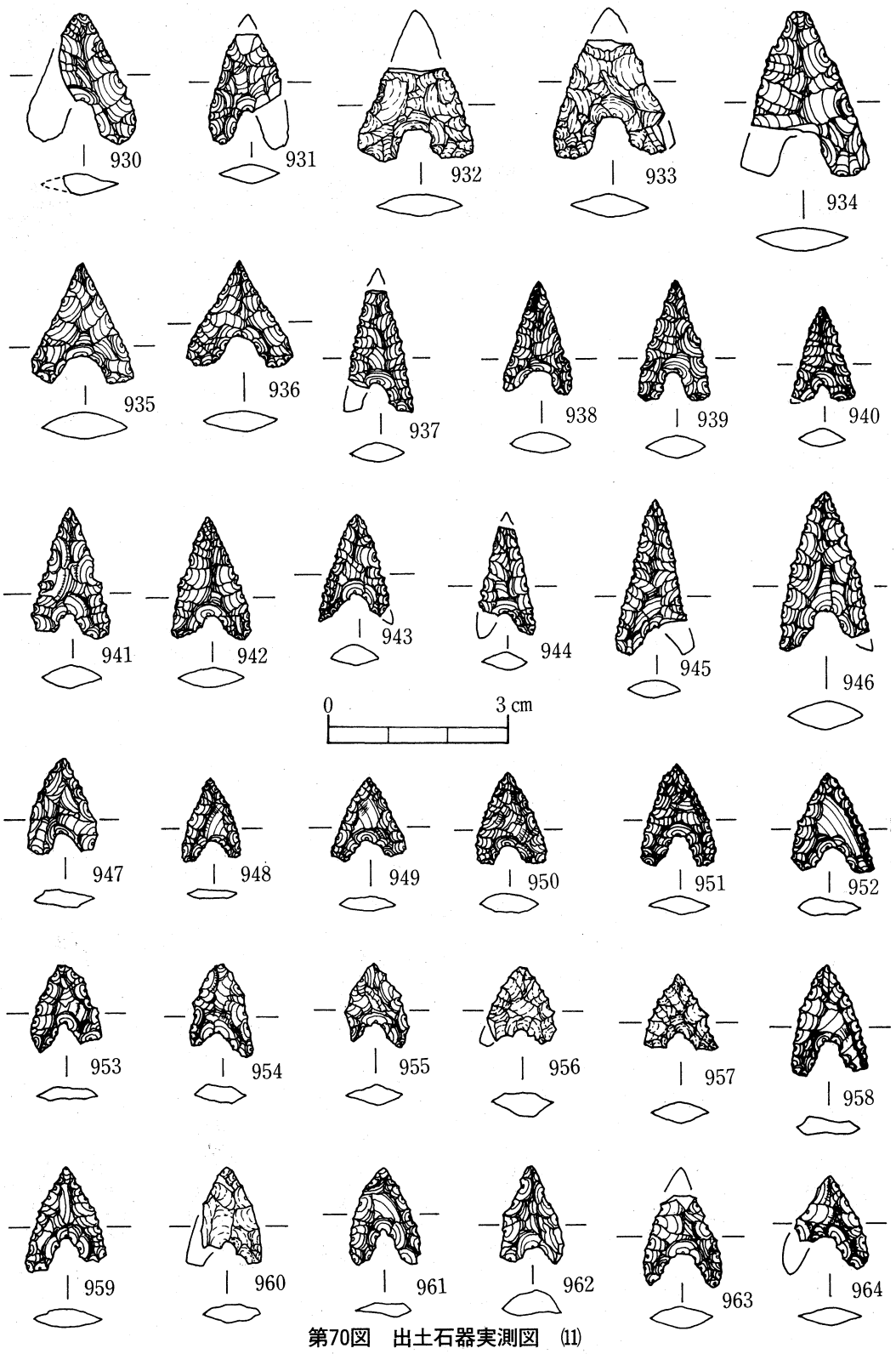
第68図　出土石器実測図 (9)

表13 石 器 計 測 表 (2)

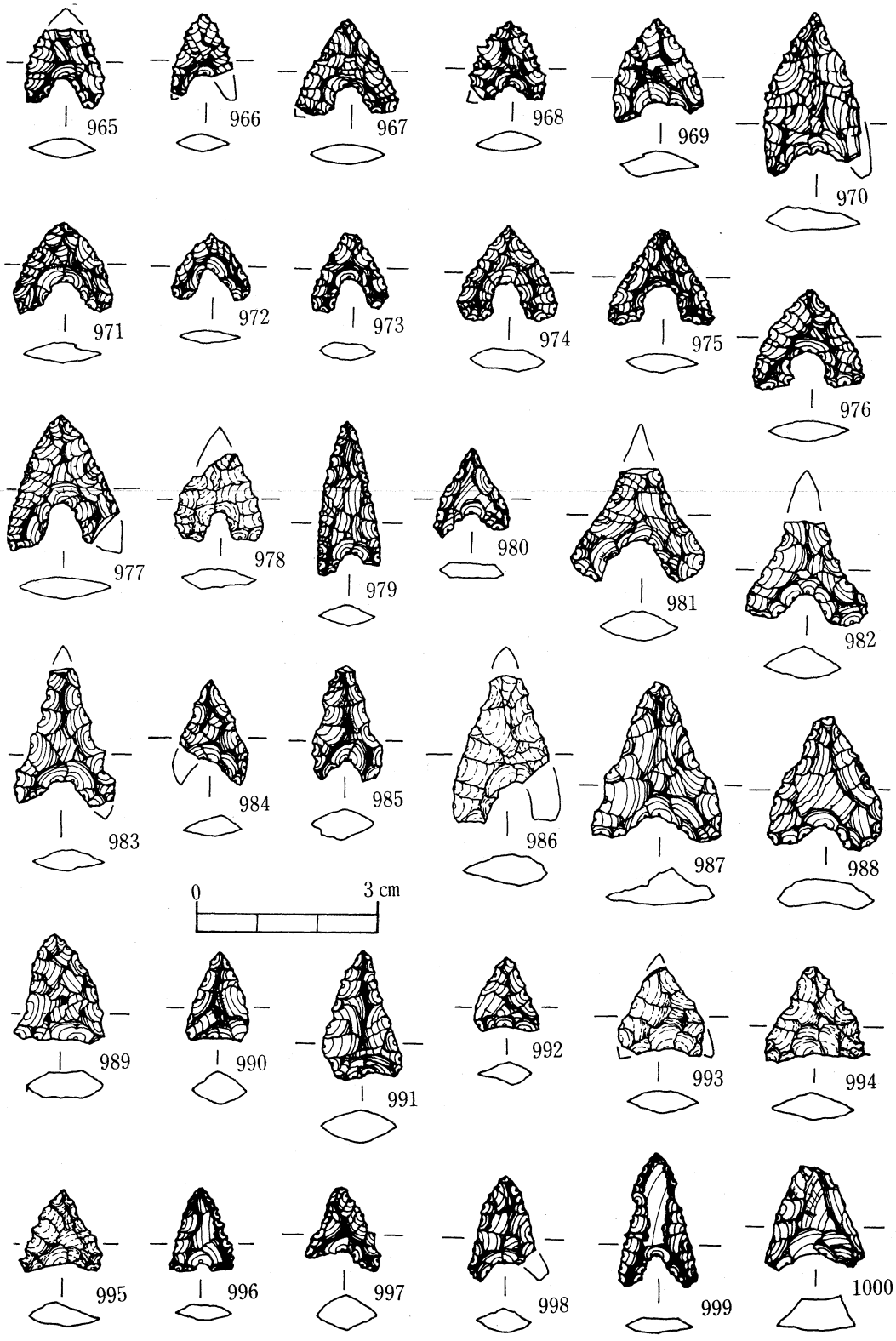
No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅 m	厚みcm	重量g	材 質	備 考
846	2699	磨石	D－6	Ⅲ下	12.4	10.6	5.0	1,181.0	砂岩	
847	1933	〃	〃	Ⅲ	12.8	11.1	5.9	1,046.0	花崗岩	
848	2701	〃	〃	Ⅲ下	12.1	10.2	6.7	1,280.0	〃	
849		〃	採		8.7	(4.1)	4.4	223.5	砂岩	赤化
850	3821	叩石	D－5	Ⅲ下	9.5	8.4	3.4	350.0	〃	
851	2223		B－6	Ⅲ	12.2	8.4	4.4	677.5	〃	
852	1838 1839〉		E－5	〃	13.1	10.9	2.4	369.0	溶結凝灰岩	
853			採		8.7	5.1	3.9	248.0	砂岩	
854	3743		E－5	Ⅲ下	8.6	5.6	3.5	241.0	〃	
855	1589		C－6	Ⅲ	6.8	4.4	3.1	121.5	〃	
856	3138		D－5	〃	7.5	5.9	4.2	224.5	〃	
857	1622		F－5	〃	6.5	5.8	4.4	217.5	安山岩	
858	2663		C－6	Ⅲ下	6.7	4.3	4.4	156.5	砂岩	
859			採		5.4	5.4	4.2	153.0	〃	
860			〃		5.9	4.7	4.3	143.5	〃	
861	3250		F－5	Ⅲ	6.4	5.3	4.5	202.5	〃	
862	3825		D－5	Ⅲ下	6.3	5.0	3.2	134.5	砂岩	
863	1746		F－5	Ⅲ	6.4	4.5	4.8	189.5	〃	
864	1955		D－6	〃	5.9	5.4	4.6	179.0	花崗岩	
865	2510		F－6	〃	7.8	5.5	4.9	251.5	砂岩	
866	3872		C－5	Ⅲ下	6.4	5.3	4.4	191.5	〃	
867	3497		F－5	〃	6.9	5.9	4.3	246.5	〃	
868	2841		〃	Ⅲ	7.0	4.4	4.0	164.5	〃	
869	3006		〃	〃	6.3	5.4	4.6	201.0	〃	
870	2982		〃	〃	5.8	4.6	3.8	126.0	〃	
871			採		5.4	4.4	4.3	136.0	〃	
872	3727		E－5	Ⅲ下	5.5	4.7	3.9	120.5	〃	
873	3521		F－5	〃	6.1	4.8	3.6	144.5	〃	
874	3130		D－5	Ⅲ	6.3	5.6	4.4	197.0	〃	
875	2261		B－6	〃	6.1	4.4	3.6	127.0	〃	
876	2941		F－5	〃	6.6	4.7	4.9	184.5	〃	
877	2297		B－6	〃	5.9	5.4	3.4	185.0	〃	
878					5.7	4.1	4.5	137.5	〃	
879					6.5	5.5	4.3	186.5	〃	
880					7.0	5.8	5.1	251.0	安山岩	
881					6.1	4.9	4.0	136.5	砂岩	
882			D－5		6.7	5.4	4.3	227.5	〃	赤化
883					8.2	5.7	5.0	305.0	〃	
884	3400		E－5	Ⅲ下	8.2	3.1	(0.8)	34.0	〃	半製
885	1866		E－6	Ⅲ	9.1	3.4	1.8	74.0	〃	
886		砥石			(9.4)	(5.5)	(2.3)	187.5	〃	折(破損)



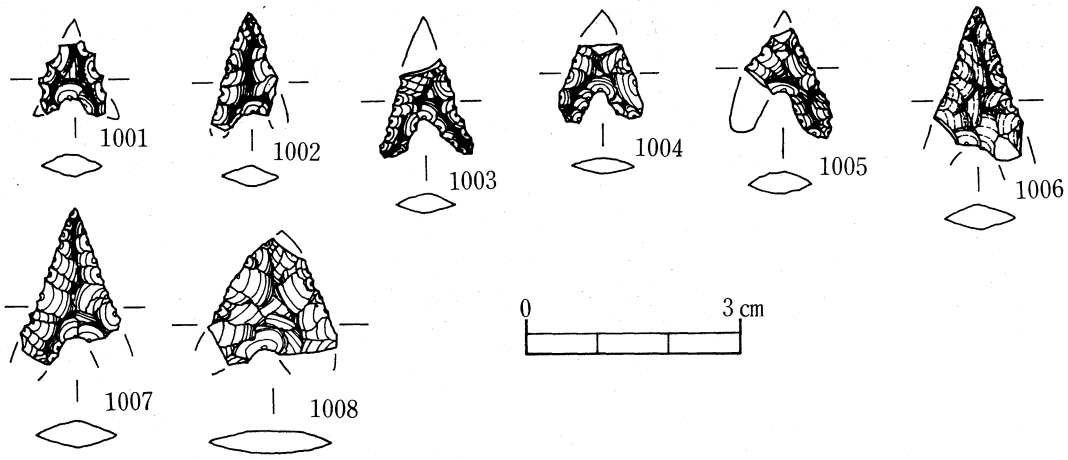
第69図　出土石器実測図 (10)



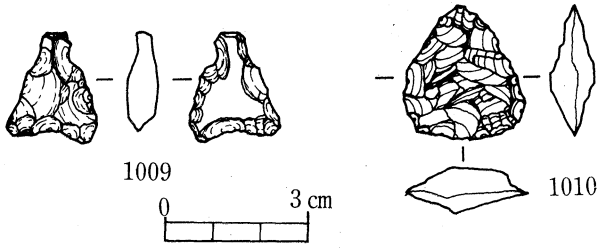
第70図　出土石器実測図 (11)



第71図　出土石器実測図 (12)



第72図　出土石器実測図 ⑬



第73図　出土石器実測図 ⑭

表14　石　鏃　計　測　表

No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅　cm	厚みcm	重量g	材　　質	備　考
887	2276	石鏃	B－6	Ⅲ	1.1	0.9	0.2	0.15	砂岩	
888	1722	〃	G－5	〃	0.95	1.1	0.31	0.25	チャート	
889	2314	〃	B－6	〃	(1.2)	(1.0)	0.29	(0.25)	黒曜石	
890	2668	〃	C－6	Ⅲ下	1.1	0.83	0.23	0.2	〃	
891	2187	〃	〃	Ⅲ	(1.15)	1.22	0.38	(0.25)	〃	
892	1071	〃	B－6	〃	1.2	1.23	0.35	0.3	〃　(姫島)	
893	3573	〃	C－6	Ⅲ下	(1.2)	1.1	0.31	(0.25)	〃	
894	3262	〃	F－5	Ⅲ	1.26	1.15	0.28	0.2	〃	
895	2624	〃	B－6	Ⅲ下	1.65	1.2	0.37	0.5	砂岩	
896	1569	〃	C－6	Ⅲ	(1.15)	1.07	0.17	(0.2)	黒曜石	
897		〃	表採		1.45	1.05	0.25	0.2	〃	
898	3168	〃	D－5	Ⅲ	1.6	1.32	0.24	0.4	チャート	
899	389	〃	C－6	〃	1.41	1.05	0.4	0.25	黒曜石	
900	882	〃	〃	〃	1.53	1.27	0.44	0.55	〃	
901	909	〃	〃	〃	(1.3)	1.25	0.26	(0.25)	〃	
902	1826	〃	E－5	〃	1.42	1.3	0.27	0.25	〃	
903	2702	〃	D－6	Ⅲ下	1.45	1.15	0.44	0.45	チャート	

No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅 cm	厚みcm	重量g	材　質	備　考
904	352	石鏃	C－6	Ⅲ	1.9	1.3	0.4	0.6	?	
905	1766	〃	F－5	〃	(1.35)	1.1	0.31	(0.3)	ホルンフェルス化した砂岩	
906	2484	〃	〃	〃	1.57	(1.1)	0.27	(0.4)	黒曜石	
907	3656	〃	〃	Ⅲ下	1.78	1.5	0.5	1.05	ホルンフェルス化した砂岩	
908	1561	〃	C－6	Ⅲ	1.5	1.0	0.36	0.3	チャート	
909	3515	〃	F－5	Ⅲ下	1.7	1.35	0.5	0.5	ホルンフェルス化した砂岩	
910	775	〃	B－6	Ⅲ	1.9	1.35	0.5	0.8	砂岩	
911	2070	〃	D－5	〃	1.55	1.25	0.4	0.5	チャート	
912	990	〃	B－6	〃	1.75	1.25	0.36	0.5	〃	
913	3873	〃	C－5	Ⅲ下	1.5	1.3	0.38	0.4	砂岩	
914	2811	〃	E－5	Ⅲ	(1.05)	1.15	0.31	(0.2)	黒曜石	
915	2784	〃	〃	〃	1.5	(1.2)	0.4	(0.4)	〃 (姫島)	
916	467	〃	C－5	〃	(1.55)	1.25	0.3	(0.45)	チャート	
917	3559	〃	C－6	Ⅲ下	1.8	1.25	0.31	0.45	黒曜石(姫島)	
918	3113	〃	D－5	Ⅲ	1.83	1.2	0.285	0.5	チャート	
919	3011	〃	F－5	〃	(1.5)	1.1	0.18	(0.25)	〃	
920	1837	〃	E－5	〃	(0.9)	1.0	0.3	(0.15)	黒曜石	
921	3635	〃	F－5	Ⅲ下	1.75	1.52	0.56	0.75	チャート	
922	2080	〃	D－5	Ⅲ	(1.13)	1.13	0.32	(0.25)	黒曜石	
923	2596	〃	B－6	Ⅲ下	(1.7)	(1.22)	0.57	(0.5)	〃	
924	2755	〃	E－5	Ⅲ	(1.4)	(1.3)	0.38	(0.35)	〃 (姫島)	
925	2852	〃	F－5	〃	1.6	1.4	0.39	0.4	〃	
926	3282	〃	〃	〃	1.67	(1.1)	(0.31)	(0.4)	〃 (姫島)	
927	2691	〃	D－6	Ⅲ下	(1.6)	1.9	0.3	(0.55)	チャート	
928	2680	〃	C－6	〃	2.42	(1.4)	0.34	(0.6)	〃	
929	2196	〃	〃	Ⅲ	(1.87)	1.85	0.4	(1.15)	〃	
930	2097	〃	C－5	〃	(2.17)	(1.3)	0.33	(0.65)	〃	
931	2950	〃	F－5	〃	(1.82)	(1.2)	0.32	(0.55)	黒曜石(姫島)	
932	328	〃	C－6	〃	(1.55)	1.9	0.38	(1.0)	ホルンフェルス化した砂岩	
933	2648	〃	〃	Ⅲ下	(2.0)	1.85	0.4	(1.2)	砂岩	
934	577	〃	D－6	Ⅲ	(2.75)	(1.9)	0.29	(1.45)	チャート	
935	3551	〃	C－6	Ⅲ下	2.05	1.65	0.49	0.9	〃	
936	2651	〃	〃	〃	1.75	1.8	0.36	0.7	〃	
937		〃	F－5	〃	(2.0)	(1.05)	0.34	(0.5)	黒曜石(姫島)	
938	3367	〃	E－5	〃	1.9	1.1	0.36	0.5	チャート	
939	3848	〃	C－6	〃	2.0	1.15	0.4	0.55	〃	
940	3468	〃	F－5	〃	1.55	1.02	0.32	0.3	黒曜石(姫島)	
941	3384	〃	E－5	〃	2.15	1.3	0.38	(0.6)	〃 〃	
942	3705	〃	E－6	〃	2.05	1.35	0.33	0.55	〃	
943	3261	〃	F－5	Ⅲ	1.8	(1.15)	0.37	(0.5)	〃	
944	3862	〃	C－6	Ⅲ下	(1.8)	(0.95)	0.32	(0.35)	〃	

No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅 cm	厚みcm	重量g	材 質	備 考
945	3465	石鏃	F－5	Ⅲ下	2.55	(1.67)	0.28	(0.55)	黒曜石(姫島)	
946	3876	〃	C－5	〃	2.7	(1.45)	0.42	(1.0)	〃	
947	2311	〃	B－6	Ⅲ	1.6	1.15	0.28	0.4	チャート	
948	3764	〃	E－5	Ⅲ下	1.35	0.95	0.16	0.2	黒曜石	
949	2023	〃	D－5	Ⅲ	1.35	1.23	0.24	0.25	〃	
950	3178	〃	〃	〃	1.5	1.18	0.31	0.3	〃	
951	2634	〃	C－6	Ⅲ下	1.7	1.25	0.32	0.5	チャート	
952	3574	〃	B－6	〃	1.65	1.3	0.31	0.45	ホルンフェルス化した砂岩	
953	2597	〃	〃	〃	1.42	1.2	0.21	0.25	黒曜石	
954	1205	〃	C－6	Ⅲ	1.5	1.05	0.31	0.3	〃	
955	2838	〃	F－5	〃	1.4	1.06	0.35	0.3	〃	
956	1223	〃	C－6	〃	1.25	1.1	0.4	0.3	ホルンフェルス化した砂岩	
957	2567	〃	B－6	Ⅲ下	1.26	1.2	0.37	0.25	砂岩	
958	13	〃	F－6	Ⅲ	1.84	1.25	0.28	0.5	黒曜石	
959	3751	〃	E－5	Ⅲ下	1.7	1.35	0.31	0.5	チャート	
960	3882	〃	〃	〃	1.6	1.0	0.3	0.4	砂岩	
961	3140	〃	D－5	Ⅲ	1.6	1.2	0.22	(0.4)	黒曜石	
962	1570	〃	C－6	〃	1.6	1.05	0.43	0.55	〃	
963		〃	表採		(1.53)	1.3	0.37	(0.5)	チャート	
964	1210	〃	C－6	Ⅲ	1.55	1.2	0.28	(0.25)	黒曜石(姫島)	
965	1209	〃	〃	〃	1.35	1.35	0.34	(0.45)	チャート	
966	3869	〃	C－5	Ⅲ下	(1.35)	(1.5)	0.32	0.25	黒曜石	
967		〃	1号住床	〃	1.6	1.7	0.34	(0.55)	〃	
968	3042	〃	F－5	Ⅲ	1.3	(1.3)	0.31	(0.3)	〃	
969	3883	〃	E－5	Ⅲ下	1.7	1.45	0.41	0.7	〃 (姫島)	
970		〃	表採		2.72	(1.55)	0.4	(1.45)	〃	
971	1844	〃	E－5	Ⅲ	1.5	1.65	0.33	0.6	チャート	
972		〃	表採		1.05	1.3	0.2	0.2	〃	
973		〃	〃		1.3	1.3	0.28	0.3	〃	
974	3615	〃	B－5	Ⅲ下	1.6	1.61	0.35	0.6	〃	
975	756	〃	B－6	Ⅲ	1.6	1.75	0.32	0.5	〃	
976	1978	〃	D－6	〃	1.65	1.82	0.36	0.8	〃	
977	3855	〃	C－6	Ⅲ下	2.2	(1.9)	0.34	(0.95)	〃	
978	3447	〃	F－5	〃	(1.45)	1.5	0.34	0.3	〃	
979	842	〃	C－6	Ⅲ	2.54	1.03	0.34	0.75	チャート	
980	2637	〃	〃	Ⅲ下	1.48	1.2	0.26	0.4	〃	
981	3842	〃	〃	〃	(1.9)	2.2	0.49	(1.15)	〃	
982	1285	〃	B－6	Ⅲ	(1.7)	2.0	0.56	(1.2)	〃	
983	1472	〃	〃	〃	(2.3)	1.7	0.37	(0.9)	黒曜石(姫島)	
984	3823	〃	D－5	Ⅲ下	(1.72)	(1.12)	0.38	(0.45)	チャート	
985	2758	〃	E－5	Ⅲ	1.9	1.16	0.53	0.7	黒曜石(姫島)	

No	遺物No	器種	区	層	長さcm	幅 cm	厚みcm	重量g	材　質	備　考
986	1176	石鏃	C－6	Ⅲ下	(2.45)	(1.55)	0.5	(1.25)	砂岩？	
987	2572	〃	D－6	〃	2.65	2.12	0.61	1.9	チャート	
988	866	〃	C－6	Ⅲ	2.2	1.85	0.53	1.85	〃	
989		〃	表採		1.8	1.4	0.45	1.05	黒曜石	
990	3335	〃	F－6	Ⅲ	1.47	(1.08)	0.54	(0.55)	〃	
991	3228	〃	F－5	〃	2.13	1.32	0.58	1.5	チャート	
992	1066	〃	B－6	〃	1.22	(1.05)	0.39	(0.3)	黒曜石	
993	3605	〃	〃	Ⅲ下	1.5	1.4	0.4	(0.75)	砂岩	
994	2749	〃	E－5	Ⅲ	1.6	1.6	0.45	0.8	〃	
995	1591	〃	C－6	〃	1.4	1.4	0.4	0.6	〃	
996	2069	〃	D－5	〃	1.36	1.1	0.28	0.25	チャート	
997	2864	〃	F－5	〃	1.4	1.22	0.55	0.5	黒曜石	
998	1922	〃	D－6	〃	1.7	(1.1)	0.4	0.5	チャート	
999	3880	〃	B－5	Ⅲ下	2.2	1.3	0.26	0.55	〃	
1000	2161	〃	C－6	Ⅲ	1.7	1.62	0.58	1.25	黒曜石	未製品か
1001	3582	〃	B－6	Ⅲ下	(1.05)	0.92	0.36	(0.25)	〃	
1002	3081	〃	G－5	Ⅲ	(1.67)	(0.95)	0.31	(0.3)	〃	
1003	3600	〃	B－6	Ⅲ下	(1.4)	1.3	0.29	(0.3)	チャート	
1004	2622	〃	〃	〃	(1.1)	1.17	0.24	(0.25)	黒曜石(姫島)	
1005		〃	〃	Ⅲ	(1.5)	(1.2)	0.31	(0.3)	チャート	
1006	3607	〃	〃	Ⅲ下	(1.78)	(1.25)	0.36	(0.75)	ホルンフェルス化した砂岩	
1007	2642	〃	C－6	〃	(2.2)	(1.4)	0.38	(0.75)	チャート	
1008		〃	3T	Ⅲ	(1.8)	(1.75)	0.32	(1.0)	〃	
	3120	石鏃	D－5	Ⅲ	(1.85)	(0.7)	0.29	(0.3)	黒曜石	
	3169	〃	〃	〃	(1.45)	(1.0)	0.46	(0.5)	〃	
	976	〃	C－6	〃	(1.0)	(1.1)	0.26	(0.25)	〃	
	3853	〃	〃	Ⅲ下	(1.5)	(1.2)	0.53	(0.9)	〃	
	357	〃	〃	Ⅲ	1.3	(1.0)	0.28	(0.25)		
	3599	〃	B－6	Ⅲ下	(1.3)	(0.95)	0.29	(0.25)		
	3834	〃	D－6	〃	(1.1)	(1.3)	0.41	(0.5)		
	3572	〃	C－6	〃	(1.33)	(1.0)	(0.29)	(0.3)		
		〃	G－6	Ⅲ	1.55	(1.1)	0.5	(0.7)		
	465	〃	C－5	〃	2.25	(1.3)	(0.5)	(1.05)	ホルンフェルス化した砂岩	
	1421	〃	B－5	〃	2.2	(1.3)	0.34	(0.6)	〃	
	1545	〃	C－6	〃	(1.7)	(1.1)	(0.31)	(0.55)	チャート	
	3568	〃	〃	Ⅲ下	(1.15)	(1.2)	0.37	(0.45)	〃	
	1443	〃	B－5	Ⅲ	(1.5)	(1.05)	(0.42)	(0.5)	〃	
		〃	表採		1.45	(1.05)	0.18	(0.15)	黒曜石	
		〃	〃		1.15	(0.8)	0.29	(0.2)	〃	
		〃	〃		1.3	(0.95)	0.31	(0.3)	砂岩	

No.	遺物No.	器種	区	層	長さcm	幅 cm	厚みcm	重量g	材 質	備 考
		石鏃			2.35	(1.35)	(0.29)	(0.8)	砂岩	
1009		その他			2.33	1.9	0.62	1.1		
1010	3847	その他			2.82	2.5	0.97	5.0	チャート	

第 7 章 ま と め (縄文時代の遺構・遺物について)

1. 遺構について

前谷遺跡で検出された遺構は，第III層において住居跡5基，円形ピット1基，集石1基，第V層においては第1トレンチで集石2基が確認された。第III層上面で検出された歴史時代に属する堀立柱建物跡と弥生時代に属する住居跡はそれぞれの章の小結において若干のまとめを行っているのでこの章では縄文時代の遺構について若干の考察を行いたい。

住居跡について

住居跡の平面形態は，3・4号住居跡の隅丸長方形と2・5・6号住居跡の円形との2つに大きく分けられる。床面積は5号住居跡の2.5m²を除けば，8.2〜9.9m²となっている。

住居跡から出土した遺物についてみると，2号住居跡からはVII a類，VIII b類，VIII c類，VIII類の土器と石斧，叩き石，石匙，石鏃が出土している。3号住居跡からはVII b類の土器と石鏃が出土している。4号住居跡からはVII a類，VII b類，VII c類，VII d類，VII e類の土器と石匙，石鏃が出

	プ ラ ン	出土遺物		
			土 器	石 器
隅丸長方形	3号 4号	3号	VII b類	石鏃
		4号	VII a，VII b，VII c，VII d類	石匙，石鏃
円形	2号 6号 5号	2号	VII a，VII b，VII c類 VIII a，VIII b類 ※VII b 5号と接合(No24)	石斧，叩石，石匙，石鏃
		5号	VII a，VII b，VII c，VII d類，VIII b類 ※VII b 2号と接合(No24)	石斧，叩石，石匙，石鏃
		6号	VII a，VII b，VII c類 VIII a，VIII b類	

第74図 住居跡の形態及出土遺物

土している。5号住居跡からは，VII a 類，VII b 類，VII c 類，VII e 類，VIII類の土器と石斧，叩き石，石匙，石鏃が出土している。6号住居跡からはVII a 類，VII b 類，VII c 類，VIII類の土器が出土し，石器は出土していない。このことから，円形住居跡からはVII類及びVIII類土器が出土しているが，隅丸長方形住居跡からはVII類土器のみでVIII類土器は出土していない。

VIII類の縄文・撚糸文を施す土器は，隅丸長方形のプランの住居跡からの出土はなく，円形プランの住居跡から出土している。VII類は春日町遺跡出土の土器を標式とする「春日式土器」[註1]に抱括されるものである。VIII類は瀬戸内地方の船元式土器との関連を示すものである。

又，5号住居跡は上面における確認の際に埋土が4号住居跡の北隅を一部切った状態であったため，5号住居跡の方が4号住居跡より時間的に若干新しいものと考えられる。2号住居跡出土の土器と5号住居跡出土の土器とが接合したもの（№24）があり，2号住居跡と5号住居跡とは同時に存在していた可能性が強いと考えられる。

隅丸長方形プランの住居跡と円形プランの住居跡とが検出されており，以上のことから両プランの住居跡の間には若干の時間差のあることが認められる。しかし，出土遺物の差はその住居跡のもつ機能差も考える必要があると思われ，機能差による両プランの共存の可能性も考えられる。本遺跡は調査の結果，相当の広がりをもつ集落遺跡であることが判明し，その全体をつかめるまでには至らなかった。

本県における縄文時代の住居跡の検出例は，縄文時代早期の加栗山遺跡[註2]，縄文時代晩期の榎木原遺跡[註3]，水の谷遺跡[註4]，タチバナ遺跡[註5]等があげられるものの調査例は少ない。加栗山遺跡では方形・長方形プランが全てであり，他は円形プランである。各時期における住居跡の表面プランが画一化されて存在していたかどうかも調査例が少ないためはっきりつかめられないままであるが，早期に方形・長方形プランが，晩期に円形プランが普遍化していたならば，本遺跡はその過渡的な現象ととらえられるのではないかと考えられるが，推論の域を脱しえない。今後の調査例の増加に期待したい。

註1　河口貞徳・河野治雄　「鹿児島市春日町遺跡」　鹿児島県考古学会紀要　4号　1974
　　河口貞徳　　「　　〃　　」　鹿児島のおいたち
註2　青崎和憲他　「加栗山遺跡」　鹿児島県教育委員会　1981・3
註3　1985年　鹿児島県教育庁文化課が調査・現在整理中
註4　1984年　鹿屋市教育委員会が調査・現在整理中
註5　白木原和美他　「タチバナ遺跡」　1979

2．土器について

土器はⅠ類～Ⅹ類に分類されるが，Ⅶ類土器が量的には圧倒的に多く，住居跡５基も検出されている。ここでもⅦ類土器を中心にまとめてみたいと思う。

Ⅰ類土器は山形押型文を施すもので縄文時代早期である。Ⅱ類土器は貝殻腹縁による刺突文，条痕文などを施すもので縄文時代早期の石坂式土器と思われる。Ⅲ類土器はくさび状突起を有し，胴部には貝殻腹縁による押引文などを施すもので縄文時代早期の前平式土器と思われる。Ⅳ類土器は口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文，胴部に沈線状の条痕文を施すもので形式は不明である。縄文時代早期のものと思われ，桑ノ丸遺跡出土の桑ノ丸Ⅲ類土器に類似している。[註1] Ⅴ類土器は地文が貝殻条痕でみみずばれ状の突帯を施すもので，縄文時代前期の轟式と思われる。Ⅵ類土器は短沈線文を施すもので，縄文時代前期の曽畑式土器と思われる。Ⅶ類土器は，前谷遺跡において出土量が最も多く，住居跡も検出されているもので春日式土器と思われる。Ⅷ類土器は縄文・撚糸文を施すもので，瀬戸内系の土器と考えられる。Ⅸ類土器は底部が尖るもので，所謂尖底土器である。Ⅹ類土器は口縁部が肥厚し，断面三角形を呈する。口縁部には凹線文・貝殻刺突文などを施すもので縄文時代後期の市来式土器と思われる。以上の様に前谷遺跡に於いては，縄文時代早期から後期までの長い期間にわたって生活が営まれたことが確認された。

前谷遺跡に於いて最も多く出土したⅦ類土器およびⅧ類・Ⅸ類土器についてみると，Ⅶ類土器は，所謂春日式土器と呼ばれる土器で，昭和27～28年にかけて調査が行われた春日町遺跡（鹿児島市春日町５番地）に於いて出土した新形式の土器である。さらに層位的に阿高式・並木式より下層から出土することにより，縄文時代前期の位置付けがなされた。器形は胴部がやや張り頸部はわずかにしまる。口縁部は外開きから内湾してキャリパー状を呈し底部はあげ底になるものが多い。他に底部から直線的に開くバケツ状のものもあると定義づけられている。[註2] 県内で春日式土器の出土した遺跡は現在の所35箇所を数えるが，表面採集や数点の出土のため実態が明らかではなかった。しかし近年行われた野久尾遺跡[註3]・下剝峯遺跡[註4]・成川遺跡[註5]などに於いては相当の春日式土器が出土し問題を投げかけた。成川遺跡に於いては池田湖火山灰（B・P・5500年）より上層に出土し，^{14}C 年代測定に於いても Y・B・P4320±40年の計測値が出ている。[註6] また，野久尾遺跡では春日式土器に類似した土器で縄文・撚糸文を施した土器が出土しその出自が問題にされてきた。[註7] 最近では春日式土器の器形がキャリパー状を呈することや縄文系の土器をよく伴っていることなどから，瀬戸内の縄文時代中期に位置づけられている船元式土器との関連性も考えられてきている。従来，鹿児島県に於いては船元式土器は確認されておらず，船元式土器文化圏には入っていなかった。しかしながら春日式と船元式の類似性や春日式土器にともなって縄文系の土器が出土することなどから，本県に於いても船元式土器が入ってきているのではないかと考えられるようになってきている。その点で今回の前谷遺跡出土のⅧ類土器（縄文・撚糸文）についてみると，硬い繊維による縄文原体を使った縄文・撚糸文を施しており船元式あるいは里木式と酷似しているものである。いずれも内面の整形はヘラ削りでⅦ類土

器とは異なる。縄文と突帯文・縄文と沈線文などの組み合わせが見られ，船元II式・III式・IV式などに対比されるものである。また668は地文に撚糸文，口縁部と胴部に沈線文を施し，頸部はヘラ削りによる無文帯となっている。口縁部は波状である。これは里木II式の特徴をそのまま備えており，移入されたものと考えられる。669・676に見られる渦巻文は里木II式および遠く関東の縄文中期の加曽利E式・勝坂式などとも類似性を持つものである。前谷遺跡に於いては春日式（VII類）土器が瀬戸内の縄文中期（船元式・里木式）の土器と密接な関係にあることがうかがわれる。このような例は，野久尾遺跡・成川遺跡・北手牧遺跡[註8]・下剝峯遺跡などでも見られる。さらに沖永良部島，知名町にある神野貝塚では春日式類似土器とされている土器に縄文，波状沈線文が施されている[註9]。この土器も船元式と密接なものと考えられる。また本年度調査が行われた鹿屋市榎木原遺跡では春日式・縄文土器などが出土して，そのなかには明らかに船元I式と思われる土器がある[註10]。このように近年の調査により船元式土器は早い段階から鹿児島県内に入ってきていることが明らかになってきた。

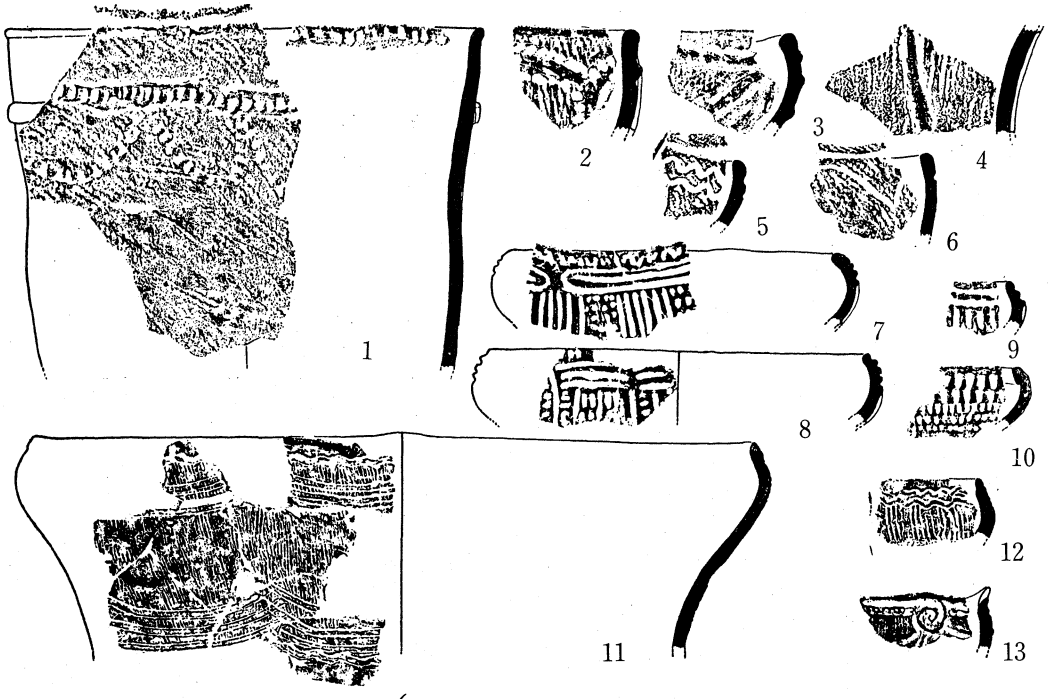
春日式土器の時期について考えてみると，河口氏は，春日町遺跡で阿高式・並木式より下層から出土したこと，北手牧遺跡で深浦式より上層から出土したことなどから縄文時代前期終末に位置づけ，前期の主な流れをなした融合文化は春日式で終わるとしている[註11]。出口氏は，池田湖火山灰より上層に出土していることから，B・P4000年より遡らないとしている。ただし成川遺跡での春日式土器の包含層の^{14}C年代測定値は，Y・B・P4320±40年である。長野は春日式そのものも船元式の範疇でとらえ，阿高式・並木式などともに採集されていることから時間的に下がるものとしている[註12]。出口氏は，池田湖火山灰の年代が，Y・B・P3500～4000年であるということが論拠であるが，現在池田湖火山灰の年代は，Y・B・P5000～5500年と修正されており[註13]，Y・B・P4320±40年という数値が生きてくる。また，長野の言う阿高式・並木式との共伴関係については発掘調査では立証されておらず，春日式を船元式とするには無理があるように感じられる。それにしても，現在までの段階で言えることは池田湖火山灰の上層出土で，約5000年より古くはならないものと思われる。前谷遺跡における^{14}C年代測定でも2号住居跡・Y・B・P4010±90年，包含層の木の実・Y・B・P4100±90年，Y・B・P4040±90年という数値がでていることを考えると，縄文時代前期の位置付けには少々無理があるように思われる。さらに船元式・里木式などとの関連などから考えると縄文時代中期に位置づけられるのが妥当と思われる。ただし，春日式土器には轟式・曽畑式などからの影響が，突帯文・沈線文などにみられ，縄文前期からの流れは続いているものと考えられる。縄文時代中期において深鉢の器形がキャリパー状を呈するという全国的な流れのなかで，前段階の轟式・曽畑式の流れを汲みながら，瀬戸内・東九州から伝わってきた船元式文化と影響しあった形で春日式土器が生まれたのではないだろうか。また，間壁氏は里木貝塚において，船元III式土器E類とされた土器には，地文に縄文がなく沈線文を施したもので，全てを船元III式に含めてよいものか判断されていない。ただ里木II式より新しくなることはなく中期中葉とし，さらに九州縄文中期の沈線文土器との関係があり，九州的土器の影響が及んでいるだろうことを指摘されている[註14]。これらの土器は確

かに春日式土器とよく似かよっており，縄文中期のある時期に相互に影響しあったものと考えられる。春日式土器は縄文時代中期の前半から始まり瀬戸内の船元式文化と影響しあいながら中葉頃まで続いたのではないだろうか。また，Ⅶ類土器の中でⅦｄ類・Ⅶｅ類とした土器について見ると，Ⅶｄ類は，口縁部が外反せず直行あるいは外反するもので無文のものや沈線文を施すものが見られる。Ⅶｅ類は注口状の突起やこぶ状の突起を有するもの，短沈線文を口縁内外に施すものなど特殊なものをまとめたもので，Ⅶ類（春日式土器）のなかにはいるかどうか今後の課題となるものと思われる。特に短沈線を口縁内外に施すものは，曽畑式土器からの影響なのか，ほかからの影響が及んでいるのか問題になるものである。

Ⅶ類土器については，これまで述べてきたように船元式，里木式と思われるが，それぞれの細分についてはまだ行っておらず，今後の課題としておきたい。

Ⅸ類土器は，底部がとがるもので尖底土器である。このような形態の土器は前期の轟式に於いてよく見られるもので，轟式土器との関連で考えなければならないと思われる。しかし前谷遺跡では轟式土器の出土量は少なく，785にしても轟式と断定できるものではなく，今後に残された問題である。

以上，前谷遺跡出土の土器についてⅦ類（春日式土器）を中心に考察を行ったが，筆者の力量不足に加え勉強不足もあり，十分に消化できないままに終わってしまった。今後の資料の増加や研究に期待したいとおもう。



第75図　里木貝塚出土遺物
1・2　船元ⅡA類　　3・4　船元Ⅱ式C類
5・6　船元Ⅲ式D類　　7～10　船元Ⅲ式E類
11～13　里木Ⅱ式

春日式土器地名表

遺跡名	所在地	文様構成	備考
前谷	曽於郡松山町	突帯・沈線・etc	縄文・撚糸文(船元系)・轟式・並木式
野久尾	曽於郡志布志町	沈線	縄文・撚糸文(船元系)・轟式・曽畑式
池野	曽於郡志布志町	突帯・沈線	
柳ノ口	曽於郡財部町	突帯・沈線	曽畑式・表面採集
榎木原	鹿屋市高須町	突帯・沈線	船元Ⅰ式・整理中
大泊貝塚	肝付郡佐多町	突帯・沈線	表面採集・縄文・曽畑式・凹線文・etc
春日町	鹿児島市春日町	突帯・沈線・刺突文	阿高式・並木式の下層より出土
小山	鹿児島郡吉田町	突帯	轟式・深浦式・岩崎式
上焼田	日置郡金峰町	沈刻線・微凸帯	轟式
黒川洞穴	日置郡金峰町	突帯・沈線	曽畑式・阿高式・出水式
堀川	日置郡金峰町	突帯・沈線	並木式・阿高式 etc
塩野堀	日置郡金峰町		
大野南原	日置郡金峰町		
入来	日置郡吹上町	突帯・凹線・連点	並木式・阿高式 etc
北手牧	揖宿郡頴娃町	突帯・沈線・刺突	縄文・曽畑式・轟式・深浦式より上層
成川	揖宿郡山川町	突帯・沈線・刺突	縄文・曽畑式・深浦式・阿高式・並木式
西之園	川辺郡笠沙町	刺突・貝殻平行押圧	轟式
下郡射手園	川辺郡知覧町		
永野	川辺郡知覧町	突帯・沈線・列点	
枕崎高校	枕崎市		
小江平	枕崎市		
南宮島	姶良郡姶良町	突帯・沈線・連点	岩崎上層
石峰	姶良郡溝辺町	突帯・沈線	轟式・曽畑式
柿木原	姶良郡栗野町		轟式・曽畑式
永山	姶良郡吉松町	突帯・沈線・連点	並木式・阿高式・南福寺式
麦之浦	川内市陽成町	突帯	整理中
大畝町園田	薩摩郡宮之城町	突帯	
田間田	薩摩郡鶴田町	沈線	整理中
狸山	出水市		
江内貝塚	出水郡高尾野町		
伊関柳原	西之表市	沈線	縄文
下剝峰	西之表市	突帯	縄文
一湊松山	熊毛郡上屋久町	突帯	撚糸文
面縄第4	大島郡伊仙町	突帯	
神野	大島郡知名町		沈線＋縄文　春日式類似（船元系）

参考文献
註1　新東晃一・青崎和憲他『桑ノ丸遺跡』九州縦貫道関係調査報告Ⅰ鹿児島県教委・1977
註2　河口貞徳・河野治雄『鹿児島市春日町遺跡』鹿児島県考古学会紀要4号・1974
註3　酒匂義明『野久尾遺跡』志布志町教委・1979
註4　新東晃一・立神次郎『赤木・下剝峯・大四郎・内和遺跡』西之表市教委・1978
註5　出口浩・繁昌正幸『成川遺跡』鹿児島県教委・1983
註6　註5と同じ
註7　註3と同じ
註8　河野治雄『北手牧遺跡』頴娃町郷土誌・1975
註9　高宮衛・下地傑・安里和美・大城広江『神野貝塚調査概報』沖国大考古第7号・1985
註10　1985年鹿児島教委文化課が調査，現在整理中
註11　河口貞徳・出口浩他『石峰遺跡』鹿児島県教委・1980
註12　長野真一『大畝町園田遺跡』宮之城町教委・1985
註13　成尾英仁『指宿地方における遺跡の火山噴出物層序』鹿児島考古第17号1983
註14　間壁忠彦・間壁葭子『里木貝塚』倉敷考古館研究集報・第7号・1971

3．石器について

本遺跡から出土した石器の種類は，磨製石斧，磨石，石匙，石鏃，スクレイパー，石錘等である。この他図化できなかったものに石皿の小破片が数点出土している。

磨製石斧は，小形・大形の2種あり，用途の差であろうか。小形のものは3本セットで出土しているものもあった。大形は多くが破損していた。

磨石・叩石もセットで出土したものもあったが，ほとんどが卵形をした小形のものが中心となっている。

石鏃は100本以上が出土しており，他の遺跡にくらべ出土量は多かったが，整理期間等から十分な統計的手法を試みることはできなかったが，小形のものが多く，又基部のえぐりが「U」字形に近いものが多く定形化しているような感じを受けた。

石材には，大分県姫島産の黒曜石や志布志湾沿岸に産する花崗岩等交流の結果得られたと考えられるものがあり，物資の交流の存在していることも今後の研究により解明されることを期待したい。

図　　版

遺　跡　近　景（北から）

調　査　風　景

図版2

遺構検出状況（広角）

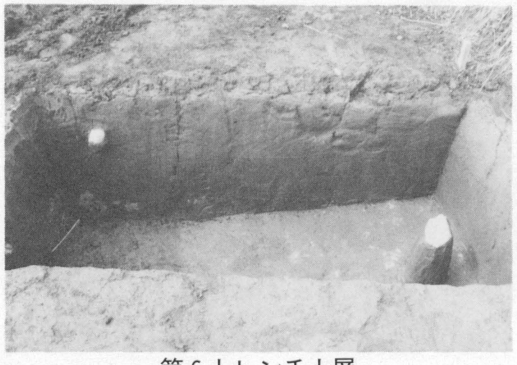
遺構検出状況標準

図版3

第1トレンチ土層

第4トレンチ土層

第5トレンチ土層



第6トレンチ土層

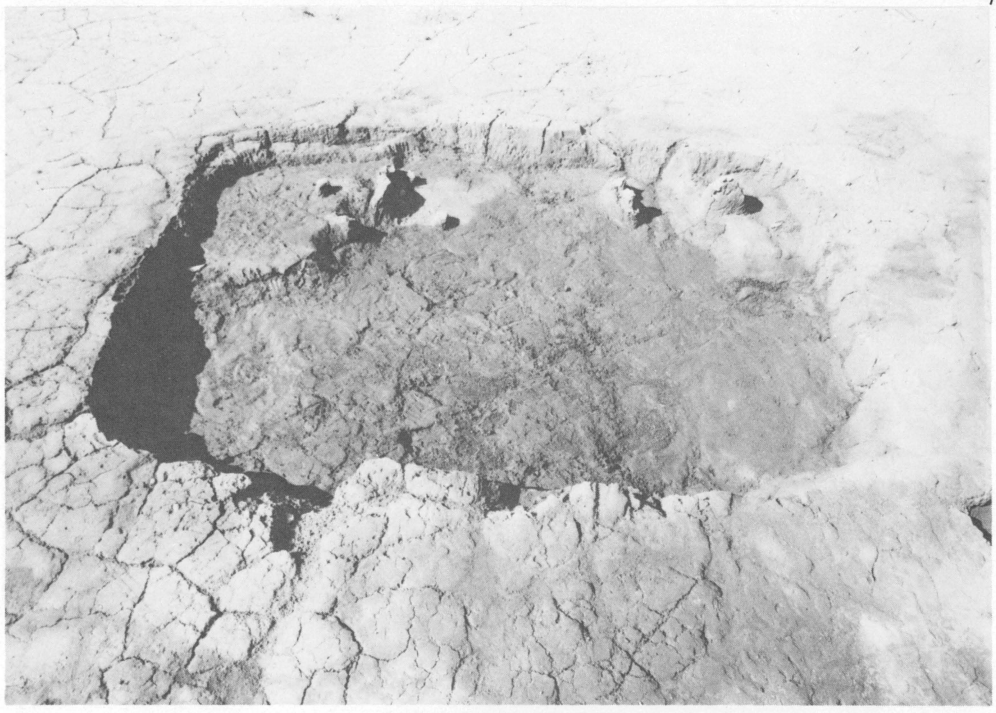
第8トレンチ土層

図版4

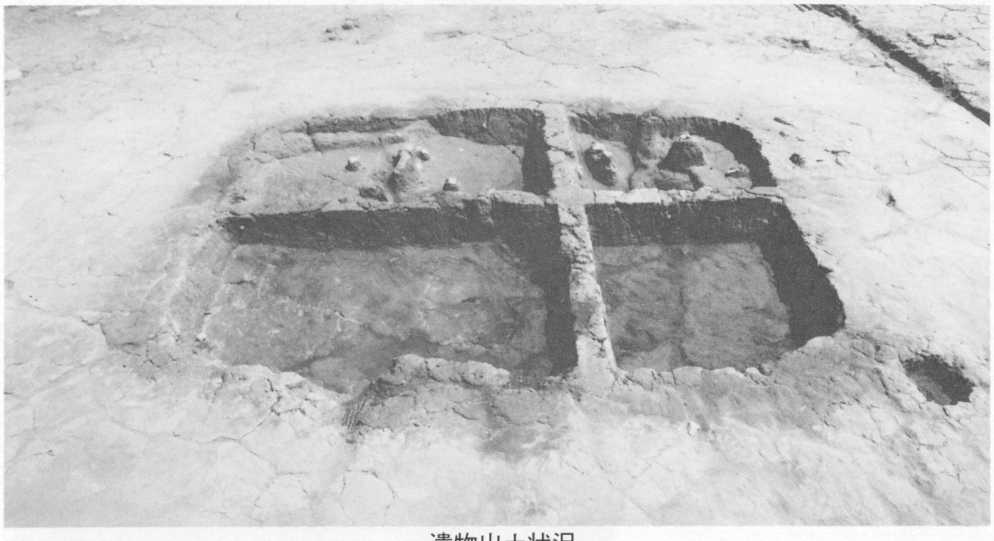
2号住居跡（南から）

遺物出土状況

埋土状況
（西から）

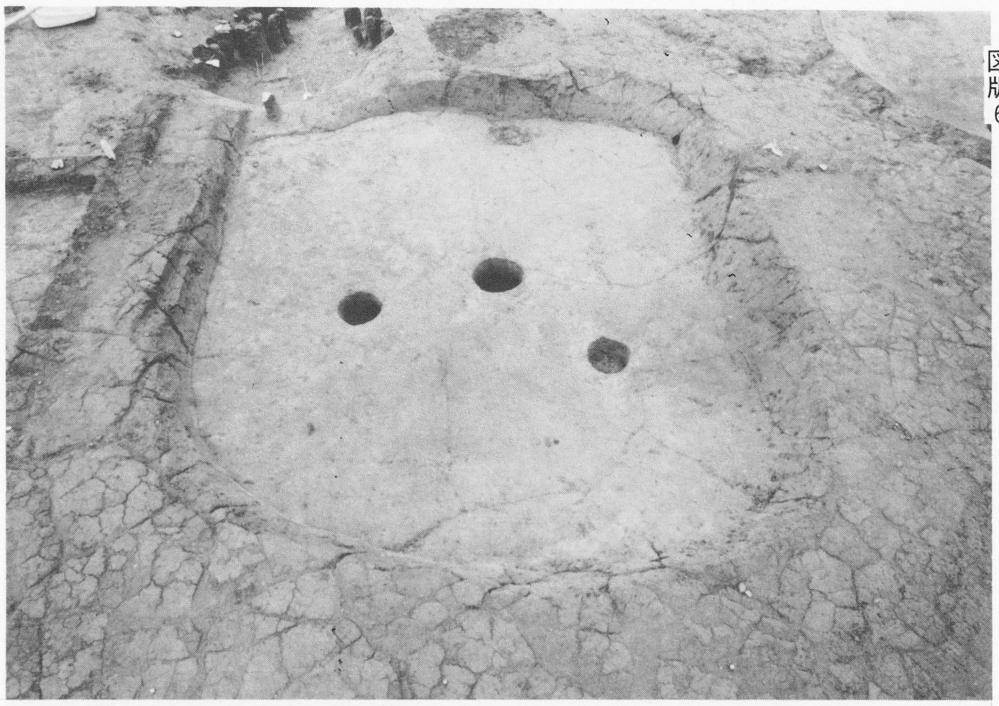


3号住居跡（南から）

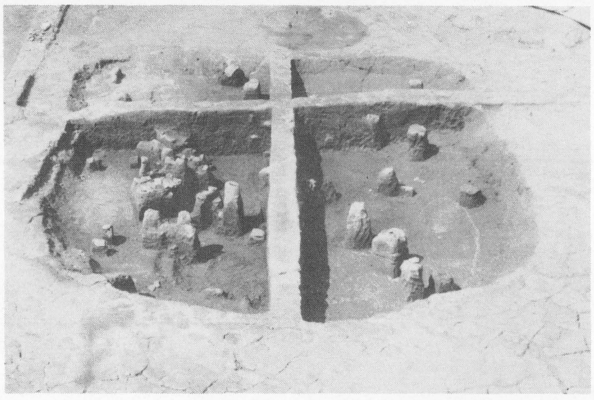


遺物出土状況

図版6

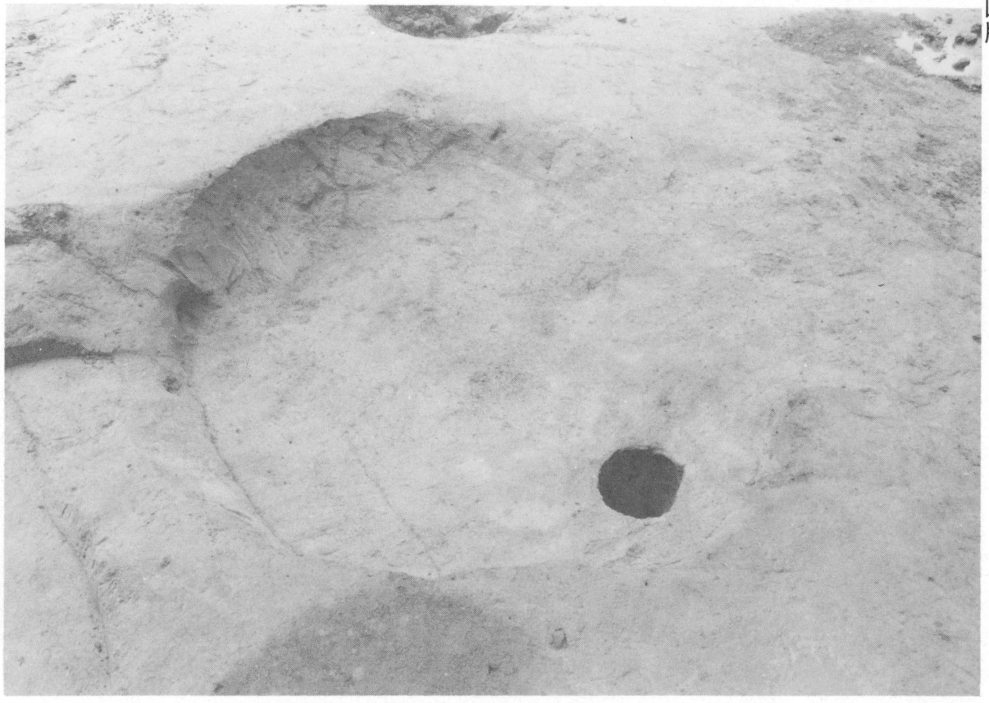


4号住居跡（南から）



遺物出土状況

遺物出土状況
（拡大）



第5号住居跡（東から）

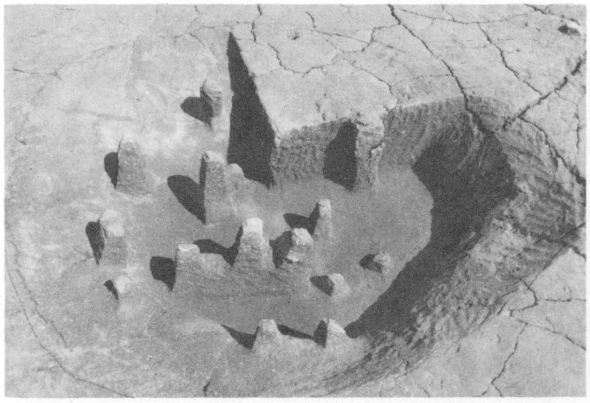
遺物出土状況

6号住居跡（北から）

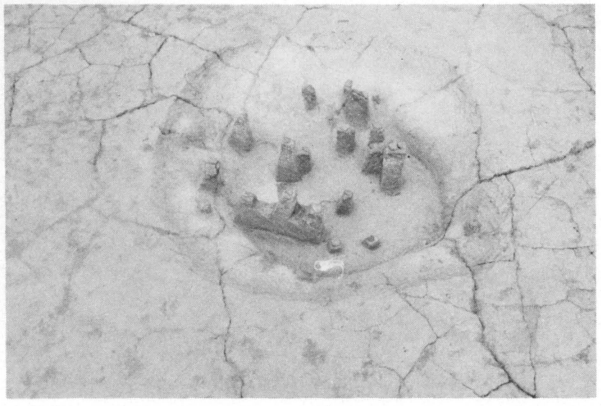
遺物出土状況

図版9

円形ピット（西から）



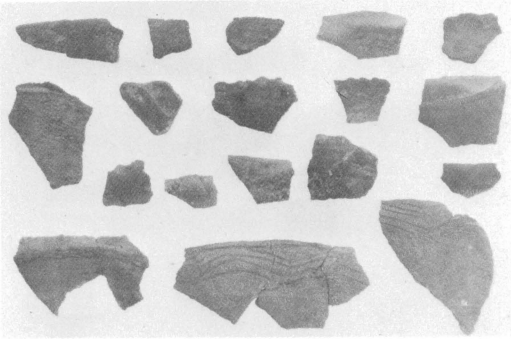
埋土及遺物出土状況



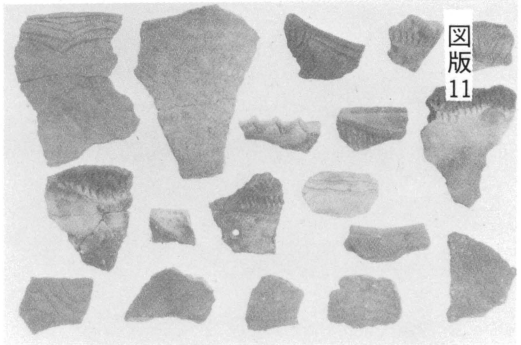
遺物出土状況

集　石(西から)

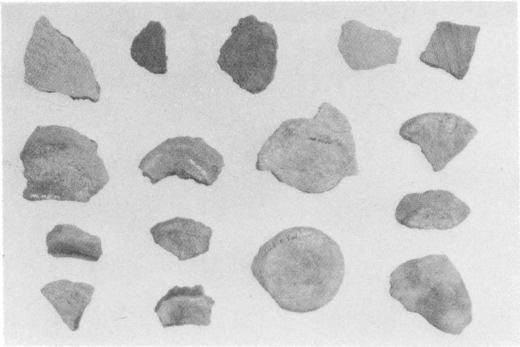
第1トレンチで確認の集石



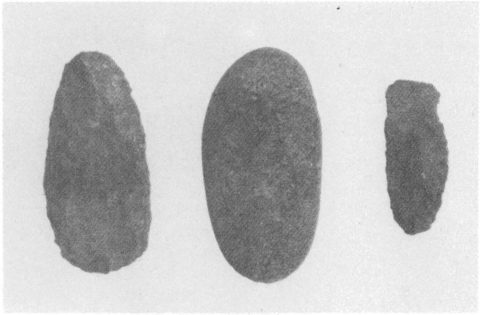
2 号住居跡出土遺物―土器



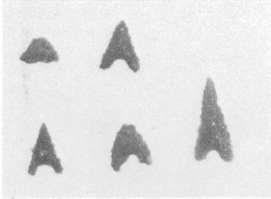
2 号住居跡出土遺物―石器



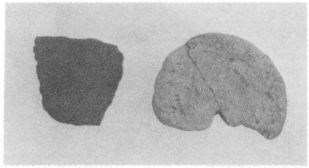
2 号住居跡出土遺物―土器



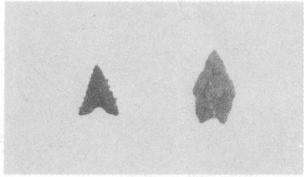
2 号住居跡出土遺物―石器



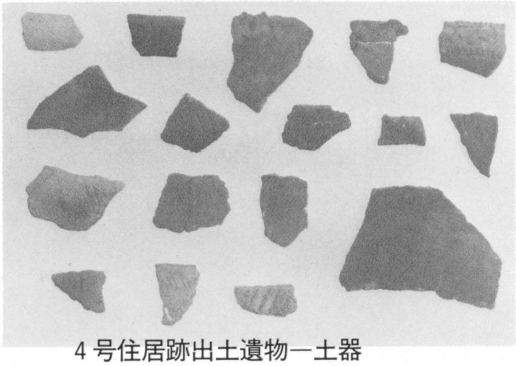
2 号住居跡出土遺物―土器



3 号住居跡出土遺物― 土器

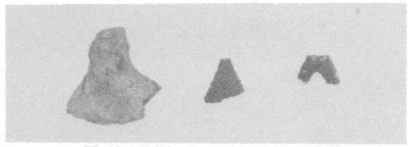


3 号住居跡出土遺物―石器



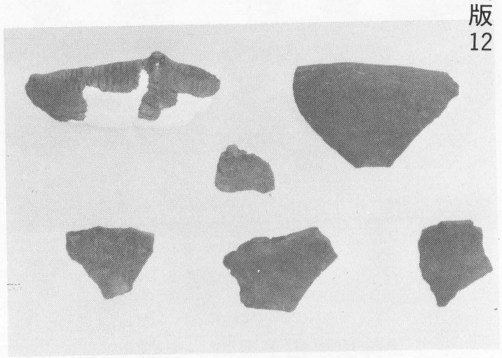
4 号住居跡出土遺物―土器

4 号住居跡出土遺物―土器

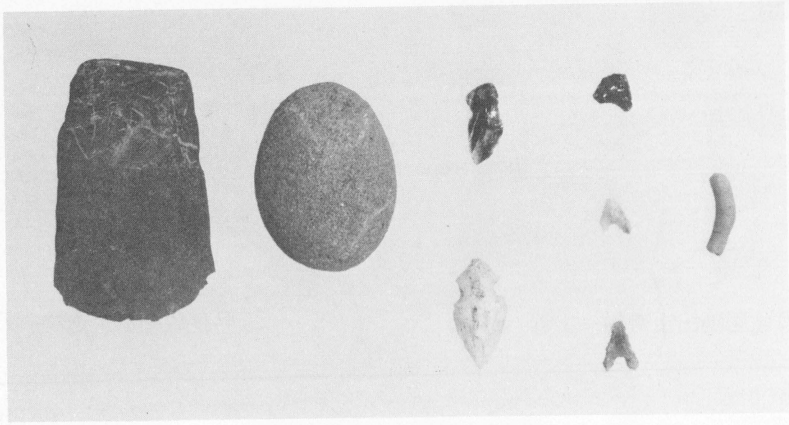


4 号住居跡出土遺物―石器

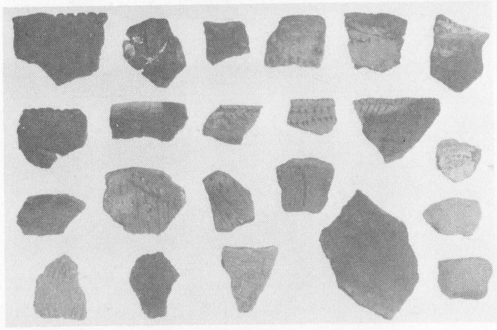
5号住居跡出土遺物―土器



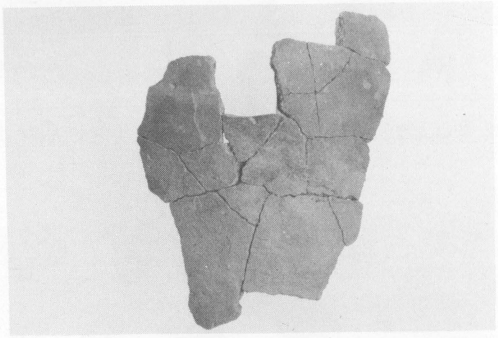
5号住居跡出土遺物―土器



5号住居跡出土遺物―石器



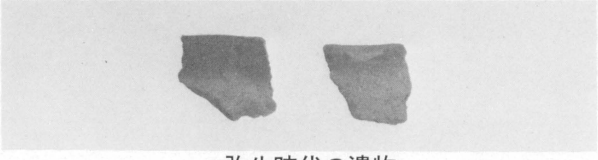
6号住居跡出土遺物―土器



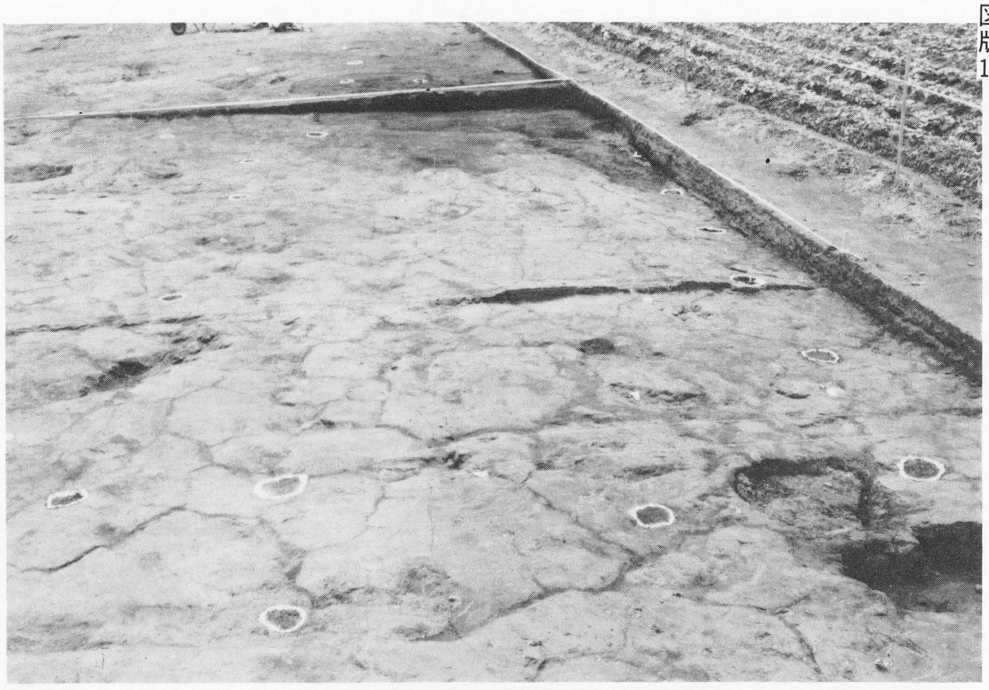
6号住居跡出土遺物―土器

1号住居跡(南から)

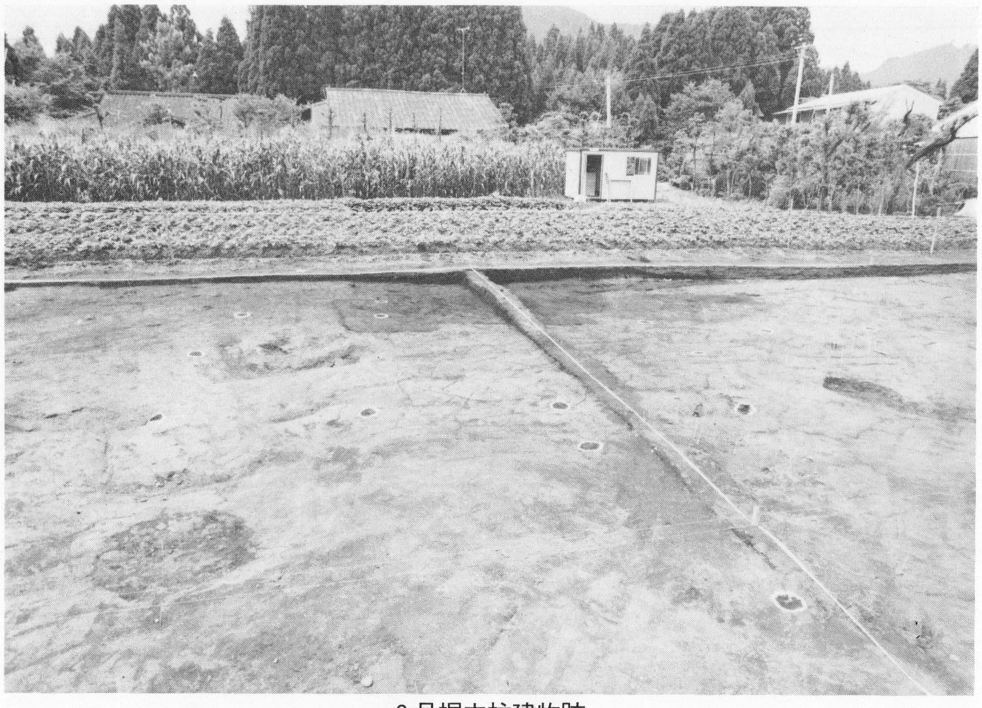
1号住居跡（北から）



弥生時代の遺物



1号掘立柱建物跡

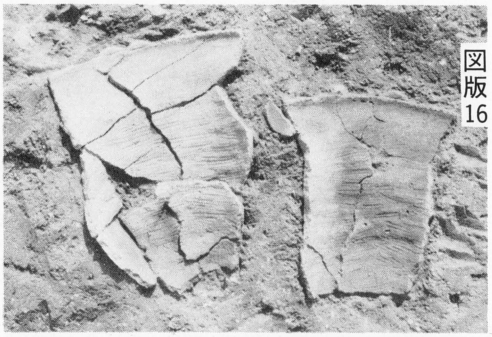


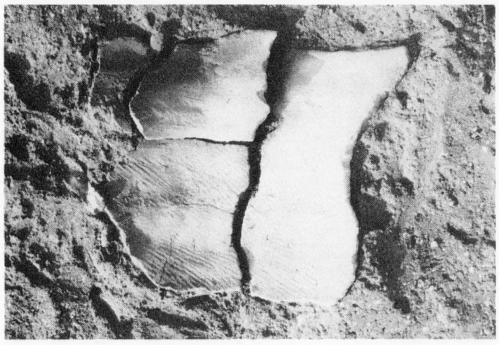
2号掘立柱建物跡

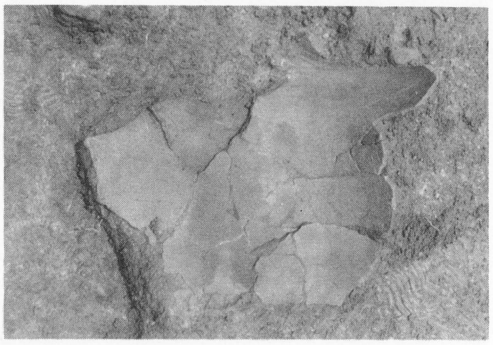
図版15

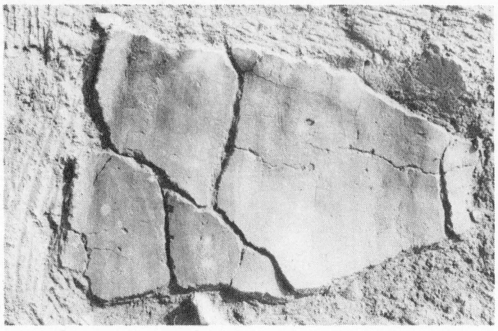
3号掘立柱建物跡

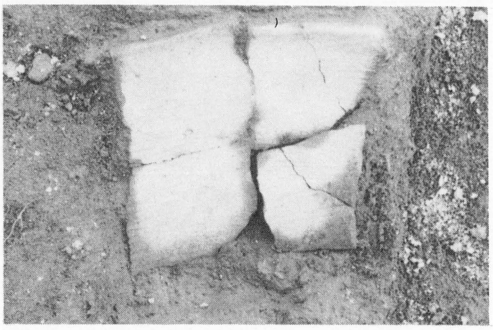
遺物出土状況—土器—

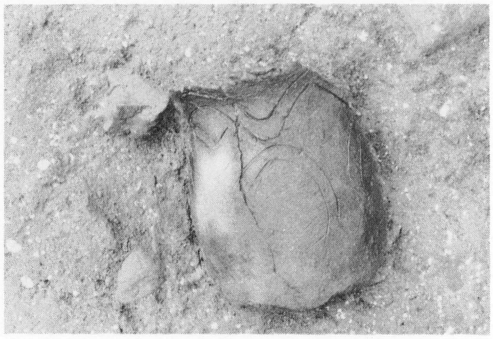




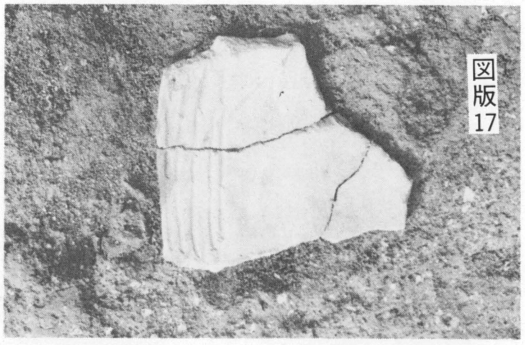




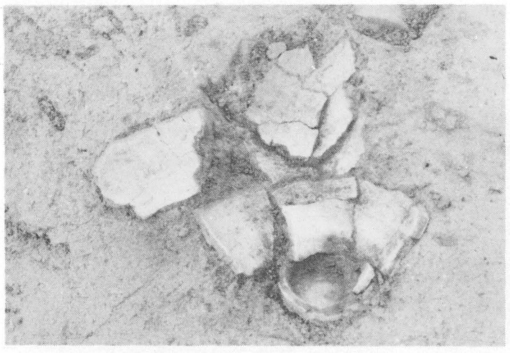


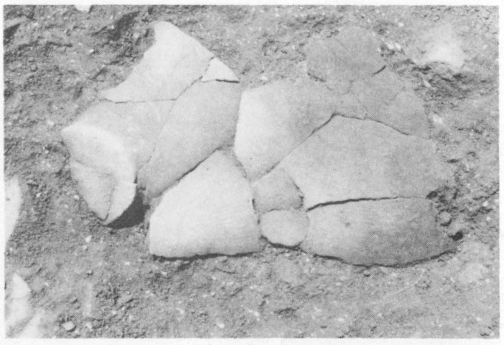


遺物出土状況―土器

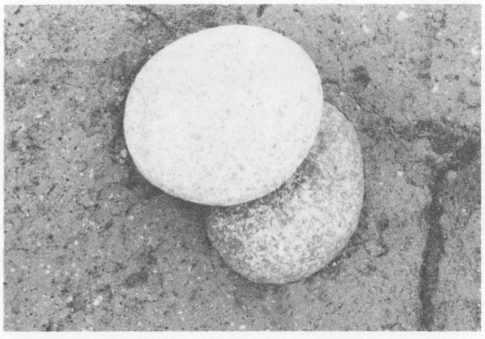


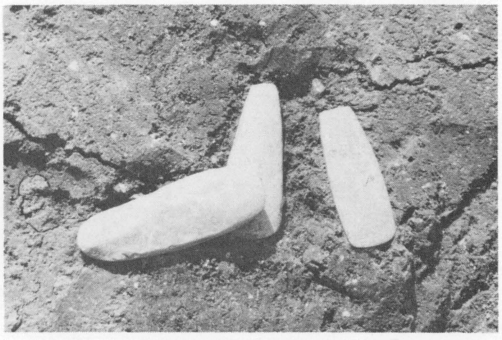
図版17

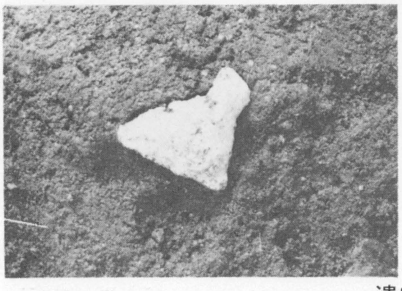




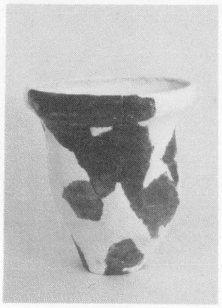
遺物出土状況—土器



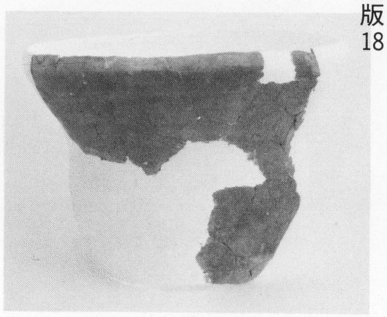




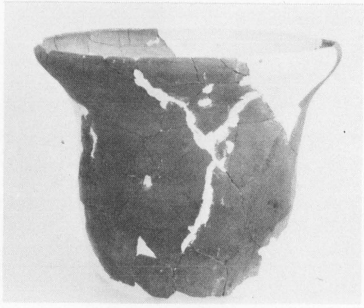
遺物出土状況—石器


161

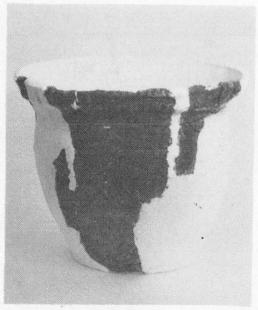
176

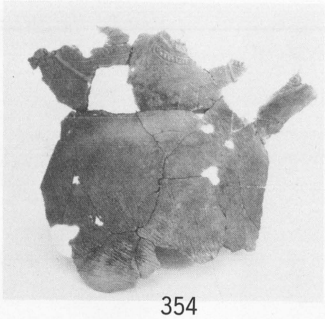

175

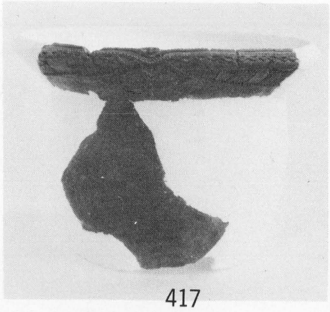
177

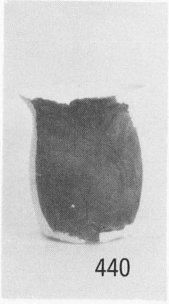

194

301

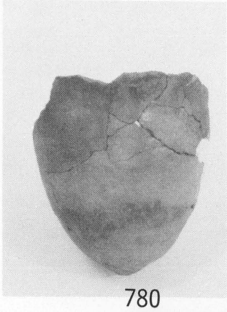

331

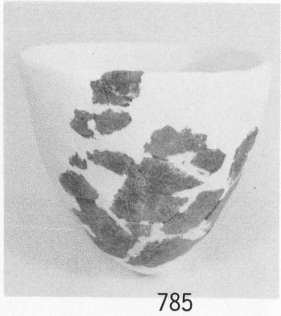

354


417

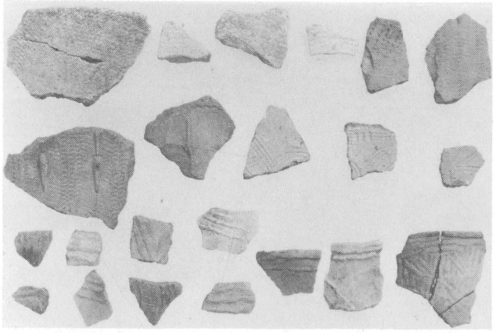

440

668

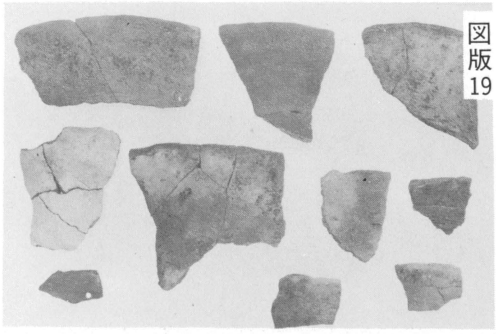

780


785

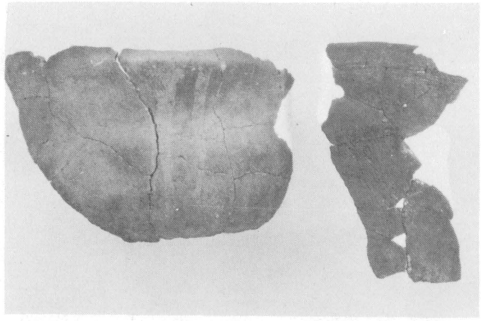
図版19



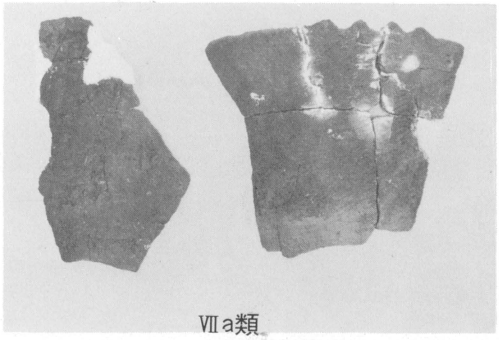
Ⅰ～Ⅵ類



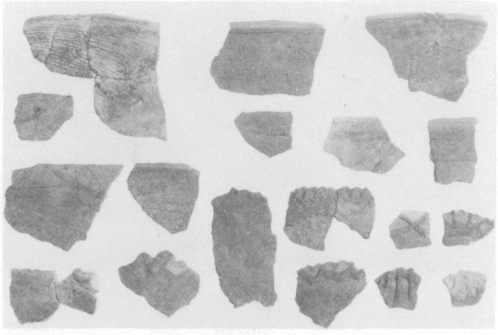
Ⅶa類



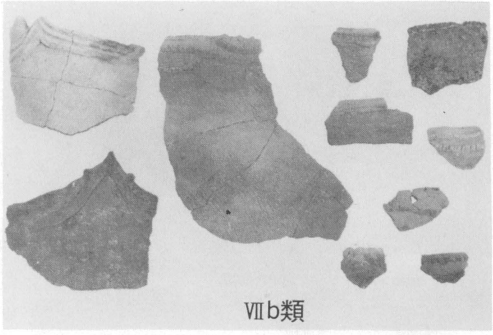
Ⅶa類



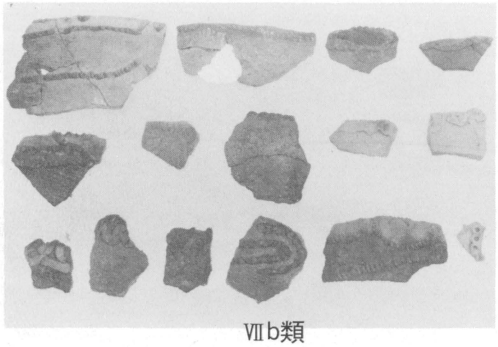
Ⅶa類



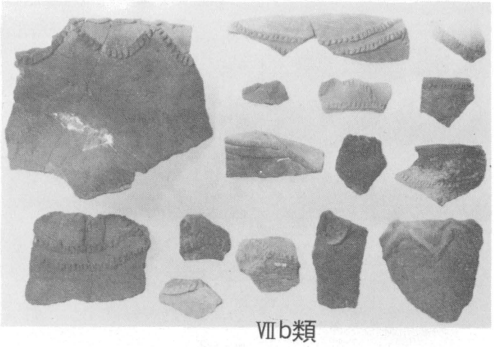
Ⅶb類



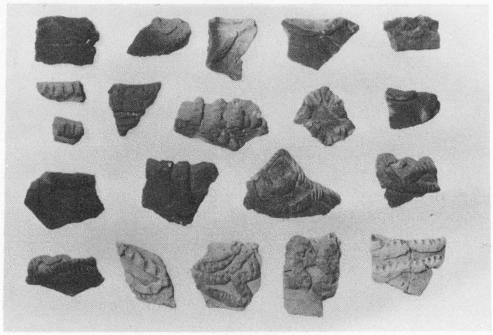
Ⅶb類



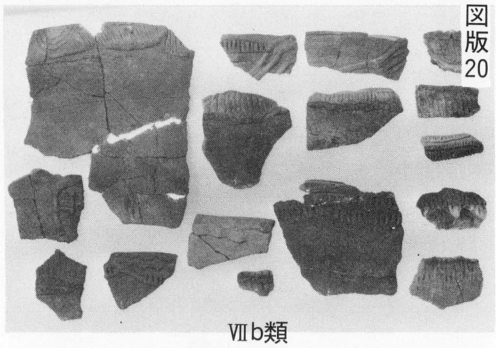
Ⅶb類



Ⅶb類

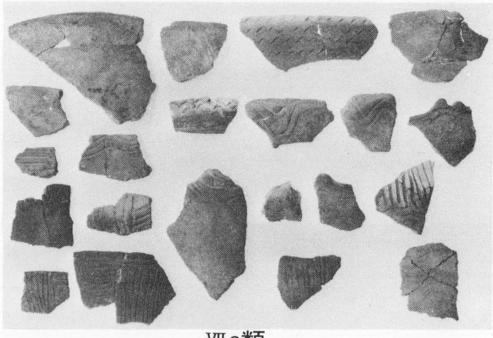


Ⅶb類



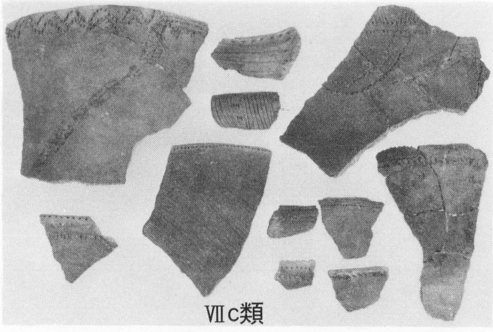
Ⅶb類

Ⅶb類

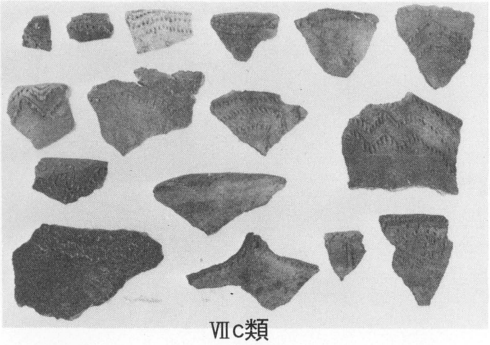


Ⅶc類

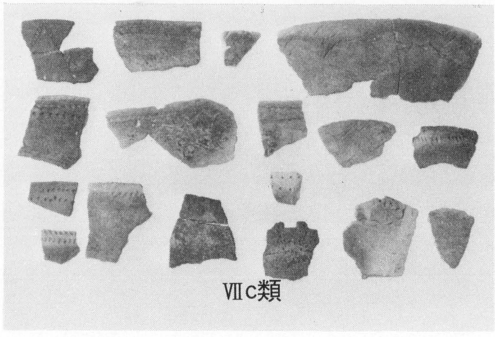
Ⅶc類



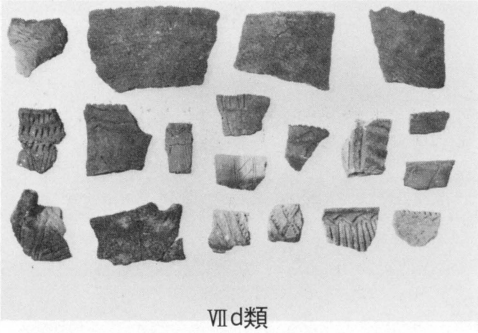
Ⅶc類



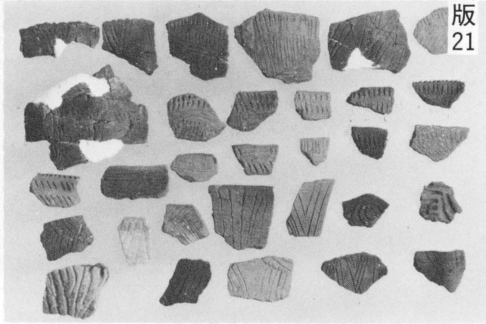
Ⅶc類



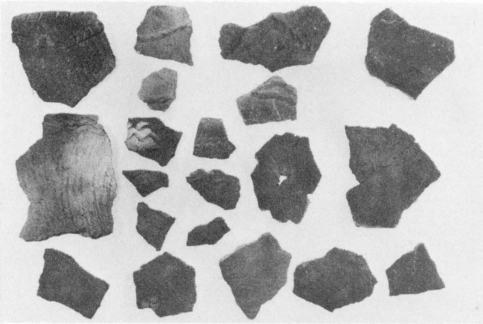
Ⅶc類



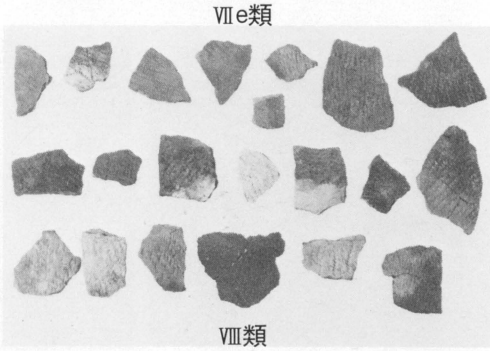
Ⅶd類



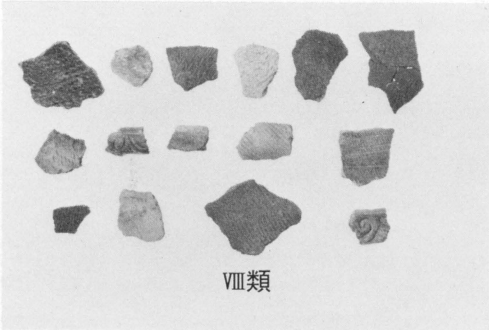
Ⅶe類



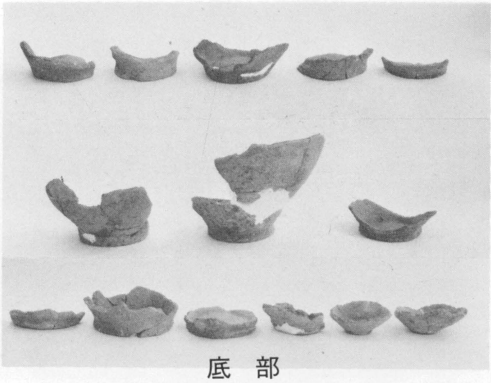
Ⅷ類



Ⅷ類

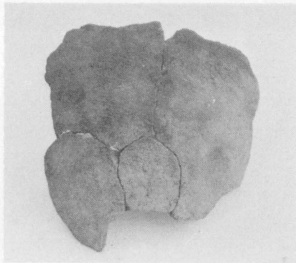


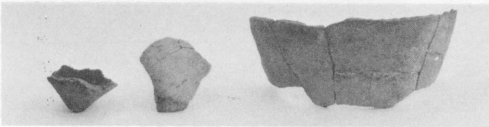
Ⅷ類



底　部

底　部



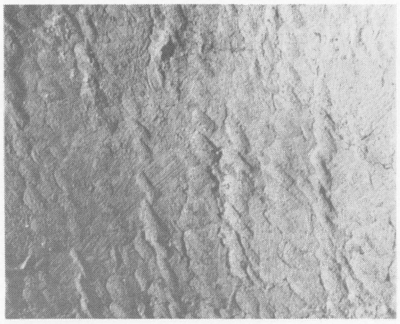


底　部

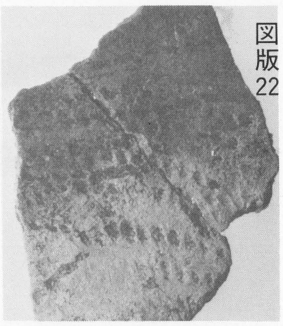
Ⅸ類底部

図版22

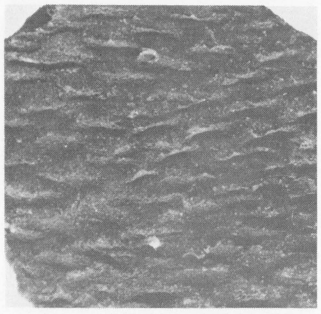
632



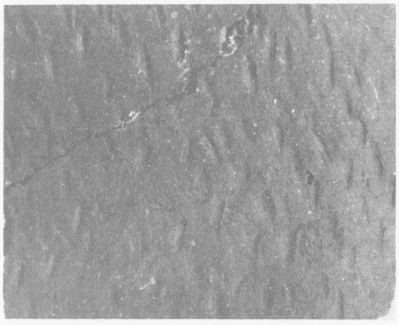
626



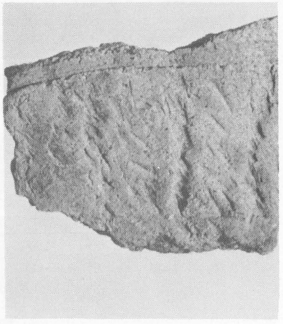
640



661



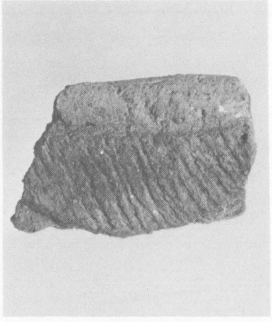
658



659

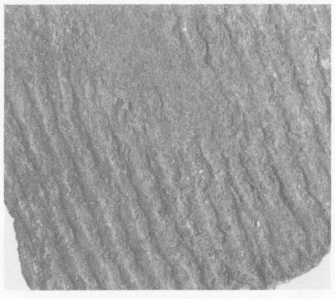
672

668

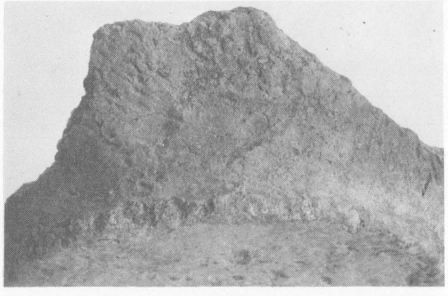


670

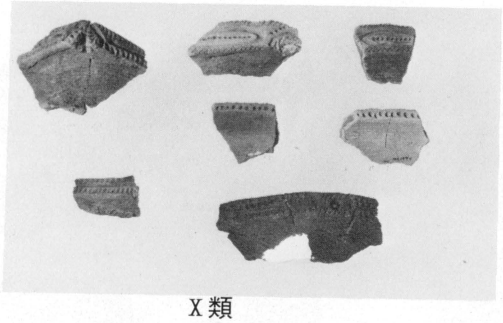
674



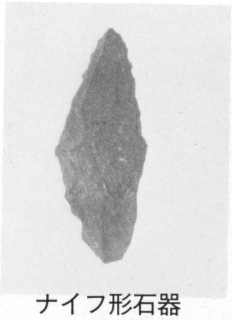
675



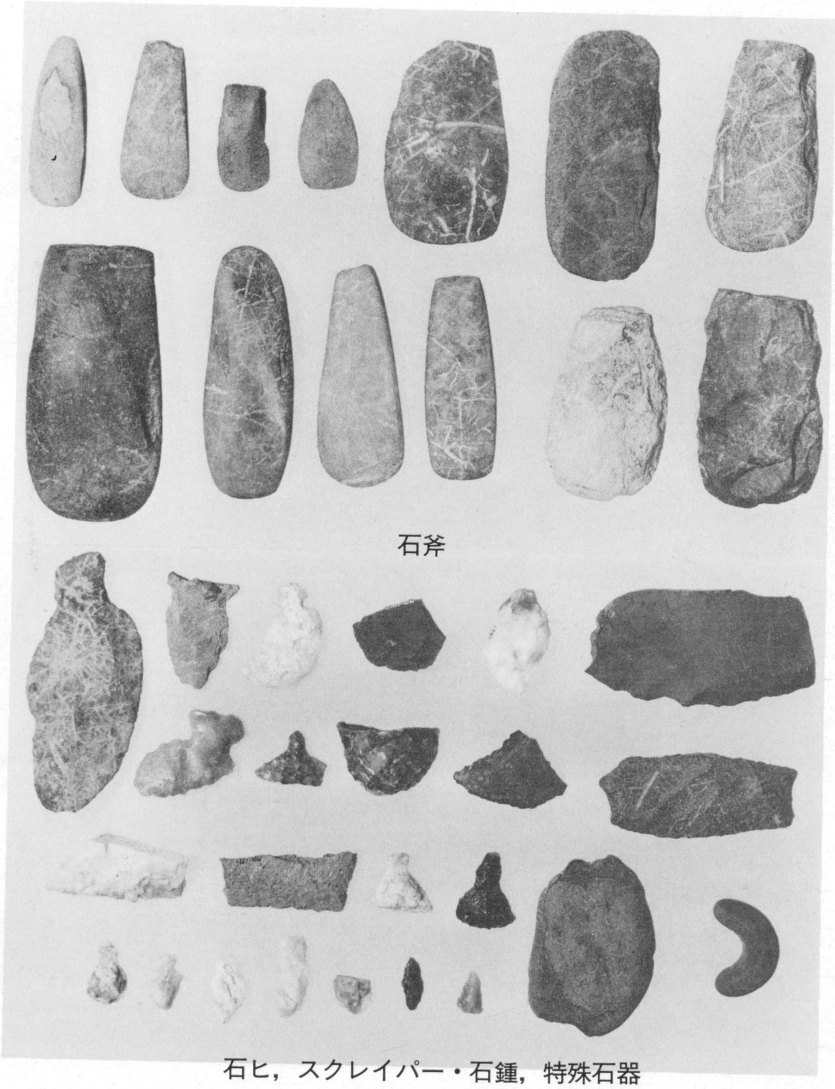
763



X類

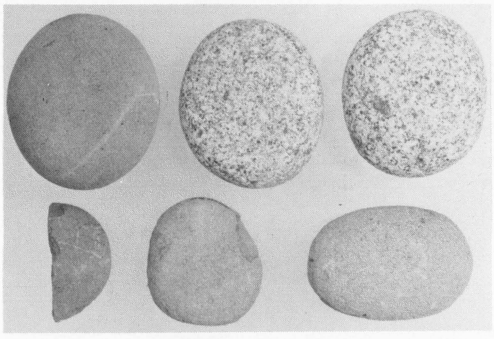


ナイフ形石器

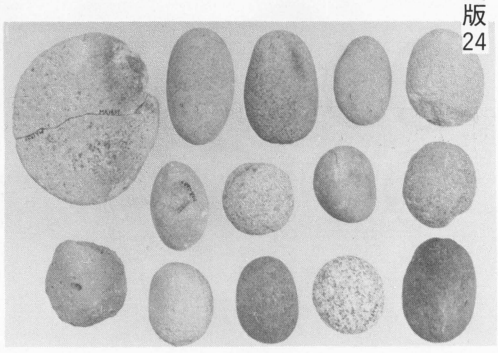


石斧

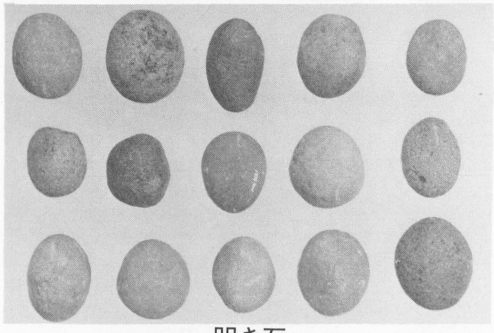
石ヒ，スクレイパー・石錘，特殊石器



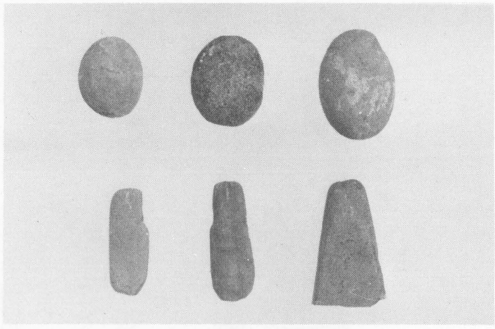
磨石，叩き石



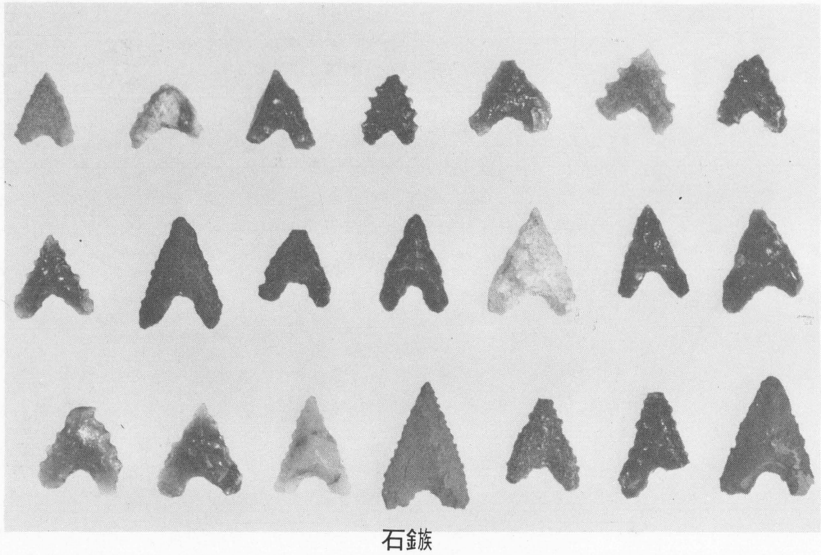
叩き石



叩き石

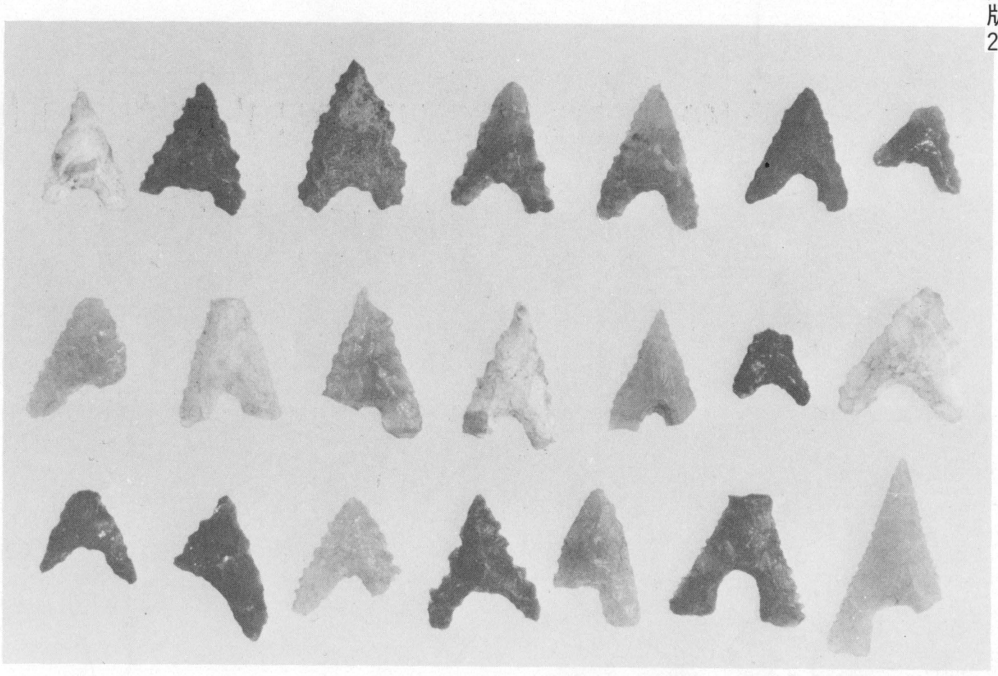


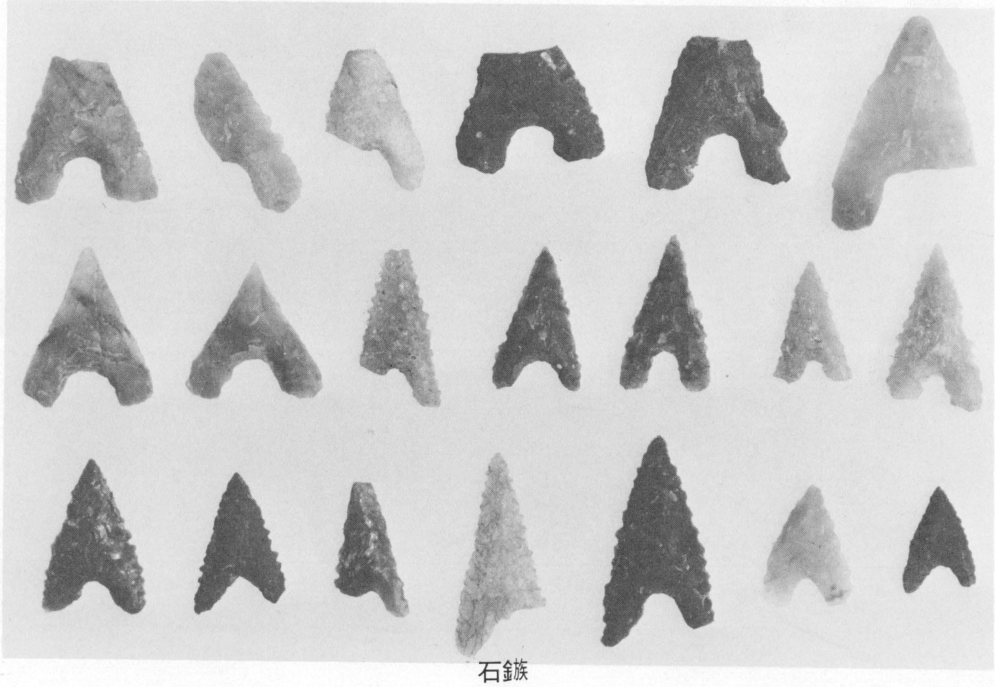
叩き石，砥石



石鏃

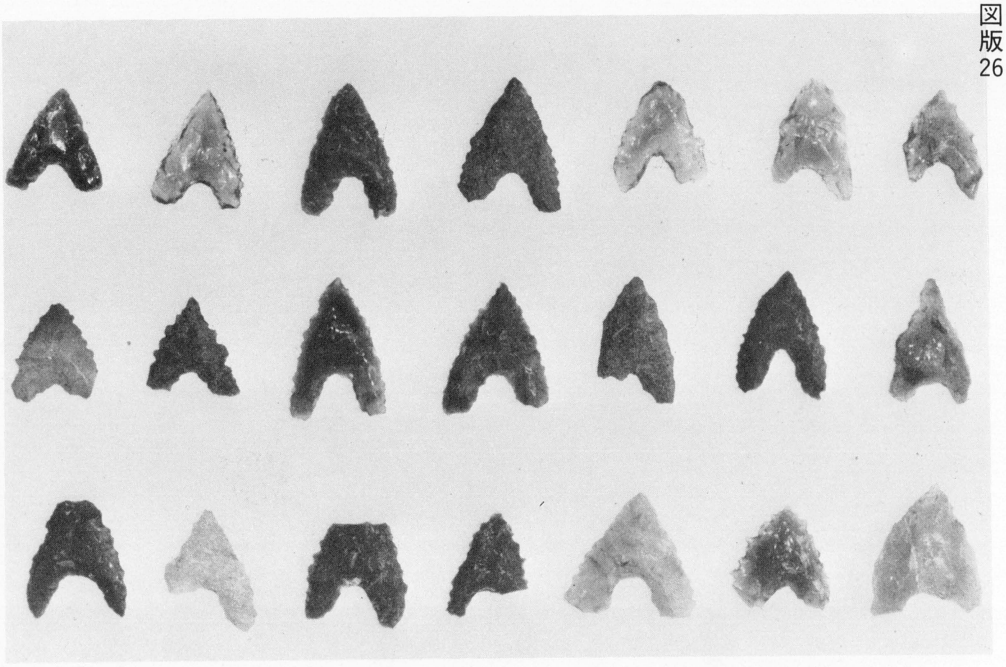
図版25

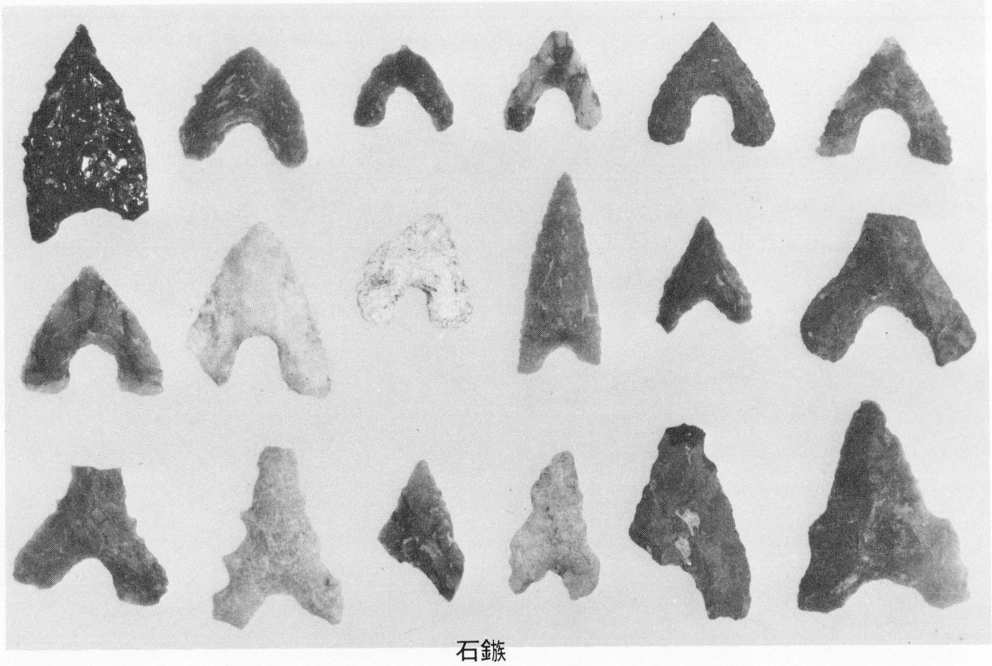




石鏃

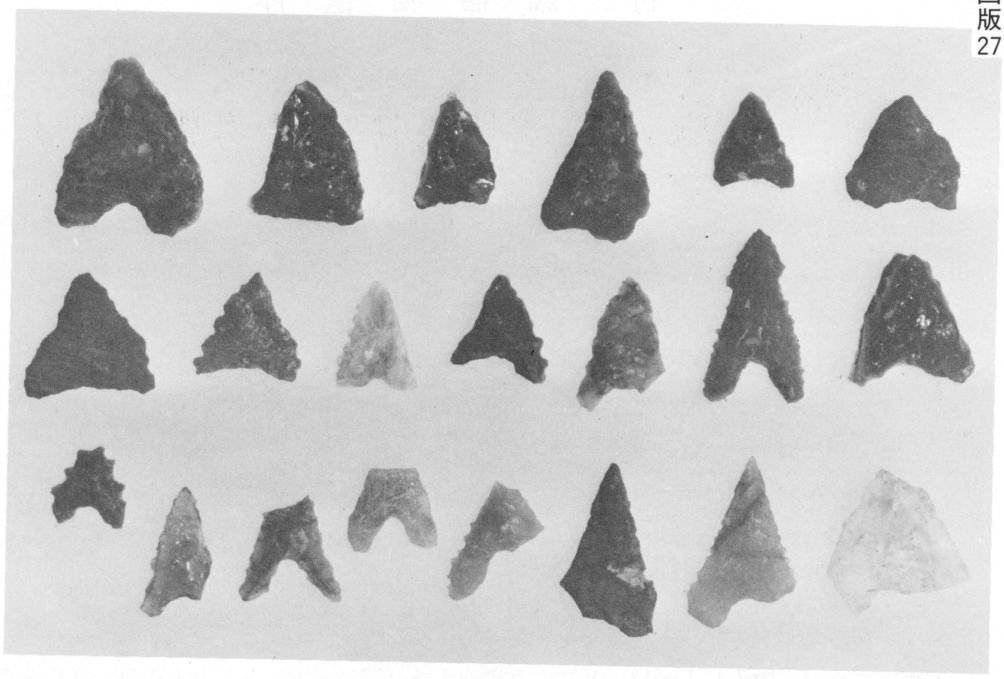
図版26



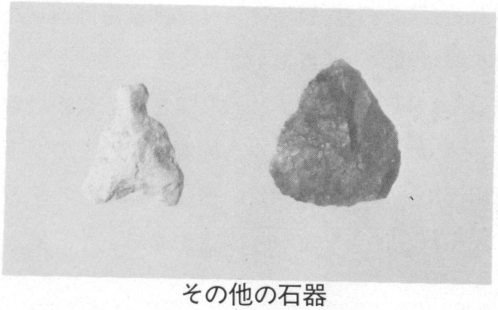


石鏃

図版27



石鏃



その他の石器

付　篇　植　物　遺　体

渡辺　誠

1．植物遺体のリスト

鹿児島県曾於郡松山町前谷遺跡より出土した植物遺体は，第2・3・4号住居址と包含層（第Ⅲ層）より検出された4件である。いずれも縄文時代前期の春日式土器に伴出したものであり，炭化している。

それらの植物遺体の種類は，次の5種類の木本類種子である。

1．ブナ科コナラ属イチイガシ　*Quercus gilva* Blume

2．ブナ科コナラ属の1種　*Quercus sp.*

3．ブナ科シイ属ツブラジイ　*Castanopsis caspidata* (Thunberg) Schottky

4．ブナ科シイ属スダジイ　*Castanopsis cuspidata var. Sieboldii* (Makino) Nakai

5．クスノキ科クスノキ属クスノキ　*Cinnamomum Camphora* (L.)Presel

このほかに不明の1種（1点）がある。

イチイガシ（図版1－1～13）とコナラ属の1種（同14～52）としたものは，4件の各資料に認められるが，ツブラジイ（同55・56）は第4号住居址と第Ⅲ層，スダジイ（同57），クスノキ（同58）と不明の1種は第Ⅲ層からのみ検出されている。後者は数量も少なく，前2者中に混入したものとみなされる（第1表）。特にクスノキは食用価値がなく，混入であることは確かである。このクスノキを除けば，いずれもいわゆるドングリ類である。

これらの件別出土数量は，第1表に示すとおりである。表中に双・半とあるは，双子葉植物であるコナラ属の子葉の双方があるものを双，片側のみのものを半として記したものである。また第4号住居址と第Ⅲ層からは，コナラ属の種皮とみられる小破片（図版1－53・54）が少量検出されているので，それらは本来皮つきの状態であったと推定される。

3．ドングリ類の分類

ドングリ類には種類が多く，森林帯によってもその種類を異にしている。そしてその食用化に際しては，まったくアク抜きのいらないシイ類（D類），水さらしを必要とするカシ類（C類），および水さらしに加えて加熱処理の必要なナラ類（B類）とがあり，わが国ではほとんど食用化されていないクヌギ類（A類）についても，韓国の場合からみるとC類と同様に水さらしだけで食用化することができる。したがってアク抜きの必要の有無とその手間の度合とによって，D類，C・A，B類とに大別することができる。なおカシ類のうちイチイガシのみはアク抜きを必要とせず，D類に含まれることに注目される。（第2表）。

形態上は，ドングリまなこという言葉があるように，狭義のドングリとはまんまるいクヌギなどのA類のドングリを指している。これに対しB・C類とイチイガシは楕円形を呈し，D類

は小型の円形（ツブラジイ），先の尖った水滴状（スダジイ），および太くて長いマテガイ状（マテバシイ）などを呈す。しかしこれらはごくおおまかな見方であり，特に種皮がとれて中の実（子葉）だけになると分類は困難である。しかし種の同定までは困難であっても，食用化という観点からみて，A～D類の大別ぐらいは可能になって欲しいところである。

本遺跡出土資料には，D類に含まれるところの小型で円形のツブラジイが，第4号住居址と第Ⅲ層より各1点，水滴状のスダジイが第Ⅲ層より1点出土している。

この他のA～C類に含まれる円形と楕円形のコナラ属については，その境界が連続的であるらしいので，その計測値を第3表に一括表示して検討することとする。そしてこれらの長幅示数を図化したのが第1図である。これには明らかにイチイガシとわかるものと，それ以外のコナラ属とを区別して示したが，その分布にはほとんど差は認められない。すなわち数量のやや少ないイチイガシの場合は，分散の範囲が1.21～2.00であり，他のコナラ属では0.91～2.00であるが，前者は後者の範囲に含まれてしまうばかりでなく，1.21～1.30もピークとしていることも共通している。したがって楕円形の形態の変異のなかに一見円形を呈するものも含まれていると判断されるのであり，本遺跡の場合A類のドングリが含まれている可能性は高くないと考えられるのである。

楕円形も呈するB・C類についての検討は難しいが，形態上類似しているがアク抜きがいらないためD類に含まれるイチイガシが含まれていることは注目されてよい。大阪市立大学理学部の粉川昭平教授によれば，子葉のみでは分類の困難なドングリ類のなかで，イチイガシのみは唯一例外的に識別が可能であるという。その外面に縦に溝状の幼根の跡がみられるからである。この基準に基づいて，本遺跡例についても分類を試みたのである。しかしこの溝は二つに分かれる子葉の片側にしかつかないのであるから，同数のものはイチイガシ以外のコナラ属に含まれてしまうことになる。しかしそれでもイチイガシ以外のコナラ属が含まれていることは，完形品のみで比較しても，イチイガシを上廻って検出されていることから明らかである。すなわちイチイガシ以外に，B・C類のナラ・カシ類のドングリ類も含まれていることは確実なのである。

4．若干の検討

イチイガシ以外のカシ・ナラ類を含むか否かにこだわる理由は，いうまでもなくアク抜き技術との関係においてである。前者はアク抜きは不要であるが，後者はそれを必要とするからである。そして筆者は，従来アク抜き技術出現の上限を東日本では縄文前期，西日本では同後期からとしていたのである。

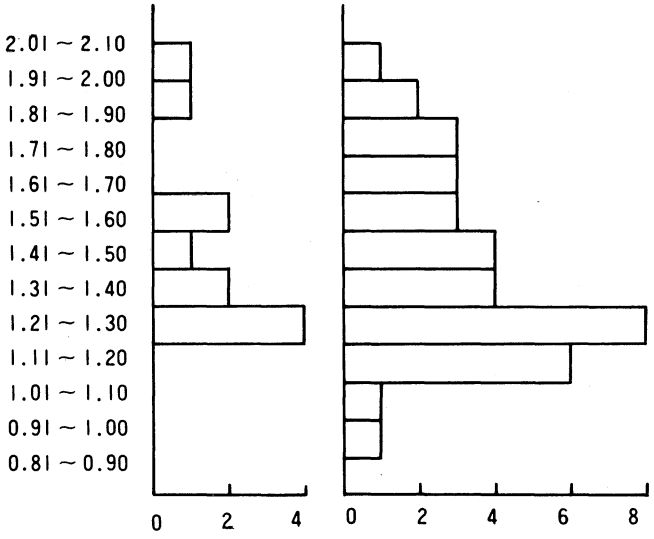
しかし先年同じ鹿児島県曾於郡内の志布志町東黒土田遺跡より検出された，縄文草創期の貯蔵穴出土のドングリを調査させて頂き，それらがイチイガシやD類のドングリ類ではないことを確認した。ただしこれは従来の知見を大幅に遡ることになるため，慎重に対処せざるを得なかったのである。ところが近年韓国でも最古の土器にドングリが伴出し，しかもそれはアク抜きを必要とする種類らしいことが明らかになってきた。その上西日本において，本遺跡のよう

に前期に遡る確実な資料が明らかになってくると，東黒土田遺跡の例が改めて非常に重要な存在であることが判明してきたのである。

そして新東晃一氏達の御好意によょて，中間の早期の例についても好知見が得られるらしいのであり，本遺跡例を含めて，縄文時代の経済基盤の研究は新しい局面を迎えつつあるということができるであろう。

謝　辞

終わりに，本資料調査の機会を与えて下さった鹿児島県曾於郡松山町教育委員会及び新東晃一・中村耕二の両氏，および資料整理に御協力下さった田中禎子嬢（名古屋大学文学部学生）対し，深謝の意を表する次第である。



第1図　ドングリ類の長巾分布図　（左：イチイガシ，右：コナラ属の一種）

表1　種子類件別数量表

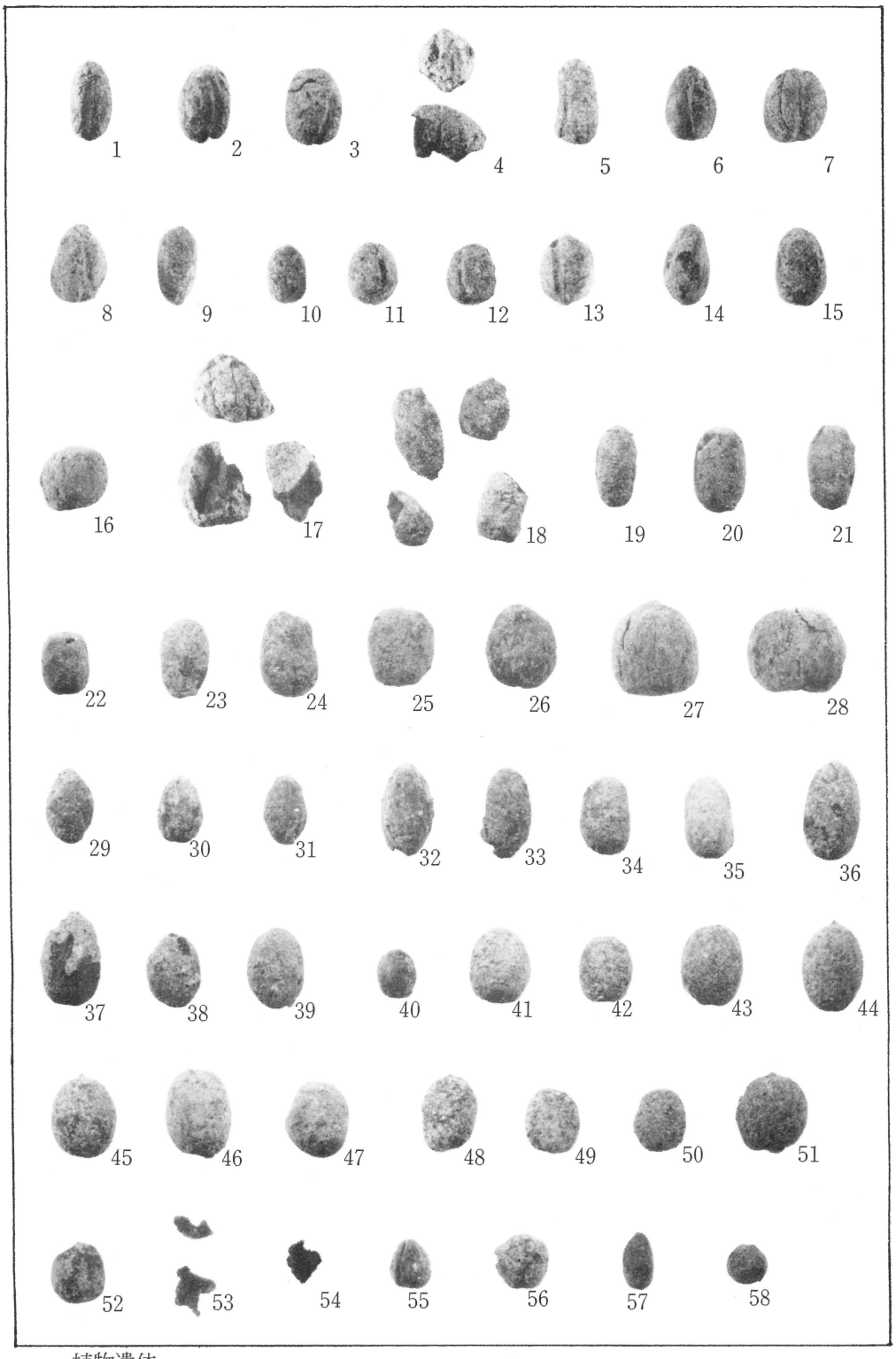
種	イチイガシ		コナラ属の種		ツブラジイ		スダジイ		コナラ属	クスノキ	不明
部位	子葉		子葉		子葉		子葉		種皮	種子	種子
件数 数量(g)	数	量	数	量	数	量	数	量	量	数	数
第2号住居址	双 1	0.27	双 2	0.48							
	半 2	0.34	半 1	0.18							
	破片 2	0.60	破片 5	1.55							
第3号住居址	破片 2	0.41	破片若干	1.32							
第4号住居址	破片 1	0.12	破片若干	2.29	半1	0.04			0.01		
第Ⅲ層	双 4	1.00	双 8	2.86	半1	0.10	半1	0.04	0.01	1	1
	半 4	0.37	半 24	3.34							
	破片若干	2.53	破片若干	35.36							

表2　ドングリ類の分類

民俗分類	属		種	森林帯	他の堅果類
A. クヌギ類 アク抜き伝承の途絶えたもの	コナラ亜属	コナラ属	クヌギ アベマキ	落葉広葉樹林帯 (東北日本)	オニグルミ クリ トチノキ
B. ナラ類 水さらし＋加熱処理			ミズナラ コナラ		
C. カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属		アカガシ・アラカシ シラカシなど	照葉樹林帯 (西南日本)	
D. シイ類 アク抜き不用			イチイガシ		
	シイノキ属		ツブラジイ・スダジイ		
	マテバシイ属		マテバシイ		

表3　ドングリ類計測値一覧表

件　別	種　　別	残存状態	長さ(cm)	巾 (cm)	長さ／巾	重量(g)	図版番号
2号柱	イ チ イ ガ シ	双	1.19	0.65	1.83	0.27	1
〃	〃	半	1.20	0.76	1.58	0.16	2
〃	〃	〃	1.17	0.88	1.33	0.18	3
〃	コナラ属の一種	双	1.20	0.70	1.71	0.21	14
〃	〃	〃	1.11	0.72	1.54	0.27	15
〃	〃	半	0.93	1.00	0.93	0.18	16
第3層	イ チ イ ガ シ	双	1.10	0.73	1.51	0.24	6
〃	〃	〃	1.09	0.9	1.21	0.26	7
〃	〃	〃	1.15	0.79	1.46	0.25	8
〃	〃	〃	1.20	0.58	2.07	0.25	9
〃	〃	半	0.84	0.60	1.40	0.06	10
〃	〃	〃	0.95	0.75	1.27	0.11	11
〃	〃	〃	0.90	0.70	1.29	0.06	12
〃	〃	〃	1.00	0.80	1.25	0.14	13
〃	コナラ属の一種	双	1.23	0.6	2.05	0.10	19
〃	〃	〃	1.27	0.78	1.63	0.29	20
〃	〃	〃	1.26	0.69	1.83	0.28	21
〃	〃	〃	0.91	0.73	1.25	0.28	22
〃	〃	〃	1.22	0.80	1.53	0.25	23
〃	〃	〃	1.26	0.90	1.40	0.38	24
〃	〃	〃	1.14	1.00	1.14	0.31	25
〃	〃	〃	1.20	1.05	1.14	0.31	26
〃	〃	半	1.43	1.30	1.10	0.66	27
〃	〃	〃	1.13	0.77	1.47	0.08	29
〃	〃	〃	0.98	0.66	1.48	0.07	30
〃	〃	〃	1.09	0.66	1.65	0.08	31
〃	〃	〃	1.39	0.82	1.70	0.11	32
〃	〃	〃	1.37	0.72	1.90	0.16	33
〃	〃	〃	1.16	0.75	1.55	0.11	34
〃	〃	〃	1.24	0.72	1.72	0.16	35
〃	〃	〃	1.50	0.84	1.79	0.12	36
〃	〃	〃	1.42	0.91	1.56	0.17	37
〃	〃	〃	10101.	0.82	1.34	0.10	38
〃	〃	〃	1.22	0.85	1.44	0.13	39
〃	〃	〃	0.76	0.59	1.29	0.02	40
〃	〃	〃	1.16	0.93	1.25	0.27	41
〃	〃	〃	0.97	0.83	1.17	0.15	42
〃	〃	〃	1.18	0.95	1.24	0.14	43
〃	〃	〃	1.27	0.91	1.40	0.22	44
〃	〃	〃	1.19	0.97	1.23	0.19	45
〃	〃	〃	1.26	1.00	1.26	0.24	46
〃	〃	〃	1.12	0.93	1.20	0.18	47
〃	〃	〃	1.15	0.80	1.44	0.17	48
〃	〃	〃	1.04	0.84	1.24	0.09	49
〃	〃	〃	0.95	0.76	1.25	0.10	50
〃	〃	〃	1.18	1.06	1.11	0.21	51
〃	〃	〃	0.91	0.81	1.12	0.07	52



植物遺体

1～13：イチイガシ，14～52：コナラ属の1種，53・54：コナラ属種皮片，
55・56：ツブラジイ，57：スダシイ，58：クスノキ(縮尺：実大)，
1～3・14・16：第2号住居跡，4・17：第3号住居跡，
5・18・53・55：第4号住居跡，6～13・19～52・54・56～58：第Ⅲ層出土，

あ と が き

前谷遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけることができた。

松山町における調査は今回が最初ではあったものの，出土量は膨大な数にのぼり，特に春日式土器の出量は多く，住居跡等の発見など好資料を提供してくれた。

調査にあたっては，できる限り詳細な記録をとることにつとめ，そのすべてを掲載することにつとめたものの，整理の期間等の問題から，必ずしも満足とはいえない。本書を利用される各位において取捨選択しながら活用していただければ幸いです。

調査中は，炎暑のなかで作業を進めていただいた地元の方々や整理作業を担当していただいた収蔵庫での作業員の方々に心から感謝の意を表します。

発掘作業員

金子　繁蔵・阿瀬知次夫・田辺レイ子・
仮屋アグイ・仮屋ヤス子・金子ツヤ子・
荻迫ツルエ・白坂マチ子・白坂美恵子・
桐木ツル子・村田セツエ・山口ひとみ・
森下　和子・荻原フサエ・本田ツヤ子・
徳増みどり・白坂アスミ・村田　久子・
田中ハル子・福永　光子・金子　　茂

整理作業員

喜入カツエ・中原己美子・脇田美津江・相良政子・高瀬孝子・下畠節子・岩坪千枝子

松山町教育委員会文化財調査報告書(1)

前　谷　遺　跡

発行日　1986年3月
発　行　鹿児島県曽於郡松山町教育委員会
鹿児島県曽於郡松山町新橋268　〒899-76
印　刷　有限会社　あべ全印刷
宮崎県都城市天神町19-20